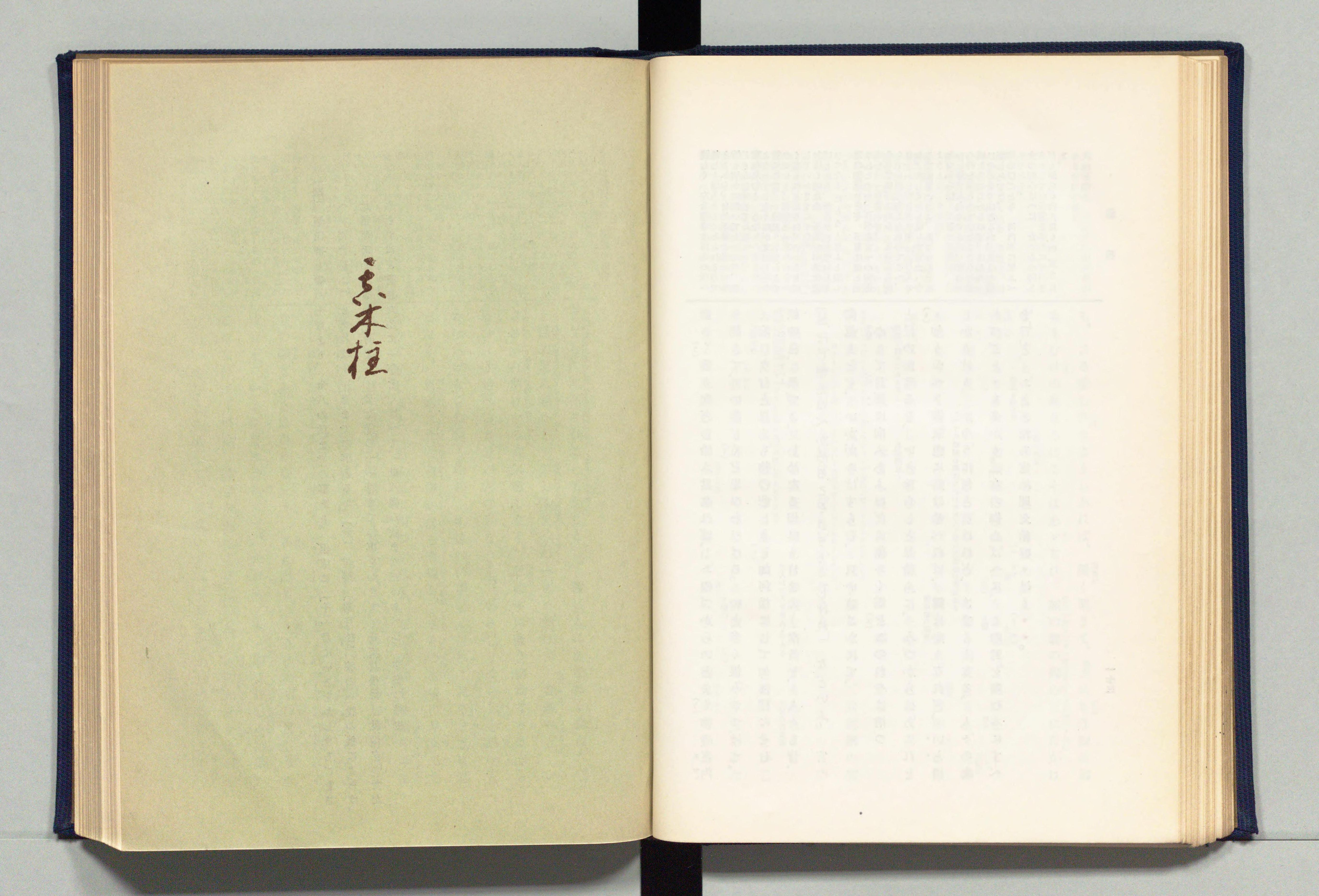

〔細〕源氏卅七歳の十月より、卅八の秋までの事あり。但末に「十一月にいとをかしきちごをさへいだき給ふ」とあれば十一月までの事あるか。〔孟〕同義。〔湖月抄〕彼の一説の義によらば、此巻源氏卅六歳の十月より、卅七歳の十一月までの事をかきて、さて其後に、秋の夕のただならぬにと書きたるに一年をくはへて、卅八歳の秋までといふべし。亦堅の幷也。

うちに聞召さむ 玉鬘は尚侍として出仕前に鬚黒に逢つた。その事が主上のお耳に入つてはお咎めがあるから、源氏はそれを内密にしておかれるのである。(花)尚侍に成給ひて、いまだ入内などもなきに、かゝる事のあれば内にきこしめしては御とがめも有べければ、しばらく人にもらさじとおとゞをはじめて御かたの人々はいさめ給ふと也。

思はずに 玉鬘は、思はぬ悲しい運命に生れついたものだと始終思ひつめて居られる、それを鬚黒はひどくつらく思ふけれども、深い因縁のあつた事を思ふとありがたく嬉しく。

石山の佛をも 玉鬘に逢ふ事の出來たのも石山觀音の御利益であり辨の骨折でもあつたから鬚黒は深く感謝するのである。

女君の 辨は玉鬘からよく〳〵いやな女だと嫌はれてしまつたので、人中にも出ず引籠つて居つた。

げにそこら いかにもいぢらしい程熱した懸想人はいろ〳〵あつたが、熱の足りない鬚黒の爲に觀音の靈驗が顯れたやうである。

おとども 鬚黒に逢つた事を不滿に思つたのは玉鬘ばかりでなく源氏も不滿に殘念に思召したが、今更詮のない事で。

たれも〳〵斯く許しそめ 實父の内大臣などもかうして納得された事だから、源氏一人だけが今更不承知らしい事をいふのも鬚黒の爲に氣の毒でもあり面白くない仕打であると思召して、儀式を立派にして聟君大事とかしづいて居られる。

玉鬘が鬚黒に逢つた事を冷泉院がお聞きになるのも畏多い

源「うちに聞召さむこともかしこし。暫し人にあまねく漏らさじ」と諫め聞え給へど、源氏が鬚黒を制されるけれども、さしもえつつみあへ給はず。鬚黒はさう遠慮がしきれない程經れど、逢ひそめてから時日はたつたが、いささか打解けたる御氣色もなく、玉鬘の心思はずに憂き宿世なりけりと、思ひ入り給へるさまのたゆみなきを、いみじうつらしと思へど、おぼろげならぬ契りの程、あはれに嬉しく思ひ、見れば見る程美しく見るままにめでたく、理想に叶つた玉鬘の容姿をもし他人のものにして了つたらと想像して見てさへ心配で思ふさまなる御かたち有様を、よそのものに見果てて(聞き)やみなましよと、思ふだに胸つぶれて、石山の佛をも辨の玉鬘の女房おもとをも、並べて頂かまほしく思へど、女君の深く物しとおぼし疎みにければ、えまじらはで、こもりゐにけり。げにそこら心苦しげなる事どもをとり〳〵に見しか・ど、心淺き人の爲にぞ寺の驗もあらはれけむ・・。源氏おとども、・心ゆかず口惜しうおぼせど、いふかひなき事にて、たれも〳〵・斯く許しそめ給へる事なれば、引返し許さぬ氣色を見せむも、人のためいとほしうあいなしとおぼして、儀式いと二なくもてかしづき給ふ。鬚黒

かる〳〵しく 玉鬘が輕々しく氣を許して引取られて行つたならば、鬚黒の所には、それを快くは思ふまいと思はれる本妻が待受けてゐるのであるから、源氏は玉鬘のもとにそれが氣の毒であるといふ口實のもとに。

ことつけ給ひて 源氏は表面はとにかく内心は玉鬘に未練が有るからである。

なほ心のどかに まあゆつくりなる心持でゐるやうにの意。

落着いて 穩かに目立たぬやうにして、世間の評判にされないやうにまた誰にも非難されたりせぬやうにおやりなさい。

〳〵めやすかめり なまなかな宮仕よりは鬚黒の妻になる方が却つて無難だらう。

志はありながら 私は玉鬘を女御殿へ上げる事は無論ないが、玉鬘に思はぬ譯ではないらつしやるのをさしおいては、玉鬘をどうにもしやうがない。

げに御門と聞ゆとも 成程いくら帝王にお仕へ申すにしても、他の女御更衣達よりも御寵遇も薄く、輕く取扱はれては、宮仕に出たのが輕率であつたといふ事にもなる譯である。

三日の夜の 嫁娶第三日に源氏が祝の儀式の事で鬚黒や玉鬘と消息をとりやりなさつた樣子である。

内侍 内侍司には尚侍典侍掌侍四等官があるが、單に内侍といへば掌侍の事である。

參りつつ 玉鬘が尚侍で女官や内侍が玉鬘の里邸六條院に來訪するのである。

かんの君 「ないしのかみ（尚侍）の君」の略轉。玉鬘は尚侍であるから斯くいふ。

兵衞督 式部卿宮の御子

髭黒 ——槇柱の姫君の北の方。

人笑へに 兵衞督は妹が鬚黒に冷遇されて世間の物笑ひになつて其上に自分の玉鬘に對する戀の叶はなかつた歎きを取り重ねて物思ひに沈んで居るけれども。

自然人々の興味有る話題として次々に廣がつていつて、珍らしい例として世間の噂に上つた。

口惜しう宿世異なりける 玉鬘が私に緣がなくて鬚黒にきまつたのは殘念だが、宮仕にきまつたといふ素もあつたのだから、尚侍として宮仕に出ても苦しくはない。併し君寵に望みをかけるのであつたら斷念するがよからう。河内本「宮仕はなどか」とあるに從ふ。

神わざなど繁く 十一月には御贖物、供忌火御飯、等を初め、新嘗祭、其他平野、春日、梅宮、吉田等全國諸社の祭が多い。公事根源に委しい。禁中に召使はれる下臈の女官。

女房 内侍司には尚侍典侍掌侍四等官があるが、單に内侍といへば掌侍の事である。玉鬘が尚侍で女官や内侍が玉鬘の里邸六條院に來訪するのである。

かんの君 「ないしのかみ（尚侍）の君」の略轉。玉鬘は尚侍であるから斯くいふ。

參りつつ 玉鬘が尚侍で女官や内侍が玉鬘の里邸六條院に來訪するのである。

忍びつゝ 玉鬘は尚侍であるから斯くいふ。

兵衞督 式部卿宮の御子

髭黒 ——槇柱の姫君の北の方。

人笑へに 兵衞督は妹が鬚黒に冷遇されて世間の物笑ひになつて其上に自分の玉鬘に對する戀の叶はなかつた歎きを取り重ねて物思ひに沈んで居るけれども。

は早速玉鬘を自邸に引取らうと熱心して居られるが つしかと、わが殿に渡し奉らむことを思ひいそぎ給へど、以下源氏の心づかひ がるしくふと打解け渡り給はむに、玉鬘が懷かうに かしこに待ち取りて、よく しも思ふまじき人の物し給ふなるがいとほしさにことつけ給ひ 鬚黒の本妻が て、源「なほ心のどかになだらかなるさまにて、いづ方にも人の謗り恨みなかるべくをもてなし給へ」とぞ聞え給ふ。

父おとどは、「なか〳〵 内大臣 やうな宮仕に出たら苦勞が多からうと心配してなき人の、なまほのすいたる宮仕に出で立ちて、苦しげにやあらむとぞうしろめたかりし。志はありながら、女御斯くて物し給ふをおきて、いかがもてなさまし」など、忍びて宣ひけり。

げに御門と聞ゆとも、人におぼしおとし、はかなき程に見え奉り給ひて、もの〳〵しくもてなし給はずば、あはつけ・きやうにもあ・べかりけり。三日の夜の御消息ども聞えかはし給ひける氣色を傳へ聞き給ひてなむ、このおとどの君の御心を、あはれにはかたじけなしとは思ひ聞え給ひける。から忍び給ふ御

中らひの事なれど、おのづから、人のをかしき事に語り傳へつつ、次々に聞き漏らしつつ、ありがたき世語りにぞささめきける。うちにも聞召してけり。帝「口惜しう宿世異なりける人なれど、さおぼしし本意もあるを、宮仕・など・。かけ〳〵しき筋ならばこそ思ひ絶え給はめ」など宣はせけり。

霜月になりぬ。神わざなど繁く、内侍所にも事多かる頃にて、女官どもも參りつつ、今めかしう人騷がしきに、大將殿、晝もいと隱ろへたるさまにもてなして、こもりおはするを、いと心づきなくかんの君はおぼしけり。兵衞督の君などは、まいていみじう口惜しとおぼす。兵衞の督は、妹の北の方の御事をさへ、人笑へに思ひ歎きて、取りかさね物・思ほしけれど、をこがましう恨み寄りても今はかひなし、と思ひ返す。大將は名に立てるまめ人の、年頃いささか亂れたる振舞なくて過ぐし給へる名殘なく、心ゆきて、あらざりしさまに好ましう、宵曉の打忍び

宵曉の 花やかに宵や曉に忍んで出入りなさるので、女房達は興味を以て見てゐる。

女はわららかに 玉鬘は根が氣さくに快濶な性質なのだが、それもしまひこんでしまつて、ひどく塞ぎこんで。

おとどのおぼすらむ事 源氏の思はくや兵部卿宮の御志深く情愛の厚かつた事などを思ひ出すにつけても、恥かしくもあり、殘念に思はれる事ばかりなので、鬚黑に對してはいつも不愉快さうにしてゐられる。源氏は玉鬘が心ならずも鬚黑に靡いた事情をよく知つてゐるのであるが、玉鬘はさうとも知らず、源氏を憚り恥かしく思つてゐるのである。

殿も 源氏も、人々が迷惑な疑ひをかけてゐた玉鬘との關係をその潔白であつたと證明して自分ながら一時的な筋違ひの戀は好きではないのだと、昔からのわが行跡を顧みて。

今更に 玉鬘が鬚黑の物になつた以上、今更昔からの癖で玉鬘に戀するでもあるまいと反省はして見るが、やはりまだ諦めてはおいでにならぬ。

物の苦しう 以下「おぼし寄り給ひし事なれば」までは挿入句で過去の事をいふ。

女君 玉鬘は妙にいつも苦しさうにしてゐられて、健かな折もなく沈んで居られたのだが。

給へる出で入りもえんにしなし給へるを、をかしと人々見奉る。女は、わららかに賑はしくもてなし給ふ本性ももて隱して、いといたう思ひ結ぼほれ・、心もてあらぬさまはしるき事なれど、おとどのおぼすらむ事、宮の御心ざまの、心深うなさけ〳〵しうおはせしなどを思ひ出で給ふに、恥かしう口惜しうのみ思ほすに、物心づきなき御氣色絶えず。殿も、いとほしう人々も思ひ疑ひける筋を心清くあらはし給ひて、わが心ながら、うちつけにねぢけたる事は好まずかしと、昔よりの事どもおぼし出でて、紫の上にも、源「おぼし疑ひたりしよ」など聞え給ふ。今更に、人の心・癖もこそとおぼしながら、物の苦しうおぼされし時、さてもやとおぼし寄り給ひし事なれば、なほお・ぼしも絶えず。大將のおはせぬ晝つかた渡り給へり。女君、あやしう惱ましげにのみもてない給ひて、すくよかなる折もなくしをれ給へるを、かく渡り給へれば、すこし

はたかくれて 全部隱れずに身體の一部分だけ隱れる事。

けけしきさまに 他人行儀の態度で世間並の挨拶を申される。

すくよかなる 玉鬘は此頃生眞面目な平凡な鬚黑を見馴れてゐると、一層きはだつてゐる源氏の風丰が明かに分るにつけても、一層意外な運命を持つた自分がどうにもならない程に恥かしくて、それにつけても涙がこぼれた。

やう〳〵こまやかなる 源氏と玉鬘との間の物語が段々内輪話に移つていつて。

おり立ちて あなたと立入つた關係は結びませんでしたが、三途川を渡る折に、他人にあなたの手引きをさせようとは約束しなかつたのに。渡川は三途川の事で、死後女が三途川を渡る場合最初に夫婦になつた男がその女の手を引いて渡すといふ俗說があつた。

みつせ川 三途川を渡らぬ先にどうぞ涙の川の泡となつて消えてしまひたうございます。鬚黑に三途川の手引きされるのはいやだといふ心がこめられてゐる。だから源氏が「御手の先ばかりは云々」と報いたのである。

心をさなの 涙の川の泡となつて消えるとは幼稚な考へです。それはさうと三途川には外にまはり道がないから、其節は御手の先を取つて手引きするだけの事は致しませう。

起きあがり給ひて、御几帳にはたかくれておはす。殿も用意ことに、すこしけけしきさまにもてない給ひて、大方の事どもなど聞え給ふ。すぐよかなる世の常の人にならひては、まして、いふ方なき御けはひ有樣を見知り給ふにも、思ひのほかなる身の、おきどころなく恥かしきにも、涙ぞこぼれける。やう〳〵・・・こまやかなる御物語になりて、近き御脇息に寄りかかりて、すこしのぞきつつ聞え給ふ。いとをかしげにおも痩せ給へるさまの、見まほしうらうたい事の添ひ給へるにつけても、よそに見放つもあまりなる心のすさびぞかしと、口惜し。

「おり立ちて汲みは見ねども渡川人の瀨とはた契らざりしを思ひのほかなりや」とて、鼻うちかみ給ふけはひ、なつかしうあはれなり。女は顏かくし・て、

みつせ川渡らぬ先にいかでなほ涙の水脈の泡と消えなむ

「心をさなの御消えどころや。さても、かの瀨はよぎ道なかな

まめやかには 冗談はおきまして、あなたにも覺えがある事でせう。

世になきしれ〳〵しさも 一緒に琴を枕にして寢ても手を出さうとしない私の愚さ加減、又無理わざはせぬ私の安心な點、何れも此世には類の無いものだといふ事を、いくら何でも分つて下さるだらうと力づよく思つてゐます。

いとほしうて 源氏が玉鬘に對して氣の毒になつて話をそらして。

うちに宣はする 主上があなたの出仕を待遠しがつておいでになるのもお氣の毒故、かたばかり參内させませう。大將があなたを自分の物として家に引き取つてしまつては、さうした宮仕もむつかしさうな時世とおもふ。まづ宮仕をさせて後に緣につけようと思つた私の最初の考へにはい違ふやうですが、内大臣は大將を聟取る事に賛成なのですから安心です。

いとかうおぼしたる 玉鬘がかうして思ひ沈んで居られるのを見ると氣の毒であるから、源氏は思ふ存分に狎れ〳〵しくもなさらず、只かうしなければならぬと、用意についてお教へになる。

かしこに渡り給はむ 鬚黑の所に引移られる事は、急にはお許しになりさうもない御樣子である。源氏は玉鬘がまだ思ひ切れずわが方におきたく思召すのである。

るを、御手の先ばかりは引き助け聞えてむや」とほほゑみ給ひて、源「まめやかには。おぼし知る事もあらむかし。世になきしれ〳〵しさも、又うしろやすさも、この世にたぐひなき程を、さりともとなむ頼もしき」と聞え給ふを、玉鬘は大變聞きづらく いとわりなう聞きぐるしとおぼいたれば、いとほしうて宣ひ紛らはしつつ、源「冷泉院 うち が玉鬘を尚侍にと に宣はする事なむいとほしきを、なほあからさまに玉鬘を 參らせ奉らむ（となむ思ふ）。鬚黑が玉鬘を おのがものとりやうじ（ら）果てては、さやうの御ま（み）じらひ（ろき）も難げなめる世なンめり。思ひそめ聞えし心はたがふさまなめれど、内大臣 二條のおとどは心ゆき給ふなれば、心やすくなむ」など、こまやかに聞え給ふ。玉鬘の心に あはれにも恥かしく（う）も聞き給ふこと多かれど、玉鬘は ただ涙にまつはれておはす。いとかうおぼしたるさまの心苦しければ、おぼすさまにも亂れ給はず、只あるべきやう、御心遣ひを教へ聞え給ふ。かしこに（へ）渡り給はむ事を、とみにも許し聞え給ふまじき御氣色なり。

そのついでに 一度入内させてそれを機會に直ぐに自邸に引取らうと考へついて、かたばかりの參内をする事をお許しになつた。

かく忍び隱ろへ 鬚黑は今まで玉鬘の居る源氏のお邸に通つて行つたのであるが、さうした忍びのあるきはなれてゐられない爲に苦しいので、自邸を修理して、今迄は荒れ放題に打捨てておいた設備や萬端の飾付をしかへて準備してゐれる。

北の方 式部卿宮の姫君で兵衞督の妹。一七七頁參照。

悲しうし給ひし 今迄愛して居つた子供達も、玉鬘といふ人が出來てからはそれに目もくれられない。鬚黑の熱中ぶりである。

なよびかに 物柔らかに人情深いところのある人は、何かの事につけても人の爲に恥になるやうな事は察しても見るのであるが、鬚黑は一徹者故、人が腹を立てるやうな場合も屢ある。

女君 鬚黑の本妻。

人の御程も 北方は身分からいつても、あゝした高貴な父親王が大事にして育てられたことを知つてゐる世間の人達は敬意を拂つてゐるし、御器量も好かつたのであるが、妙に執念深い物怪の爲に惱まされて、この數年來は普通の人のやうではなく、性根を失はれるやうな時が頻繁にあつて、夫婦仲も長い間離れ〳〵になつて居つたが、鬚黑は玉鬘が參内する事を面白からず鬚黑は思つて居られるが うちへ參り給はむことを、やすからぬ事に大將おぼせど、そのついでに、やがてまかで（鬚黑の方に）させ奉らむの御心つき給ひて、只あからさまの程を許し聞え給ふ。かく忍び隱ろへ給ふ御振舞も、ならひ給はぬ心地に苦しければ、わが殿の内（をいよ〳〵）修理すりししつらひて、年頃は荒らし埋（塵に）もれ、打捨て給へりつる御しつらひ、よろづの儀式を改めいそぎ給ふ。鬚黑の本妻 北の方のおぼし歎くらむ御心も知り（頓着もせず）給はず、悲しうし給ひし（ふ）君だちをも、目にもと（ど）め給はず。なよびかになさけ〳〵しき心（の）うちまじりたる人こそ、とざまかうざまにつけても、人のため恥ぢがましからむ事をば、推し量り思ふ所もありけれ、ひたおもむき（ぶ）に進み給へる御心（本注）にて、人の御心動きぬべきこと多かり。北方 女君（は）人に劣り給ふべき事（も）なし。人の御程も、さるやんごとなき父（式部卿宮）みこの、いみじうかしづき奉り給へ（りけ）る覺え、世にかろからず、御かたちなどもいとようおはしけるを、あやしう執念（しふね）き御物怪に煩ひ給ひ

とにかく本妻として尊重して居られたところ、今度新たに愛の移つた玉鬘は、一通りならず人にすぐれて美しいが、その事よりも、誰もが疑つて居つた源氏との仲が潔白であつたので、それを世にも珍らしく殊勝な事と思つて、一入愛情の深まりゆくのも當然である。

式部卿の宮 北方の御父宮。

今はしか今めかしき人 今はさうした花やかな婦人を引取つて大事にしてゐる片隅に、見つともなくくつついてゐるのも外聞がわるからう。私の生きてゐる間は世間體わるく鬚黒に屈從して居らないでもよからう。

宮 式部卿の宮の御殿。

親の御あたりと いくら親の家だからとて、今は他人の妻となつてゐながら、出戻つて親に顔を合せるのもどんなものであらう、と心勞なさるので。「今はかぎりの身にて」は河内本の如くあるべきである。縁づいて年經た事をいふ。

いとど御心地も 一入氣が狂亂して、ずつと病床に居られる。

て、この年頃(月)、(世の)・・人にも似給はず、うつし心(も)・なき折々おほく物し給ひて、御中(鬚黒と北方との)もあくがれて程經にけれど、やんごとなきものとは又並ぶ人なく思ひ(北方を)聞え給へるを、珍らしう御心移る方の、なのめにだにあらず人にすぐれ給へる御有様よりも、かの疑ひおきて皆人の推し量りし事さへ(源氏と玉鬘の仲の事)、心清くて過ぐい給ひけるなどを、ありがたう(鬚黒の心に)あはれと思ひまし聞え給ふもことわりになむ。

式部卿の宮聞召して、宮「今はしか今めかしき人(玉鬘)を渡してもてかしづかむ片隅に、人(北方が鬚黒に)わろくて添ひ物し給はむも、人聞きやさし(ま)かるべし。おのがあらむこなたは、いと人笑へなるさまに、隨ひ靡かでも物し給ひなむ」と宣ひて、宮の東(ひんがし)の對を拂ひしつらひて、渡し(北方を)奉らむとおぼし宣ふ(を)。親の御(以下北方の心中)あたりといひながら、今はかぎ(ほか)・りの身にて、立ちかへり見え奉(給は)らむこと、と思ひ亂れ給ふに、いとど御心地もあやまりて、うち(引續いて)はへ臥し煩ひ給ふ。

本性いと靜かに 北方は、本性は物靜かな氣立てのよい大やうな人であるが、時々狂氣して、人にいやがられさうな事がまゝあるのであつた。

玉を磨ける目移しに 玉鬘の華麗な住居を見馴れた目では見る氣にもならないけれども、鬚黒は北方に對する年來の愛情は變るものでないから、心中には不便に思つておいでになる。玉鬘は今六條院に居るのである。

昨日今日の ほんの昨今の深い愛情があるといふのでもない間柄でも、相當な身分になると、皆我慢して添ひ遂げるものです。北方が父宮方に歸らうとするのをなだめて引きとめようとするのである。

世の人にも似ぬ 人並でもないあなたの末始終を見屆けてあげようと私は長い間辛抱して來ましたのに、その辛抱がしとげられない程の不料簡を起して私を嫌ふのですね。子供達もある事ですから、どのみちあなたを粗末にする様な事はありませぬ。(細)此なの字制禁の心にはあらず、うとみ給ひけるよと云かけたる詞也。

女の御心の 愼みの足りない女心から、かうしていつも私を恨んで居られる。それも私の料簡の分らない間は一通り尤もですが、もう暫く私の爲るなりになつて樣子を見屆けて下さい。

本性(ほんじやう)(は)・いと靜かに心よくこめき給へる人の、時々(物怪の爲に)心あやまりして、人に疎まれぬべき事なむうちまじり給ひける。すまひなど(北方は狂氣してゐるので御殿は妙に締りがなくの、あやしうしどけなく、物の清(身繕ひもせずみすぼらしい姿で引込みがちにして居られるので)らもなくやつして、いとうもれいたくもてなし給へるを、玉を磨ける目移しに、心(鬚黒の)もとまらねど、年頃の志引きかふるものならねば、心にはいとあはれと思ひ聞え給ふ。鬚「昨日今日のいとあさはかなる人の御中らひだに、よろしき際にな(り)・・(ぬ)れば、皆思ひのどむる方ありてこそ見果つ(侍る)なれ。いと身(あなたは苦しさうにしてゐられるので申したい事もいひ出しにくいのです)も苦しげにもてなし給へれば、聞ゆべき事も打出で聞えにくく(て)・なむ。年頃(今迄始終約束してゐる事ではありませんか)契り聞ゆる事にはあらずや、世の人にも似ぬ御有様を、見奉り果て(果て奉ら)むとこそは、ここら思ひしづめつつ過ぐしくるに(つ)、えさしもあり果つまじき(を)・御心おきてに、おぼし疎むな。『をさなき人々も侍れば、とざまかうざまにつけて、おろかにはあらじ(侍)』と聞えわたるを(前々から申して居るのに)、女の御心の亂りがはしきままに、かく恨み渡り給ふ。一わたり、見定め給はぬ

宮の聞召しうとみて あなたの父宮が噂を聞いて私を嫌つて、未練氣もなくあなたを引取つてしまはうとなさるのは、却つて輕率な仕打のやうに思ひます。

誠におぼしおきつる それも本氣でさうなさるお積りなのでせうかそれとも暫く私を懲らしめるのでせうか。

御召人だちて お妾のやうにして仕へてゐる木工や中將などでさへ、玉鬘の事については、身の程相當におもしろくもなくまたつらく思つて居つたのに、北方は丁度正氣で居られる時であつたので、やさしく泣いて居られた。

みづからを 私をぼけてゐるのひがんで居るのと辱められるのは御尤もの事ですが。

宮の御事をさへ 父宮までも引合ひに出して非難なさるといふ事は、若しそれを父宮がお聞きになつては氣の毒で、なさけない私の緣故で父宮の威信を墮す事になります。

耳馴れにて あなたのわる口は始終聞き馴れて居りますから、今更何とも氣にはとめて居りませぬ。

いとささやかなる 北方は小柄な上に、平素の病氣の爲に痩せ衰へて弱々しく、髮も綺麗で長かつたのであるが、今は分け取つたやうに拔けて少くなつて、梳る事も殆どなさらず、涙に濡れかたまつて居るのは誠にあはれに見える。

程、さもありぬべき事なれど、まかせてこそ今暫し御覽じ果てめ。宮(式部卿宮)の聞召しうとみて、さわ(きは)やかにふと(ふいと)渡し奉りてむとおほし宣ふなむ、却りて・(は)いとかる〳〵しき。誠におぼしおきつる事にやあらむ、暫し勘事(かうじ)し給ふべきにやあらむ」と、打笑(鬚黒が)ひて宣(居給)・へる(り)、いとねたげに心やまし(それを聞く北方はいま〳〵しくもあり腹立たしい)。御召人(めしうど)だちて仕(鬚黒に)うまつり馴れたる木工(鬚黒付の女房)の君、中將(北方付の女房)のおもとなどいふ人々だに、程につけつつ、やすからずつらしと思ひ聞えたるを、北の方は、現心(うつしごころ)ものし給ふほどにて、いとなつかしう・(只)打泣(嘆)きて居給へり。北方「みづからを、(は)『・(お)ほけたり。ひが〳〵し』と宣(鬚黒が)ひ恥ぢしむるは、ことわりなる事になむ。宮の御事をさへ取りまぜ宣ふ・(こ)ぞ、漏り聞き給はむはいとほしう、憂き身のゆかりかる〳〵しきやうなる。耳馴れにて侍れば、今初(し)めていかにも物を・(しと)思ひ侍らず」とて、うち背き給へる(横を向かれた北方の姿はかはいらしい)、らうたげなり。いとささやかなる人の、常の御惱みに痩せ衰へ、ひはづにて、髮いとけうらにて(うるはしう)長かりける

こまかに匂へる 如何にもつやつやしい美しさといふ所はないが、父宮に似てあでやかなお顏立ちであるのに、お化粧もなさらないから、どこに花やかなところがあらう。

宮の御事を 私が何で父宮を輕蔑したやうな口をきくものですか。そんな怖ろしい人聞きのわるい事をおつしやるな。

かの通ひ侍る所の あの通つてゐるさきは花やかな立派な御殿で、私のやうな物馴れない生眞面目な者が出入りしたら、何かにつけて人が目をつけるであらうと思ふと氣が引けるから、こちらに引取つて氣樂に居たいと思ひます。

おほきおとどの 源氏は、あゝした比類のない御名聲は申すに及ばず、奥ゆかしい、行屆いた方ですから、いやな嫉妬沙汰などが聞えては、迷惑でもあり、また恐縮な事でもあります。

憎げなる事 玉鬘を迎へる事について北方が嫉妬するといふ事が源氏に漏れ聞えては。

なだらかにて 玉鬘と穩かに仲よくしてゐて下さい。

宮に渡り あなたが父宮の方に歸られても、あなたを忘れる事はありますまい。

とてもかうても どのみち、今更愛情の離れていくといふ事はありますまいが、あなたが里に歸られるといふ事は、あなたとしても世間の物笑ひであり、私

が、分け取りたるやうに・(て)落ちほそりて、けづることもをさをさし給はず、涙にまろがれたるは、いとあはれなり。こまかに匂へる所はなくて、父宮に似奉りて、なまめいた・(給へ)るかたちし給へるを、もてやつし給へれば、いづこの花やかなるけはひか・(は)あらむ。鬚「宮の御事を、かろく(けて)はいかが・(は)聞ゆる。おそろしう、人聞きかたはに・・(なる事)な宣ひなしそ」とこしらへて(北方をなだめて)、鬚「かの通ひ・・(まうづ)侍る所(玉鬘の居る六條院の事)のいとまばゆき玉の臺(うてな)に、うひ〳〵(鬚黒自身の事)しうきすぐなるさまにて出で入るほども、かた〳〵に、人目立つらむと傍痛ければ、心やすく移ろ(玉鬘を鬚黒方に)はしてむと思ひ侍るなり。おほきおと(太政大臣、源氏の事)どの、さる世にたぐひなき御覺えをば、更にも聞えず、心恥かしういたり深うおはすめ(な)る御あたりに、憎げなる事・・(ども)漏り聞えば、いとなむいとほしう忝かるべき。なだらかにて・御中よく・・・(語らひ)て物し給へ。宮(北方が式部卿宮方へ)に渡り給へりとも、忘る・・(れ聞ゆ)る事は侍らじ。とてもかうても(く)、[illegible]に志の隔たることはあるまじけれど、

にしても　輕率といふ誹を受ける譯ですから、今迄通り夫婦として、お互に助け合ふやうにして下さい。

世の人にも似ぬ　人並でない私の身の憂さを父宮もお歎きになつて、今更離縁になつては外聞のわるい事と心配しておいでになる事ですから、それがお氣の毒で、里に歸つても合せる顏がございませぬ。

大殿の北の方　源氏の北方即ち紫上。紫上と鬚黒の北方とは姉妹。

かれは知らぬさまにて　あの方も子供の時分には父宮のお世話にならずに育つた方なのですが、年老いてからかうして（幼時の）しかへしでもするやうに）玉鬘を親のやうに世話をして居るのが、恨めしいと父宮は仰しやいますが、私は何とも氣にかけては居りませぬ。

いとよう宣ふを　中々わかつた事を仰しやるが、又例の氣が狂つてくると困つた事が起りはせぬかと心配です。

人の親げなく　父宮は親といふ態度ではないやうですね。

斯かる事の聞えあらば　一切が紫上のからくりだなどといふ噂が源氏のお耳に入つてはつらい。

世の聞え人笑へに、まろが爲にもかる〳〵しうなむ侍るべきを、年頃の契りたがへず、かたみに後見むと・おぼせ」と、こしらへ聞え給へば、「人の御つらさは、ともかくも知り聞えず。世の人にも似ぬ身の憂きをなむ、宮にもおぼし歎きて、今更に人笑へなる事と御心を亂り給ふなれば、いとほしう、いかでか見え奉らむとなむ思ふ。大殿の北の方と聞ゆるも、他人にやは物し給ふ。かれは、知らぬさまにて生ひ出で給へる人の・末の世に斯く人の親だちもてない給ふつらさをなむ、おもほし宣ふなれど、ここにはともかくも思はずや。もてない給はむさまを見るばかり」と宣へば、「いとよう宣ふを、例の御心たがひにや、苦しきことも出でこ・む。大殿の北の方の知り給ふ事にも侍らず。いつき娘のやうにて物し給へ・ば、斯く思ひおとされたる人の上までは知り給ひなむや。人の御親げ・なくこそ物し給ふべかめれ。斯かる事の・・聞え・あらば、いと苦しか・べき」など、

心も空に　鬚黒が玉鬘の方に行きたくて居ても立つても居られぬのである。

斯かる空に　こんな天氣にわざわざ出かけるのも體裁がわるいので、北方が憎々しく嫉妬でもなさつたら、却つてそれをきつかけに、こちらからも逆ねぢをくはせて出かける所であるのに、北方が穩かに平氣な樣子をして居られるのがいぢらしいので。

むかひ火つくりて　日本武尊が東征して駿河國の賊に野で難に遭はれた時、十束の劍で草を刈り臥せ向火をつけて難を遁れ給うた。景行紀「日本武尊信二其言一入二野中一而覓獸、賊有二殺レ王之情一、放二火燒其野一、王知レ被レ欺、則以レ燧出レ火之、向燒而得レ免」

あやにくなめる　生憎な雪で迚もいらつしやれさうもございませんね。

今は限り　もうこれぎりだ、どうせ止めても無駄だと思つて居られる北方の樣子は同情に堪へない。

なほ此頃ばかり　玉鬘方へ繁く通ふのも此當座だけの事です。

此處になど渡しては　玉鬘をこちらに引取れば却つて氣が樂になる事でせう。

日一日入り居て語らひ申し給ふ。暮れぬれば、心も空に浮き立ちて、いかで出でなむとおぼすに、雪かきたれて降る・・。斯かる空にふりいでむも、・・・人目いとほしう、この御氣色も、憎げにふすべ恨みなどし給はば、なか〳〵ことつけて、我もむかひ火つくりてあるべきを、いとおいらかにつれなうもてなし給へるさまの、いと心苦しければ、いかにせむと思ひ亂れつつ、格子などもさながら、端近ううちながめて居給へり。北の方氣色を見て、「あやにくな・める雪を、いかで分け給はむとすらむ。夜も更けぬめりや」と、そそのかし給ふ。今は限りと、とどむともと思ひめぐらし給へる氣色、いと哀なり。「斯かるには、いかでか」と宣ふものから、「なほ此頃ばかり。心の程を知らで、とかく人のいひなし、おとどたちも、ひだり右に聞きおぼさむ事を憚りてなむ、とだえあらむはいとほしき。思ひしづめてなほ見果て給へ。此處にな

斯く世の常なる かうしてあなたが正氣で居られる時には、外に愛情を分けようといふ氣もなくなつていとしく思はれます。

よそにても 他處においでであつても、私の事を思ひ出してさへ下さるならば、袖の氷も解けようと存じます。

袖の氷も 後撰冬「思ひつつ寢なくに明くる冬の夜の袖の氷は融けずもあるかな」

火取 香を焚きしめる香爐。

いとどほそう 病に痩せ細つて居られる上に衣裳も糊氣がないから。

しめりておはする 沈みこんで居られる北方の樣子は氣の毒である。

御目のいたう 北方が目をひどく泣き腫らして居られるのは少し氣に喰はないが、同情心の動いてゐる今の間は、それもさしてあ、今迄この北方を相手に暮して來られたものだとおもふほどに、すつかり玉鬘に見かへてしまふのは輕率だとは思ふものの、矢張玉鬘に逢ひたさの心支度は動いて。

ど渡しては、心やすく侍りなむ。斯く世の常なる御氣色見え給ふ時は、ほかざまに分くる心も失せてなむあはれに思ひ聞ゆる」など語らひ給へば、北方「立ちとまり給ひても、御心の外ならむは、なか〳〵苦しうこそあるべけれ。よそにても、思ひだにおこせ給はば、袖の氷も解けなむかし」など、なごやかに言ひ居給へり。

北方が御火取召して、鬚黒の衣裳に香をます〳〵いよ〳〵たきしめさせ奉り給ふ。北方は糊氣の失せた着物をみづからは、召してなえたる御ぞどもに、うちとけたる御姿、いとどほそうかよわげなり。しめりておはする、いと心苦し。北方を見ての鬚黒の心中御目のいたう泣き腫れたるぞ、すこし物しけれど、いとあはれと見る時は、罪なう(く)おぼして(え)、いかで過ぐしつる年月ぞと(は)、名殘なう移ろふ心のいとかろ(る)きぞやとは思ふ〳〵、なほ心げさうは進みて、玉鬘方へ心の進まぬ樣子を裝つて空歎きをうちしつつ、なほ裝束し給ひて(ふ)、小さき火取(ことに)取寄せて、袖に引入れ(寄せ)てしめ(香を)居給へり。鬚黒のさまなつかしき程になえたる御裝束に、

かたちも 鬚黒の器量も、あの比類の無い源氏には及ばないが、すつきりと男らしい樣子は、平凡の人とは見えず、何となく氣の置ける人品である。

侍 供人の詰所。

さすがに 北方に遠慮するのである。

中將木工 北方の侍女で鬚黒の思ひ人。

籠 衣裳に香を焚きしめる時使用する伏籠。

火取 袖に引入れて居る火取ではなくて、前に「御火取召していよ〳〵たきしめさせ奉り給ふ」とあつた火取をさす。

ややみあふる この語不明。或はヤヽム(動詞)とアフル(動詞)との熟語か。ヤヽムになやむ意の語はあるが、こゝには當らない。ヤヽといふ呼び聲に語尾のムの結合して呼びとめる意を表はす動詞となつたものか。アフルは煽るか。大騷ぎして取抑へる間もなくの意か。

うつし心にて 正氣でこんな亂暴をなさるのだと思へば二度と見向く氣にもならずに惘れてしまふのだが、又例の物怪が、北方を嫌はせようとしてする爲業であると思ふので、女房達も氣の毒がつてゐる。

かたちも、かの並びなき御光にこそ壓さるれど、いとあざやかに雄々(をか)しきさまして、ただ人と見えず、心恥かしげなり。侍(さぶらひ)に人々聲して、「雪すこし間(ひま)あり。夜(よ)は更けぬらむかし」など、さすがにまほにはあらで、そそのかし聞えて(お出かけを促すやうに咳拂ひをする)、こわづくりあへり。中將、木工など(も)、「あはれの世や」など打歎きつつ語らひて臥したるに、さうじみはいみじう思ひしづめて、らうたげに寄り臥し給へり(る)と見る程に、俄に起きあがりて(物怪が起つたのである)、大きなる籠(こ)の下(した)なりつる火取を取りよせて、殿(鬚黒)のうしろに寄りて、さといかけ給ふほど(鬚黒にあびせかけ)、人のややみあふる程もなう(く)、あさましきに(鬚黒の驚きのさま)、あきれて物し給ふ。さるこまかなる灰の目(にも)鼻にも入りて、おほほれて物も覺えず(鬚黒はぼんやりして自失の體である)。拂ひ棄て給へ(れ)ど、立ち滿ちたれば(灰が)、御ぞども脱ぎ給ひつ。うつし心にて斯くし給ふぞと思はば、又顧みすべくもあらずあさましけれど、例の御(おほん)物怪の、人に(見)疎ませむとするわざと、お前(北方の侍女達)なる人々も、いとほしう見奉る。立ち騷(女房達が)

清らを盡し給ふ 華麗を極めた玉鬘の所へは、その儘の姿では行けさうもない。

心たがひとは 狂亂の上とはいひながら、珍らしいついぞ見た事のない北方の態度だと。

爪彈 人を疎んじ憎む時の所作である。

このごろ荒立てては 今の場合事を荒立てては大事件が出來する事だらうと辛抱して。

打たれ引かれ 北方が加持の僧に打たれたり引かれたりして泣き惑ひ明かして、曉方にすこし眠つて居られるひまに。

よべ俄に 昨晩當方に突然氣絶した人がありました上に、あの雪模様ではわざ〳〵出かけにくくてぐづ〳〵して居りましたので。

御心をば あなたの思はくは申す迄もなく、はたの人達が、私の行かなかつた事を、どういふ意味に取つた事でせう。

心さへ空に 雪が亂れ降るばかりか心もうはの空に亂れながら寒い雪の夜を寒い獨寢に明かしましたよ。

ぎて、鬚黒は御ぞども奉りかへなどすれど、そこらの灰の、鬚黒の御鬢のわたりにも立ちのぼり、よろづの所に・・・滿ちたる心地すれば、清らを盡し給ふわたりに、さながらまうで給ふべきにもあらず。鬚黒の心中心たがひとはいひながら、なほ珍らしう見知らぬ・・人の御有様なりやと、爪彈せられ、うとましうなりて、あはれと思ひつる心も殘らねど、このごろ荒立てては、いみじき事出で來なむ、とおぼししづめて、夜中になりぬれど、僧など召して、加持參り騷ぐ。よばひのののしり給ふ聲など、思ひうとみ給はむに、こ北方のわめき立てる聲などを聞くと鬚黒が愛相をつかしなさるのも當然である とわりなり。夜一夜・・・・打たれ引かれ泣き惑ひ明かし給ひて、すこし打休み給へる程に、かしこへ御文奉れ給ふ。鬚黒文「よべ鬚黒が玉鬘の所へ 俄に消え入る人の侍りしにより、雪の氣色もふり出でがたく、北方の事 やすらひ侍りしに、身さへ冷えてなむ。御心をばさるものにて、玉鬘方に失禮した由の斷りである 玉鬘を案ず 人いかに取りなし侍りけむ」と、きすくに書き給へり。玉鬘の女房達 生眞面目に

「鬚黒心さへ空に亂れし雪もよにひとりさえつる片敷きの袖

つしやかに 書風のどつしりしてゐるさま。

かく心ときめき 鬚黒は夜がれを玉鬘が何と思つてゐるかと胸をわくつかせながら文をよこしたのだが、玉鬘はそれを御覽にもならないから御返事もない。

男胸つぶれて 鬚黒は返事が來ないので終日氣を揉み通して居られる。

心のうちにも 鬚黒も心中に、せめてこの頃だけでも何事もなく正氣であらせ給へと祈念する。

誠の心ばへの 北方の本心が可憐なものである事を知つて居らなかつたら、かうまで我慢は出來さうもない氣味わるさだと鬚黒は思つて居られた。

例の急ぎ出で給ひて 「いと見苦し」につゞく。併し河内本の方が穩かである。

御裝束の事なども 北方は物怪の爲に鬚黒の衣裳なども體裁よくも造られないで、いつも妙にしつくりしないといふので、鬚黒は苦情を言つて居られたが、今日も鮮かな直衣なども間にあはないので甚だ見苦しい。

よべのは 昨日の直衣は。

御ぞどもに 下著にはその焦げ臭い匂ひもしみついてゐる。

異樣なり 變だ。

堪へがたくこそ」と、白き薄様に、づしやかに書い給へれど、たまらないつらさでした 殊にをかしき所もなし。手はいと清げなり。格別風情もない ざえかしこくなどぞ物し給ひける。かんの君、玉鬘は鬚黒の來ない事などは何とも思つて居られないのに 夜がれを何ともおぼされぬに、かく心ときめきし給へるを見も入れ給はねば、御返りなし。男胸つぶれて、・・おもひ暮し給ふ。

北の方はなほいと苦しげにし給へば、御修法など始めさせ給ふ。鬚黒の本妻 心のうちにも、此頃ばかりだに、事なくうつし心にあらせ給へ、と念じ給ふ。誠の心ばへのあはれなるを見知らずば、かうまで思ひ過ぐすべうもなき・けうとさかな、と思ひ居給へり。暮るれば、例の急ぎ出で給ひて、御裝束の事なども、めやすくも・・・・・・・・・・・しなし・給はず、よに・怪しううちあはぬさまにのみむづかり給ふを、あざやかなる御直衣なども、え取りあへ給はで、いと見苦し・。昨夜火取を投げつけられたので よべのは燒け通りて、うとましげに焦がれたる匂ひなども、異樣なり。御ぞどもに移香もしみたり。燒けた香

ふすべられける この焦げ臭い著物を著て行つては北方に嫉妬された跡が歴然として居つて、玉鬘も嫌ひさうなので、それを脱ぎかへて、御湯に入つて大層おめかしなさる。

ひとりゐて 昨晩あなたの御直衣を燒いたあの焔は、獨り取殘されて恨めしく思つておいでになる北方の胸一つにとめられないで燃えだした火だと存じました。ひとりは獨と火取、思ひのひに火がかけてある。

いかなる心にて 一體自分はどういふ料簡でこんな女と馴染んだのであらうか、などとばかり鬚黒はお感じになつた。

憂き事を 昨夜はひどい目にあつたが、それを思ふと、北方の事木工の事それやあれやと後悔の念が一入念頭に浮んで來る。くゆるは煙の燻るに悔ゆをひゞかせたもの。

いと殊の外なる あのとんでもない騒ぎが玉鬘に聞えたら、私は玉鬘からも嫌はれて、中ぶらりんの身になつてしまふ事だらう。

一夜ばかりの 一晩行かなかつたばかりなのに、その間に玉鬘の樣子は更に美しさがましたやうに感ぜられるので、一段と他の女に愛情を分ける事が出來さうもないやうな氣がして。

ふすべられける程あらはに、人も・(見)うんじ給ひぬべければ、脱ぎかへて、御湯殿など、いたう(く)繕ひ給ふ。木工の君、御薫物・(な)(ど)・しつつ聞ゆ。鬚黒に

「(木工)ひとりゐて焦がるる胸の苦しきに思ひ餘れる炎とぞ見し名殘なき御もてなしは、見奉る人だに、ただにやは」と、口(地で)ほひて居たる、まみいといたし。(木工の目もとは大變美しい)されど、いかなる心・(地)にて斯樣の人に物をいひけむ、などのみぞ覺え給ひける。なさけなき事よ。(無情な話だ)

「(鬚黒)憂き事を思ひ騒げばさま〴〵にくゆる(ぶ)煙ぞいとど立添ふ(けぶり)いと殊の外なる事どもの、もし聞えあらば、ちゆうげん(中間)・になりぬべき身なめり」と、打歎きて出で給ひぬ。一夜ばかりの隔てだに、又珍らしう(く)をかしさ・・(きさま)まさりて覺え給ふ有樣に、いとど心を分くべくもあらず覺えて、(玉鬘を專心に愛してゐる爲に)心憂ければ、(北方がいやで久しい間玉鬘方に逗留して居られた)久しう籠り居給へり。

修法などし騒げど 北方の物怪を祓ふ爲に加持祈禱をして大騒ぎをしてゐるが一向效驗が無くて物怪が盛に出て來てわめき立てて居るといふ話を鬚黒は玉鬘方に居つて傳聞したので。

殿に渡り給ふ時も 鬚黒は自邸に歸られた時も他の部屋に別居してゐて、お子達だけを呼寄せて御寵愛になつて居られる。

又次々 その下に二人の弟がおありになつた。

やんごとなう さすがに本妻として他に競爭者も無く大事がられて居られた事故、いよ〳〵鬚黒との緣もこれまでと思ふと、侍女達までもひどく悲しく思ふ。

今はしかかけ離れて 今となつては、鬚黒が今後はさういふやうに除け者あつかひなさるであらうのに、北方が頑張つてくつついて居るのは、甚だ不面目な人笑ひの種です。

おのがあらむ 私の生きてゐる間は、さう一圖に屈從してゐる必要はない。

世の中をあさましう 自分達の夫婦仲を情なく思ひ歎いて居られる所へ父宮からお迎への參つた由を申上げたから。

強ひて立ちとまりて 強ひて此處に居すわつてゐて、夫から捨てられてしまふのを見極めてから諦めをつけて歸つて行くのも一層外聞がわるい事だらう。

修法などし騒げど、(は)御物怪(おんものけ)こちたく(う)起りてののしるを聞き給へば、あるまじき疵もつき、(自分が北方の所へ歸つたらとんでもない非難を受け恥をかく事が屹度起らうと怖ろしくて寄りつかない)恥ぢがましき事必ずありなむと、怖ろしう(く)て・・・(まうで)寄りつき給はず。殿に渡り給ふ時も、他方(ことかた)に離れ居給ひて、君だちばかりをぞ、呼び放ちて見奉り給ふ。女一(眞木柱の)所、(姫君といふ)十二三ばかりにて、又次々をとこ(おとこ)二人なむおはしける。近(近年)き年頃となりては、(は北方と鬚黒とは疎遠がちに暮して居られたが)御中も隔たりがちにてならはし給へ・(ひつ)れど、やんごとなう(く)立ち並ぶ方なくてならひ給へれば、今は限りと見(鬚黒の心に)・(え)給ふに、(へは)さぶらふ人々も、いみじう悲しと思ふ。父宮(式部卿宮)聞き給ひて、宮「今は、しかかけ離れてもていで(なし)給ふらむに、さて心強く物し給ふ、いとおもなう(く)人笑へなる事なり。おのがあらむ世の限りは、ひたぶるにしも、などか隨ひくづほれ給はむ」と聞え給ひて、俄に御迎へ(北方を父宮方に)あり。

北の方、御心地すこし例になりて、(正氣に立戻つて)世の中をあさましう(く)思ひ歎き給ふに、斯くと聞え給へれば、強ひて(北方の心)立ちとまりて、人の絶

おぼし立つ 實家に歸る決心をした。

御兄の君だち 北方の兄弟。

事々しとて 北方を迎へに行くのは大袈裟すぎるとて。

さこそはあべかめれと どうせかうなる事と豫期して居た事ではあるが、差當り今日が最後と思ふと、侍女達も悲しくて、涙を流して泣きあつた。

年頃ならひ給はぬ 長らく里歸りもしつけないから、旅住の、うな氣がして、そんな所に大勢で狹苦しくきまりのわるい目をしながら居る事は出來ませぬ。

かたへはおの〳〵 一部の人はそれ〴〵一旦實家に歸つて、北方が落着きなされてから又參りませう。

御調度ども 北方の御調度類も相當な物は皆取纏めておきなどするにつれて、上下の者共が泣き騷いでゐるのは、おそろしいやうに思はれる。

みづからは 私はこんなに不幸な身の上だと今はよく〳〵分りましたから、もう生きてゐなければならない事もなく、運命のままに任せませう。先の長いあなた方が行方も知らず散り〳〵になつてしまはれるのが悲しい事です。「さすがに」は「悲しうもあべいかな」を修飾する。萬事を諦めた今ではあるが、さすがに悲しいの意。

え果てむさまを見果てて、思ひとぢめむも、今すこし人笑へにこそあらめ、などおぼし立つ。御兄(せうと)の君だち、兵衞の督は上達部におはすれば、事々しとて、中將、侍從、民部(みぶ)の大輔(たいふ)など、御車三つばかりしておはしたり。(迎へに)さこそはあべかめれとかねて思ひつる事なれど、さし當りて今日を限りと思へば、さぶらふ人々も、ほろ〳〵と泣きあへり。人々「年頃ならひ給はぬ旅住(たびずみ)に、せばくはしたなくては、いかでか數多はさぶらはむ。かたへはおの〳〵里にまかでて、靜まらせ給ひなむに」などささめく。

人々、おのがじし、(女房達は所持の雜物を里に運んで)はかなき物どもなど、里に運びやりつつ、亂れ散るべし。(それ〴〵家路につく)御調度ども(は)、さるべきは皆したためおきなどするままに、上下(かみしも)泣きさわぎたるは、いとゆゆしく見ゆ。君だ(北方の)ちは何心もなくてありき給ふを、母君皆呼びすゑ給ひて、(北方)「みづからは、斯く心憂き宿世今は(と)見果てつれば、この世に跡とむべきにもあらず、ともかくもさすらへなむ(を)。生ひ先遠う(く)て、

なか〳〵男君だちは 男君達は餘儀なく父君の所へ出入りなさらなくてはなるまいが、父君は構つて下さりさうもなく、姫君よりも却つて落着きのない生活をなさる事でせう。

かのおとどたちの 今は源氏や内大臣の御心の儘の世の中ですから、源氏や内大臣にやはり、あれは注意を要する人の孫だと知られては、出世も出來ますまい。さりとて山や林に隱遁する事は私には死んでも諦められない悲しさです。

知られて 河内本は「つめられて」とあるが、或本には「しめられて」とあるといふ。

昔物語 住吉や落窪の類。

世の常の志深き親 世間普通の愛情深い親でも、時につれ後妻に引かされては、先妻の子におろそかになるものです。まして父子といふ名ばかりで、今からさへ忘れておいでになる大將殿のお心では、ゆく〳〵君達のお力にはなつて下さるまい。

宣ひ歎く 誤か。或は母北方をこめて敬語に言つたものであらう。二〇五頁に玉鬘と女房とをまとめて「過ぐい給はまし」と敬語に言つてある。

さすがに、ちりぼひ(續む主人もなしに)給はむ有樣どもの、悲しう(く)もあ(る)べい(き)かな。姫君は、(姫君はどうならうとも私についていらつしやい)となるともかうなるとも、おのれに添ひ給へ。なかなか、男君だちは、えさらずまうで通ひ見え奉らむに、人の、心とどめ給ふべくもあらず、はしたなう(く)てこそ漂はめ(や)。宮のお(式部卿宮の御)はせむ程、かたのやうにまじらひをすとも、かのおとどたちの御心にかかれる世にて、斯く(かの)心おくべきわたりぞと、さすがに(つめ)知られて、人にもなり立たむこと難し。さりとて(は)、山林に引入り(うちつづき)つつまじら(は)む事(の)、後の世までいみじ(かるべ)き事(なん)」と泣き給ふに、皆深き心は思ひ分かねど、(君達は幼少故深い仔細は分らぬながら)うちひそみて泣きおはさうず。(乳母共)「昔物語などを見るにも、世の常の志深き親だに、時に移ろひ(ひ)人に隨へば、おろかにのみこそなりけれ。ましてかたのやうにて、見る(目の)前に(て)だに名殘なき御心(鬚黒の)は、かかりど(し)ころありてももてない(し)給はじ」と、御乳母ども、さし集ひて宣ひ歎く。日も暮れ、雪降りぬべき空の氣色も、心細う(く)見ゆる

いたう荒れ侍りなむ 大荒れになりませう。早くお出かけ下さい。

姫君は 姫君は鬚黒がかはいがつてゐられるのが癖になつてゐるので。

見奉らでは お父樣にお目にかからずには居られない。お暇乞などもせずに行つて、二度とお目にかかる事が出來ないかも知れない。

え渡るまじと 母君のお里には迚も行けまいと姫君が思つてゐるので。

只今も渡り給はなむ 眞木柱は父君が今直玉鬘の方から歸つて來て下さればよいにと待つて居られるが。

斯く暮れなむに こんなに日が暮れたからには、どうしてお歸りになるものか。鬚黒は今玉鬘方に居るのである。

今はとて 今日を限りと此家は立去つても、多年馴染んで來た眞木柱は私を忘れてくれるな。眞木は檜木である。この歌からこの姫君を眞木柱の姫君といふ。

馴れきとは 柱は長い馴染を忘れず居てくれても、私共には立ちどまるべき譯がない。柱はどうあらうともその主人が心がはりしてゐる故との義。「立」は柱の緣。

さしも思はぬ 日頃は別に氣にもとめない草木の上までも、別れて後は戀しからうと名殘を惜しんで。

夕べなり。「いたう荒れ侍りなむ・・(とす)。早う」と、御迎への君だちそそのかし(北方のお出かけを促して)聞えて、御目(皆)おしのごひつつながめおはす。姫君(眞木柱)は、殿・(の)いとかなしう(く)し奉り給ふならひに、見奉(姫君の心)らではいかでかあらむ、今、(今行きますとも言はずに)なども聞えで、又あひ見ぬやうもこそあれ、とおぼすに、うつぶし(姫君のさま)臥して、え渡るまじと思(お)ほしたるを、(北方)「かくおぼしたるなむいと心憂き」など、こしらへ(北方が姫君を)聞え給ふ。只今(姫君の心)も渡り給はなむ、と待ち聞え(たれ)給へど、斯く暮れなむに(ぬるには)・、まさに動き給ひなむや。常(姫君が)に寄り居給ふ東面(ひんがしおもて)の柱を、人に讓る心地し給ふもあはれにて、姫君、檜皮色(ひはだいろ)の紙のかさね、只いささかに書きて、柱の乾(ひ)われたるはざまに、笄(かうがい)の先して押入れ給ふ。

今はとて宿離(やどか)れぬとも馴れ來つる眞木の柱は我を忘るな(眞木柱)

(これだけの文句も書ききれないで)えも書きやらで泣き給ふ。母君・(は)、「いでや(いやなんの未練があらう)」とて、

(北方)馴れきとは思ひいづとも何により立止(たちどま)るべき眞木の柱ぞ

お前なる人々(女房達)も、さま〴〵に悲しく・(て)、さしも思はぬ木草のも

淺けれど 緣の淺いあなたがあとに居殘つて、宿を番する筈の北方がお立去りになるといふ事があるものでせうか。「石間」は湖月抄本には漢字で書いてある、河内本では「いしま」と假名で書いてある。「かけ」は懸に影の意がこめてある。

とも角も 悲しさで何とも申上げられませんが、私も此儘此處に永く居殘る事が出來ようとは思はれませぬ。「むすぼ、れ」は水の流が亂れて人影を寫すことが出來ぬといふ意に心が懊惱する意が持たせてある。「ともかくも一岩に「云はぬ」の意味で言ひかけた枕詞である。

又はいかでかは 二度と此邸を見る事はあるまいと、ものはかない氣持になる。

はかなき心地す 河内本の如く「はかなき梢をも云々」とある方がよい。この場合「はかなき」は「何でもない」と譯する。

隱るるまでぞ 大鏡時平の條菅公「君が住む宿の梢をゆく〳〵も隱るるまでに顧みしはや」

おほきおとど 宮は源氏を結構な緣者だと思つておいでになるが、あれは前世からの大變な仇敵だと思はれます。

女御 式部卿宮の御女で少女卷に冷泉院の女御として入内。

はしたなくもてなし 源氏が秋好中宮を入内させて式部卿宮の女御にきまりのわるい思ひをおさせになつたが。

とさへ、戀しからむ事と目とどめて、鼻すすりあへり。木工の君は・(た)、殿(鬚黒付の女房故居殘る)の御方の人にてとどまるに、中將(北方付の女房)のおもと、

「淺けれど石間(いしま)の水はすみ果(すみは澄と住)てて宿もる君やかけ離るべき思ひかけざりし事なり。(あなたとかうしてお別れ申さうとは思ひもかけなかつた事です)斯くて別れ奉らむ事よ」といへば、木工、

「とも角も岩間(いはま)の水の結ぼほれ影と・(ど)むべくも思ほえぬ世をいでや(思ひかけない事です)」とて打泣く。御車引出(北方の乘られる御車を)でて、うち顧みる・(に)も、又はいかでかは見むと、はかなき心地す。梢をも目とどめて、隱るるまでぞ顧み(北方が)給ひける。君が住む故にはあらで、(道眞の歌のやうに君が住むからといふ意味ではないが長い間の御住家であるから戀しくない筈はない)ここら年經給へる御すみかの、いかでか偲び所なくはあらむ。(想出の程がなからうや)

(御父式部卿宮は北方を迎へて悲しく思召した)宮には待ちとり、いみじうおぼしたり。母北の方泣き騷ぎ給ひて、(式部卿宮の北方で紫上の繼母)

母「おほきおとどを、めでたきよすがと思ひ聞え給へれど、(太政大臣即ち源氏の事)いかばかりの昔の仇敵にかおはしけむとこそはおもほゆれ。女御をも、事に觸れ、はしたなく・・・・(おとしめ)もてなし給ひしかど、(ふな)

御中の恨み それは須磨に御退去の時にこちらから音信もせず冷淡であつた事を根に持つて居られて、その恨みを思ひ知れといふ意味だとあなたも仰しやり世間でもさういつて居りましたが、それでも、そんなになさるべきではない。

繼子かしづき 源氏が玉鬘を引取つて娘分として育てた事。

實法なる人の わき目も振らずに玉鬘を大事にする律義者をと思つて、鬚黑を引付けて大事になさるとは腹が立ちます。

かしこき人は 源氏のやうな賢い人は、前以て考へておいて、こんな返報をしてやらうと思つてゐられたのだらう。

さ思はるる さう睨まれたのが私共の不幸といふものでせう。

つれなうて 源氏は何げない顔をして居つて、須磨退去の當時の返報は、或は引立て或は退けつて萬遍なくやつてゐられるやうだ。

おのれ一人をば 私一人だけは紫上の父だと思つて、先年も五十の賀をあのやうに盛大に催して、わが家門には餘る程の事をして下さつた。私共はそれをこの世の面目と思つて滿足して居なければなりますまい。

さる世の響きに 式部卿宮の五十の賀を紫上が世を響かして催した事が少女卷にあつた。

それは、御中の恨み解けざりし程、思ひ知・れとにこそはあり(ら)けめ、とおほし(式部卿宮が)宣ひ、世の人もいひなししだに、なほさやはあるべき(紫上を大事になさるならばその緣につながる私どもまでもお蔭を蒙るのが常だのにと思つて源氏の仕打が納得出來なかつたのですのに)。人一人を思ひかしづき給はむ故は、ほとりまでも匂ふためしこそあれと心得ざりしを、まして(た)・斯く末(晩年にわけのわからぬ繼子の世話など)にすずろなる繼子(をして)かしづきをして、おのれ(自分が先に手をつけたのが氣の毒さに)ふるし給へるいとほしみ(がり)・に、實法(じはふ)なる人(鬚黑)のゆるぎ(く)どころあるまじきをとて、取寄せ・もてかしづき給ふは、いかが・つらからぬ(は)」と、いひ續けののしり給へば、宮は、「あな聞きにくや。世に難(なん)つけられ給はぬおとどを、口にまかせてなおとしめ給ひそ。かしこき人は、思ひおき、斯かる報いもがなと思ふ事こそは物せられけめ。さ思はる(覺えた)るわが身の不幸(ふかう)なるにこそはあらめ。つれなうて(く)、皆かの沈み給ひし世の報いは、浮べ沈め、いとかしこくこそは思ひわたい(き)給ふめれ。おのれ一人をば、さるべきゆかりと思ひてこそは、一年も、さる世の響きに、家よりあまる事どももありしか。それをこの世

この大北の方ぞ この大北の方こそしたたか者であつた。鬚黑の北方に對して母北の方を大北の方といつて區別するのである。

聞きて 鬚黑はその事を玉鬘方にゐて傳聞して。

怪しう 以下鬚黑の心。

さうじみは 北方自身はそれ程手の裏かへしたやうに際立つた事をする積りもないのだが、父宮がかうした輕率な事をなさるのだ。

君だちもあり 鬚黑は子供も有る事であり外聞もわるいので、それを苦にして。

斯く怪しき事 こんな奇怪な事が有るのですよ。北方が父宮方に歸られた事をいふ。

さて片隅に 北方はあゝして家の片隅に引込んでもゐられさうな氣樂な人で荒立てるやうな事はあるまいと思つてゐましたのに。

人の聞き見ることも 此儘捨ておいては薄情のやうにも見えますので、一寸顔を出して參りませう。

柳 表は白、裏は青。

綺 かむはた。錦に似て薄いもの。

などかは 玉鬘には似合ひの夫であると女房達は思つて居るが玉鬘は、こんないきさつをお聞きになるにつけても、しみ〴〵我身がいやになつてしまふので見向きもなさらない。

の面目(めいぼく)にてやみぬべきなめり」と宣ふに、いよ(大北方は)〳〵腹立ちて、まが(忌はしい惡口をいひ散らされる)〳〵しき事などをいひ散らし・(て)給ふ。この大北の方ぞさがなものなりける(か)。

大將(鬚黑は)の君、斯く渡り(北方が父宮の方に)給ひにけるを聞きて、・・怪しう(いと)、(く)若々し(若い同志の仲)き中らひのやうに、ふすべがほにて物し給ひけるかな、さうじ(正)みは(身)、しかひききりに、きは〳〵しき心・(に)もなきものを・(や)、宮の斯くかる〳〵しうおはする、と思ひて(鬚黑が)、君だち(北方との間に)もあり、人目もいとほしきに、思ひ亂れて、かん(玉鬘)の君に、鬚「斯く怪しき事なむ侍るなる。なか〳〵心やすく(北方が去つて却つて氣樂とは思ふが)は思ひ給へ(ひ)なせど・(も)、さて片隅に隱ろへてもありぬべき人の心やすさを、おだしう(く)思ひ給へつるに、俄にかの宮(父宮が北方を引取つたのでせう)の物し給ふならむ。人の聞き見ることもなさけなきを、うちほ(父宮の方へ)のめきて參り來なむ」とて出で(玉鬘方を)給ふ・(に)。よきうへ(抱)の御ぞ、柳の下襲(したがさね)、青鈍(あをにび)の綺の指貫(さしぬき)著給ひて、引繕ひ給へる、いと物々し(貫祿がある)。などかは(女房達の心)似げなからむと人々は見奉るを、か

宮に恨み聞えむとて 宮に恨言を言はうと思つて出られた序に鬚黑はまづ自分の御殿に立寄つて見られると。

ありしさま 鬚黑の留守中の有樣。

さても世の人に似ず さて〳〵私は普通の人と違つて、長の年頃妙な北方の物怪を我慢し通して來たのに、その志を結局北方は分つて下さらなかつたなあ。

いと思ひのままならむ 我儘な男ならば、今まで連れ添つてゐる筈はない。

よしかのさうじみは まゝよ、北方自身は、どうせすたり者と思はれるから、どうならうとも同じ事だが、子供達までもどうなさらうといふのだらう。「とてもかくても」は「同じ事なり」に續く。

眞木柱 姫君の詠んだ眞木柱の歌の事。

何か いやなに、鬚黑が樒勢に阿る輕薄は今始まつた譯ではないのです。

年頃思ひ浮かれ 玉鬘に現を拔かして居られるといふ話は前から聞いてゐましたが、いつまで待つたからとて思ひ直る時はありますまい。

んの君は、斯かる事どもを聞き給ふにつけても、身の心づきなうおぼし知らるれば、見もやり給はず。

宮に恨み聞えむとてまうで給ふままに、まづ殿におはしたれば、木工の君など出で來て、ありしさま語り聞ゆ。姫君の御有樣聞き給ひて、雄々しく念じ給へど、ほろ〳〵とこぼるる御氣色、いとあはれなり。

鬚「さても世の人に似ず、怪しき事どもを見過ぐすここらの年頃の志を、見知り給はずもありけるかな。いと思ひのままならむ人は、今までも立ちとまるべくやはある。よし、かのさうじみは、とてもかくてもいたづら人と見え給へば、同じ事なり。をさなき人々も、いかやうにもてなし給はむとすらむ」と、打歎きつつ、かの眞木柱を見給ふに、御手もをさなけれど、心ばへのあはれに戀しきままに、道すがら涙おしのごひつつまうで給へれば、對面し給ふべくもあらず。「何か。ただ時に移る心の、今始めて變り給ふにもあらず。年頃思ひ浮か

いとゞひが〳〵しきさまを 連れ添うてゐればゐるほど狂氣の樣を見られるばかりで、それは一生續いていくでせう。「ひが〳〵しきさま」は物の怪の事。

ことわりなり 父宮が北方に諭して鬚黑に對面させられないのも當然である。

いと若々しき 突然里に歸られるなどは、甚だ苦々しい仕打だと思ひます。

今は只なだらかに 私の過ちを穩かに勘辨して下さつて、あれでは爲方がない、出て行くのも當然だと人がいふ所まで待つて見て、その時にかうして引取つて下さつたならと存じます。

十なるは 後に藤中納言。

殿上 童殿上。

ようい 河内本「よくも」に從ふ。

らう〳〵じう 氣轉が利いて居つて、次第に物が分つて來て居る。

あこをこそは お前を懷しい姫君の御形見にも見ようと思ふ。宮にも式部卿宮にもお目に懸りたいと鬚黑が内意をうかゞはれるが。

れ給ふさま聞きわたりても久しくなりぬるを、いづくを又思ひなほるべき折とか待たむ。（憎ゆにも）いとどひが〳〵しきさまをのみこそ見え果て給はめ」と諫め申し給ふ。（北方を にくゆにいとどイ）、ことわりなり。

鬚「いと若々しき心地もしはべるかな。おもほし捨つまじき人々も侍ればと、のどかに思ひ侍りける心の怠りを、かへす〴〵聞えてもやる方なし。今は只なだらかに御覽じ許して、罪さりどころなう（く）世人にもことわらせてこそ、かやうにももてない（し）給はめ」など、聞え煩ひておはす。

姫君「眞木柱になりとも遂ひたいと鬚黑がいふけれども、姫君をだに見奉らむと聞え給へれど、いだし奉るべくもあらず。男君だち、十なるは殿上し給（て）ふ。いとうつくし（く）。人にほめられて、かたちなど（は）ようい（く）あらねど、いとらう〳〵じう（く）、物の心やう〳〵知り給へり。次の君は八つばかりにて、いとらうたげに（て）、姫君にも覺えたれば、かき撫でつつ、

鬚「あこをこそは戀しき御形見にも見るべか（ん）めれ」など、打泣きて語らひ給ふ。宮にも御氣色賜はらせ給へど、

この君だちをば 鬚黒は二人の男君達と同車して、話しながら歸つて來られる。

見送りたるさま 鬚黒は一旦君達を自邸に連れ戻つてそこに殘して一人で玉鬘の方に出かけたのである。

女君の御さまの 玉鬘の見がひのある美しさに狂氣の北方を比べて見ると、あまりな相違なので、すべての苦惱を忘れられるのであつた。

うち絶えて 其後鬚黒は北方には一向音づれもせず、先達の手持無沙汰をよい口實にして居るらしいのを、宮は腹立つて歎いておいでになる。

ここにさへ 私までが恨まれる事になるのは迷惑です。式部卿宮の北方は、紫上が玉鬘を鬚黒に取持つたものと邪推して紫上を恨んで居られるからである。

おのが心一つにもあらぬ 私の一存ではどうにもならぬ玉鬘の緣故で、主上も私にこだはりを持つていらせられるやうです。

宮「風(風を引いて養生をして居りまして)おこりてためらひ侍る程にて」とあれば、はしたなくて出(鬚黒は手持無沙汰に歸つてゆかれ)で給ひぬ。

この君だちをば車に乘せて、かたらひおはす。六條殿(玉鬘の居る六條殿には子供を連れ)にはえゐておはせねば、殿(自邸に)にとどめて、鬚「なほ此處(自邸に)にあれ。來て見む(逢ひに來るにも來やす)にも心(いやうに)やすかるべく」と宣ふ。うち(君達は)ながめて、いと心細げに見送(鬚黒の六)りたるさまなども、いとあはれなるに、物思ひ加はりぬる心地(又新に物思ひの種が殖えたやうな氣がするが)すれど、女君(をんなぎみ)の御・・(あり)さまの見るかひありてめでたきに、ひがひがしき御さま(北方の事)を思ひくらぶるにもこよなくて、よろづを慰め給ふ。うち絶えて音づれもせず、はしたなかりしにことつけがほなるを、宮(式部卿宮)にはいみじうめざましがり歎き給ふ。春の上も聞(紫上もこの事をお聞き)き給ひて、紫「ここにさへ恨みらるる故になるが苦しきこと」と歎き給ふを、おとど(源氏)の君いとほしとおぼして、源「難きことなり。おのが心一つにもあらぬ人(玉鬘)のゆかりに、うち(冷泉院)にも心おきたるさまにおぼしたン(ん)なり。兵部卿(鬚宮)の宮なども忍じ給ふと聞きしを、

さいへど 併し兵部卿宮は譯の分つた方で、事情を聞いて諒解して下さつたのです。

かくれなきものなれば この下に「聞こえあらむ」といふやうな語が省かれてゐる。

しか思ふべき罪もなし 式部卿宮の北方も遂には事情を御聞きになるだらう。またそんなに苦にしなければならぬやうな過失は私達にはないと思ひます。

思ひあつかひ聞えて この語は「年かへりて參らせ奉り給ふ」に續く。玉鬘を氣の毒にも思ひ、また、それ相當にとりさばいて。

この參り給はむとありし 玉鬘が尙侍として參內する筈になつて居つた事も鬚黒の故障から沙汰やみになつたので、主上もそれを何か意趣あつての事のやうに無禮なと思召していらせられるであらうし、源氏や內大臣なども何か胸に持つてゐられる事だらう、それに宮仕の官女を妻としてゐる例もない譯ではない、と思ひ返して、年が改まつてから玉鬘を參內させた。

男踏歌 卷一、二六七頁。

儀式 玉鬘入內の儀式。

かたぐ〳〵のおとどたち 源氏や內大臣、それにこの鬚黒の大將の勢力までが一つになつて、夕霧が懇切に一切の世話をする。

兄の君だち 玉鬘の兄柏木等。

じようきやうでん 承香殿は仁壽殿の後方、常寧殿の前方に在る。玉鬘はその東面の部屋に居られるのである。

さいへど思ひやり深う(く)おはする人にて、聞きあきらめ恨み解け給ひにたなり。おのづから、人の中らひは、忍ぶる事と思へど、隱れなきものなれば。しか・(ここに)思ふべき罪もなしとなむ思ひ(覺え)侍る」と宣ふ。

斯かる事どもの騷ぎに、かんの君の御氣色(玉鬘の機嫌が前より一層よくないので)、いよ〳〵晴間なきを、大將(鬚黒)はいとほしと思ひ(玉鬘を)あつかひ聞えて、この參り給はむと(尙侍として參內する事)ありし事も絶え切れて、妨げ聞えつるを、うち(冷泉院)にも、なめく心(「心あるさまにな)あるさま(めく思召し」の意)に聞召し、人々(源氏や內大臣)もおぼすところあらむ、おほやけ人を(打)・賴み・(も)たる人はなくやはある、と思ひかへして、年かへりて(源氏三十八歲)參らせ(玉鬘を冷泉院に)奉り給ふ。男踏歌(をとこだうか)ありければ、やがてその程に、儀式いといかめしう(く)二なくて參り給ふ。かた〳〵のおとどたち(源氏と內大臣)、この大將の御勢さへさしあひ、宰相(夕霧)の中將・(も)懇に心しらひ(よせ)聞え給ふ。兄(せうと)の君だちも、斯かる折にと・・(さし)つどひ、追從(つゐしよう)し寄りて、・・(もて)・・(なし)かしづき給ふさま、いとめでたし。じようきやうでん(そ・・)の東(ひんがし)

西には 承香殿の西面の御局には式部卿宮の御女である冷泉院の女御がおいでになるので。

めだうばかりの 玉鬘と宮の女御とは馬道だけを隔てて住んでおいでになるのであるが。馬道は卷一、四頁。

この宮の女御 今いうた式部卿宮の御女である女。

左の大殿の女御 左大臣の御女である女御であるが誰か明かでない。

中納言宰相 二人共系圖不明。

踏歌は方々に里人參り 踏歌は各婦人達のお里の人々も見物に參り、一風變つた陽氣な見ものであるから、女房達は皆綺羅を飾つて、袖口のかさねも、何枚となく澤山重なるやうに準備なさる。當時は婦人の袖口や裾のかさなりには特に念を入れたのである。

春宮の女御 春宮の御母で朱雀院の女御。鬚黑の妹で承香殿の女御ともいふ。

今めかし 賑かだ。

お前中宮の御方 男踏歌の人々が主上の御前から中宮の御方を經て朱雀院に參つた。

竹河 催馬樂呂竹河「竹河の橋のつめなるや、橋のつめなる花園にはれ、花園に、我をば放てや、我をば放てやめざしたぐへて」

面に御局したり。西に・宮の女御はおはしければ、め・だうばかりの隔てなるに、御心のうちは遙に隔たりけむかし。御方々いづれとなく挑みかはし給ひて、うちわたり心にくくをかしき頃ほひなり。殊に亂りがはしき更衣たち、あまたもさぶらひ給はず。中宮、弘徽殿の女御、この宮の女御、左の大殿の女御などさぶらひ給ふ。さては中納言、宰相のむすめ二人ばかりぞさぶらひ給ひける。踏歌は方々に里人參り、さま殊に賑はしき見物なれば、誰も〳〵・清らを盡し、袖口のかさなり・、こちたく・・・整へ給ふ。春宮の女御も、いと花やかにもてなし給ひて、宮はまだ若くおはしませど、すべていと今めかし。お前、中宮の御方、朱雀院・とに參りて、夜いたう更けにければ、六條の院には、この度は所せしと省き給ふ。朱雀院より歸り參りて、春宮の御方々にめぐる程に夜あけぬ。ほの〴〵とをかしき朝ぼらけに、いたく醉ひ亂れたるさまして、「竹河」謠ひ・・け

四五人ばかり 内大臣の子息四五人は今殿上人なのである。

童なる八郎君 内大臣の本妻の腹で柏木と同腹。藤裏葉に「賀王恩といふを奏する程に、おほきおとどの御男の十ばかりなる、せちに面白う舞ふ」とあるのもこの八郎君の事である。二七〇頁。

大將殿の太郎君 母は式部卿宮の御女。前に「男君だち、十なるは殿上し給ふ」とあつた。

この御局の袖口 玉鬘の御局の女房達の袖口や全體の樣子が賑やかで、色合やかさなりは何も特別なものではないが、一際すぐれて花やかである。

かやうに御心をやりて かやうにのびのびした氣分で當分宮中生活をして居たいものだと玉鬘自身も女房達も思つて居つた。

皆おなじごと どこでも同じやうに踏歌の人々に祿を出したが玉鬘の所では、綿もよそとは違つて光澤もあり氣の利いた體裁にしてあつた。

水驛 踏歌の人々が禁中から諸院諸宮をめぐるのを驛路にたとへて、鄭重な饗膳を用ひて人々をもてはやすのを飯驛（いひうまや）又芻驛（くさうまや）といひ、簡單に酒や湯漬などでするのを水驛といふ。

人々心げさうして 踏歌の人々は氣持を緊張させて。

限りある御饗應 きまつた御馳走ではあるが、そのしざまは鬚黑が特に意を用ひてされたので

る程を見れば、内の大殿の君だちは、四五人ばかり、殿上人のなかに聲すぐれかたち清げにて打續き給へる、いとめでたし。童なる八郎君はむかひばらにて、いみじうかしづき給ふが、いとうつくしうて、大將殿の太郎君と立ち並びたるを、かんの君も、よそ人と見給はねば、御目とまり・・けり。やんごとなくまじらひ馴れ給へる御方々よりも、この御局の袖口、大方のけはひ今めかしう、同じ物の色合かさなりなれど、物・より殊に花やかなり。さうじみも女房たちも、かやうに御心をやりて暫しは過ぐい給はまし・、と思ひ・あへり。皆おなじごとかづけわたすなかに、綿のさまも匂ひ・殊に、らう〳〵じうしない給ひて、こなたは・水驛なりけれど、けはひ賑はしく、人々心げさうし・・て、限りある御饗應などの事どもも、したるさま、殊に用意ありてなむ大將殿せさせ給へりける。宿直所に居給ひて、日一日聞え暮し給ふことは、「よさりまかでさせ奉りてむ。

あつた。

心あわただしき あまりせわしく退出しないで、稀な御參内の事だから、主上の御滿足のあるまで禁中に居て、お許しが出てから退出なさるやうに。

今宵はあまり 今晩の退出ではあまりさつぱりし過ぎては居ませんでせうか。

さばかり聞えし 參内前に、禁中に參つても直に歸つて來るやうにと、あれ程玉鬘に言ひ聞かせておいたのに。

お前の遊びに 主上の御前の管絃の席に列つて居られたが。

靜心なく 「思ひやられ」を修飾する。思ひやつて氣がおちつかぬ意。

この局のあたり 玉鬘の御局のあたりが思ひやられるので。

つかさの御曹司 西宮記卷八「左大將宿所在二宣陽門内廊南一、右大將宿所在二陰明門内東廊一」

それよりとて 宮からの御文であるのに鬚黑からの御文だといつて取次いだので、玉鬘は澁々御覽になる。

深山木に あなたと鬚黑とが睦まじくして居られるので、私は非常に妬ましくてなりませぬ。

さへづる聲も 古今春上「百千鳥囀る春は物ごとに改まれども我ぞふりゆく」こゝは春の鳥の緣で言葉だけを借りた言ひまはしである。

斯かるつい（こんな機會に禁中に住みつかうといふ氣になられると心配だから）でにとおぼし移るらむ御宮仕なむやすからぬ」とのみ、同じ事（同言を繰返して退出を促されるが）をせめ聞え給へど、御返り（玉鬘は取合はない）なし。さぶらふ（玉鬘の侍女）人々ぞ、

「おとどの（源氏）、『心あわただしき程ならで、まれ〳〵の御參りなれば、御心（主上の）・ゆかせ給ふばかり。許されありてをまかでさせ（嘆辭）・給（て）へ』と聞えさせ（源氏が玉鬘に）給ひしかば、今宵はあまりすが〳〵しうや」と聞えたるを（鬚黑に）、いとつらしと（鬚黑は）思ひて、鬚「さばかり聞えしものを、さて〳〵さも心にかなはぬ世かな」と、打歎き・居（て）給へり。

兵部卿の宮（鬚宮）・、お前の遊びにさぶらひ給ひて、靜心なく、この・局（御）のあたり（わ）思ひやられ給へば（けれ）、念じあまりて（怪へきれずに宮が玉鬘に文を贈られた）聞え給へり。大（鬚黑）將は、つかさの御曹司（みざうし）にぞおはし（居給へり）・ける。それよりとて取入れたれば、しぶ〳〵（玉鬘が）に・見（ぞ）給ふ。

「深山木に羽打交しゐる鳥の又なくねたき春にもあるかな（兵部卿宮）

さへづる聲も耳とどめられてなむ」とあり。いとほしう（玉鬘は宮に對してお氣の毒で）、おもて赤みて、聞えむ方（返事のしやうもなく）なく思ひ居給へるに、うへ渡らせ給ふ（冷泉院が玉鬘方に）。月

斯かる人は こんなお美しい方が又も此世においでになつたのだと玉鬘は思つてゐられる。

かの御心ばへは 源氏の愛情は淺くはなかつたが、懸想心を持つて居られたのでいやな歎きが附け加はるのであつたが、主上に對してはさうした歎きの伴なはう筈がない。

いとなつかしげに 下の「宣はするに」に續く。主上は玉鬘の宮仕が豫期に反した事をやさしくお恨みになるので。

よろこびなども 叙位の事などでも私の志は分つて下さつた筈と思ひますのに、知らぬ顏ばかりして居られるのは、（入内を勸めた時も知らぬ顏で、聞き過ごしてゐられたし）さうして居られるのがあなたの癖なのでしたね。

などて斯く どうせ逢ふ事の出來ないあなたを、なぜ私は深く思ひ始めた事でせう。紫には三位の人の着する色。紫には灰を合せて染めるから灰合ひといふ。

濃くなり果つまじき 紫はそれに合せる灰の分量によつて色が濃くなるから斯くいつたのである。

たがひ給へる 主上も源氏と同じ事だから何も御遠慮申すには及ばぬと氣を取り直して御返事申上げる。

宮仕のらうもなくて 次の歌の註である。格別御奉公の功勞もないのに、今年加階の御恩に浴した事を感謝する意味であらうか。

（い）と・あかきに、御かたち（主上の）はいふよしなく清らにて、ただかのお（源氏の御樣子其儘でい）とどの（らせられる）御けはひにたがふ所なくおはします。斯かる人は又もお（源氏の外にも）はしましけり、と見奉り（玉鬘が主上を）給ふ。かの（源氏の）御心ばへは、淺からぬも、うたて物思ひ加はりしを、これはなどかはさしも覺えさせ給はむ。いとなつかしげに（く・）、思ひし事の違ひ（宮仕に出ずに鬚黑と結婚した事）・たる（に）恨みを宣はするに、おもて（玉鬘は）置かむ方なくぞ覺え給ふや。顏をもて（玉鬘が）隱して、御いらへも聞え給はねば、「あやしう覺束なきわざかな（妙に默つて居られるのですね）。よろこび（玉鬘が三位に叙せ）なども、思ひ知り給ふらむと思ふことあるを、聞き・入（も）れ給はぬさまにのみあるは、斯かる御癖なりけり」と宣はせて、

「などて斯くはひあひがたき紫を心に深く思ひそめけむ（冷泉院 灰合と違ひ違ひの掛 始めに染めをかけて緣語）

濃くなり果つまじきにや」と仰せらるるさま（宣はする御）、いと若く清らに（二人の契は結局深くならぬのでせうか）

恥かしきを（氣がおけるが）、たがひ給へる（た・）所やはあると、思ひ慰めて聞え給ふ（玉鬘が主上に）。

宮仕のらうもなくて今年加階し（ことしかかい）給へる心にや・・・（あらむ）。

「いかならむ色とも知らぬ紫を心してこそ人は染めけれ（玉鬘 主上はさういふ思召で三位にして下さつたのに私はどんな意味とも氣づきませんでした）

今よりなむ　これからはその積りで御奉公申上げませう。

愁ふべき人あらば　私の胸の中を開いてくれる人があるなら、その人に話して、何と判斷するか聞きたいものです。

をかしきさまをも　以下玉鬘の心中。今後は主上の御前で風情のあるやうな素振はしまい。主上も源氏と同じく懸想心を持っておいでになるとは、いやな世の習はしだ。

急ぎ惑はし給ふ　玉鬘にやたらに退出を促される。

似げなき事も　玉鬘も、長く宮中に居ては不釣合な間違も起りさうだとなさけなくなつて、暢氣にもして居られないので、退出の理由に尤もらしい口實を設けて、父の内大臣などがうまくとりつくろつてお暇を頂戴された。

さらば物懲して　では退出しなさい。鬚黑が懲りて二度と參內させないと困るから。

いとこそからけれ　誰よりも先に熱中して居りながら、先を超されて鬚黑に氣兼ねをして居るとはつらい。

今よりなむ思う(ひ)給へ知るべき」と聞え(させ)給へば、うちゑみて、冷泉「その今より染め給はむこそかひなか(る)べい(き)事なれ。愁ふべき人あらば、ことわり聞かまほしくなむ(な)」と、いたう恨みさせ給ふ御氣色の、まめやかに煩はしければ、いとうたてもあるかなと覺えて、をかしきさまをも見え奉らじ、むつかしき世の癖なりけり、と思ふに、まめだちてさぶらひ給へば、えおぼすさまなる亂れごとも打出でさせ給はで、やう〱こそは目馴れめ、とおぼしけり。

大將は、斯く渡らせ給へるを聞き給ひて、いとど靜心なければ、急ぎ惑はし給ふ。みづからも、似げなき(げにけしからぬ)事も出で來ぬべき身なりけりと心憂きに、えのどめ給はず、まかでさせ給ふべきさま(よし)、つき〲しきことつけども作り出でて、父おとどなど、かしこくたばかり給ひてなむ御暇許され給ひける。冷泉「さらば。物懲して又いだし(い)たてぬ人もぞある。いとこそからけれ。人

昔のなにがしがためし　平貞文が妻を藤原時平に奪はれた事。後撰戀三「大納言國經朝臣の家に侍りける女に、平定文いと忍びて語らひ侍りて、行末まで契り侍りける頃、此女俄に贈太政大臣に迎へられて渡り侍りにければ、文だにも通はす方なくなりにければ、かの女の子の五つばかりなるが、本院の西の對に遊びありきけるを、呼び寄せて、母に見せ奉れとて、かひなに書きつけ侍りける　平定文、昔せしわがかねごとの悲しきはいかに契りし名殘なるらむ。かへし　讀人知らず、うつゝにてたれ契りけむ定めなき夢路に迷ふ我は我かは」

忝う　玉鬘は主上に對して勿體なく感じて。

我は我と　貞文の歌の返歌の句による。鬚黑に嫁いだのも自分の意思ではない、さういふどうなるとも分らない夢の世界に彷徨してゐる身分であるのに、その私に何と契られても、どうなるものでもありませぬの意。

近きまもり　鬚黑が近衛大將だから斯く仰せられたのである。

九重に　大將がせきとめたならば、この度程の參內もなさらぬ積りですか。

殊なることなき　格別のお歌でもないが、主上の御樣子を拜しては、興味をひいた事であらう。

野をなつかしみ　續古今春下赤人「春の野に菫摘みにとこし我ぞ野をなつかしみ一夜ねにける」

より先に進みにし志の、人におくれて氣色取り隨ふよ。昔のなにがしがためしも引き出でつ(ぬ)べき心地なむする」とて、誠にいと口惜しと思召したり。聞召ししにもこよなき近まさりを、初めよりさる御心(の)なからむにてだにも、御覽じ過ぐすまじきを、まいていとねたう飽かずおぼさる。されどひたぶるに淺き方に思ひ疎まれじとて、(いと)いみじう心深きさまに宣ひ(はせ)契りてなつけ給ふも、忝う(く)、我は我と思ふものをとおぼす。御輦車寄せて、此方彼方の御かしづき人ども心もとながり。大將もいと物むつかしう立ち添ひ騷ぎ給ふ(ひ)まで、えおはしまし離れず。冷泉「かういときびしき近きまもりこそむつかしけれ」と憎ませ給ふ。冷泉院「九重にかすみ隔(め)てば梅の花ただかばかりも匂ひこじとや

殊なることなき事(け)なれども、御有樣けはひを見奉る程は、をかしくもやありけむ。冷泉「野をなつかしみあかいつべき夜を、惜しむべかめる人も、身をつみて心苦しうなむ。いかでか聞ゆべき」

身をつみて　自分を以て人を推察する事。

香ばかりは　私は女御更衣達と肩を並べるだけの美しさはございませんが、これ位のお便りは戴きたうございます。

やがて今宵かの殿にと　鬚黒は今晩此儘直に玉鬘を自邸に引取る積りであつたが、前以て言うておいては源氏がお許しになるまいと思つて、それとはいはないで。

俄にいと亂り風の　風邪の爲に急に氣分がわるくなりましたので、氣樂な所で養生しようと思ひまして、源氏にその事を漏らし聞え給はで、別々の處に離れて居つては心配ですから一緒に自邸へ歸りませう。

俄なるを　父大臣は、あまり早急な事で、嫁娶の儀式が無いやうでわるくはないかと思召したが、それ位の事で强ひて邪魔するのも氣にさはるだらうと鬚黒に斟酌して。

ともかくも　どうなりとあなたのお考へ次第にまかせます。玉鬘はもと〳〵私の自由にはならぬ人なのですから。玉鬘は我子ながらも内大臣は源氏に氣がねして居られるのである。「しだい」は進退の字音。

女も鹽燒く煙の　玉鬘も思ひ設けぬ方に靡いた事を呆れた事には思ふが。伊勢物語古今戀四「須磨の蜑の鹽燒く煙風をいたみ思はぬ方にたなびきにけり」鬚黒は盜みもていきたらましと考へて、嬉しく心も落着いた。

とおぼしなやむも、玉鬘の心に就に異多い事だと思ふ いと忝しと見奉る。

香ばかりは　玉鬘　香ばかりは風にもつてよ花の枝に立並ぶべき匂ひなくとも

やがて今宵かの殿にと　鬚黒の御殿　源氏にその事を全く取りあはぬでもない挨拶を聞しく思召しながら　大將の自邸の事　玉鬘を六條院におくのは玉鬘の方からお歸りになつた　引返りがちに主上は　鬚黒の氣をわるくする　突然鬚黒の方に引取られた　その儘玉鬘を自邸へ引取つた　不本意に　鬚黒が氣をわるくする　玉鬘にはそれが不事を不本意には思召すが不平を仰しやる譯はない　機嫌がわるい　鬚黒に對する態度は非常に叮嚀しくなります　世には心解けぬ御もてなし、いよ〳〵しき心地して、　鬚黒は玉鬘を手に入れて　鬚黒心　盜みもていきたらまし　主上が玉鬘方に　玉鬘にきつぱりと玉鬘を自分のものにしようとも　それが始終氣になつて玉鬘の事が人目わるい程戀しく思はれた　前世の緣といふ事も重大なものだが自分があまり惚氣であつた爲に自業自得の物思ひをするのだ　玉鬘の心に　源氏の心に

主上が　玉鬘の心に就に異多い事だと思ふ　玉鬘　全く取りあはぬでもない挨拶を聞しく思召しながら　大將の自邸の事　玉鬘を六條院におくのは玉鬘の方からお歸りになつた　引返りがちに主上　自邸へ引取る事を前以て源氏にいうては　鬚黒の氣をわるくする　突然鬚黒の方に引取られた　その儘玉鬘を自邸へ引取つた　不本意に　鬚黒が氣をわるくする　玉鬘にはそれが不事を不本意には思召すが不平を仰しやる譯はない　機嫌がわるい　鬚黒に對する態度は非常に叮嚀しくなります　世には心解けぬ御もてなし、いよ〳〵しき心地して、　鬚黒は玉鬘を手に入れて　鬚黒心　盜みもていきたらまし

さこそ猛う宣ひしかいみじうおぼしわぶれど　あんな强い口は利かれたものの。前に「おぼしなやむも」とあるにしても、などか强ひくづほれ給はむ」と仰せられた事。一九三頁參照。

鬚黒がとんと願みないのではひどく思ひなやんでは居られるが、鬚黒は一向訪ねようともしない。　其後鬚黒が氣をわるくする　突然鬚黒の方に引取られた　その儘玉鬘を自邸へ引取つた　不本意に　鬚黒が氣をわるくする　玉鬘にはそれが不事を不本意には思召すが不平を仰しやる譯はない　機嫌がわるい　鬚黒に對する態度は非常に叮嚀しくなります　世には心解けぬ御もてなし、いよ〳〵しき心地して、　鬚黒は玉鬘を手に入れて　鬚黒心　盜みもていきたらまし　主上が玉鬘方に

思ふ事かなひぬる願ひが叶つた癖しさに、前日かり切つて玉鬘の世話をして居られる。　大殿源氏。

さてもつれなきわざなりや　河内本の如く一と文字がある方がよい。そして此句は一戀しう思ひ出でられ給ふ」に續く。

ねたさをこの「を」は咏嘆の助詞。

宿世などいふもの　ねたさなるもの。以下源氏の心。

大將のをかしやかに　大將は無風流な無愛相な男で、それの側に附添うてゐる玉鬘に、一寸した冗談をいうてやるのもありまらなくも思召してもあり、辛抱して居られたのであるが「わらかなるもき人にて」とある河内本に從ふ。

とおぼしなずらへて、いと嬉しく心地おちゐぬ。

いみじうおぼしわぶれど　鬚黒は玉鬘を手に入れて

鬚黒がとんと願みないのではひどく思ひなやんでは居られるが、鬚黒は一向訪ねようともしない。　其後鬚黒が氣をわるくする　突然鬚黒の方に引取られた　その儘玉鬘を自邸へ引取つた　不本意に　鬚黒が氣をわるくする　玉鬘にはそれが不事を不本意には思召すが不平を仰しやる譯はない　機嫌がわるい　鬚黒に對する態度は非常に叮嚀しくなります　世には心解けぬ御もてなし、いよ〳〵しき心地して、　鬚黒は玉鬘を手に入れて　鬚黒心　盜みもていきたらまし　主上が玉鬘方に

思ふ事かなひぬる願ひが叶つた癖しさに、前日かり切つて玉鬘の世話をして居られる。　大殿源氏。

さてもつれなきわざなりや　河内本の如く一と文字がある方がよい。そして此句は一戀しう思ひ出でられ給ふ」に續く。

ねたさをこの「を」は咏嘆の助詞。

宿世などいふもの　ねたさなるもの。以下源氏の心。

大將のをかしやかに　大將は無風流な無愛相な男で、それの側に附添うてゐる玉鬘に、一寸した冗談をいうてやるのもありまらなくも思召してもあり、辛抱して居られたのであるが「わらかなるもき人にて」とある河内本に從ふ。

かやうのつれ〴〵も 昔こんな雨降りの徒然を紛らはす爲に玉鬘の部屋に話しこんで居られた事など思ひ出して戀しいので。

右近がもとに 玉鬘の侍女の右近にあてて、そつとお遣しになるにつけても、又一方では右近の思はくを憚つて、書きたい事もお書きになる事が出來ず、内容は只推察に任せた書きざまであつた。

かきたれての歌 春雨が降り續いて長閑な此頃ですが、私の事をどんな風に思ひ出して下さいますか。

つれ〴〵に添へても 徒然であるにつけても、思ひ出すと恨めしい事が多くありますが、どうしたら申上げる事が出來ませうやら。

わが心にも 玉鬘も、時がたつにつれて、源氏の事が思ひ出されるけれども、親といふ名はありながら、あらはには、戀しいとかお目にかかりたいなどとは言へないのだから、源氏のお文にもある通り、どうして對面が出來ようぞと思ふと感慨無量である。

この人 右近をさす。

右近はほの氣色 右近はうすうすそれと氣づいて居た。

いかなりける 源氏と玉鬘との間柄は實際どうなのか知らと今に納得が出來ずに居つた。

ながめする 戀しさの涙に袖を濡らして、暫しの間もあなたの事を思ひ出さぬ事はございませぬ。「ながめ」は霖雨に物思ひの

なる頃、かやうのつれ〴〵も紛らはし所に、渡り給ひて語らひ（源氏が玉鬘方へ）・・（聞え）給ひしさまなどの、いみじう戀しければ、御文奉り給ふ。（源氏の心に）（玉鬘に）右近がもとに忍びて遣すも、かつは思はむ事をおぼすに、何事（直接玉鬘にあてずに）もえ續け給はで、只思はせたる事どもぞありける。

「かきたれてのどけき頃の春雨に古里人をいかにしのぶや（源氏）（源氏自身の事）つれ〴〵に添へても、恨めしう思ひ出でらるる事多う侍るを、いかでか聞ゆべからむ」などあり。ひまに忍びて見せ奉れば、（人の居らぬ隙を見て右近が玉鬘にお目にかけると）（人まイ）（玉鬘は）うち泣きて、わが心・にも、程經るままに思ひ出でられ給ふ御さまを、まほに・、「戀しや。いかで見奉らむ」などはえ宣は・（せ）ぬ親にて、げにいかでかは對面もあらむとあはれなり。時々むつかしかりし御氣色を、心づきなう思ひ聞えしなどは、この人（源氏がいやな）（懸想をするのを氣にくはない事だと思つた事などは）（玉鬘はその事）（を右近にも秘密にして居られたので）にも知らせ給はぬ事なれば、心一つにおぼし續くれど、右近はほの氣色見けり。いかなりける事ならむと・、今に心得がたく思ひける。御返り、玉「聞ゆるも恥かしけれど、おぼつかなくや（中上げるのもお恥かしうございますが御無沙汰致すのも如何と存じまして）

意がかけてある。「うたかた」即ち泡沫の意から轉じて瞬間の意に用ひる。こゝでは軒の雫によつて生じる泡の意がひゞかせてある。

程經る頃は 長くお目に懸らぬと、格別の淋しさを感じます。

玉水のこぼるるやうに 軒の雫の緣で玉水といつたのである。

人も見ば 此の心弱い樣子を人に見られてはいやだからと源氏は平氣を裝つては居られるが、胸が一杯になるやうな氣がして。

かの昔のかんの君を 臘月夜の尙侍を弘徽殿女御が無理やりに逢はせないやうになさつた時の事などが思ひ出されるが、それは昔の事であるから今はそれ程悲しくもないが。

世づかずぞ 世間並みはづれて。假にも親と名のつく人の戀故いふ。前に「や」とあつて、こゝに「ぞ」とあるのはどうしたものだらう。他本に校合して見る必要がある。

すいたる人は 色好みといふものは、自ら求めて苦勞の種を蒔くものだ、今更何の爲にそんな苦勞をしよう、こんな事は身分に似合はぬ戀の引懸りだ。

あづま 東琴・和琴・大和琴。

六絃の琴 六絃の琴。

菅搔きて 菅搔（すががき）といふ和琴の一奏法である。

玉藻はな刈りそ 風俗歌乎之高倍「をしたかべ、鴨さへ來居る原の池に、生ふる玉藻はや、よき草の、ゆかりぞや、まねな刈りそや」

は」とて書き給ふ。

「ながめする軒の雫に袖濡れてうたかた人を偲ばざらめや（玉鬘）（暫くの間も）（源氏をさす）程經る頃は、げに殊なるつれ〴〵もまさり侍りけり。あなかしこ」と、ゐや〳〵しく書きなし給へり。引き廣げて、玉水のこぼるるやうにおぼさるるを、人も見ばうたてあるべしと、つれなくもてなし給へど、胸にみつ心地して、かの昔のかんの君を、朱雀院の后の、せちに取籠め給ひし折などおぼし出づれど、さし當りたることなればにや、これは世づかずぞあはれなりける。（仰しやる通り）（禮儀正しく）（源氏が）（戀ひしさに涙のこ）（ぼれるやうに感ずるが）（う）（朱雀院の御母后）（玉鬘の事は當面の問題であるからか）（玉鬘の事は）（以下源氏の心）すいたる人は、心・から安かるまじきわざな・りけり、今は何につけてか心をも亂らまし、似げなき戀のつまなりやと、さましわび給ひて、御こと・搔鳴し・・て、懷かしう彈きならし給ひし爪音、思ひ出でられ給ふ。あづまの調べを菅搔きて、源「玉藻はな刈りそ」と謠ひすさび給ふ・も、戀しき人に見せたらば、あはれ過ぐすまじき御さまなり。うちにも、ほのかに御覽ぜし（つまおと）（興にまかせてうたはれる）（玉鬘に）（玉鬘も感動なしには聞きすぐされないやうな御有樣である）（冷泉院も）

紫（むらさき）**の**（の）**ゆかりを**（を）**引**（ひ）**きて**　萬葉十一・新勅撰戀四讀人知らず「立ちて思ひ居てもぞ思ふ紅の赤裳垂れ引きいにし姿を」古書。

身（み）**を憂**（う）**きものに**　玉鬘は自分の身に愛相をつかして、かうした氣まぐれの贈答などをもつまらなく思はれたから、打解けた御返事などなさらない。

なほかのありがたかりし　やはりあの源氏の深切が深く心の底にしみこんでゐて、何かにつけて忘れる時がなかつた。

まづ見るかひありて　何はさておき、嘗て見がひのある美しさでおいでになつた玉鬘の事ばかりが思ひ出されるので。

春（はる）**のお前**（まへ）**さき**　紫上の御殿を去つて玉鬘の居られた西の對に來て眺めておいでになる。

わざとなう　人工を加へない自然の姿で。

色（いろ）**にころもを**　續古今戀一讀人知らず「思ふともこふともいはじ口なしの色に衣を染めてこそ着め」

思（おも）**はずに**　思ひがけなく二人の仲は隔たつても、心の中では戀ひ慕つて居ります。「いはでぞ」は山吹の口なし色にすがつていた言葉。

顏（かほ）**に見えつつ**　六帖六「夕されば野邊に鳴くてふ鶺鴒の顏に見えつつ忘られなくに」あなたの姿が目先にちらついて忘られませぬ。

斯（かく）**くさすがに**　玉鬘は六條院に居なくなられたから、宿着の深い源氏も、さすがにこの歌でわかるやうに今度こそ緣が切れたといふ感じを持たれた。

かりの子（こ）**の**　鴨の卵の澤山あるのを御覽になつて、柑子、橘などのやうにして玉鬘にお贈りになつた。

御心（みこころ）**一**（ひと）**つにのみは**　それもあなたの御一存ばかりでもないやうに聞いて居りますから、格別の用事でもなければ、お目にも懸られまいと思ふと殘念です。

同（おな）**じ巢**（す）**に**　折角かへつた鵜が同じ巢の中に見えないが、誰の手に握られてゐるのだらう。玉鬘が源氏の手許を離れて髮黑に守られてゐる事をいふ。

などかさしも　さう堅固にあなたを守つてゐなくてもよささうなものと、ねたましい。などかさしも握りもたらむ」の意。

御返（おんかへ）**りここには**　御返事は私はえう書きませぬ。

玉鬘の御かたち有樣を、御心にかけ給ひて、帝「赤裳垂れ引きいにし姿を」と、憎げなる古言なれど、御口癖のやうに口ずさみながら思ひに耽つておいでになるさせ給ひける。御文は忍び〳〵にありけり。身を憂きものに思ひしみ給ひて、かやうのすさび事をも、あいなくおぼしければ心解けたる御いらへも聞え給はず。なほかのありがたかりし御心おきてを、かたく〳〵につけて思ひしみ給へる御事ぞ忘られざりける。

三月になりて、六條殿のお前の藤山吹の面白き夕映を見給ふにつけても、まづ見るかひありて居給へりし御さまのみおぼし出でらるれば、春のお前を打捨てて、こなたに渡りて御覽ず。呉竹の笛に、わざとならう咲きかかりたる匂ひ、いと面白し。「色顏に見えつつ」など宣ひて、

思はずに井手の中道隔つともいはでぞ戀ふる山吹の花

「思はずに井手の中道隔つともいはでぞ戀ふる山吹の花」など宣ふも、聞く人なし。斯くさすがにもて離れたることは、此度ぞおぼしける。げに怪しき御心のすさびなりや。かりの子のいと多かなるを御覽じて、かんじ、橘などやうに紛らはして、わざとならず奉り給ふ。御文は、あまり人目については困るぞ目だつる、などと思しくさなりぬるを、思はずなる御もてなしなりと恨み聞ゆるも、御心一つにのみはあるまじう聞き侍れば、殊なるついでならでは、對面の難からむを、口惜しく思ひ給ふる」など、親めき書き給ひし卵の見えぬ哉いかなる人か手に握るらむ

などかさしもなど、心やましうなむ」などあるを、大將も見給ひて、

「同じ巢に孵りし卵の見えぬ哉いかなる人か手に握るらむ

などかさしもなど、心やましうなむ」などあるを、大將も見給ひて、うち笑ひて、「女は、誠の親の御あたりにも、たはやすく打渡り見え奉り給はむこと、ついでなくてあるべき事に、あらず。まして、なぞこのおとどの、折々思ひ放たず恨みごとはし、給ふ」とつぶやくも、憎しと聞き給ふ。「御返り・・・、ここ

巣隠れて　源氏の子供の数にも入らぬ日蔭者の玉鬘などを誰が取隠して居るものですか、「いかなる人か手に握るらむ」とあるのに答へたのである。

よろしからぬ御氣色に　御機嫌がわるくいらつしやるらしいのが驚いて右のやうな辯解がましい事を申上げました。「心やましうなむ」とあつたから、かういつたのである。

斯くらうじたるを　髭黒が玉鬘を我がものの顔に振まふのをひどく憎がつて居られる。

もとの北の方　髭黒の本妻。式部卿宮の姫君。

えしもかけ離れ　北方の方でも髭黒と縁を跡つてしまふ事も出來ず、從前通り生活上の厄介になつて居られた。

ほけしれて　癡呆狀態になる。

大方のとぶらひ　一通りの世話は萬事十分に手と盡されて、子息達をば相變らず大事にして居られるので。

若い御心のうちに　姫君は幼心ながらも、この父君を誰も皆容赦なく恨んで、自分との仲をまするなどなさるばかりなので心細く悲しがつて居られるが。

まろらをも　玉鬘は私達をもかはいがつてやさしくして下さるよ。始終風流な事をして暮してゐらつしやる。

かやうにても　自分はなぜ兄さんたちのやうに自由の出來る男に生れなかつたらうと嘆いてゐられる。

怪しう男女につけつつ　妙に男にも女にも物思ひの種を蒔く玉鬘であつた。男には主上螢兵部卿宮源氏などゝ、女には元の北方又槇柱などゝ、事柄こそ變れ何れも玉鬘故に物思ひをされるから斯くいふ。

わざとかしづき給ふ　玉鬘は内大臣が特に大事にして居られる弘徽殿の女御たちにもその御器量などは劣らない。

さすがなる御氣色　前には兄妹とも知らずに戀したり事もあるからその名殘で、さすがに諦めかねたやうなそぶりを見せて。

宮仕にかひありて　かうして皇子をも儲けて御奉公がひのある生活をお送りになつたであらう。

にはえ聞えじ」と、書きにくくおぼいたれば、「まろ聞えむ」と代るも、傍痛しや。

「巣隠れて數にもあらぬかりの子を何方にかは取隠すべき
よろしからぬ御氣色に驚きて。すき〳〵しや」と聞え給へり。

「この大將の、斯かるはかなしごといひたるも、まだこそ聞かざりつれ。珍らしう」とて笑ひ給ふ。心のうちには、斯くらうじたるを、いと憎しとおぼす。

かのもとの北の方は、月日の隔たるままに、あさましと物を思ひしづみ、いよ〳〵ほけしれて物し給ふ。大將殿は、大方のをも委しうおぼしおきて、君だちをば、かはらず思ひかしづき給へば、えしもかけ離れ給はず、まめやかなる方の頼みは、同じことにてなむ物し給ひける。姫君をぞ、墻へだてたく戀ひ聞え給へど、絶えて見せ奉り給はず。若い御心のうちに、この父君を、誰も〳〵許しなら恨み聞えて、いよ〳〵隔て給ふ事のみまされば、心細く悲しきに、男君だちは、常に參り馴れつつ、かんの君の御有樣などをも、おのづから事に觸れて打語りて、「まろらをもらうたくなつかしうなむし給ふ。明暮をかしき事を好みて物し給ふ」などいふに、羨しう、かやうにても安らかに振舞ふ身ならざりけむを歎き給ふ。怪しう、男女につけつつ、人に物を思はするかんの君にぞおはしける。その年の十一月に、いとをかしき兒をさへ抱き出で給へれば、大將も、思ふやうにめでたしと、もてかしづき給ふこと限りなし。そのほどの有樣は、いはずとも思ひやりつべき事ぞかし。

父おとども、おのづから思ふやうなる御宿世とおぼしたり。わざとかしづき給ふ君だちにも、御かたちなどは劣り給はず。頭の中將も、このかんの君をいと懐かしき兄弟にて、睦びかひありて物し給はましものをと、この若君のうつくしさにつ

今まで 主上は今迄皇子の無い事を歎いておいでになるが、これが皇子であつたら、どんなに名譽な事でせう。

あまりごと 餘りむしのいゝこと。

おほやけごとは 玉鬘は尚侍としての公職は規定通りに勤めては居られるが、參内はもうこれぎりになつてしまひさうである。

さてもありぬべき それはさうあつて然るべき事だ。

さる物のくせなれば あゝいふ種類の人の癖として、好色がましい落着かぬ心も出て、父内大臣ももてあまして居られる。「物のくせ」と熟した一語。

遂にあは〳〵しき 近江君がはてには粗忽な事をしでかすだらうと女御も動もすればひや〳〵して居られるけれども。

殿上人あまた 殿上人が大勢、それも人望の有る方々ばかりが。

なつかしき程の あつさりした程度に拍子を取つて御遊を催された。

例ならず亂れて 夕霧がいつもになく冗談などを仰しやるので。

人々 弘徽殿方の女房達。

けても、「今まで御子たちのおはせぬ・歎きを見奉るに、いかに面目あらまし」と、あまりごとをぞ思ひて宣ふ。おほやけごとは、あるべきさまに知り給ひなどしつつ、參り給ふことぞ、やがて斯くて・やみぬべかめり。さてもありぬべきことなりかし。

まことや。かの内の大殿の御むすめの、内侍のかみ望みし君も、さる物のくせなれば、色めかしうさまよふ心さへ添ひて、もてわづらひ給ふ。女御も、遂にあは〳〵しき事この君ぞ引き出でむと、ともすれば御胸つぶし給へど、おとどの、「今はなまじらひそ」と、制し宣ふをだに聞き入れず、まじらひ出でて物し給ふ。いかなる折にかありけむ、殿上人・あまた、覺え殊なる限り、この女御の御方にまゐりて、物のねなど調べ・、なつかしき程のひやうしうち加へて遊ぶ。秋の夕べのただならぬに、宰相の中將も寄りおはして、例ならず亂れて物など宣ふを、人々

出で居給ふ 皆の並み居る前方に出て來られた。

あぶなき事や ひや〳〵するやうな事を言ひ出さねばよいが。

突きかはすに 互に膝などを突きあつて、無言の儘相圖する事。

ささめき ざわつく事。河内本に從へばざめきと讀むべきか。字鏡や名義鈔に颯、漡、濊などをよんで風の音水の聲と釋いてある。或は河内本が穩當か。

おきつ船 あなたにまだ雲居雁がきまらずに居りますならば、お側に參る道筋を私に教へて下さい。私も雲居雁の姉妹ですから同じ事です。

棚なし小舟 古今戀四「堀江漕ぐ棚無し小舟漕ぎかへり同じ人にや戀ひ渡りなむ」雲居雁の事ばかり思つていらつしやるものではありませぬ。

あなわるや これはどうも失禮を。

いと怪しうこの御方には この女御の所には、こんな粗忽者はなかつた筈だがと、不思議に思つて考へて見ると、あの評判の近江君であつたと分つて。

よるべなみの歌 雲居雁との緣がきまらないで困つて居る私だつて、好かない人にかかりあふのはいやです。

はしたなかめり 近江君はさぞきまりのわるい目をした事だらう、と物に書いてあつたとか。

珍らしがりて、人々「なほ人より殊にも」とめづるに、この近江の君、人々のなかを押しわけて出で居給ふ。人々「あなうたてや。こはな・ぞ」と引き入るれど、いとさがなげに、睨みてはりゐたれば、煩はしくて、人々「あぶなき事や宣ひ出でむ」と突きかはすに、この世に目馴れぬまめ人をしも、近江「これぞな〳〵」とめでて、ささめき騷ぐ聲いとしるし。人々いと苦しと思ふに、聲いとさわやかにて、

「おきつ船よるべ浪路に漂はば棹さし寄らむとまり教へよ

棚無し小舟漕ぎかへり、同じ人をや。あなわるや」といふを、いと怪しう、この御方には、かう用意なきこと聞えぬものを、と思ひまはすに、この聞く人なりけりとて、をかしうて、よるべなみ風のさわがす船人も思はぬかたに磯づたひせずとて、はしたなかめり・とや。

梅枝

〔細〕源卅九歳正月の事也。〔孟〕正二月の事云云。

御裳著 明石姫君十一歳。源氏は姫君の裳著の準備で一通りならず氣をつかつてゐられる。

春宮 朱雀院の皇子。後に今上と申上げる。今年十三歳。

やがて御參りも 明石姫君が引續いて春宮に御入内なさる事であらう。

晦日 下旬の意。

薫物合せ給ふ 裳著の時に用ひる薫物を源氏がお造りになる。

二條の院 源氏の舊邸。

唐の物ども 唐渡りの香や其他の品物。

錦綾なども 香は勿論錦や綾でも。

茵 座蒲團。

高麗人の奉れりける 鴻臚館で源氏を相した時奉つた物。卷一、二一頁。

緋金錦 金襴の類で緋色の錦である。

なほさま〴〵御覽じあて それぞれ似合ふ織物を覆ひや敷物や茵などに充當なさつて。

此度の二種づつ 今度大貳が奉つた。黒方と侍從と二種類づつ調合して下さい。

贈物 裳著の折にお祝として人々に贈る土產物。

祿 腰結や使などを勤めた人に報酬として贈るかづけ物。

内にも外にも 六條院に於ても また他處に於ても。

御(おほむ)・・裳著のことおぼしいそぐ(準備する)御心おきて、世の常ならず。春宮も、同じ二月(きさらぎ)に御かうぶり(元服)の事あるべければ、やがて御參りも打續くべきにや・・・(あらむ)。正月(むつき)の晦日(つごもり)なれば、おほやけ(源氏は公事私事共にお暇の頃で)私のどやかなる(あるから)頃ほひに、薫物(たきもの)合せ給ふ。大貳(誰か分らない。筑紫から外國よりの輸入品を源氏が)の奉れる香(かう)ども御覽ずるに、なほ古(矢張新しい物は品質が古いものに劣つては居ぬかと源氏が思召して)へのには劣りてやあらむとお・ぼ(も)して、二條の院の御倉(みくら)あけさせ給ひて、唐(から)の物ども取りわた(六條院の源氏方に)させ給うて御覽じくらぶるに、源「錦綾なども、なほ舊き物こそなつかしうこまや(親しみがあつて念が入つてゐる(深切な))かにはありけれ」とて、近き(近々にある姫君人内の折に用ひる調度品の覆ひや)御しつらひの物のおほひ、敷物、茵(しとね)などの端(はし)どもに、故院(桐壺院)の御世の初めつかた、高麗人の奉れりける綾、緋金錦(ひごんき)どもなど、今の世の物に似ず、なほさま〴〵御覽じあてつつぞさ(せ)せ給ひて、此度の綾羅(あやうすもの)などは人々に賜はす。香(かう)どもは、昔今の取りならべさせ給ひて、御方々(六條院の各婦人達に)にくばり奉らせ給ふ。源「二種(ふたくさ)づつ合せさ・・せ給へ」と聞えさせ(源氏から各婦人達に)給へり。贈物(おくりもの)、上達部の祿(ろく)など、世になきさまに内にも外(と)にも繁く營み給ふに

方々に　冬婦人達も香を精選して。**鐵曰**　河海抄「香細抄者、和供入二鐵臼一」抱五百杵云々茅山太平觀記」**そうわの御禁の**　仁明天皇が不傳男として御制禁の二種の調合法を源氏がどうして傳授されたのか。河内本に「そむわう」とあるが、河海抄に「古本に大略そむ王とあり、頗不レ得二其意一、そうわを展轉書寫の誤歟」とあつて花鳥もそれに同説である。**東の中の放出**　六條院の東對の中程にある放出。放出は廂の間に設けた一室で賓客の應接などにも用ひる。**八條の式部卿**　仁明天皇の皇子本康親王。薫物調合の名人。河海抄は第七皇子とあり、花鳥は第五皇子とある。（花鳥）母は從四位上滋野温子參議貞主女也。**匂ひの深さ淺さも**　源氏も紫上も同種の香を互に秘しつつ調合してゐられるから源氏から挑んで來られたのである。**かうごの御箱**　香壺は薫物を入れおく壺で箱中に納めておく。**火取**　薫を焚く薫爐。

かぎ合せて　人々の調合した香を一度かいで見た上で、その中の優れたのを約めようと思召すのであつた。御裳着の親が今明日に迫つて嘸かし御忙しいでせうとの意味を述べてお見舞申された。

添へて、方々に（春どもも）・・・えり整へて、鐵臼（かなうす）のおと耳かしかましきころなり。源氏おとどは寢殿（六條院の）に離れおはしまして、そうわ（む）・の御禁（いましめ）の二つの法を、いかでか御耳には傳へ給ひけむ、心（專心に）にしめて合せ給ふ。紫上うへは、東の中の放出（はなちいで）に、御しつらひ殊に深うしなさせ給うて、八條の式部卿の（宮の）・御法を傳へて、かたみ（紫上と源氏と）に挑み合せ給ふほど、いみじう秘し給へば、「匂ひの深さ淺さも、勝負の定めあるべし」とおとど宣ふ。源氏人の御親げなき御爭ひ心なり。

侍女達お前にさぶらふ人あまたならず。御調度どもも、華美を盡したかすくの品の中でそこらの清らを盡し給へるなかにも、かうごの御箱どものやう、香壺の恰好の姿、火取の心ばへも、目馴れぬさまに今めかしう、樣式を新奇にやうかへさせ給へるに、所々の心を盡し給へらむ匂ひどもの、すぐれたらむどもを、かぎ合せて・・入れむとおぼすなりけり。

二月の十日、雨すこし降りて、六條院のお前近き紅梅さかりに、色も香も似るものなき程に、

前齋院　**槿齋院。**　**散り過ぎたる**「散り透きたる」と云ふ説もあるが取らない。花のいまだ散つてしまつた枝。**いとなれ〳〵しき**　誠に無躾なお願をしたのですが、記帳面に早速調合して下さつたのでせう。

御文は　薫物は其儘にして御文の方は隱してしまはれた。**沈の箱**　沈香木で作つた香壺の箱。以下槿齋院から届けられた薫物のさまをいふ。**瑠璃の坏**　これが香壺である。瑠璃は紺色硝子であり、玻璃は白色硝子であるが、こゝでは瑠璃を指す。**心葉**　絲又は金屬などで梅や松などの枝を捲へて、贈物の箱などに飾りとして附けるもの。**白きには梅をえりて**　白瑠璃の坏には白梅を彫刻した心葉を附けて。「えりて」は湖月抄の傍注に從つて「彫或撰」とあるが、河内本に從つて「折る」と見るべきである。

花の香はの歌　私の合せたこの薫物には匂ひもございませんがたきしめる袖には深く染みこみませう。湖月抄云（或抄）引歌「春過てちり透ける梅の花只かばかりぞ枝にのこれる」御説云々。表紅に裏紫。又表紅梅に裏蘇芳とも。**紅梅匂に裏蘇芳**

明日になりにけること、とぶらひ聞え給ふ。源氏と宮とは落別の昔より取りわきたる御中なれば、隔てなく、その事かの事となく聞え合せ給ひて、梅花をめでつつおはする程に、梅の枝に附けたる御文もて參れり。宮、聞召すこともあれば、女の方から進み參れるにか」とて、をかしとおぼしたれば、源氏はほほゑみて、源「いとなれ〳〵薬物調合の事しき事聞えつけたりしを、まめやかに急ぎ物し給へるなめり」とて、御文は引隱し給ひつ。沈の箱に、瑠璃の坏二つするゑて、薫物を大きにまろがしつつ入れ瑠璃の坏に給へり。心葉、紺瑠璃の坏には五葉の枝の心葉を附け筆を絲で結んだその結び方もしたやかな優艶なものですね引き結びたる糸のさまも、なよびかになまめかしうぞし給へる。

聲「えんなる物のさまかな」とて、御目と・め給へるに、

瑠璃の坏

花の香は散りにし枝にとまらねど移らむ袖に淺くしまめや

薫爐で香いてある歌を宮が見つけられてほのかなるを御覽じつけて、宮は、大層らしくことゝ〳〵しうず詞し給ふ。夕霧宰相の中將、御使尋ねとどめさせ給ひて、いたう醉はし給ふ。紅

唐の細長　唐織物の細長。

何事かは侍らむ　いや何でもないのです。それを秘密があるやうに思はれては迷惑します。

御硯のついでに　源氏が齋院への御返事を認めた筆のついでに、書いて兵部卿宮にお示しになつたが、それは「花の枝に云々」とでもあつたであらうか記者は今はつきり覺えて居らないが。

花の枝にの歌　齋院への返歌。人に氣づかれるのは怖ろしいか、あなたには一入引きつけられます。戀の心がこめてあるのである。

いと醜ければ　姫君は器量もよくない事ですから、腰結の役を親しくない人にお賴みするのもきまりがわるくて、中宮に里歸りして頂いてると思つて居ります。

親しき程に　中宮とは親しく馴染んでは居りますが、大變氣のおける所のある方ですから、用意も並一通りの所をお目にかけては恐縮ですから。

あえものを　中宮にあやかる爲にも、腰結の役を中宮に賴まうと思ひつかれたのは尤もな事です。

梅襲の唐の細長添へたる女の裝束かづけ給ふ。御返り（源氏からの御返事も紅梅襲の薄様）もその色の紙にて、お前の花（紅梅）を折らせて附けさせ給ふ。宮、「內のこと（御文の内容が）思ひやらるる御文かな。何事の隱ろへ（どんな秘密があるのか深くお隱しですね）あるにか、深く隱し給ふ」と恨みて、いとゆかし（手紙を見たがつて居られる）とおぼしたり。源「何事かは侍らむ。隈々しくおぼしたるこそ苦しけれ」とて、御硯のついでに、

源氏　花の枝にいとど心をしむるかな人の咎めむ香をばつつめど（香の縁語）（人目を憚かるが）

とやありつらむ。源「まめやかには（實は薫物合せなどを方々に賴んで大騷ぎするのは物ずきのやうですが何分一人娘の事ですから）すき／＼しきやうなれど、又もなかめる人のうへにて（かうするのが當然の事と思ひまして）、これこそはことわりの營みなめれと思う（ひ）給へなしてなむ。いと醜ければ（明石姫君の事）、うとき人は傍痛さに、中宮（秋好）まかでさせ奉りてと思ひ給ふる。親しき程に馴れ聞えかよへど、恥かしき所（中宮は）の深うおはする宮なれば、何事も世の常にて（調度等の諸用意）見せ奉らむ、かたじけなくてなむ」など聞え給ふ。螢「あえものも、げに必ずおぼし寄るべき事なりけり（腰結の事を中宮にと）」と、ことわり申し給ふ（當否を判定された）。

これ分かせ給へ　この薫物の優劣を判定して下さい。

誰にか見せむ　古今春上「君ならで誰にか見せむ梅の花色をも香をも知る人ぞ知る」

知る人　私はその「知る人」でもありませんよ。

進みおくれたるが一種などか　「などか無からん」の略。いづれも劣らぬ匂ひだが、その中にも匂ひの立ちすぎるのや立たないのが一といろぐらゐ無い筈はない。一種は調合されてゐる成分の中の一種と釋く說があるが取らない。直ぐ後に「御二種」とある用例を考へても分るとほりである。

咎　缺點。

あながちに　聞き分けにくいのを强ひて。

右近の陣　禁中月華門內に在る陣の座。香を土中に埋めるのはその匂ひをよくする爲で、仁明天皇の御代に右近の陣の御溝水の邊に香を埋めた事があつて、それ以後代々同じ場所に埋めたのであらう。源氏もその例に倣つたのである。

兵衛の尉　少女巻に五節の舞姬の兄として見えてゐる。三三九頁六行。

けぶたしや　薫物の鬪分けだからけぶたくて苦しいと戲にいつたのである。

人々の心々に　各人の思ひ／＼に工夫して調合した薫物の優劣をかぎ合せて見ると、調合した人の性格がうかゞはれて實に興味が深いの意。

（さて）このついでに、御方々の合せ給ふども（薫物合せの依頼先にそれ／＼使者を立てて）、おの／＼御使して、「この夕暮のしめりに試みむ（香を）」と聞え給へれば（各婦人達に）、さま／＼をかしうしなして奉れ給へり（それ／＼風流に趣向をこらして源氏の所へ薫物を届けて來た）。源「これ分かせ給へ。誰にか見せむ」と聞え給ひて（兵部卿宮に）、御火取ども召して試みさせ給ふ。螢「知る人にもあらずや」と卑下し給へど、いひ知らぬ匂ひどもの、進みおくれたるが一種などか（な）。いささかの咎を分き給うて（ひ）、あながちに劣りまさりのけぢめ（優劣の差等をおつけになる）をおき給ふ。かのわが御二種（源氏自身の）のは、今ぞ取う出させ給ふ。右近の陣の御溝水のへん（ほとり）になずらへて（に）、西（右近の陣）の渡殿の下より出づる汀近う（は西の方であるから源氏も六條院の西の渡殿の汀を選んだのである）うづませ給へるを、惟光の宰相（惟光任參議の事初見）の子の兵衛の尉、掘りて參れり（源氏の方に）。宰相の中將（夕霧）取りて傳へ參らせ給ふ（源氏に）。宮、「いと苦しき判者にも當りて侍るかな。いとけぶたしや」と惱み給ふ。同じ法こそは（根源は同一の調合法が諸方に擴がり傳はつてゐるのだが）、いづく（に）にも散りつつ廣ごるべかめるを、人々の（御）心々に合せ給へる、深さ淺さをかぎ合せ給へるに、いと興あること多かり。更にいづれともなきなかに（何れも優劣の差のない中に）、齋院（槿）

御黒方 薫物の名。沈香、丁子香、白檀香、甲香、麝香、薫陸香の六種を煉り合せたもの。類聚雜要抄四に委しい。

侍從 これも薫物の名。沈、丁子、甲、甘松、熟鬱金又は麝香等を煉り合せて作つた香。

三種 黒方、侍從、梅花。

梅花 薫物の名。沈、甲、薫陸、甘松、白檀、丁子、麝香の六種を調合した香。

人々の 花散里は、人々が薫物を思ひ〳〵に競爭して居られる中に、人がましくも仲間入りをするでもあるまいと、遠慮深い引込思案から。

煙をさへ思ひ消え 薫物の縁語で、萬事控目がちにしてゐる事。

荷葉 甘松、沈、甲、白檀、熟鬱金、霍、丁子の七香或は安息香を加へて煉つた薫物。夏の御方には相應しい薫物である。

時々によれる匂ひの 明石上は冬の御方だから、時節相當からいへば落葉を合せるべきだが、それでは春や夏の梅花や荷葉に壓倒されるから、それではつまらないと思つて。

薫衣香の法 薫衣香の調合法のすぐれたのは、宇多院の御法を學んで公忠が特に工夫を凝らした百歩の方であるが、明石上はその百歩の方などを思ひつい、世にも類のないあでやかな感じのする薫衣香をいろ〳〵調合して奉つた。宮は明石上のその考案を稱讃されて執れの香をも取柄のあるものやうに批判された。薫衣香は甲、丁子、白膠、沈、蘇合、甘松、白檀、麝香、薫陸の九種の香を煉り合せたもので、衣裳にたきしめる。香の事は類聚雜要抄に委しい。「さきの朱雀院」を源氏物語中の朱雀院の前の朱雀院と解して承平の帝の御事とする説もある。

の御黒方、さいへども、心にくく靜やかなる匂ひ殊なり。侍從は、おとどの御は、「すぐれてなまめかしうなつかしき香なり」と定め給ふ。對の上の御は、三種あるなかに、梅花花やかに今めかしう、すこしはやき心しらひを添へて、珍らしきかをり加はれり。「此頃の風にたぐへむには、更にこれにまさる匂ひあらじ」とめで給ふ。夏の御方には、人々の、かう心々に挑み給ふなるなかに、かず〳〵にも立ち出でずやと、煙をさへ思ひ消え給へる御心にて、ただ荷葉を一種あはせ給へり。さま變りしめやかなる香して、あはれになつかし。冬の御方にも、時々によれる匂ひの定まれるに、消たれむもあいなしとおぼして、薫衣香の法・すぐれたるは、さきの朱雀院のをうつさせ給ひて、公忠の朝臣の殊に選び仕うまつれりし、百歩の方など思ひ得て、世に似ずなまめかしさを取り集めたる、心おきてすぐれたりと、いづれをも無徳ならず定め給ふを、「心ぎたなき判者なめり」

藏人所 六條院内の藏人所で地下の者の詰所である。

裝束 絃をかけたり柱をつけたりして直に彈奏の出來るやうに準備する事。

内の大殿の頭の中將 内大臣の息子である頭中將。

げざん 見參。誰々が參上したと交名を註して主人に示す事。此處は柏木兄弟が明日の裳著に招かれたので御禮の見參に來たのである。

折にあひたる調子 春だから雙調でもあらう。

梅が枝 催馬樂呂梅枝「梅が枝に來居る鶯や、春かけてはれ、春かけて、鳴けどもいまだや、雪は降りつつ、あはれそこよしや、雪は降りつつ」

童にて韻塞の折 辨の少將が高砂を謠つた事は賢木の卷にあつた。四四一頁。

高砂 催馬樂律高砂「高砂のさいさごの、高砂の尾上に立てる白玉椿玉柳云々」四四一頁參照。

さしいらへし給ひて 一緒になつて謠はれて。

ときらひ給ふ。月さし出でぬれば、大御酒など參り給ひて、昔の物語などし給ふ。霞める月の影心にくきを、雨の名殘の風すこし吹きて、花の香なつかしきに、御殿のあたりいひ知らず匂ひ滿ちて、人の御心地いとえんなり。

藏人所の方にも、あすの御遊びのうちならしに、御ことどもの裝束などして、殿上人などあまた參りて、をかしき笛のねども聞ゆ。内の大殿の頭の中將、辨の少將なども、げざん許りにてまかづるを、とどめさせたまひて、御ことども召す。宮のお前に琵琶、おとどに箏の御こと參りて、頭の中將和琴賜はりて、花やかに搔立てたるほど、いと面白く聞ゆ。宰相の中將横笛吹き給ふ。折にあひたる調子、雲居とほるばかり吹き立てたり。辨の少將拍子取りて、「梅が枝」いだしたる程いとをかし。童にて、韻塞の折、「高砂」謠ひし君なり。宮もおとどもさしいらへし給ひて、事々しからぬものから、をかしき夜の御遊びなり。

鶯の聲にや 只でさへ執心のある花のあたりですのに、梅が枝の歌を聞いては一層心もそらに立去りかねませう。

千代も經ぬべし 古今春下「いつまでか野邊に心のあくがれむ花し散らすば千代も經ぬべし」

色も香もの歌 この春は、花の色も香も身に染まる程、花咲くわが家を絶えず訪ねて下さい。

うぐひすの 面白い笛の音を徹底的に吹き鳴らして下さい、鶯の宿かる梅が枝も撓む程に。

心ありて 風さへも斟酌して觸れようとはしない花の木のあたりに、無闇にあわたゞしく笛を吹き立ててよいでせうか。

なさけなく 花にとつて、それは無情だらう。

霞だに 霞さへ月と花とを隔てて居らなければ、月のあかるさをもう夜があけたものと思つて花に宿つてゐる鳥も鳴き出す事でせう。

誠に 「千代も經ぬべし」といはれたやうにの意。明けがたになつての意。

花の香を この頂いた薫物をこの結構な裝束にたきしめて歸りましては、道ならぬ過ちをしたものと妻が咎める事でせう。貰つた薫物は梅花香であつたのであらう。

御かはらけ參るに、宮、（宮が源氏に盃をさされて）

「鶯の聲にやいとどあくがれむ心しめつる花のあたりに千代も經ぬべし」（いつまでも此處に居たい氣持です）と聞え給へば、（源氏に）

色も香も移るばかりに此春は花咲く宿をかれずもあらなむ

頭の中將に賜へば、取りて宰相の中將にさす。（柏木に盃をさすと）（柏木が盃を受けて夕霧にさす）

うぐひすのねぐらの枝も靡くまでなほ吹き通せ夜半の笛竹（柏木）（夕霧の笛をほめた歌である）

宰相の中將、（夕霧）

心ありて風のよくめる花木にとりあへぬ迄吹きや寄るべき（はなのき）（鳥を響かせて鶯の塒の枝とあつたのに應じたもの）

「なさけなく」と、皆うち笑ひ給ふ。辨の少將、（柏木の弟）

霞だに月と花とを隔てずばねぐらの鳥もほころびなまし（花の縁語）

誠にあけがたになりてぞ宮歸り給ふ。（兵部卿宮）御贈物に、（宮への）みづからの御（源氏看料の）

料の御直衣の御よそひ一領、（ひとくだり）手觸れ給はぬ薫物二壺添へて、御

車に奉らせ給ふ。（使役）宮、

花の香をえならぬ袖に移しもてことあやまりと妹や咎めむ

いとくしたりや 屈したりや。悋氣を恐れてえらくしよげて居られますね。

めづらしと あなたがその衣裳を著て歸られたら、お待受けする方々も、珍らしく思つて御覽になる事でせう。決して咎めたりなどはなさるまい。宮にはまだ定まつた北方はない。

又なき事と あなたは妻もなく從つて外宿などなさらぬ方だから、お宅の方々は、ためしのない朝歸りだと思はれるでせう。「めづらし」の意を説明した言葉である。

西の御殿 秋好中宮の御殿。

西の放出 西の對屋の放出。

御髮上の內侍 姫君の御髮上を奉仕する掌侍。御髮上とは髫放（うなゐばなり）を襟のあたりで元結で結ぶ事。

子の時 午後十二時。

おぼし捨つまじきを 疎んじなさる事はあるまいと信じて、姫君の失禮な姿をこちらから進んでお目にかけた譯なのです。

なめげなる姿 明石姫君は今日初めて裳着されるので今日までは本式の女の裝束でないから斯くいふ。

後の世のためしにや 中宮に行啓をお願ひして、腰結の役を勤めて頂く事は後世の例にもならうかと小さい胸にひそかに考へて居ります。

とあれば、源「いとく・（ん）したりや」と笑ひ給ふ。御車懸（牛に）くるほどに追ひて、

「めづらしと故郷人も待ちぞ見む花の錦を著てかへる君（源氏）（宮の方の人々）（錦を著て故郷へ歸るの故事による）

又なき事とおぼさるらむ」とあれば、いといたうからがり給ふ。（故郷人がお思ひになるでせう）（宮は妻のないのを指されたのだから）

つぎ〳〵の君だちにも、事々しからぬさまに、細長小袿などかづけさせ給ふ。（柏木や辨や夕霧などにも）

斯くて西の御殿に戌の時に渡り給ふ。宮のおはします西の放出をしつらひて、御髮上の內侍なども、やがて此方に參れり。うへも、このついでに、中宮に御對面あり。御方々の女房、おし合せたる、かず知らず見えたり。子の時に御裳奉る。大殿油ほのかなれど、御けはひいとめでたしと宮は見奉れ給ふ。おとど、（姫君の容姿を中宮は初めて御覽になつたのである）（裳をお著けになる）（御）（となぶら薄暗）（源氏）

「おぼし捨つまじきを頼みにて、なめげなる姿を、進み御覽せられ侍るなり。後の世のためしにやと、心せばく忍び思ひ給ふる」など聞え給ふ。宮、「いかなるべき事とも思う給へわき侍ら（中宮へ申す詞）（世間せばい自分は）（何の氣もなしに勤めた腰結の役ですのにさう力居らしくいつて頂くと却つて恐縮）

おぼすさまにおかしきふしの美しい方々がわが一門に集まつて居られる事を源氏は目出たい事と満足される。（思ひ通り）

母君（明石姫君の御母明石上。）斯かる折にこんな目出たい折にも顔の出せないのを悲しがつて居た事を氣の毒に思つて、この席に招かうかと思召したが非難を憚つておよしになつた。

斯かる所の儀式は、一體お祝といふものは、大したのでなくても、何かと煩雑でうるさいのが常であるのに。

片端ばかり源氏の催された盛大な裳着であるから、その一端だけを例の如くとりとめなく描寫するのも却つてどうかと思つて、こまかには記さない。

春宮（朱雀院の皇子で後に今上と申す。御母は承香殿の女御。今年十三歳。）

このおぼしきざす源氏が明石の姫君を奉らうと勢ひこんで豫定して居られる事で、自分の宮仕に終るまじか陸でもない宮仕に終るなら事だらうと左大臣や左大将などもお中止になさるといふ話を源氏が聞召して。

宮仕のすぢは、宮仕といふものは、大勢の中で、すこしの優劣を競合ふのが入内の意義といふものだらう。折角澤山なすぐれた姫君達が宮仕に出ずに居るのは如何にも折角の寶の持ちぐされといふものだらう。「榮あらじ」は持ちばえしないだらうの意。

ざりつるを、かう事々しく取りなさせ給ふになむ、なか〳〵心おかれぬべく」と、宣ひ消つ程の御けはひ、いと若く愛敬づきたるに、おとどもも、おぼすさまにをかしき御けはひどもの、さしつどひ給へるを、あはひめでたくおぼさる。母君の、斯かる折だにえ見奉らぬを、いみじと思へりし心苦しうて、まうのぼらせやせましとおぼせど、人の物いひをつつみて過ぐし給ひつ。斯かる所の儀式は、よろしきにだに、いと事多くうるさきを、片端ばかり、例のしどけなくまねばむも、なか〳〵にやとて、こまかに書かず。

二月廿餘日の程になむありける。春宮はいと大人しくおはしませば、人のむすめどもきほひ參らすべき事を、心ざしおぼすなれど、この殿のおぼしきざすさまのいと殊なれば、なか〳〵にてやまじらはむと、左のおとど、左大将なども、おぼしとどまるなるを、聞召して、「それは強だけしからぬいとたい〳〵しき事なり。宮仕のすぢは、あまたあるなかに、すこしのけぢめを挑まむこそ本意ならめ。そこらの警策の姫君たちの引きこめられなば、世に榮あらじ」と宣ひて、御參り延びぬ。次々にもとしづめ給ひけるを、斯かるよし所々に聞き給ひて、左大臣殿の三の君參り給ひぬ。麗景殿と聞ゆ。

昔の御宿直所淑景舎を改めしつらひて、御まゐり入内の豫定この御方は、昔の御宿直所淑景舎を改めしつらひて、御參り延びぬ。

春宮も待ちわびておいでになるので宮にも心もとながらせ給へば、四月にと定めさせ給ふ。御調度どもも、以前からある調度の上に更に作り加へてもとあるよりも整へて、御みづからも、物のしたかた繪様などをも御覽じ入れつつ、すぐれたる道々の上手どもに召し集めて、こまかに磨き整へさせ給ふ。冊子の箱どもに入るべき冊子どもの、やがて本にもし給ふべきを選ばせ給ふ。古への上なききはの御手どもの、世に名を殘し給へるたぐひのも、いと多くさぶらふ。源「よろづの事、昔には劣りざまに淺くなりゆく世の末なれど、かんなのみなむ今の世はいと際

警策のすぐれた。

次々にもと左大臣も左大将も明石姫君のあとで姫を入内させる積りでさし控へて居られたのに延期になつたといふ事を聞かれて、左大臣殿の第三女が入内した。

昔の御宿直所源氏の宮中に於ける昔の宿直所。淑景舎は桐壺の事。

冊子の箱冊子箱。造紙宮とも書く。冊子や料紙を入れおく箱。

冊子は綴ぢ本のこと。

本姫君の習字の手本。

古への上なき上代の無上の名人で後世に名を殘した人々の筆蹟なども澤山ある。

よろづの事には世が末になるにつれて、萬事深みがなくなつて次第劣りになつて來ては居るが、假名だけは當世は無上の發達をしました。

かんな假り名の音便。漢字を眞字といふのに對して呼ぶ稱。「な」はこゝでは文字の意。「かんな」を甞語の「カラーナ」の轉じたものといふ説もあるが、採らない。假名に男手（今いふ萬葉假名）女手（今いふ平假名）眞名（漢字の草書に近い一體で、萬葉假名から平假名に類れていく中途の字體）片假名の四種ある。この外に草手を數へる説もあるが、これは書式の名であつて字體の名ではない。

妙にをかしき事は　巧妙な雅致に富んだ書體は、近代になつてから書く人々が出て來ました。女手を心に入れてゐた頃、よい手本を澤山集めた中で、中宮の御母御息所が念を入れずに無頓着に走り書きせられた一行程を手に入れて、實にうまいものだと感心しましたよ。

さてあるまじき御名も　それが爲にとんでもない浮名を立てる事になつたのです。「さて」といふのは手紙を受取つた爲にの義。走り書くのは手紙の書風である。

宮に斯く後見　御息所は考へぬく方であつたから、今では考へ直して、私が中宮のお世話をしてゐるのを、草葉の蔭から喜んで居られる事でせう。

院の内侍のかみ　臘月夜の尙侍の事。院は朱雀院。

なくなりたる。舊き跡は、定まれるやうにはあれど、廣き心ゆたかならず、一筋にかよひてなむありける。妙にをかしき事はとよりてこそ書き出づる人々ありけれど、女手を心に入れて習ひしさかりに、事もなき手本多くつどへたりしなかに、中宮の母御息所の、心に入れず走り書いたまへりし一行ばかり、わざとならぬを得て、きは殊に覺えしはや。さてあるまじき御名も立て聞えてしぞかし。くやしき事に思ひしみ給へりしかど、さしもあらざりけり。宮に斯く後見仕うまつることを、心深うおはせしかば、亡き御影にも、見なほし給ふらむ。宮の御手は、こまかにをかしげなれど、かどやおくれたらむ」と、うちささめきて聞え給ふ。「故入道の宮の御手は、いと氣色深うなまめきたる筋はありしかど、弱き所ありて、匂ひぞすくなかりし。院の内侍のかみこそ、今の世の上手におはすれど、あまりそばそばしたるぞ添ひたためる。さはありとも、かの君と前齋院と此處に

いたうな過ぐし給ひそ　源流抄は「さのみまんじ給ひそと也」と註してゐるが取らない。

眞字の進みたる　「ほどに」を程度にと譯しては後文につづかない。これを漢字が上手になつたと見る說もあるが、「ほどに」といふやうに見る說も「割合に」といふやうに「ほどに」を割合にの意味に用ひた例はない。こゝでは理由を示す助詞と見るべきで、漢字が上達したから、假名の中に整はない文字がまま出來るやうですね。これは漢字と假名との書法精神の相違に伴ふ事實である。

表紙　冊子の表紙。

紐　冊子の中にも袋物の如く表紙に紐をつけた裝潢があつた。空海が支那から持ちかへられた三十帖冊子などはさうである。

物せむ　書いて貰はう。

みづから一雙は　私も二帖は書かう。

ただならぬ御消息　源氏が隨分意氣込んでゐる依頼狀を各方面に出されたので。

葦手　葦は葦式の意。これに葦の群生してゐる樣を呼ぶのと、群生沼沿いなど下繪を畫いてゐるのとがある。

歌繪　歌の用紙の下繪として畫かれた繪であつてゐる時に、その繪が歌の意味を表はしてゐるのを歌繪といふ。その繪が水に群生してゐる葦で合に葦手といふ。葦手が下繪のとこそは書き給はめ」と許し聞え給へば、「この數にはまばゆくや」と聞え給へば、「いたうな過ぐし給ひそ。にごやかなる方のなつかしさは、殊なるものを。眞字の進みたるほどに、かんなはしどけなき文字こそまじるめれ」とて、まだ書かぬ冊子ども作り加へ、表紙、紐などいみじうせさせ給ふ。「兵部卿の宮、左衞門の督などに物せむ。みづから一雙は書くべし。氣色ばみいますかりとも、え書きならべじや」と、われぼめをし給ふ。墨筆並びなくえり出でて、例の所々に、ただならぬ御消息あれば、人々難きことにおぼして、・・・あるはかへさひ申し給ふもあれば、まめやかに聞え給ふ。高麗の紙の薄樣だちたるが、せめてなまめかしきを、「この物好みする若き人々試みむ」とて、夕霧宰相の中將、式部卿の宮の兵衞の督、內の大殿・の頭の中將などに、「葦手、歌繪・・を、思ひ〳〵に書け」と宣へば、皆心に挑むべかめり。

最も普通な圖樣であつた。（寶雲、第六年、第一冊參照）

草のもただのも 草は假名の草體。ただのもは平假名。

女手を こゝは女手を假名の總稱に用ひてゐる。

白き赤きなど 色々の紙をまぜて綴ぢた册子のうちで、白や赤などのやうな目立つ紙面は、筆を取り直して注意してお書きになる。

御褥まゐり添へ 座蒲團をもう一つ敷き足して。

つれ〴〵に籠り侍るも この頃は大變閑散で、つくねんと引籠つて居るのも苦しい程に思つて居りました所、好い時においで下さいました。

例の寢殿に離れおはしまして、書き給ふ。（源氏（い））花ざかり過ぎて、淺綠なる空うらかなるに、古き事どもなど思ひすまし給ひて、御心のゆくかぎり、草のもただのも、女手をいみじう書き盡し給ふ。お前に人繁からず、女房二三人ばかり、墨などすらせ給ひて、故ある古き集の歌など、いかにぞやなどえり出で給ふに、口惜しからぬ限りさぶらふ。御簾あげわたして、脇息の上に冊子うちおき、端近くうち亂れて、筆の尻くはへて、思ひめぐらし給へるさま、飽く世なくめでたし。白き赤きなど、掲焉なる枚は、筆取りなほし、用意し給へるさまさへ、見知らむ人は、げにめでぬべき御有樣なり。「兵部卿の宮渡り給ふ」と聞ゆれば、おどろきて御直衣奉り、御褥まゐり添へさせ給ひて、やがて待ち取り、入れ奉り給ふ。この宮もいと清げにて、御階、さまよく歩みのぼり給ふほど、内にも人々のぞきて見奉る。うちかしこまりて、かたみにうるはしだち給へるも、いと清らなり。源「つ

（源氏が前に薫物を合せた所であるから例のといふ）（古歌）（假名）（女房達に）（この歌は如何などと選び出される時に相談相手になり得る人々ばかり）（源氏が）（行儀も繕はずに書に夢中になつてゐる樣をいつたものである）（源氏のさま）（いくら見ても見飽かぬ）（情趣を解する人）（源氏に）（今まで源氏はうち亂れて居られたから禮儀の爲）（源氏の居られる所へ）（禮儀正しくして居られる樣子も）（綺麗な方で）（御簾の中から女房達が）（源氏と宮とが互に）

かの御册子持たせて 源氏から書を御依頼した册子を持參されたのである。

ただ片かどに 一本調子な同じ筆法で、書いてあるが垢拔けしたところがある。

歌も殊更めき 歌もわざとらしい僻した古歌を選んで、一首の歌を三行程に分けて、漢字はあまりまぜずに體裁よく書いてある。

更に筆投げ棄つ 私などはもう迚も筆を取る氣になれませぬ。

斯かる御なかに かうした名人達の仲間入りをして、臆面もなく書くのですから、いくら何でもまづい筈はありませんよ。

唐の紙の 源氏の書かれた册子のさまである。

草に書き添へる 草體で書いてあるのを、實にうまいものだと感心しながら宮は御覽になる。

うるはしう心とゞめて 注意して整然と書いてある。

れ〴〵に籠り侍るも、苦しきまで思う給へらるる頃ののどけきに、折よく渡らせ給へる」と、よろこび聞え給ふ。（源氏が謝意を表せられた）かの御冊子持たせて渡り給へるなりけり。

やがて御覽ずれば、すぐれてしもあらぬ御手を、ただ片かどに、いといたう筆すみたる氣色ありて書きなし給へり。歌も殊更めき、そばみたる古言どもをえりて、ただ三行ばかりに、文字ずくなに好ましくぞ書き給へる。おとど御覽じ驚きぬ。源「かうまでは思ひ給へずこそありつれ。更に筆投げ棄・つべしや」と、ねたがり給ふ。（釐「斯かる御なかに、おもなくくだす筆の程、さりともとなむ思う給ふる」など、たはぶれ給ふ。書き給へる冊子どもも、隱し給ふべきならねば、取うで給ひて、かたみに御覽ず。唐の紙のいとすくみたるに、草に書き給へる、すぐれてめでたしと見給ふに、高麗の紙の膚こまかに、なごうなつかしきが、色など花やかならでなまめきたるに、おほどかなる女手

（直樣）（その册子を源氏が）（あまり上手といふではないが）（兵部卿宮の筆蹟の事）（漢字）（これ程上手と）（源氏と宮と）（柔かな親しみのある紙質で）（平假名）

涙さへ 墨ならぬ感涙までも。

此處の紙屋の色紙 「此處の」は前の唐や高麗に對して日本をさす。紙屋は紙屋川畔に圖書寮の別院があつて官用の紙を漉いた。それを紙屋院又は紙屋といつた。

草の歌 草體の字の歌。あちらになぎれたり、こちらにゆがんだり、奔放な。

しどろもどろ その自由自在な愛敬のある筆致に見とれて、人々から書いて奉つた册子には、目もくれようとなさらない。

葦手の册子どもぞ 葦手下繪の册子はそれ〴〵工夫を凝したもので、どつしりした所はないが面白い。葦手下繪の用紙に書くには書式もそれに調和するやうに散らして輕く書く故「はかない」感じが出るのである。

此方彼方ゆきまじりて 葦が交錯して生えてゐておもしろい。「ゆきまじりて」の下に「をかし」が省筆してある。こゝまでが下繪の評である。

いたうすみたる所あり 文字の評である。この節の後半に明かに文字やうと下繪との事が見えてゐるから、前半の評も兩者に亘つてゐるものと釋かなければならぬ。

又いといかめしう 又畫風をいかめしい調子にかへて。前半の「はかなう」に對して、これは「いかめしう」といふのである。

石などのただずまひ これが下繪である。下繪がどつしりしたものだから、文字もそれに調子を合せていかめしく書かれたのである。

好み書き給へる 趣向を凝らして書かれた紙面もある。

何事も物好みし 兵部卿宮は何事にも興味を持つて風流がつてゐられる方だから。

續紙の本 いろ〳〵の色紙を繼いで卷物にし立てた手本。

取りにつかはす 宮は今日も源氏方にゐられるのである。

古萬葉集 古今集を續萬葉集といふのに對して普通の萬葉集をいふ。

四卷 河内本に「ヨマキ」と傍訓を施す。

淺縹 淡い縹色。

綺 錦に似て薄い織物。

綾の唐組の紐 捻つた糸で眞田打の如くに組み、色糸で種々の模樣を刺繡にした平たい組紐。

此頃の人は 今どきの人は、古人の書のよい所の一部分を眞似するだけの事です。

やがてこれは 古萬葉集と古今集とは其儘宮から源氏にお贈りになつた。

女子などを この二つは私に娘がありましても、見る目を持たぬ娘には傳へたくない品です。

の、うるはしう心とどめて書き給へる、譬ふべき方なし。見給ふ人の涙さへ、水莖に流れ添ふ心地して、飽く世あるまじきに、又此處の紙屋の色紙の、色合花やかなるに、亂れたる草の歌を、筆にまかせて亂れ書き給へるさま、見所かぎりなし。しどろもどろに愛敬づき、見まほしければ、更に殘りどもに目も見やり給はず。

左衞門の督のは、事々しうかしこげなる筋をのみ好みて書きたれど、筆のおきてすまぬ心地して、いたはり加へたる氣色なり。歌なども、殊更めきて、選り書きたり。女のはまほにも取り出で給はず。齋院のなどは、・・まして取うで給はざりけり。葦手の册子どもぞ、心々にはかなうをかしき。宰相の中將のは、水の勢ゆたかに書きなし、そそけたる葦の生ひざまなど、難波の浦にかよひて。此方彼方ゆきまじりて、いたうすみたる所あり。又いといかめ・しう引きかへて、文字やう、石などのたた

ずまひ、好み書き給へる枚もあめり。目も及ばず。これは暇いりぬべきものかな」と、興じめで給ふ。何事も物好みし、えんがりおはする親王にて、いといみじうめで聞え給ふ。

今日は又手の事どもを宣ひ暮して、さま〴〵の續紙の本ども、えり出ださせ給へるついでに、御子の侍從して、宮にさぶらふ本ども取りにつかはす。嵯峨の御門の古萬葉集を選び書かせ給へる四卷、延喜の御門の古今和歌集を、唐の淺縹の紙をつぎて、同じ色の濃き・もんの唐の綺の表紙、同じき玉の軸、綾の唐組の紐など、なまめかしうて、卷ごとに御手の筋をかへつつ、いみじう書き盡させ給へる。大殿油短くまゐりて御覽ずるに、盡きせぬものかな。此頃の人は、ただ片そばを氣色ばむにこそありけれ」などめで給ふ。やがてこれはとどめ奉り給ふ。女子などをもて侍らましにだに、をさ〳〵見はやすまじきには傳ふまじきを、まして朽ちぬべきを」など聞えて、奉れ給ふ。侍從

沈　沈香。

世の中に　世間で書家と謳められてゐる人々を尋ね出しては、身分の高下を問はず、相當の品を見計らつてお書かせになる。

この御箱には　明石姫君の冊子の箱には、下手な分はお入れにならず、丹念に人の身分や階級を見定めて、冊子や巻物をお書かせになる。

よろづに珍らかなる　御調度品はひの、何から何まで珍らしい寶物揃ひの、高麗唐土にも滅多にないさうなものばかりである中に。

この本どもも　宮から贈られた二品に心を動かして、見たく思ふ若人が多かつた。

かの須磨の日記　源氏が須磨謫居中に書いた繪日記。

人の上にて聞き給ふも　人が入内すると聞くにつけても、ひどく氣が氣でなく、淋しくお感じになる。内大臣は御女の雲雁のことが思ふ儘にならないからである。

徒然とうちしめり　姫君が淋しさうに沈んで居られるのは父大臣の一方ならぬ歎きの種であるのに、夕霧は相變らず熱の無い態度であるので。

心弱く進み寄らむも　こちらからおなく降參してゆくのも外聞がわるいし、いつそ夕霧が懇望して居た時に許せばよかつた。

一方に罪をも　夕霧ばかりをわるくいふ譯にもいかない。内大臣が我を張りすぎた事を後悔されるのである。

雲しつらかりし御心を　内大臣が一時つれない仕打をされたのが恨めしく思はれるのではなく、夕霧はわざとそし振りして居られぬ振りをしてゐるが、併し別の女に思ひを移さうとするなどは氣にもなれず、自ら求めて遣る瀬ない思ひをしてゐるが、浅緑などを折々六位の下賤である事を嘲つた乳母達にも、納言にも思ふ心を見せてやらうと思ふ心になつたのである。今古排諧あらゆる試みがてらあひ見ねばやと思ひ初めしきまでぞ戀しきりぬるやうだから、どちらなりとおきめなさい。

かやうの事は　かうした問題は父院の御教訓にさへ隨はうとはなかつたのだから、私も口を出したくないが、今思ひ合せると、あの御教訓こそ永久の眞理なのでした。

の御子に、唐の本などのいとわざとがましき、沈の箱に入れて、いみじき高麗笛添へて奉れ給ふ。源氏から侍從に

また此頃は、ただ假字の定めをし給ひて、世の中に手書くと覺えたる上中下の人々にも、さるべきものども思し計らひて、尋ねて書かせ給ふ。この御箱には、立ちくだれるをばまぜ給はず。

わざと人の程、品わかせ給ひつつ、冊子巻物皆書かせ奉り、よろづに珍らかなる御寶物どもなむ、ゆかしと心動き給ふ若人世に多かりこれも明石姫君の料

このに、古萬葉集と古今集なかに、この本どもも整へさせ給ふなかに、かの須磨の日記は、末に後世

ける。御繪どもも整へも傳へ知らせむとおぼし返して、まだ取り出で給はず。

とおぼしせど、姫君がもう少し物が分つてから與へようと思ひ返して今すこし世をもおぼし知りなむに

内のおとどは、この御いそぎを、人の上にて聞き給ふも、いみじう心もとなくさう〳〵しとおぼす。雲居雁

明石姫君入内の準備を

姫君の御有樣、さかりに雲居雁が

整ひて、すこしうつくしげなり。徒然とうちしめり給へる

程、いみじき御歎きぐさなるに、かの人の御氣色、はた同じやうになだらかなればこそ、心弱く進み寄らむも人笑はれに、人のねんごろなりしきざみに靡きなましかば、など人知れずおぼし數きて、一方に罪をもえおほせ給はず。暫しつらかりし御心を憂しと思へば、つれなくもてなしづめて、さすがに外ざまの心はつかふべくも覺えず、心づからたはぶれにくき折多かれど、浅緑聞えごちし御乳母どもに、納言にのぼりて見えむの御心深かるべし。おとどは、怪しく浮きたるさまかなとおぼし惱みて、

内大臣のいみじき御歎きぐさなるに　夕霧の態度は

内大臣の心心弱く進み寄らむも人笑はれに　雲居雁戀しきに

大輔の乳母

乳母

夕霧は

源氏

雲居雁を

夕霧の獨身である事を心配されて

今院に宰相であるから

内大臣が心中に

かうして内大臣の方ですこし折れた樣子を夕霧は聞

誰とも分らない

右のおとど

かのわたりの事思ひ絶えにたらば、右のおとど、中務の宮などの、氣色ばみいはせ給ふめるを、いづくも思ひ定められよ」と宣へど、物も聞え給はず、かしこまりたる・さまにてさぶらひ給ふ。

夕霧は　結婚の事

恐縮の樣で

桐壺院の

かしこき御教へにだに、隨ふべくも覺えざりしかば、言ま

つれ〴〵と物すれば あなたが淋しい獨身生活をしてゐられるので、何か思はくでもある事かと世間でも想像するだらうが。

しりび 龍頭蛇尾。

いみじう思ひのぼれど いくら高くとまつて居ても、思ふ通りにはならないで、制限のあるものだから、浮氣心を出してはいけない。

いはけなくより 私は幼い時から宮中に成長して、自由も利かず、窮屈な日を送つてゐて、すこしの缺點があつても、輕率の謗りを受けはしまいかと愼んで居たのですが、それでさへ好色の非難を蒙つて、大變きまりのわるい目をしました。

位淺く何となき 位が低くて詰らぬ身分だからとて、氣樂な身勝手な振舞などはなさるな。

思ひしづむべきくさはひ 浮氣を制する程氣に入つた妻のない場合には、女の事で昔の賢人でさへ身を持ちくづした例もあつた。

さるまじき事に 道ならぬ事に執着して、女の浮名をも立て、自分も恨み（彼故に浮名を立てられたと）を負ふといふ事は、後生の障りとなるものです。

とりあやまりつつ 見そこなつて結婚した女が、己の氣に入らず我慢の出來ない事があつても矢張思ひ直して見るやうにして或はその親の心に免じ、又親がなくて不如意がちな世を送つてゐるにしても、當人がいぢらしい人柄であつたら、それを一つの取柄に數へて連添ひなさい。

故院の かの御教へこそ長きためしにはありけれ。つれ〴〵と物すれば、思ふ心あるにやと、世の人も推し量るらむを、宿命に引きずられて行つて 宿世の引く方に て、とどのつまり詰らぬ緣を結んでしまふのは なほ〳〵しき事にあり〳〵て靡く、いとしりびに尻すぼみで不體裁です 人わろき事ぞや。いみじう思ひのぼれど、心にしもかなはず、限りあるものから、すき〴〵しき心使はるな。源氏自身の事 いはけなくより、宮の内より生ひいでて、身を心にもまかせず、所せく、いささかの、事のあやまりもあらば、かろ(る)〴〵しき謗りをや負はむとつつみしだに、なほすき〴〵しき咎(とが)を負ひて、須磨謫居の事 世にはしたなめられき。位淺く何となき身の程、打解け、心のままなる振舞など物せらるな。たま〳〵増長すると 心おのづから驕りぬれば、思ひしづむべきくさはひなき時、女の事にてなむ、かしこき人、昔も亂るるためしなむありける。さるまじき事に心をつけて、人の名をも立て、みづからも恨みを負ふなむ、つひのほだしとなりける。とりあやまりつつ見む人の、わが心にかなはず、(見)忍ばむ事難きふしありとも、

わがため人のため 自分の爲にも女の爲にも、跡始末のよいやうにといふ考へ方が、分別のあるといふもののやうだ。

かやうなる御いさめに 夕霧は斯樣な御教訓に從つて、冗談にも他の女に心を寄せるといふ事は、心から雲居雁に對して不便な事だとお思ひになる。

人やりならず 人から教へられるのではなく、自分の心から雲居雁を不便と思ふのである。

御文は 夕霧は思ひ餘る折々には、情愛をこめた御文を雲居雁にお遣しになる。

たが誠をか 古今戀四「いつはりと思ふものから今更にたが誠をか我は頼まむ」

世馴れたる人こそ 以下「疑ふなれ」までは記者の批評を挿入したものである。男馴れた女こそ無闇に男の心を疑ふものだ。併し雲井雁はさうでないから、誰が誠をかと思ひながらも、ほんにさうだと夕霧の手紙に動かされる點が多くあるの意。

中務の宮なむ 中務宮が源氏の内意を伺つて、姫君を夕霧に娶せようかと相談して居られる。前に「右のおとど中務の宮などの氣色ばみいはせ給ふめる」とあつた。

なほ思ひ返さむ心をならひて(修行して)、もしは親の(女の親の)心に讓り、もしは親なくて世の中かたほにありとも、人(女の)がら心苦しく(う)などあらむ人をば、それを片かどに寄せても見給へ。わがため人のため、遂によかるべき心ぞ深うあるべき」など、源氏がひまがあつて のどやかにつれ〴〵なる折は、斯かる心づかひをのみ教(夕霧に)へ給ふ。

かやうなる御いさめにつきて、たはぶれにても外(ほか)ざまの心を思ひかかるは、あはれに人やりならず覺え給ふ。雲居雁も父大臣が常とは違つて嘆いてゐられる御樣子を見て 女も、常より殊に、おとどの思ひ歎き給へる御氣色に、我身の不遇を恥かしく思つて打沈んではゐられるが 恥かしう憂き身とおぼし沈めど、うへはつれなくおほどかにて、ながめ過ぐし給ふ。夕霧から雲居雁に 御文は、思ひあまり給ふ折々、あはれに心深きさまに聞え給ふ。人のいふ誠など信ずる事は出來ないものだと雲居雁は思ひながらも たが誠をか、と思ひながら、世馴れたる人こそ、あながちに人の心をも疑ふなれ、あはれ、と見給ふふし多かり。「中務の宮なむ、大殿(おほいどの)にも御氣色賜はりて、承諾を得て さもやとおぼしかはしたンなる」と人の聞え(内大臣に)ければ、おとどは、引返し(悲しみを新たにして)御胸ふたがるべし。忍び

さる事をこそ　以下雲居雁に仰しやる詞。さる事とは中務宮から縁組を申込んだ事。

おとどのロ入れたまひしに　源氏は御自分が口添へして夕霧と雲居雁との縁組を申出られた時に當方で強情であつたからとて、他へ縁組を持つて行かうとなさるのでせう。

なほや進み出でて　やはりこちらから進み出て夕霧の機嫌を取つて雲居雁との縁組を纏めたものだらうか。

立ち給ひぬる名殘も　内大臣が姫君の部屋を立去られたあとでも姫君は其儘端近い所で物思ひに沈んで居られる。

怪しく心おくれても　不思議に心弱くも涙が流れ出る事よ。父君はこの涙を御覽になつて何と思召した事だらう。夕霧に未練があるとでも思はれたらうかの意。

つれなさは　あなたは次第に世間並の女と同樣無情な女になつて行かれるのに、それをいつまでも忘れずに居る私は、なみは限りとて　忘れられないづれの人間なのでせうか。と仰しやる私を是までだと棄ててしまつて、あなたは餘處と縁組をなさる。それが世間につれる人心といふものでせう。

て、（内府「さる事をこそ聞きしか。（夕霧は無情な人ですね）なさけなき、人の御心にもありけるかな。（源氏）おとどの、口入れ・たまひしに、執念かりきとて、引きたがへ給ふなるべし。（今頃歎いても地なく先方に降嫁しては物笑ひの種でせう）心弱く靡きても人笑へならましこと・・」など、涙を浮けて宣へば、（姫君に）（雲居雁は）姫君、いと恥かしきにも、（何とはなしに）そこはかとなく涙のこぼるれば、（きまりわるくて横を向かれる様子は）はしたなくて背き給へる、らうたげさ限りなし。（内大臣の心）いかにせまし、なほや進み出でて氣色を取らまし、などおぼし亂れて、立ち給・ひぬる名殘も、やがて端近うながめ給ふ。（以下雲居雁の心）怪しく心おくれても進みい・づる涙かな、いかにおぼしつらむなど、よろづに思ひ居給へるほどに、（夕霧から）御文あり。（夕霧を恨みながらも）さすがにぞ見給ふ。（こまやかにて）こまやかにて、

（夕霧）つれなさは憂き世の常になりゆくを忘れぬ人や人に異なるとあり。（中務宮との縁談の事などけぶりにも匂はさないで何くはぬ顔をして居られるよと思ふと恨めしいが）氣色ばかりもかすめぬつれなさよ、と思ひ續け給ふは憂けれど、（雲居雁）限りとて忘れがたきを忘るるもこや世に靡く心なるらむ

怪しと打置かれず　夕霧は、變な事が書いてあると、下にも置けずに、不審がりながら雲居雁の御文を見てゐられたとか。

とあるを、（夕霧心）怪し、と打置かれず。かたぶきつつ見居給へる（ゐ）とぞ。

〔花〕源卅九歳三月より、十二月までの事見えたり。梅がえの同年の事也。

御いそぎの程にも 明石姫君が春宮に御入内の支度の折にも。源氏今年三十九歳。

わが心ながら執念き 自分ながら何といふ執念深い事だらう、こんなに無闇に煩悶するのなら内大臣も目をつぶつて雲居雁を許さうとまで我を折られたといふ噂もあるのだもの、とは思ひながらも、同じ事なら外聞のわるくないやうに始末をつけようと意地を張つて、苦しい物思ひをし續けてゐられる。

關守の 伊勢物語・古今戀三「人知れぬわが通ひ路の關守は宵々ごとにうちも寢ななむ」

怪しく背き〳〵に 夕霧と雲居雁とは不思議に別々の事を考へながらも互に思ひあつてゐる。夕霧は内大臣が折れて出るのを待つてゐるし、雲居雁は夕霧と中務宮の姫君との緣組の事を考へてゐるから背き〳〵といふのである。

かの宮にも 中務宮が夕霧を聟取る事にきめてしまはれたら、別に雲居雁の夫を選ぶにしても、その夫である人に氣の毒だし、雲居雁に取つても外聞わるく、自然輕率の難は免れないだらう。

とかく紛らはして 何とか目立たぬやうにしてやはり我を折らなければなるまい。

御いそぎの程にも、宰相の中將（夕霧は雲居雁の事の爲に物思ひがちで）はながめがちにて、ほれ〴〵（ほんやりした氣持で居るのが一方では不思議に思はれて）しき心地するを、かつは怪しく、わが（夕霧の心）心ながら執念（しふね）きぞかし、あながちにかう思ふ事ならば、關守のうちも寢ぬべき氣色に思ひ弱り・・（給ふな）たるを聞きながら、同じくは人わろ（る）からぬさまに見果てむ、と念ずるも、苦しく（う）思ひ亂れ給ふ。女君（雲居雁も父大臣がほのめかした夕霧の緣談）も、おとどのか（がもし事實ならば夕霧は自分の事などすつかり忘れてしまふ事だらうと悲しく）すめ給ひし事の筋を、もしさもあらば、何の名殘かは、と歎かしうて、怪しく背き〳〵に、さすがなる御諸戀（おんもろごひ）なり。おとども（内大臣もあんなに似せ元氣を見せてゐられたが意地の張りがひのないのに思ひあぐんで）、さこそ心強がり給ひしかど、猛からぬにおぼし煩ひて、かの宮（以下内大臣の心）にもさやうに思ひ立ち果て給ひなば、又とかく改め思ひかかづらはむ程、人のためも苦しく（う）、わが御方ざまにも人笑はれに、おのづからかろ（る）〴〵しき事やまじらむ、忍ぶ（いくら隱さうとしても夕霧と雲居雁との過失事）とすれど、うちう（情も世間に漏れてゐる事だらう）ちの事あやまりも、世に漏りにたるべし、とかく紛らはして、なほ負けぬべきなめり、とおぼし（内大臣が）なりぬ。うへ（表面は何事もないやうであつて）はつれなくて、恨み解けぬ御中（内大臣と夕霧の間柄故）なれば、ゆくり（だしぬけに）なく言ひ寄らむもいかが、とお（内大

事々しくもてなさむも　改まつて仲直りを申し出るのも夕霧の手前も馬鹿らしいから、どうした機會にほのめかしたらよからう。
おほい殿の大宮　内大臣の御母大宮逝去の事は物語の上には明かに書いてないが、行幸卷の三月廿日であつた事が知られる。
忌日　命日。
このおとどをばつらしと　夕霧は雲居雁の事で内大臣を怨めしく思つてからは、お會ひになるのにも氣がおけて、用心深く取すましてゐられる。
おとども常よりは　内大臣も雲居雁の事について此頃思ひ悩んで居られるのであるから、自然夕霧に目がとまるのである。
御誦經　御誦經の布施物。
夕かけて　夕方になつて一同が歸路に就かれる時は。
霞たど〳〵しきに　霞がこめてあたりがおぼろであるので。
雨氣なり　雨が降りさうだから早く歸りませうと從者達が歸洛を促して騷ぎ立つてゐるのに、夕霧はなほじつと物思ひに耽つてゐられる。

ぼし憚りて（臣が斟酌して）、事々しく（内大臣の心）もてなさむも（大層らしく取扱ふのも）、人の思はむ所をこなり、いかなるついでしてかはほのめかすべき、などおぼすに、三月廿日、おほい殿の大宮の御忌日にて、極樂寺（深草）にまうで給へり。（内大臣が）君だち（内大臣の子息達を）皆引きつれ、いきほひあらまほしく（う）、上達部などもあまた參りつどひ給へるに、（極樂寺に）宰相の中將、をさ〳〵けはひ劣らずよそほしくて（夕霧は他の人々に劣らない程に威嚴もそなはつて）、かたちなど、只今（の）・いみじきさかりにねびゆきて、取集めめでたき（どこもかしこも揃つて立派な御有様である）、人の御有樣なり。この（内大臣を）おとどをばつらしと（夕霧）思ひ聞え給ひしより、見え奉るも（内大臣に）心づかひせられて、いといたう（夕霧のさま）用意し、もてしづめて物し給ふを、おとども（内大臣も）常よりは目とどめ（夕霧に）給ふ。御誦經などは、（も）六條の院（源氏）よりもせさせ給へり。宰相の君（夕霧は外祖母の法事であるから一切を引受けて懇に世話をされた）は、ましてよろづをとりもちて、あはれに營み仕うまつり給ふ。夕かけて皆歸り給ふ程、花は皆散り亂れ、霞たど〳〵しきに、おとど（内大臣は）昔おぼしいでて、なまめかしううそぶきながめ給ふ（小聲で歌を誦しつつ）。宰相（夕霧）もあはれなる夕べの氣色に、いとどうちしめりて（しんみりした氣分で）、「雨氣（あ）なり」

などいとこよなくは　なぜさうひどく私をいぢめようとなさるのです。
今日の御法の會をも　今日の御法事が誰の爲のものであるかをお考へなさるならば、私の罪を許して下さいよ。餘命すくなくなつてゆく今日此頃、私を御見捨てなさるとは恨めしい。
過ぎにし御おもむけも　亡き大宮の御遺言にも、あなたを力とせよとの事でございましたが、あなたが御許し下さらないので遠慮致しました。
君いかに思ひて　夕霧は、内大臣がどういふお積りで、いつものやうでもなく、雲居雁を許してもよいやうな事を仰しやつたのだらうと、絶えず氣にかかつてゐる雲居雁の事であるから、一寸した一言ではあつても、内大臣の詞が耳に殘つて、色々と考へながら一夜を明かされた。
ここらの年頃の　夕霧が多年煩悶した効があつて、内大臣もすつかり我を折つて、一寸した機會——さう改まつた機會ではなく而も適當な機會——に夕霧をお招きしようと思つてゐられると。
朔日ごろ　上旬。奥に「七日」とある。

と人々の騷ぐに、なほながめ入りて居給へり（夕霧のさま）。心ときめきに見給ふ事やありけむ（内大臣が夕霧の様子を見て胸にどきりと來た事があると見えて）、袖（夕霧の）を引寄せて、（内大）「など（か）・いとこよなくは勘事し給へる。今日の御法の會を（に）も尋ねおぼさば、罪を許し給ひてよや。殘りすくなくなりゆく末の世に（私の晩年に）、思ひ捨て給へるも、恨み聞ゆべく」など宣へば、打畏まりて（夕霧のさま）、（夕）「過ぎにし御おもむけも（大宮の）、頼み聞えさすべきさまに（内大臣を）承りおく事侍りしかど、許しなき（内大臣が夕霧を）御氣色に、憚りつつ（なん）・・」など聞え給ふ。心あわただしき雨風に、皆散り〴〵にきほひ歸り給ひぬ。君（夕霧）、いかに（内大臣が）思ひて例ならず氣色ばみ給ひつらむなど、世と共に（常住）心をかけたる御あたり（雲居雁の事を）なれば、はかなき事なれど、耳とまりて、とやかうやと思ひあかし給ふ。
ここらの年頃の思ひのしるしにや、かのおとども名殘なくおぼし弱りつつ（て）（こ）、はかなきついでのわざとはなく、さすがにつきづきしからむをおぼすに、四月の朔日ごろ、お前（内大臣邸の）の藤の花、いと

遊びなどを催されて。内大臣が管絃の御遊

一日の花の蔭のの御對面は物足りなく感じましたが。極樂寺にての事をいふ。先日の花の藤

わが宿のつてゐる夕方に、暮れゆく春を惜しみにいらつしやらないと、ふ法はありますまい。末句に雲居雁の事を含めてある。私方の藤が濃紫に匂

待ちつけ給へるもけた夕霧も内大臣の下心を推察して胸をどきつかせながらお禮を申される。お招きを受

なか〳〵にの歌向がはつきり分らなくては、お招に預つても却つてどうしてよいか途方にくれて居ります。なさけない程氣おくれがして思ふやうにいへませぬ。あなたからよろしく取繕つてお導へ下さい。あなたの御意

口惜しくこそおくれがして思ふやうにいへませぬ。あなたからよろしく取繕つてお導へ下さい。

煩はしき隨身はうるさい隨身はいやです。

返し給ふ夕霧は柏木を一足さきに歸宅させた。

過ぎにし方の大宮の言葉に從はないで、雲井雁を夕霧に許さなかつた恨も解けようといふものだ。「けう」は湖月抄本も河内本も共に「けふ」と假名書であるが、河内本には「孝」と傍書してある。

面白う咲き亂れて、世の常の色ならず、ただに見過ぐさむ事惜しきさかりなるに、遊びなどし給ひて、暮れゆく程のいとど色面、飽かず覺え侍りしを、御暇あらば、立寄り給ひなむや」と

あり。御文には、

わが宿の藤の色濃きたそがれに尋ねやは來ぬ春の名殘を

とて返し給ふ。おとどのお前にて、斯くなむとて御覽ぜさせ給ふ。「思ふやうありて物し給へるにやあらむ。さも進み物し給はばこそは、過ぎにし方のけうなかりし恨みも解けめ」と宣ふ

わざと使されば夕霧は柏木を一足さきに歸宅させた。

あまり濃くて花鳥「直衣の色、夏は若き時二藍、次に濃き花田、次に淺き花田也。非參議は二位三位などの中將を云。夕霧は時に宰相中將也。非參議にあらず。二藍はあまりに若々しければ、濃き花田よかるべしと宣ふ也」

わざと使されば蔭々使を向けられたのだから早くおいでなさい。

わが御方にて夕霧は自分の部屋で念入りに化粧して、黃昏も過ぎて、待ちあぐんでゐる時分に參られた。

いづれともなく列席の人は皆美しい方々であるが、夕霧は矢張人よりすぐれてすつきりと綺麗であるけれども、人づきがよくて味があつて氣があつて氣がおける人品である。

おとど御座引繕はせ夕霧の座を設けさせたりして御心づかひは一通りでない。内大臣は

御心おごり、こよなうねたげなり。夕「さしも侍らじ。對の前の藤、常よりも面白く咲きて侍るなるを、靜かなる頃ほひなれば、遊びせむなどにや侍らむ」と申し給ふ。夢「わざと使されたりけるを、早う物し給へ」と許し給ふ。夕「直衣こそあまり濃くてかろびためれ。非參議の程、何となき若人こそ二藍はよけれ。引繕はむや」とて、しく、ただならず。夢

源氏の御意な樣子は憎らしい程である

對の前の内大臣邸の

靜かなる頃ほひなれば

往訪を承諾された夕霧の心

いかならむと内々は心配で

二藍は

引繕はむや

わが御方にて、心づかひいみじくけさうじて、たそがれも過ぎ、心やましき程にまうで給へり。あるじの君だち、中將をはじめて、七八人うちつれてかたちどもなれど、なほ人にすぐれてあざやかに清らなるものから、なつかしうよしづき恥かしげなり。おとど御座引繕はせなどし給ふ御用意おろかならず。御かうぶりなどし給ひて出で

内大臣の子息達

内大臣方で

内大臣が御冠に纓櫻を正して設けの席に出られようとし

いとかうざくに　夕霧は年と共に立派になられる方ですよ。「かうざく」は「きやうざく」ともいふ。

あざやかに抜けいでて　あざやかに群を抜いて老成してゐる點は、父君の源氏よりもまさつて居るやうに思ふ。

見るにゑましく　源氏の姿を見ると愉快になつて、心配事も忘れてしまふやうな氣がする。

おほやけざまは　役人としてはすこし眞面目を缺いて、氣輕でとなす方であつたが、それも尤もな事です。

ことわりぞかし　あの容色とこの才氣では當然さうなるの意。

物まめやかに　眞面目なしかつめらしい話は少しで切上げて、すぐに花の宴に移られた。

春の花いづれとなく　春の花は何れも目を驚かす程の美しい色合を持つてはゐるが、氣ぜはしく、惜しむ人のゐる氣持も知らずに散つて了つて殘念に思つてゐる時分に、この藤の花だけがおくれて夏まで咲き續いてゐるのは妙に奥ゆかしくて感興をそゝられます。

夏に咲きかかる　伊行釋引歌「夏にこそ咲きかかりけれ藤の花松にとのみも思ひけるかな」

色もはた　藤の花は夏に咲き續くあつて、なつかしいゆかりの色ともすることが出來ませう。

給ふとて、北の方の若き女房などに、「のぞきて見給へ。いと(夕霧を)からざくにねびまさる人なり。用意などいと靜かにもの〳〵しや。あざやかに抜けいでおよすげたる方は、源氏父おとどにもまさりざまにこそあめれ。源氏はだまらぬ程あでやかで愛敬があつてきて、見るにゑましく、世の中忘るる心地ぞし給ふ。源氏の事をいふ　おほやけざまは、すこしたはれて、あざれたる方なりし、ことわりぞかし。夕霧は級間もすぐれて居り心操へも男らしく眞面目で缺點のない人だと世間では考へてゐるやうです　これはざえのきはもまさり、心用ひ雄々しく、すくよかに足らひたりと世に覺えためり」など宣ひて、引繕ひてぞたいめんし給ふ。物まめやかにうべ〳〵しき御物語はすこしばかりにて、花の興に移り給ひぬ。「春の花いづれとなく、皆開けいづる色ごとに、目驚かぬはなきを、心短く打捨てて散りぬるが恨めしう覺ゆる頃ほひ、この花の獨り立ちおくれて、夏に咲きかかる程なむ、怪しくこころにくくあはれに覺え侍る。色もはたなつかしきゆかりにもしつべし」とて、うちほほゑみ給へる、氣色

もてあそぶに心を寄せて　藤の花を專心に賞翫しながら、酒をのみ又音樂を催される。

みだりがはしく　無作法に無理に夕霧を醉はさうとなさる。

さる心して　夕霧は用心して辭退するのに困つてゐられる。

君は家の世には　あなたは滅季の今の世には過ぎる程天下の物知りでいらつしやるやうだが。

文籍　書物、書籍。

家禮　子が父を敬するのに準じて他人をも敬する事。内大臣は夕霧の舅であるから斯くいふ。史記高祖紀「六年高祖五日一朝太公」「如二家人父子禮一」

をかしき程に　酒が云はせる泣言やら、内大臣は意中をほのめかされるやら。それもおもしろいもので、惡い感じは與へなかつた。

音を思ひ給へ出づる　大宮や母君奏上などにお仕へする代りには身を捨ててお仕へする筈と承知はしてゐながらお仕へする事も出來ずに居りますから、内大臣は時を見計つて御許しを願ひ出ませう。後撰春下「春日さす藤の裏葉のうらとけて君し思はば我も頼まむ」

ありて匂ひ清げなり。七日の月が昇つたのである　月はさし出でぬれど、花の雲に花の色さだかにも見えぬ程なるを、もてあそぶに心を寄せて、大御酒まゐり、御遊び・・し給ふ。内大臣おとど、程なく空醉をし給ひて、みだりがはしく強ひ醉はし給ふを、さる心して、いたうすまひ惱めり。内「君は末の世にはあまるまで、天の下の有職に物し給ふめるを、私の齡ふりぬる人、思ひ捨て給ふなむつらかりける。文籍にも家禮とやうな老人をお嬪ひなさるのが恨めしいいふ事・あるべくや。儒教にも十分通じていらつしやる筈と存じますのにと思ひ給ふるを、いたう心惱ましと恨み聞ゆべくなむ」などに君を苦しめなさいますとお恨み申上げたいのです宣ひて、醉泣にや、をかしき程に氣色ばみ給ふ。夕いかでか。昔を思ひ給へ出づる御かはりどもには、身を捨つるさまにもとこそ思ひ給へ知り侍るを、いかに御覽じなす事にかは侍らむ。もとよりおろかなる心の怠りにこそ」と、夕霧がおわびを申された かしこまり聞え給ふ。御時よくさうどきて、内大臣の息君不參の恨み言を受けて内「藤の裏葉の」とうちずんじ給へる、御氣色を賜はりて、頭の中將、花の色濃く殊に房長きを折りて、

取りてもてなやむに　夕霧は受取つたものの處置に困つてゐると。
紫にかごとはの歌　お申込を今か〳〵と待つて居た日數も過ぎて今日に及んだ事はつらいが、その責任は雲居雁に負はせませう。
氣色ばかり　ほんの眞似ばかり拜舞の禮をなさる。
幾かへり　今日のお許しを得るまでには幾度悲しい春を送り迎へた事でせう。新古今戀一能宣「幾かへり咲き散る花を眺めつつ物思ひ暮す春にあふらむ」
たをやめの歌　連添ふ夕霧故に雲居雁も美しくなる事でせう。
次々に　次々と順に歌を詠むやうであつたが。
七日の夕月夜　前に「四月の朔日ごろ」とあつた。
げにまだほのかなる　晩春初夏の候とて、いかにも梢の若葉も繁らないで物淋しい時であるのに。
例の辨の少將　梅枝卷に催馬樂の梅枝を謠つた人。梅枝二二七頁參照。
葦垣　催馬樂、呂、葦垣「葦垣ま垣かき分けて、踏み越すと、追ひ越すと、はれ、踏越すと誰か、誰か、此事を、親にまうよこし申しし。とどろける此家、此家の、おとよめ、親にまうよこしけらしも。天地の神も、神も、證したべ。我はまうよこし申さず。菅の根のすがな、すかなき事を我は聞く」夕霧と雲井雁との關係は結局內大臣の負となつたのだから、少將が殘念に

まらうどの御盃に加ふ。取りてもてなやむに、おとど、

紫にかごとはかけむ藤の花まつより過ぎてうれたけれども

宰相盃を持ちながら、氣色ばかり拜し奉り給ふ・さま、いとよしあり。

幾かへり露けき春を過ぐし來て花のひもとく折にあふらむ

頭の中將に賜へば、

たをやめの袖にまがへる藤の花見る人からや色もまさらむ

次々に皆順流るめれど、醉ひの紛れにはか〳〵しからで、これよりまさらず。

七日の夕月夜、影ほのかなるに、池の鏡のどかに霞みわたれり。げにまだほのかなる梢どもの、さう〳〵しき頃なるに、いといたう氣色ばみ横たはれる松の、木高き程にはあらぬに、懸かれる花のさま、世の常ならず面白し。例の辨の少將、聲いとなつかしくて、「葦垣」を謠ふ。おとど、「いとけやけうも仕うまつる

思つて男が葦垣を越えて女を連れ出すとある葦垣を歌つて、夕霧にあてこすつたのである。
けやけうも　結婚式の日に女を盗み出す歌などは緣起でもないから、變つた歌を持出したものだと咎めたのである。
年經にけるこの家の　葦垣の句の「とどろける此家の」をわざと謠ひ換へたのである。「とどろける」は女が逃げたので大騷ぎをしてゐる意味である。其故內大臣が氣轉をきかして換へて歌つたのである。
ほとほとしく　殆ど出來ない。
宿直所讓り給ひ　あなたの部屋をとめて下さらんか。
朝臣や　柏木よ、夕霧の御寢室を世話してあげなさい。私はひどく醉つぱらつて失禮ですから、もう御免蒙ります。
花の蔭の　花の蔭の假初の旅寢かね。どういふものだらう。これは迷惑な案內役を仰せつかつたものだ。
松に契れるは　藤の花は四時に色かへぬ綠の松に咲きかゝるものだもの、浮氣の花とはいへない。新古今春下貫之「綠なる松に契れる藤なれどおのが頃とぞ花は咲きける」六帖六・貫之集一。
ねたのわざや　柏木は自分の方が遂に夕霧に降參してしまつた事を殘念に思ふのである。
斯うもあり果てなむと　かういふ結果になる事を希望して居つた事とて、安心して雲居雁の所へ案內した。
わが身いとど　一入わが身のえちさを感じた事であらう。

かな」と打亂れ給ひて、「年經にけるこの家の」と打加へ給へる御聲、いと面白し。物をかしき程に亂りがはしき御遊びにて、思ひ殘らずなりぬめり。やう〳〵夜更けゆく程に、いたう空惱みをして、「亂り心地いと堪へがたうて、まかでむ空もほとほとしくこそ侍りぬべけれ。宿直所讓り給ひてむや」と中將にうれへ給ふ。おとど、「朝臣や、御休み所求めよ。翁いたく醉ひ進みて無禮なれば、まかり入りぬ」といひ捨てて入り給ひぬ。中將、「花の蔭の旅寢よ。いかにぞや。苦しきしるべにぞ侍るや」といへば、「松に契れるは、あだなる花かは。ゆゆしや」と責め給ふ。中將は心のうちに、ねたのわざや、と思ふ所あれど、人ざまの思ふさまにめでたきに、斯うもあり果てなむと、心がけわたる事なれば、うしろやすく導きつ。男君は、夢かと覺え給ふにも、わが身いとどいつかしうぞ覺え給ひけむかし。女は、いと恥かしと思ひしみて物し給ふも、ね

世のためしにも　私は隨分ひどい目にあつて、世間の話の種にもなりさうな身でしたが、それを辛抱して居つたればこそ、こんなに迄許して戴いたのでせう。それにあなたが人情を理解して下さらないのは、世間並はづれてゐますよ。

いたき主かな　少將はえらい男だ。

河口の　催馬樂呂河口「河口の關の荒垣や、守れども、はれ、守れども、出でてわれ寢ぬや」。河口關は伊勢國壹志郡に在つた。

あさき名を　私の父を考への無いものゝやうに世間に云ひ流したのは、もとをたゞせばあなたの口からの出たのですが、何でそんな事をなさつたのですか。關の荒垣は夕霧に譬へてある。河口といふ名によつて河の口に見立てゝ或は「流し」といひ「漏らし」といつたものである。漏は水を漏らす意に用ひたのであるが、關の縁で「守る」をきかし、また關に堰がきかしてある。

漏りにける　憂名を流した咎を私の輕率にばかり負はせて下さるな。「漏り」に「守り」がきかしてある。

年月の積りも　長い間いぢめられ通した事を思ふと、實にたまらない程苦しくて、分別の力もありませぬ。

人々聞え煩ふを　侍女達は、夕霧がどうしても起きないで困つて居るので。

したりがほなる　い、氣になつて朝寢をしたものだ。

御文は　後朝の文は、以前と同樣人目を憚つてゐるやうな心遣ひで書いてあるので。

なか〳〵今日は　雲居雁は今までは氣樂に返事をしたのだが。

いとわりなきや　夕霧の文を父君に見られて雲居雁が當惑してゐるのである。

いとど思ひ知らるる　一入わが身の程が思ひ知られまして、たまらない苦しみに死んでしまひさうですが。

咎むなよの歌　今までは袖にたまる涙を人目立たぬやうに紛つてゐましたが、絞り疲れたので今日は隱す事も出來ませんが、愼みのない爲方と咎めて下さるな。

御返し　なか〳〵返事が出來さうでないので。

さもおぼし憚りぬべき　雲居雁がさういふやうに書きにくがつてゐるのも尤もな事ゆゑ。

右近のじようなる人の　この御使は、夕霧が親しくお召使ひになる右近將監であつた。河海抄「右近將監はまだ敍爵せざるをばぜうとよぶ也」弄花抄「夕霧左中將也、左近將監たるべき歟」

かひありかし。

御文は、なほ忍びたりつるさまの心づかひにてあるを、（雲居雁は）なかなか今日はえ聞え給はぬを、物いひさがなき御達つきしろふに、（返事しかねてゐるので）いとど渡りて見給ふぞいとわりなきや。（夕霧の文を内大臣が雲居雁の方におとど）氣色に、なか〳〵いと思ひ知らるる身の程を・・、（夕霧は時宅した）堪へぬ心に又消えぬべきも、咎むなよ忍びに絞る（手のだるさに）手もたゆみ今日あらはるる袖の雫を」など、いと馴れがほなり。（内大臣は）うちふみて、（内府）「手をいみじくも書きならべにけるかな」など宣ふも、（荷葱の跡かたもない）昔の名殘なし。御返しいと出で來がたげなれば、（内府）「見苦しや」とて、さもおぼし憚りぬべき事なれば、（後朝の文の御使に與へる祝儀）渡り給ひぬ。御使の祿、なべてならぬさまに・賜へり。（柏木が御方に風情のある方法で）中將、をかしきさまにもてなし給ふ。（御使を）常に引隱しつつ隱ろへありきし御使、今日は、（内大臣はわが御方に一人前の顏付をして得意ぶりにしてゐる）おもものちなど人々しく振舞ふめり。（今迄は文を隱しながら忍んで來た御使が）右近のじようなる人の、陸まじくおぼし使ひ給ふなりけり。

六條のおとども 源氏も、内大臣と夕霧との間に仲直りの出來た事を聞召した。

文など物しつや 雲居雁に文をやりましたか。

人わろうかかづらひ あなたが今まで雲居雁との關係について見つともなくこだはつたり焦れるといふやうな事もなく過して來られたのは、人にすぐれた用意だと思ひます。

おとどの御おきての 内大臣の考へがあまりゆとりがなくて、すつかり降參してしまつた事と世間でも非難する事でせう。

すき〴〵しき心ばへなど 雲居雁の外に女などを作るな。

さこそおいらかに 内大臣はあんなに大やうな寛大な性格のやうに見えるが、本心は男らしからず癖があつて、つきあひにくい所のある人です。

事打合ひ目やすき 夕霧と雲居雁とは條件の揃つた似合の夫婦だと源氏はお思ひになる。

御子とも見えず 源氏があまり若く見えるので親子とは見えず兄弟のやうに見える。源氏三十九夕霧十八。

白き御ぞの唐めき 白い唐織物めいたお下著の文樣がはつきりしてつや〳〵と透通つてゐるのを召して、年はふけたが、どこまでも上品になまめかしくしておいでになる。

六條のおとども、斯くと聞召してけり。宰相（夕霧）常よりも（いといたう）・・・・光添ひて參り給へれば、うちまもり（源氏が夕霧を）給ひて、源「今朝はいかに。文など・（も）物しつや。さかしき（賢明な人でも）人も、女の筋には亂るる例（ためし）あるを、人わろう（く）、かかづらひ、心いられせで過ぐされたるなむ、すこし人に拔けたりける御心と覺えける。おとどの御（み）おきての、あまりすすみ（く）て、名殘なくくづほれ給ひぬるを、世の人もいひいづる事あらむや。さりとても、わがかた（自分の方を偉さうに考へていゝ氣になつて浮氣らしい事をなさ）猛う思ひがほに、心（るな）おごりして、すき〴〵しき心ばへなど漏らし給ふな。さこそおいらかに大きなる心おきてと見ゆれど、したの心ばへ雄々しからず癖ありて、人見えにくき所つき給へる人なり」など、例の教へ聞え給ふ。事打合ひ目やすき御あはひとおぼさる。御子とも見えず、すこしが兄（このかみ）ばかりと見え給ふ。ほか〳〵（源氏と夕霧が別に居る時は）にては、同（夕霧）じ顔（が源氏に生寫しのやうだが）をうつし取りたると見ゆるを、お前（夕霧が源氏の前に出るとそれ〴〵特徴があつて）にては、さま〴〵あなめでたと見え給へり。おとどは（源氏）、薄き（薄緑色の）御直衣、白き御ぞの唐（から）め

丁子染 丁子を煎じてその汁で染めたもので薄紅に黄を帶びてゐる。香染ともいふ。

こがるるまで 丁子で濃く染めると火に焦げたやうに見える。

白き綾の 河内本に「こゝ綾の」とあるが「こゝの綾」の誤寫か。それなら日本産の意。「白き綾」ではこゝは通じない。

灌佛ゐて奉りて 今日は四月八日で灌佛會であるから誕生佛を寺から持參して佛會を行つた。諸寺に行ふ佛生會は推古天皇の御代からであるが、宮中や親王大臣家などで行つたのは仁明天皇の承和七年四月八日以後である。

靜心なく 氣がおちつかないで。雲居雁の事が氣になるから。

わざとならねど 別に深い關係はなくても、夕霧に氣のある若女房達には、恨めしく思ふ者もあつた。

年頃の積り 夕霧と雲居雁とは長い間の思ひが漸く實を結んだといふ點もあつて理想的の仲故。

水も漏らむやは 伊勢物語「などてかくあふごかたみになりにけむ水漏らさじと結びしものを」

きたるが、文（文樣がはつきりと）けざやかにつや〳〵と透きたるを奉りて、なほ盡きせずあてになまめかしうおはします。宰相（夕霧）殿は、すこし色（源氏より少し濃い）深き御直衣に、丁字染（ちやうじぞめ）のこがるるまでしめる白き綾（こゝ）のなつかしき（懷しい感じのする下著）を著（を召してゐられるのが）給へる、殊更めきてえん（艶）に見ゆ。灌佛（くわんぶつ）ゐて奉りて、御導師（おんぎうし）おそく參りければ（佛生會を行ふ導師が遲參したので）、日暮れて・方々（御）（六條院の婦人）より童（達から）べいだし、布施など、おほやけざまに（朝廷と同じやうに各婦人達が思ひ〳〵に布施を出した）變らず、心々にし給へり。お前の作法（禁中の作法を模して）を移して、君だち（夕霧始め諸家の若君達が六條院に參集して）なども參りつどひて、なかなかうるはしきお前（儀式的な主上の御前よりも）よりも、怪しう心づかひせられて（六條院の方が妙に氣骨が折れて）、臆しが（氣おくれしがち）ちなり。

宰相（夕霧）は靜心なく、いよ〳〵けさうじ（めかしこんで）引繕ひて出で（雲居雁方に）給ふ・（を）。わざとならねど、なさけだち給ふ若人は、恨めし（夕霧が雲居雁に定まつたから）と思ふもありけり。年頃の積り取添へて、思ふやうなる御なからひなめれば、水も（心と心と）漏らむ（が結ばれて）やは。あるじ（内大臣）のおとども（は）、いとどしき（夕霧を近くで見ると猶更美しいので）近まさりを、うつくしき（思つて）ものにおぼして、いみじう（夕霧を）もてかしづき聞え給ふ。負け（夕霧に負

罪も殘るまじうぞ　この一句は下の「ありがたうおぼしゆるす」に續く。夕霧が眞面目な性格で今迄外に戀人も作らずに辛抱し通した事を、一切を宥す氣になつた。**女御の御有樣など**　雲居雁の身上は、結構で思ふ存分であるので、母や侍女達など、不快に思つて誹る者もあるが、そんな事は何の障りにもならぬ。**按察の北の方**　雲居雁の實母。**斯かる方にて**　宮中に宮仕の出來ぬのを殘念には思つたが、夕霧に大事にされる點で嬉しく思つた。**みあれ**　玉依姫が別雷神を生み給うた所で下賀茂である。**なかく〳〵さしも引續きて**　紫上と同行しては却つておもしろくなからうと辭酌して誰も同行しない。**御前**　前驅。**事そぎたるしも**　萬事簡畧したのが却つて人目を引いた。**物御覽ずべき**　祭の行列を見るべき設けの棧敷に紫上がおいでになる。**御方々の女房**　源氏紫上明石姫君等に仕へる侍女。

けた事を殘念には思つてゐられるがぬる方の日惜しさはなほおぼせど、罪も殘るまじうぞ、まめやかなる御心ざまなどの、年頃他心なくて念じ過ぐし給へるなどを、ありがたうおぼしゆるす。女御の御有樣などよりも、花やかにめでたくあらまほしければ、北の方、さぶらふ人々などは、快からず思ひいふもあれど、何の苦しき事かあらむ。按察の北の方などにて、斯かる方にて嬉しと思ひ聞え給ひけり。

對の上、例の御いそぎは、甘餘日のほどなりけり。例の如く六條院の婦人達を誘つたが、例の御方々いざなひ聞え給へど、なかなかさしも引續きても、心やましきをおぼして、誰もく〳〵とまり給ひて、事々しき程にもあらず、御車二十ばかりにて、御前なども、くだく〳〵しき人かず多くもあらず、事そぎたるしもはひ殊なり。祭の日、曉にまうで給ひて、かへさには、物御覽ずべき御棧敷におはします。御方々の女房、おの〳〵車引續きて、お前、所々占めたる程いかめしう、かれはそれと、遠目よ

おとどは　源氏は自分の棧敷を讓れて紫上の方の棧敷に來られたのである。**時に寄る心驕り**　時の勢力を恃んであんな事をしたのは、心ない仕打でした。**その程は宣ひ消ちて**　その當時の事をくさして。**中將**　葵上の子夕霧。**宮殘り給はむ**　御息所の娘中宮秋好。あなたが私の死後に生き殘つて、見る影もないお ちぶれ方をしようかとその點を顧慮するので。**御棧敷に參りつどひ**　上達部等が源氏の棧敷に參集されたので源氏は紫上方から自席に歸られた。**近衞づかさの使**　賀茂祭と春日祭とには東遊を奉る。而してその東遊には奉仕する舞人、陪從は近衞府の被管であるから、この兩祭には近衞府の官人を勅使として差遣されるのである。**かの大殿にて**　こゝに「出で立つ」といふ語が省かれてゐる。父内大臣の御殿から勅使として出發する、人々はそこへ人々が參集して、その足で源氏の棧敷に參つた。**藤内侍のすけ**　惟光の娘で夕霧が懸想してゐる女。この女が内侍使として遣されたのである。

ものである
りおどろ〳〵しき御勢なり。源氏おとどは、秋好中宮の御母御息所の、六條御息所
葵祭にての事
車押しさげられ給へりし折の事おぼしいでて、御息所を壓倒した事
さやうなる事なむ、なさけなき事なりける。こよなく
御息所を極度に輕蔑してゐた葵上も
思ひ消ちたりし人も、歎き負ふやうにて亡くなりにき」とその
程は宣ひ消ちて、遺殘りとまれる人々も、夕霧中將は斯くただ人に
やつと出世しつゝある
て、纔かになりのぼるめり。宮は並びなき筋にておはするも、
中宮といふ無上の地位で
盛概無量だ
思へばいとそあはれなれ。すべていと定めなき世なればこそ、
何事も思ふままにて、生ける限りの世を過ぐさまほしけれど、
殘り給はむ末の世などの、たとしへなき衰へなどをさへ思ひ憚
らるれば」と、打語らひ給ひて、上達部なども、御・・棧敷に
源氏は
參りつどひ給へれば、そなたに出で給ひぬ。近衞づかさの使は、
頭の中將なりけり。かの大殿にて。いで立つ所よりぞ人々は參
り給ひける。藤内侍のすけも使なりけり。この典侍は人から重んぜられてゐる人で主上や
覺え殊にて、内春宮
春宮を初め源氏からも數々の贈物を戴き大變恩顧を蒙り結構な身の上である
より始め奉りて、六條の院などよりも、御とぶらひども所せき

斯くやんごとなき方に　夕霧が雲居雁と結婚してしまはれた事を「無謀心では居られなかつた。**何とかや**　今日のかざしの葵、それを目の前に見て居ながらも何といふ名であつたか、はつきり思ひ出せない程になつてしまひました。葵に遙ふ日をひざかせて、逢ふ事をいふのである。**かざしても**　何といふ草か頭に挿して居りながらも私はその名を思ひだしかねるのですが、進士及第の貴方は御存じでせう。賀茂祭の日には葵と桂とを頭に挿す。これをもろかづらといふ。河海抄「晋書郤詵曰、臣対東爲天下第一、猶桂林一枝崑山片玉」今以之課試及第之事に作用也、拾遺雑上「菅原大臣かうぶりし侍ける夜母のよみ侍ける、久堅の月の桂も折るばかり家の風をも吹かせてしがな」**博士ならでは**　あなたのやうな學者でなければ分る筈はありませぬ。**斯くて御まゐりには**　明石姫君の入内の折には。**常に長々しくは**　紫上もさう附きつきりで長く宮中に居る事も出來まい、かういふ機會に明石上を附添はせようかしら。**遂にあるべき事の上**　結局は明石姫君に附添はれる筈だのにかうして離れ〳〵になつて居る事を明石上も面白からず思つて歎いてゐる事だらう。

まで、御心寄せいとめでたし。夕霧は藤典侍の出産所にまで文を附られへとぶらひ給へり。宰相の中將、出で立ちの所にさくやんごとなき方に定まり給ひぬるを、打解けずあはれを交し給ふ御中なれば、斯ただならず打思ひけり。

「何とかや今日の挿頭よ且見つつおぼめく迄も成にける哉あさまし」とあるを、折過ぐし給はぬばかりを、いかが思ひけむ、いと物さわがしく、車に乗る程なれど、

「かざしてもかつ辿らるる草の名は桂を折りし人や知るらむ博士ならでは」と聞えたり。はかなけれど、ねたきいらへとおぼし給はじ、斯かるついでに、かの御後見をや添へましとおぼす。

うへも、遂にあるべき事の斯く隔たりて過ぐすも、いとあはれにおぼさるらむ、この御心にも、今

この折に　この機會に明石上を姫君に附添はせてあげて下さい。**みづからは**　私は附きつきりに附いて居られませんから、安心の出來るやうに明石上を附添はせてあげて下さい。**いとよくおぼし寄る**　よい思ひつきだと源氏は思つて、その事を明石上にお話になると、大變に喜んで、日頃の望が叶つたやうに思つて、侍女等の裝束萬端、紫上にも劣らぬ程立派に用意する。尼君　明石上の母で姫君の祖母である。**なほこの御生ひ先**　孫娘の成人を見たいと思ひつめて居られた。**いかにしてかは**　入内の後はもう見る事が出來まいと思ふと悲しい。**御輦車にも**　以下明石上の心。自分が輦車にも乗れず、歩んだりして行つたら見つともなからうが、それも自分の爲に顧慮するのではなくて、自分のかうして生きて居る事が姫君の瑕になりはしまいかと、嬉しい一方にはその事を心苦しく思つた。

これ奉らむもあいなし、と思ひなり給ひて、

「この折に添へ奉りみづからは

給へ。まだいとあえかなる程もうしろめたきに、さぶらふ人ともの心至る限りあるを、みづからは、えいとしもさぶらはざらむても、若々しきのみこそ多かれ。御乳母たちなども、見及ぶ事程、うしろやすかるべう」と聞え給へば、いとよくおぼし寄るかなとおぼして、さなむとあなたにも語らひ宣ひければ、いみじく嬉しく、思ふ事かなひ侍る心地して、人の裝束なにはの事も、やんごとなき御有様に劣るまじくいそぎ立つ。尼君なむ、なほ此の御生ひ先見奉らむの心深かりける。今一たび見奉る世もやと、命をさへ執念うなして念じけるを、いかにしてかは、と思ふも悲し。

その夜は、うへ添ひて參り給へり。御輦車にも、立ちくだり打歩みなど人わろかるべきを、わが爲は思ひ憚らず、ただ斯く磨き・奉り給ふ玉の瑕にてわが斯くながらふるを、かつはいみ

人に讓るまじう 「おぼす」を修飾する。こんなかはゆい姬君が人の子供でなく實の娘であつたらと紫上は人に渡したくないやうに思はれる。
三日過ぐしてぞ 三日間宮中にゐられて紫上は退出された。
立ちかはり 紫上と交代に明石上が參內された晩に始めて紫上と對面した。
斯く大人び給ふ 姬君がこんなに大人なられたのを見ても、あなたと姬君と離れてゐられた年月の長さも分りますから、親しみがなくなつてゐるかも知りませぬが、かうしてお會ひになれば、親子の事とて、分け隔ての心持など跡かたもなく消えてしまひませう。「知られ侍れば」の下に「疎々しき隔てもや侍らん」といふやうな省文がある。
けぢめ 識別點。大人になられたのが年月の長い事を見定める識別標になるの義。
これも 物語を指してゐる。話しあつて互に感心しあつた事が二人を睦じくする端緒になつたやうだの義で、前文を承け後文を起す語である。
そこらの中に 紫上が多くの婦人達の中で源氏の寵愛が殊に厚く本妻になつたのも道理だと頷かれるにつけても。
かうまで 自分がかうした立派な方と肩を並べる運命を持つた事を幸福とは思ふものの、紫上の御退出の儀式が格別に立派で輦車などを許されて、女御と同

じう心苦しう思ふ。御參り（姬君入内の儀式）の儀式、人の目驚くばかりの事はせじと（源氏は遠慮されたが）おぼしつつめど、おのづから世の常のさまにぞあらぬや。限りもなくかしづき（姬君を大事に崇め奉って）すゑ奉り給ひて、うへ（紫上の心に姬君を）は誠にあはれにうつ・（かはゆく）くしと思ひ聞え給ふにつけても、人に讓るまじう、誠に斯かる事もあらましかばと思す。おとど（源氏）も宰相の君（夕霧）も、只この事一つ（紫上に實子のない事を）をなむ飽かぬ事かなとなむ・・おぼしける。三日過ぐしてぞうへはまかでさせ給ふ。立ちかはり・（こ）參り給ふ夜（よ）、御對面（明石上と紫上と）あり。（紫）「斯く大人び給ふけぢめになむ年月の程も知られ侍れば。うと〳〵しき隔ては殘るまじうや」（く）と、・・（いと）なつかしう宣ひて、物語などし給ふ。これも打解け（二人が）ぬる初めなめり。物などうちいひたるけはひ（明石上の）など、うべこそはと（源氏の寵愛の深いのも道理だと紫上は目を驚かされた）めざましう見給ふ。又いとけだか（紫上の樣子）うさかりなる御氣色を、かたみに（紫上と明石上と）めでたしと見て、そこら（明石上心）の・（御）中にもすぐれたる御志にて、並びなきさまに定まり給ひけるも、いとことわりと思ひ知らるるに、かうまで立ち並び（紫上と）聞ゆる契り、

待遇を受けてゐるのに比べて見ると、さすがは正夫人だけの事はあつてやはり自分は段違ひの身の上である。
一つ物とぞ 悲しい涙とは似もつかぬ嬉し涙である。後撰雜二「嬉しきも憂きも心は一つにてわかれぬものは涙なりけり」
年頃よろづに 長の年月、何かにつけて歎いて居つた罪も、それは我身の不幸だと諦めて憂鬱な氣持で居つたが、今は命も延ばしたい程晴やかな氣持になるにつけても、住吉明神がありがたく感じられた。
大方の寄せ覺え 世間でいふ後楯や氣受を始として。
挑み給へる 姬君の競爭者であるお方に事へて居る女房達などは。
それに消たるべくも それ位の事で姬君の價値を損する事はない。
いまめかしく 明石上が姬君をかしづいて居る有樣は、何事も花やかで類を拔いてゐる事は勿論、奧床しくもあり風情もある姬君の動作を、一寸した事にも然るべく引立てて上げられるから。

おろかなりやはと思ふものから、出で給ふ（紫上の宮中退出の儀式）儀式のいと殊によそほしく、御輦車（おんてぐるま）など許され給ひて、女御の御有樣に異ならぬを思ひくらぶるに、さすがなる身の程なり。いとうつくしげに（明石姬君がかはいらしく）雛（ひいな）のやうなる御有樣と、夢の心地して見奉る（明石上が）・（に）も、涙のみとどまらぬは、一つ物とぞ見えざりける。年頃（明石上の心）よろづに歎きし罪、さま〳〵憂き身と思ひくしつる・（ん）命も延べまほしう、はれ〳〵しきにつけて、誠に住吉の神（父入道が明石上の爲に祈つた神であるから）もおろかならず思ひ知らる。思ふさ（姬君の躾は理）まにかしづき聞えて、（想的でありそして殆ど行屆かぬ所のない程に利發な方であるので）心及ばぬ事はたをさ〳〵なき、人（姬君の事）の勞々（らうらう）じさなれば、大方の寄せ覺えより始め、なべてならぬ御ありさまかたちなるを、（に）宮（春宮）も若き御心地に、いと（姬君を）心殊に思ひ聞え給へり。挑み給へる御方々の人などは、この母君（明石上が姬君に附添つてゐる事を）の斯くてさぶらひ給ふを、疵（きず）にいひなしなどすれど、それに消（け）たるべくもあらず。いま（か）めかし・く（う）並びなき事を・ば更にもいはず、心にくくよしある御けはひを、はかなき事につけても、あらまほしく（う）もてなし聞

とり〴〵に 姫君の侍女等に殿上人達が思ひ〳〵に懸想して見たところが、明石上はその侍女等の心構へまでも立派に躾けてお置きになつた。

さりとて いくら打解けても明石上は出過ぎた失禮なし打はなく、といつて、さげすまれるやうな態度は少しも交らず、不思議に性行共に理想的な婦人である。

長からずのみ 源氏も先の長くない自分の存生中にと思つて居つた姫君の入内も目出たく濟んだし、又自分の心からとはいへ獨身の儘で世間體のわるかつた夕霧も體裁よく無事に身が固まつてしまつたから、すつかり安心されて今は出家の望みを遂げたいと御決心になる。

思ひなく 「しづまり給」を修飾する。心配のない狀態に落着く事。

對の上の 紫上の事が氣になるが、それも秋好中宮が居られる事だから、力強い味方である。

この御方にも 明石姫君も表向は第一に紫上を親と思つて居られる筈だから、いくら何でもこの人達に任任たら心配はあるまいとお思ひになつた。

夏の御方の 花散里は、自分が出家したら時折につけて花やかな目を見るといふ事も有るまいが。

え給へれば、殿上人なども、珍らしき挑み所にて、とり〴〵にさぶらふ人々も心を懸けたるに、女房の用意有様さへ、いみじく(う)整へなし給へり。(紫上)うへもさるべき折節には(姫君の方に)參り給ふ。(紫上と明石上)御なからひ、(との仲は)あらまほしく(う)打解けゆくに、さりとてさし過ぎ物馴れず、あなづらはしかるべきもてなしはた露なく、怪しう(く)あらまほしき、(明石上の)人の御有様心ばへなり。(源氏)おとども、長からずのみおぼさる御世のこなたにとおぼしつる御參りの、(望みがひのあること)かひあるさまに見奉りなし給ひて、(夕霧の)心からなれど、(落着きのない狀態で)世に浮きたるやうにて見苦しかりつる(夕霧)宰相の君も、(雲居雁に定まつた事)思ひなく目やすきさまにしづまり給ひぬれば、御心落ちゐ果て給ひて、今は本意も遂げなむとおぼしなる。對の上の御有様の見捨てがたきにも、(秋好は紫上の養女分だから)中宮おはしませば、おろかならぬ(紫上に對しての)御心寄せなり。この御方にも、世に知られたる親ざまにはまづ思ひ聞え給ふべければ、さりともと思し讓りけり。夏の御方の、時々に花やぎ給ふまじきも、(夕霧が居るから安心だ)宰相の物し給へばと、

御賀 四十歳以後は十年毎に年壽を賀する祝が行はれる。

その秋 今年の秋。

太上天皇 略して上皇と申し奉る。

御封 封戸即ち親王以下諸臣の官位勳功に應じて賜ふ民戸。

年官年爵 名義上の官爵を任補して、それからあがる所得を太上皇三宮等に納入するもの。

院づかさ 院司。源氏は上皇に準ぜられたのであるから院司が定められ何事の儀式も一段と嚴重になつたのである。

斯くてもなほ飽かず 主上は源氏に對してこれだけの事をして上げても猶不十分に思召して。

内大臣あがり給ひて 内大臣が太政大臣に昇進して。

御悦びに 夕霧が官位昇進の御禮に參内された。

あるじのおとど 夕霧は今太政大臣邸に居る故にあるじといふのである。

なか〳〵人に壓され 雲居雁がなまなかな宮仕に出て人に壓倒されつまらない月日を送つてゐるよりは夕霧の妻になつて結句仕合であつたと太政大臣は初の考へを換へられる。

ゐのこと 河内本の如く「よのこと」とあるべきである。

皆とり〴〵にうしろめたからずおぼしなりゆく。

(源氏の事)明けむ年四十(よそぢ)になり給ふべければ、御賀(おんが)の事を、おほやけより始め奉りて、大きなる世のいそぎなり。その秋、太上(だいじやう)天皇になずらふる御位得給ひて、(賜はり)御封加はり、つかさ(年官)かうぶり(年爵)など皆添ひ給ふ。斯からでも、(それ程にせずとも源氏は何不足もないが)世の御心にかなはぬ事なけれど、なほ珍らしかりつる(け)昔の例(れい)を改めで、院づかさ(じ)どもなどなり、さま(殊)いつくしく(う)なり添ひ給へば、(容易に參内も出來ぬ事を源氏は歎ぜられた)うちに參り給ふべき事難かるべきをぞかつはおぼしける。斯くても、なほ飽かず御門(冷泉院)はおぼし(めし)て、世の中を憚りて位を(え)讓り聞え給はぬ事をなむ、朝夕の御歎きぐさなりける。内大臣あがり給ひて、(夕霧が)宰相の中將、中納言になり給ひぬ。御悦びに出で給ふ。光い(夕霧のさま)とどまさり給へる(容姿)さまかたちより始めて、飽かぬ事なきを、(太政大臣)あるじのおとども、なか〳〵人に壓され、すさまじき宮仕よりはとおぼしなほる。(雲居雁)女君の大輔(夫)の乳母、「六位宿世」(少女卷三三二頁にあつた事)とつぶやきしゐ(よ)のこと、物の折

うつろひたる　白菊が褪色すれば紫になる。それ故「紫の色とかけきや」の歌に添へられたのである。

あさみどり　六位の淺緑の袍を著て居た私が、今日濃い紫の袍を著る三位の官に昇らうとは夢にも思ひかけなかつたでせう。菊の緑で「少しく」の意味を露といふ語であらはしたもの。「かけ」は露の緑語。

一言葉　葉にとりなして菊の緑語。

二藍より　名門にお生れになつたお方故、淺緑の袍を著ておいでになつた二葉の昔から、輕蔑して選り捨てようとする者はゐませんでした。「淺き色分く」は淺色を選り分けて捨ておくの義。

斯かる御すまひも　太政大臣と同居してゐるのも第一居故。

三條殿　もと祖母の大宮の住んで居られた御殿。

昔おぼえて　大宮御存生の當時が夢寐として、思ひ出もあり、申し分のない御住ひである。

一群薄も　古今哀傷「君が植ゑし一群薄蟲のねのしげき野邊ともなりにけるかな」

折におぼし出でければ、菊のいと面白くて、うつろひたるを賜（大納言）はせて、

「あさみどり若葉の菊をつゆにても濃き紫の色とかけきや

（夕霧）いかに心置かせ給へりけるにか」と、いと馴れて苦しがる。御（夕霧）前栽どもなど、小さき木どもからかりし折の一言葉こそ忘られねね」と、（夕霧が笑しく微笑みながら渡された）いと匂ひやかにほほゑみて、たまへり。恥かしういとほしきものから、うつくしう見奉る。

（大納言は）「二葉より名だたる園の菊なれば淺き色分く露もなかりき

（夕霧）どんなに私を憎んでおいでの事でせう）は（地位が高くなつて）勢まさりて、斯かる御すまひも所せければ、三條殿に渡り給ひぬ。すこし荒れにたるを、いとめでたく修理しなして、宮のおはしましし方を、改めしつらひて住み給ふ。昔おぼえて、あはれに思ふさまなる御すまひなり。前栽どもなど、小さき木どもなりしも、いと繁き蔭となり、一群薄も、心にまかせて亂れたりける、つくろはせ給ふ。遣水の水草も掻きあらためて、いと

二所ながら　夕霧と雲居雁と。

古人　大宮の時から仕へてゐる侍女で暇も取らずに曹司々々に居殘つてゐる者などは。

なれこそは　宿の眞清水よ、前こそは昔からこの宿を守つてゐる主人であるが、故大宮の行方を知つてゐるか。

なき人は　故大宮は娑さへ見えないのに、小井の水だけがいい氣になつて平氣で流れて居る。お娑を寫さうともしないでの意。

昔おはしまいし　大宮御在世の時と殆ど變らずどこもかしこも尋常に住まつて居られる樣子が花やかであるのを御覽になるにつけても太政大臣は無量の感慨に耽られる。

顏すこし赤みて　大宮の事などを思出して泣いたからである。

女は又斯かる　女君の方はこれ位の器量ならば他にも有りさうに思はれるが、男君は水際立つて美しい。

心ゆきたる氣色なり。をかしき夕暮の程を、二所ながめ給ひて、

（幼時人目を避けて遙つて居つた事出も多く侍女達に色々思はれた事も恥かしく思つてゐられる）あさましかりし世の御をさなさの物語などし給ふに、（雲居雁は戀しい思）戀しきこともの、まかでちり集まりて、いと嬉しと思ひあへり。（夕霧）男君、

（をんなぎみ）女君、

（雲居雁）なき人は（の）影だに見えずつれなくて心をやれるいさらゐの水

（父太政大臣が祭中御退出の途次）おとどうちよりまかで給ひけるを、（三條殿の）紅葉の色になど宣ふ程に、

（感慨無量といつた風で）驚かされて渡り給へり。昔おはしま（さ）いし御有樣にも、をさを

（太政大臣が）あたり〳〵いとおとなしくすまひ給へるさま、さ變ることなく、花やかなるを見給ふにつけても、いと物あはれにおぼさる。（夕霧）中納言も、（感慨無量といつた風で）氣色殊に顏すこし赤みて、いとどしづまりて（しんみりした氣持でゐられる）物し給ふ。

（雲居雁）女は又斯かるかひなれど、（女は又斯かるか）

（理想的で羨ましい御夫婦ぶりだ）あらまほしくうつくしげなる御あはひなれど、

古人どもも　老女房達も御夫婦の前で得意になつて古い昔話を語り出す。

この水の心　私も大宮を偲ぶ歌を詠みたいのですが、御新婚早々の事故遠慮して。翁とは太政大臣自身の事。

當時の老木は　太政大臣の歌。大宮が世を去つてから年久しくなつたのも道理だ、その子の私までがこんなに老いこんでしまつたのだから。

いづれをも　お二人とも幼馴染の事ですから、私は御兩人を同様に行末長くお力にして居ります。

あいなく　つまらなく。恥しがらないでもいゝのにの意。

六條の院に　冷泉院が源氏の六條院に行幸遊ばされた。

朱雀院にも　冷泉院から朱雀院にも御幸をお勧めになつて。

たちのたぐひもなどかなからむと見え給へり。男は、きはもなく清らにおはす。古人どももお前に所得て、神さびたる事ども聞え出づ。太政大臣はお二人の歌の散らばつてゐるのを見つけられて ありつる御手習どもの散りたるを御覧じつけて、うちしをれ給ふ。太政「この水の心尋ねまほしけれど、翁は言忌して」と宣ふ。

當時の老木はうべも朽ちぬらむ植ゑし小松も苔生ひにけり

太政大臣自身の事

大政大臣が夕霧につれない仕打をされた事が忘れられないから

夕霧

男君の宰相の乳母、つらかりし御心も忘れねば、したりがほに、

宰相

いづれをも蔭とぞたのむ二葉より根ざしかはせる松の末々

他の老女房達も皆かうした意味の歌を詠むので

老人どもも、かやうの筋に聞え集めたるを、夕霧中納言はをかしと おぼす。

雲居雁

女君はあいなく、おもて赤みて苦しと聞き給ふ。

神無月の廿日あまりの程に、六條の院に行幸あり。紅葉のさかりにて、興あるべき度の行幸なるに、朱雀院にも御消息ありて、朱雀院も六條院に御幸遊ばす事故 院さへ渡りおはしますべければ、世に珍らしくありがたき事に て、世の人も心を驚かす。あるじの院がたも、御心を盡し、目

巳の時　午前十時頃。

左右の司　左右馬寮。

五月の節に　五月五日には競馬が催されるがその節會と見分けがつかない程似てゐる。

未くだる程に　午後二時過ぎに主上は馬場殿から南の寢殿に移御になる。

ぜじやう　軟障と書く。繪をかいた幔幕の事。

御厨子所　後涼殿の西庇にあつて内膳司に屬し別當預所衆等の職員が有り、主上の御膳部を調進する。

過ぎさせ給ふ　馬場殿から寢殿にお移りになる道中の餘興に催しただけの事である。

御座二つ　主上と朱雀院との御座。

宣旨ありて　源氏の座がしも手に設けてあつたのを勅命で同座に直されたのは結構な事に思はれたが。源氏は準太上天皇であるし且主上の御父君でもあるといふ下心からである。

御門はなほ限ある　冷泉院は源氏に對して父子の禮を盡してお目に掛ける事の出來ない事を不滿足に思召す。

藏人所の鷹飼の　藏人所の鷹飼の鳥一番を狩り取つて、寢殿の東を近衞少將が北野で捧げて、主上の御前に出て、御階の左右に跪いて奉呈する。

御歡迎の御用意を

もあやなる御心まうけをせさせ給ふ。巳の時に行幸ありて、まづ馬場の殿に、左右の司の御馬引並べて、左右の近衞立ち添ひたる作法、五月の節にあやめわかれず通ひたり。未くだる程に、南の寢殿に移りおはします。道の程、反橋渡殿には錦を敷き、あまり見え過ぎる場所にはあらはなるべき所にはぜ・じやうを引き、道中がいかめしくしてある いつくしうしなさせ給へり。ひ・がしの池に舟どもを浮けて、御厨子所の鵜飼の長、使はせなされた 六條院の院の鵜飼を召しならべて、鵜をおろさせ給へり。小さき鮒どもくひたり。わざとお目にかける爲の催しではないがわざとの御覽とはなけれど、過ぎさせ給ふ道の興ばかりになむ。六條院の築山の紅葉は、いづ方も劣らねど、西のお前は心殊なるを、中じきりの中の廊の壁をくづし、中門を開きて、源氏あるじの御座は下れるを、御覽ぜさせ給ふ。御座二つよそひて、宣旨ありて直させ給ふ程、めでたく見えたれど、父子の禮にも限りある事では 御門はなほ限 あるがりあるぬや〳〵しさを盡して見せ奉り給はぬ事をなむおぼしける。池のうをを、左近衞少將 左の少將取り、藏人所の鷹飼の、北野に狩仕

調じて その魚鳥を調理して主上の御膳部に供する。

珍らしきさまに この句は「仕うまつらせ給へり」に續く。常とは趣向を換へて珍しく調理された。

樂所 宮中の桂芳房にあつて音樂を調習する所。又音樂を奏する樂屋をもいふ。

わざとの大樂には 儀式張つた大演奏ではなく、なまめかしい程度に殿上童が舞を舞ふ。

賀王恩 嵯峨帝の御代に大石峰良が作つたと稱する大食調の雅樂。

舞踏 御恩を感謝する拜禮。子が勅祿を戴いた時に父が拜舞するのが作法である。

青海波の折 源氏は紅葉賀卷で太政大臣と共に青海波を舞つた。

色まさる 今は出世して居られるあなたも、私と一緒に舞つた昔を折々思出される事でせう。

我も人に 自分も太政大臣になつて人並以上に出世はしてゐるが、源氏が太上天皇になつたのに比べて格段の相違だと痛感した。

うまつれる鳥一番を右の佐捧げて、寢殿の東よりお前に出でて、御階のひだり右に膝をつきて奏す。おほきおとど仰言賜ひて、調じて御膳にまゐる。親王達上達部などの御まうけも、珍らしきさまに、常の事ども・・をかへて、仕うまつらせ給へり。皆御醉になりて、暮れかかる程に、樂所の人召す。わざとの大樂にはあらず、なまめかしき程に、殿上の童べ舞仕うまつる。朱雀院の紅葉の賀の例の古事おぼし出でらる。「賀王恩」といふ・・を奏する程に、おほきおとどの御男の十ばかりなる、せちに面白う舞ふ。うちの御門、御ぞ脱ぎて賜ふ。おほきおとどおりて舞蹈し給ふ。あるじの院、菊を折らせ給ひて、青海波の折・・おぼし出づ。

色まさるまがきの菊もをり〳〵に袖打懸けし秋を戀ふらし

おとど、その折は同じ舞に立ち並び聞え給ひしを、我も人には・すぐれ給へる身ながら、なほこの際はこよなかりける程おぼし

むらさきの 紫雲の色にもまがふ菊の花ともいふべきあなたは曇らぬ聖代の星かと私は思ひます。

時こそありけれ 古今秋下「秋をおきて時こそありけれ菊の花うつろふからに色のまされば」

青き赤き白橡 青白橡と赤白橡。青白橡は青白の橡色で麹塵とも青色ともいふ。赤白橡は赤色ともいひ、黃櫨に茜を交ぜた色。薄赤く少し鼠色を帶びる。

樂所など 奏樂所などは大袈裟に設けない。

書司 後宮十二司の一で、後宮の書籍文房具樂器等を司どる。尚書典書女孺等の女官を任ずる。

お前に 冷泉院朱雀院六條院などの御前に御琴を差上げた。

宇陀の法師 和琴の名器で檜作りである。一條院の御代内裏燒亡の時に燒失したといふ。

秋を經て 老人となつて幾多の秋を經た私も、これ程美しい紅葉の折を見た事がない。「時雨」は「ふりぬる」の枕詞。

恨めしげに 朱雀院の御在位中に斯かる面白い行幸のなかつた事を殘念に思召すのである。

世の常の 朱雀院の御代の紅葉の御賀に倣つて引きめぐらしてある錦即ち周圍の紅葉を、世間並の紅葉と同じやうに思ひませうか。

知らる。時雨をり知りがほなり。

「むらさきの雲に紛へる菊の花濁りなき世の星かとぞ見る時こそありけれ」と聞え給ふ。夕風・吹きしく紅葉の色々、濃き薄き、錦を敷きたる渡殿の上見えまがふ庭の面に、かたちをかしき童べの、やんごとなき家の子どもなどにて、青き赤き白橡、蘇芳、蒲萄染など常のごと、例のみづらに額ばかりの氣色を見せて、短きものどもをほのかに舞ひつつ、紅葉の蔭に歸り入る程、日の暮るるもいと惜しげなり。樂所など、・・おどろおどろしくはせず、うへの御遊び始まりて、書司の御ことども召す。物の興せちなる程に、お前に皆御ことども參れり。宇陀の法師の變らぬ聲も、朱雀院は、いと珍らしくあはれに聞召す。

秋を經て時雨ふりぬる里人もかかる紅葉の折をこそ見ね

恨めしげにぞおぼしたるや。御門、

世の常の紅葉とや見る古へのためしに引ける庭の錦を

中納言の　その場に伺候してゐる夕霧も、このお二人とは別の顔でないのが驚異に値する。

あてにめでたき　夕霧は身分の相違を思つて見るせいか、主上よりも品は劣つて見えるが、すつきりと水際立つて色つやのよさは却つてすぐれて見える。

辨の少將　太政大臣の息で柏木の弟。後に紅梅右大臣といふ。

と聞え知らせ給ふ。（朱雀院の御誤解を解かせられる）御かたちいよ〳〵ねびととのほり給ひて、（冷泉院は）ただ一つものと見えさせ給ふを、（源氏と瓜二つに）中納言のさぶらひ給ふが、こと〳〵ならぬこそめざましかめれ。あてにめでたきけはひや、思ひなしに劣りまさらむ、あざやかに匂はしき所は添ひてさへ（主上よりも）見ゆ。笛仕うまつり給ふ、いと面白し。唱歌の殿上人、御階にさぶらふなかに、辨の少將の聲すぐれたり。なほさるべきにこそと見えたる御なからひなめり。（御兩家である）（かうして何れもすぐれてゐるのはやはり前世からの宿縁と）

若菜上

〔細〕 此巻は源氏卅九の冬よりかけり。女三の宮裳著の事あり。四十年賀事幷ニ明石中宮懐姙の事、四十一の三月中宮御産の事、以上三ヶ年の事あるなり。

ありし御幸 六條院御幸の事をいふ。源氏今年四十歳。

年頃も行ひの 年來出家の望みが深かつたが。

后の宮の 朱雀院の御母弘徽殿大后崩御の事は此處に初めて見える。

御子たちは春宮を 春宮は後に今上と申し奉る。

承香殿女御
- 春宮（今上）
- 朱雀院
  - 女一宮
  - 女二宮（落葉宮）
  - 女四宮
  - 女三宮
- 藤壺（源氏宮）

そのなかに 次の頁二行の「女三の宮を云々」に續く。

藤壺と聞えしは 薄雲女院の御妹で式部卿宮などと御兄弟である。以下話は昔に立返つて女三宮の所生を物語るのである。

母方も 藤壺は母方を尋ねると血統を取立てていふ程の家柄でもなくつまらない更衣の腹に生れた方だから。

大后の内侍のかみを 弘徽殿大后が妹の朧月夜尚侍を宮中にあげて寵を專らにせしめたりなどなされたので。

朱雀院の御門、ありし御幸（みゆき）ののち、その頃ほひより、例ならず惱みわたらせ給ふ。もとより（院は以前から御重態でいらせられたが）あつしくおはしますうちに、この度は物心細く思召されて、院「年頃も行ひの本意深きを、后（きさい）の宮のおはしましつる程は、よろづ憚り聞えさせ給ひて（自敬）、今までおぼし（出家）滞りつるを、なほその方に催すにやあらむ（出家をうながすのかもう先も長くないやうな氣がする）、世に久しかるまじき心地なむする」など宣はせて、さるべき（出家なさる御用意を）御心まうけどもせさせ給ふ。御子（みこ）たちは春宮を置き奉りて、女宮たちなむ四所（よところ）おはしましける。そのなかに、藤壺と聞えしは、先帝（せんだい）の源氏にぞおはしましける。まだ坊（藤壺は朱雀院の春宮時代に入内して）と聞えさせし時參り給ひて、高き位（后や中宮にも）にも定まり給ふべかりし人の、取立てたる御後見もおはせず、（おなりなさる筈のお方であつたが）母方もその筋となく物はかなき更衣腹にて物し給ひければ、御（藤壺）まじらひの程も心細げにて、大后（おほきさき）の内侍のかみを參らせ（朱雀院に）奉り給ひて、傍に並ぶ人なくもてなし聞え給ひなどせし程に、けおさ（藤壺は朧月夜に壓倒されて）れて、御門も御心の内に、いとほしき（藤壺を朱雀院が）ものには思ひ聞えさせ給

おりゐさせ 朱雀院御讓位の事は落標卷一〇七頁に在る。

あまたの御中に 四人の皇女達の中で朱雀院は特にこの女三宮を御寵愛になる。

今はと背き捨て 自分が出家して山籠りしたあとに殘つてこの姫宮は誰を頼りにお暮しなさる事だらう。

移ろはせ給はむ 朱雀院は京の西山のお寺にお引移りになる御準備をなさると同時に、この姫宮の御裳著のお支度を遊ばされる。

その次々をなむ おもだつた物を除いた第二流以下の物を他の御子達に御讓與になつた。處分は形見わけの意。

春宮 朱雀院の第一皇子で後に今上と申上げる。

渡らせ給へり 春宮が朱雀院に行啓になつた。

ひながら、おりゐさせ給ひにしかば、かひなく口惜しくて、世（藤壺）の中（は不過の狀態で）を恨みたるやうにて亡せ給ひにし、その（藤壺の）御腹の女三（をんなさん）の宮を、あまたの御中に、すぐれて愛（かな）しきものに思ひかしづき聞え給ふ。その（女三宮は）程御年十三四ばかりにおはす。今はと（朱雀院の御心）背き捨（此世を見限つて）て山籠りしなむ後の世に立ち（女三宮が）とまりて、誰を頼む蔭にて物し給はむとすらむ、と、只この（女三宮の御事を御心配遊ばす）御事をうしろめたくおぼし歎く。西山なる御寺造り果（へ）てて、移ろはせ給はむ程の御いそぎをせさせ給ふに添へて、又この（女三宮の）宮の御裳著の事をおぼしいそがせ給ふ。院（朱雀院の内で大事にしてある寶物）のうちにやんごとなくおぼす御寶物（おんたからもの）、御調度どもをば更にもいはず、はかな（一寸した翫具）き（まで）御遊びものまで、すこしゆゑある（由緒ある物は全部）限りをば、只この（皆女三宮にお讓りになつて）御方にと渡し奉らせ給ひて、その次々をなむ他御子（ことみこ）たちには御處分（どそうぶん）どもありける。

春宮は、斯かる（朱雀院が御病氣の爲に）御惱みに添へて、世を背かせ給ふべき御心遣ひになむと聞かせ給ひて、渡らせ給へり。母女御（承香殿女御も春宮と御一緒に）も添ひ聞えさせ

宮の斯くておはします わがお生みの皇子が春宮に立たれたといふ結構な宿緣でいらせられるので。

この世に 現世に遺憾に思ふ事はありませぬ。

女宮たちの 女三宮をはじめ四人いらせられる。

さらぬ別れ 伊勢物語「老いぬればさらぬ別れのありといへばいよ〳〵見まくほしき君かな」

さき〴〵人の上に 今まで他人の身の上で見聞した所によつても、女といふものは、思ひがけずも無分別の誹を受ける運命に生れついてゐるのが遺憾でもあり又悲しくもあるのです。

いづれをも どの姫宮をも、御即位の後は、何かにつけて大事にしてあげて下さい。

そのなかに 女一宮女二宮女四宮などは御母や歴とした親族があつてそれに委せられるから安心だが。

打捨てて む後の世に 私の出家後は途方にくれる事だらうと、それが只今よりも一入心配で悲しい事です。

給ひて、參り（朱雀院に）給へり。すぐれたる（承香殿は朱雀院の特別の御寵もなかつたのだが）御覺えにしもあらざりしかど宮（春宮の御事）のかくておはします御宿世の限りなくめでたければ、年頃（朱雀院と女御）の御物語、こまやかに聞えかはさせ給ひけり。宮（春宮）にも、よろづの事、世を保ち給（世を治める上の御注意を）はむ御心遣ひなど聞え（朱雀院が）知らせ給ふ。御年の程（春宮はお年の割合に大）よりは、いとよく大人びさせ給ひて、御後見（明石姫君などである）どもも、こなたかな（何れも立派な方々だから）た、かろ〴〵しからぬ中らひに物し給へば、いとうしろやすく（朱雀院は御安心になる）思ひ聞えさせ給ふ。朱雀「この世（春宮への御詞）に恨み殘る事もは・（へ）べらず。女宮たちのあまた殘りとどまる行く先を思ひやるなむ、さらぬ別れ（死別の際にも極樂往生の）にもほだし（妨にもなりさうです）なりぬべかりける。さき〴〵、人の上に見聞きしにも、女は心より外に、あは〳〵しく人におとしめらるる宿世あるなむいと口惜しく悲しき。いづれをも、思ふやうならむ御世には、さま〴〵につけて、御心とどめておぼし尋ねよ。そのなかに、後見などあるは、さる方にも思ひ讓り侍り。三の宮なむいはけなき齡にて、只一人（私一人を頼りにしつけて來たのだから）を頼もしきものとならひて、打捨て

されど母女御の　だが女三宮の母女御が人よりは寵を得てゐられたので、皆がそれと寵を競つて居られた時分は、自然お互に仲のよい譯にはゆかなかつたから。

皆いどみかはし　藤壺や承香殿を始め後宮の方々が互に競爭して承香殿は藤壺に壓倒されたのであるから。

げに今はわざと　承香殿が女三宮を格別憎く思はぬまでも、誠意を以て世話しようとは思つてゐられないのではないかと想像されるのである。

御物怪にて　以前にも憑物の爲に御苦しみになつた事は有るが今度のやうに長く引續いて間斷なくお惱みになつた事はなかつたのに、今度こそはやはり最期だと思召した。

なほその世に　朱雀院の御在位當時にお蔭を蒙つた人達は、院がやさしく結構なお方でいらせられるので、今でも昔の儘に心の慰安所として御奉公申上げてゐるのだが、その人々は何れも色々氣を揉んでお惜み申上げる。

ても後の世に、寄りつくさきもなくうろくするだらう　ただよひさすらへむ事、いと・どうしろめたく悲しく侍り」と、承香殿女御にも、心うつくし好意を以て女三宮の御世話藤壺宮の御母女御の、人よりは　ひし程、御中らひども、その名殘にて、げに今はわざと憎し・とはなくとも、誠に心とどめて思ひ後見むとまでは　朝夕にこの御事をおぼし給へる人々は、今も、なつかしくめでたき御有樣を、心やりどころに參り仕うまつり給ふ限りは、心を盡して惜しみ重くなりまさらせ給ふ事もありつれど、いと斯くうちはへ、怪にて時々惱ませ給ふ事をおはしまさざりつるを、此度は、なほ限りなやみなきさまにはおはしまさざりつるを、此度は、なほ限りなり、と思召したり。朱雀院御自身も　御位を去らせ給へれど、なほその世に賴みて參り給ふ。朱雀院は現在

故院の上の　故桐壺院が御臨終の折に色々の御遺言があつた中で、源氏の御事と今上の御事とを特に私にお賴みになつたが。

おほやけとなりて　私が卽位の後は、動かす事の出來ないまでもある事ゆゑ、個人としても好きもあるし、一念に變りはないものの、一寸した過失の爲に、源氏から恨まれたり、思ひますが、源氏は今迄どんな場合にもその恨みを含んでゐられた事などはけぶりにもお出しにならないやうにと、朱雀院の御遺言

さかしき人といへど　いくら賢い人でも、自分の身の上の事にしても、公平を失つて心も動搖したりすると、乾度復讐をするやうにもなり、曲つた事をするものである。

いかならむ折にか　源氏もいつかはその復讐心があらはれるだらうと世の人も水も向けたり疑つたりして居ましたが、最後まで我慢し通されて、春宮などにも好意を寄せて居られる。

源氏の方からも時々お見舞申上げた　聞え給ふ。六條の院よりも、御とぶらひしばく　あり。源氏自身も　みづから見舞に參られる由を院が聞召して　ふ。夕霧が朱雀院に　中納言の君參り給ふべき由聞召して、院はいといたく喜び聞えさせ給ひ「故院の上の、今はのきざみに、あまた・御遺言朱雀院は現在　まやかなり。朱雀　ありしなかに、六條院　この院の御事、冷泉院　今のうちの御事なむ、取分きて　宣ひおきしを、おほやけとなりて、公の規則もある事ゆゑ　事限りありければ、源氏に對するうちう　朱雀院の御曩原　ちの心寄せは變らずながら、須磨流謫の事　かれ奉る事もあり　はかなき事・あやまりに、心・置　殘し給へる氣色をなむ漏らし給はぬ。さかしき人といへど、身の上になりぬれば、事たがひて心動き、必ずその報い見え、ゆがめる事なむ古へだに多かりける。いかならむ折にか、その御心ばへほころぶべからむと、世人もおもむけ疑ひけるを、遂に忍び過ぐし給ひて、春宮などにも心を寄せ聞え給ふ。朱雀院の第一皇子　今はた又　朱雀院と源氏と　聞ひかはし給へるも、限りなく心　私は非常に親しく內心　なく親しかるべき中となり、

本性のおろかなるに 私などは本性が愚な上に、子故の闇に迷つて、見苦しい振舞でもしはせぬかと遠慮して、却つて餘處事のやうに無關心な狀態で過ごして居ります。

斯く末の世の かうした明君として私在位中の不面目をも取返して下さつたので、私の望みも叶つて大層嬉しく思ひます。

この秋の行幸 昨年十月に六條院に行幸御幸のあつた事。十月であるが秋といつたのである。

對面に聞ゆべき 源氏に對面して申上げねばならぬ事もあります。

過ぎ給ひにけむ 過去の事は何とも私には分りませんが、成人致しまして朝廷にも御奉公申上げ、世事に携はるやうになりましてからは、大小の世事に關し又うちは向きの事などを父と話しましたが、其折にも父は、昔つらい目にあつた、などとほのめかした事はございませぬ。

には思つて居りますものの
には思ひながら、本性(ほんじやう)のおろかなるに添へて、子の道の闇に立ちまじり、かたくななるさまにやとて、なか〳〵よその事に聞え放ちたるさまにて侍る。(奉宮の御事は源氏に任せて)(今上の御事については故桐壺院の御遺言の通りに取計らつておきましたから)うちの御事は、かの御遺言たがへず、仕うまつりおきてしかば、(冷泉院は)斯く末の世の明らけき君として、(私の)きし方の御おもてぶせをも起し給ふ、本意のごと、いと嬉しくなむ。この秋の行幸(ぎやうがう)ののち、(昔話もしたいから源氏にお目にかかりたい)古への事取添へて、ゆかしく覺束なくなむ覺え給ふ。(自敬)對面(たいめん)に聞ゆべき事ども(も)侍り。(是非源氏御自身でお訪ね下さ)必ずみづからとぶらひ物し給ふべき由催し申し給へ」など、うちしほたれつつ宣はす。

(夕霧)中納言の君、夕「過ぎ侍りにけむ方は、ともかくも思う給へ分きがたく侍り。年まかり入り侍りて、おほやけにも仕うまつり侍る間、世の中の事を見給へまかりありく程には、大小(だいせう)の事につけても、うち〳〵のさるべき物語などのついでにも、『古への憂はしき事ありてなむ』など、うちかすめ申さるる折は侍らずな

(須磨流謫の事などをいふ)

斯くおほやけの かうして朝廷の御世話も御辭退申上げて、出家の望みを遂げようとすつかり隱退してからは、世事一切を振捨てて、故院の御遺言の通りにもえうせず、朱雀院御在位中は私はまだ年も若く、器量も劣つてをり、且つ賢い目上の人が多かつたので、思ふ通りに御奉公申上げる機會もなかつた。

今かく政事を去りて 今この通り朱雀院が御讓位遊ばして閑散でいらせられる折に參上して、隔意なくお話も承りたいのですが。

さすがに何となく所せき 併し私も太上天皇に準ぜられて何となく出入りも容易でない身の有樣で自然無爲に月日を送つて居る事を殘念におもふ。

二十にまだ 夕霧十八歳。

このもてわづらはせ給ふ あの處置に惱んでゐる女三宮の壻にこの君をしようかなどと人知れずお考へになつた。

おほきおとどの あなたは太政大臣の壻になられたさうですね今迄折合がうまくゆかないやうに聞いて氣の毒に思つてゐたのですが、それを聞いて安心はしたものの、併し殘念に思ふ事があるのです。

む。『斯くおほやけの御後見を仕うまつりさして、靜かなる思ひをかなへむと、偏へに籠りゐし後(のち)は、何事をも知らぬやうにて、故院(桐壺院)の御遺言のごと(ど)もえ仕うまつらず。御位(朱雀院御在位の折の事)におはしまししし世には、齡の程も、身の器物(うつはもの)も及ばず、かしこき上(かみ)の人々多くて、その志を遂げて御覽ぜらるる事もなかりき。今かく政事(まつりごと)を去りて靜かにおはします頃ほひ、心の内をも隔てなく參り承らまほしきを、さすがに何となく所せき身のよそほひにておのづから月日を過ぐす事』となむ折々(源氏が)歎き申し給ふ」など奏し給ふ。二十(はたち)にもまだ僅かなる程なれど、いとよく整ひ過ぐして、かたちもさかりに匂ひていみじく清らなるを、御目にとどめて、うちまもらせ給ひつつ、このもてわづらはせ給ふ姫宮(女三宮)の御後見にこれをや、など人知れず思し寄りけり。(朱雀)「おほきおとどのわたりに、今は住みつかれにたりとな。年頃心得ぬさまに聞きしがいとほしかりしを、耳やすきものから、さすがにねたく思ふ事

(以下源氏の詞を共儘奏するのである)

(朱雀院が夕霧の有樣に)

(夕霧が雲居雁と婚した事)

(大政大臣が雲居雁を許さなかつた事)

(女三宮にと思召す故に)

いかに宣はする事にか 夕霧はどういふ意味で仰しやるのかと院の御意中を解しかねて考へて見ると、院は女三宮をもてあまして、適當な人があつたらそれに託して、安心して出家したいと仰しやつていらせられると漏れ聞く機會も自然今までにあつたので、そんな事ではないかと感づいては見たが、呑込み顔に何で突然御挨拶が申上げられよう。

はか〴〵しくも侍らぬ 私のやうな頼りにならぬ者には、妻になつてくれる人もございませぬ。

いとありがたくも 御器量も御心構も本當に世に又と無い程にお見えになる。ああお立派な。

今は又その世にも 今は年と共にあの時よりもつと立派になられて、光るとはあんなのをいふのだらうと思はれる程の感じが一段と増して來ました。

うるはしだちて 堂々とした態度で公務に携はつて居られる所を見ると、嚴然とはつきりしたものでも形容も出來ないやうに思はれるが、又くつろいで冗談など言つてふざけてゐると、その點では、無類な愛敬があつて、又とない程人なつこく可愛い感じのする人でした。

こそあれ」と宣はする御氣色を、いかに（夕霧の心に）宣はする事にかと、怪しく思ひめぐらすに、この姫宮を斯くおぼしあつかひて、「さるべき人あらば預けて、心やすく世をも思ひ離ればや」となむおぼし宣はするとおのづから漏り聞き給ふたよりありければ、さやうの筋にやとは思ひ寄れど、ふと心得がほにも何かはいらへ聞えさせむ。只、夕「はか〴〵しくも侍らぬ身には、よるべもさぶらひがたくのみなむ」とばかり奏してやみぬ。女房（朱雀院に伺候する女房達が）などは、のぞきて（夕霧を覗き見て）見聞えて、「いとありがたくも見え給ふかたち（夕霧の）用意かな、あなめでた」など、集まりて聞ゆるを、老いしらへる（老女房は）は、「いで、さりとも、かの院（源氏が夕霧位の年輩の時分の御樣子には比べものにはなるまい）のかばかりにおはせし御有樣には、えなずらへ（ひ）聞え給はざめり。いと目もあやにこそ清（源氏はまぶしい程お綺麗でいらつしやいました）らに物し給ひしか」など言ひしろふを聞召して、朱雀「誠にかれはいとさま（源氏は違つた人でした）殊なりし人ぞかし。今は又その世（以下源氏の事をほめて宣ふ）にもねびまさりて、光る（當時は極めて美しい事を光るといふ詞で形容したのである）とはこれをいふべきにやと見ゆる匂ひなむいとど加はりにたる。うるはしだち

何事にも 何事につけても、前世の善根を思はしめるに足る不思議な人です。

身にかへて 桐壺院がわが御身に換へる程源氏を御寵愛になつたが。

一つあまりて 二十一の時に參議で近衞大將を兼任したやうに思ふ。

それにこれは ところが夕霧は非常に出世してゐるのは、源氏の子孫が次第に聲望がまさつて行くのだらう。

誠にかしこき方の 誠に輔弼上の學問や心構などは父にも殆ど劣るまいし、どうかして（源氏に優るといふ事はありえない事と思ふが）年と共にのびてゆく聲望が源氏にも立ちまさつてゐるやうだ。

見はやし奉り 女三宮を愛して又不十分な所はそつと教へ直してくれる、そしてあぶなげのない人に託したいものだ。

て、はか〴〵しき方に見れば、いつくしくあざやかに目も及ばぬ心地するを、又打解けてたはぶれごとをもいひ亂れ遊べば、その方につけては、似るものなく愛敬づき、なつかしくうつくしき事の並びなきこそ世にありがたけれ。何事にも前（さき）の世推し量られて、珍らかなる、人の有樣（源氏をさす）なり。宮の内に生ひいでて（源氏は宮中に生長して桐壺院が非常に御寵愛遊ばして）、帝王の限りなくかなしきものにし給ひ、さばかり撫（源氏を）でかしづき、身にかへておぼしたりしかど、心のままにも驕らず（源氏は謙遜して）卑下して、二十（はたち）がうちには、納言（なふごん）にもならずなりにきかし。一つあまりてや宰相にて大將かけ給へりけむ。それにこれはいとこよなく進（夕霧は十九で中納言右大將に任ずる）みにためるは、次々の子の覺えのまさるなめりかし。誠にかしこき方の才心用ひなどは、これもをさ〳〵劣るまじく、誤りて（夕霧も源氏に）（どうかして）もおよすげまさりたる覺えいと殊なめり」などめでさせ給ふ。姫宮（女三宮）のいと美しげにて若く、何心（無邪氣な）なき御有樣なるを見奉り（朱雀院が）給ふにも、朱雀「見はやし奉り、かつは又片生（かたおひ）ならむ事をば、見隱し教

ただ人のなかには 普通人の中にはさうした適當な人はありさうもない。

中宮 秋好は冷泉院の中宮。

次々の女御たち その次々の女御達も、何れも身分のある人ばかりだから、しつかりした後見もなくて宮仕をするのは、却つて面白くなからう。

若けれど 夕霧は若いが人にすぐれて居つて、將來のある人だと思ふのに。

年頃もかのわたりに 今までもあの方に戀して、他の女などは見向きもなさらなかつたので、その思が叶つた今日では、一入心の動搖するやうな事はございますまい。

かの院こそ 源氏こそ却つて今も相變らずどんな場合にも、女に手を出したがる癖がやまないのでございます。

へ聞えつべからむ人の、うしろやすからむに預け(女三宮を)聞えばや」など聞え給ふ。大人しき御乳母ども召しいでて、御裳著の程の事など宣はするついでに、朱雀「六條(源氏が紫上を育てたやうに)のおとどの、式部卿のみこのむ(紫上)すめ(の事)おほし立てけむやうに、この(女三宮)宮を預かりてはぐくまむ人もがな。ただ人(びと)のなかにはありがたし。うち(禁中)には中宮(秋好)さぶらひ給ふ。次々の女御たちとても、いとやんごとなき限り物せらるるに、はか〴〵しき後見なくて、さやうのまじらひいとなか〳〵ならむ。この權中納言(夕霧が獨身で居つた間に試みにほのめかして見るべきであつたのだ)の朝臣の獨りありつる程に、うちかすめてこそ試るべかりけれ。若けれどいと警策(きやうざく)に、生先(おひさき)頼もしげなる人に・(こ)ぞあめるを」と宣はす。乳母「中納言(夕霧)は、もとよりいとま(眞面)め人(目な人で)にて、年頃もかの(雲居雁の事)わたりに心を懸けて、ほかざまに思ひ移ろふべくも侍らざりけるに、その思ひかなひては、いとどゆるぐ方侍らじ。かの(六條院)院こそ、なか〳〵、なほいかなるにつけても、人をゆかしく(見たく思ふ)おぼしたる心は絶えず物せさせ給ふなれ。そのな

やんごとなき御願ひ 身分の有る女を望んでいらつしやいまして。

前齋院 槿姫君などをも今も忘れかねてお文が通ふのでございます。

げにあまたのなかに なる程多くの婦人達の仲間入して、けしからぬ思ひをする事はあつても、やはり親子の體で乳母の言ふやうに源氏に渡してしまはう。

めざましかるべき 源氏には紫上を始め明石上其他の婦人達があるのに、女三宮が又新に加はれば、更に嫉妬沙汰で氣まづい目をしなければならない。

いくばくならぬ どうせ短い生涯だもの、あの人のやうに愉快に暮したいものだ。

まして女の欺かれむは 男の私でさへさうだもの、まして女がだまされるのは尤もだ。

この御後見どもの この女三宮の後見の中で重立つた乳母の兄それは左中辨の官で源氏の親しい人として今迄仕へて來た人であつた。

この宮にも この左中辨は女三宮にも特に好意を寄せて居るので、女三宮の御殿に參上した折。「心よを」は湖月抄本の誤刻である。

かにも、やんごとなき御願ひ深くて、前齋院(ぜん)などをも、今に忘れがたくこそ聞え給ふなれ」と申す。朱雀「いで、その(源氏がいつまでも浮氣でゐられる)古りせぬあ(のは心配だね)だけこそは、いとうしろめたけれ」とは宣はすれど、げにあま(朱雀院の御心中)たのなかにかかづらひて、めざまし(女三宮が)かるべき思ひはありとも、なほやがて親ざま(源氏を女三宮の親といふ體裁にして)に定めたるにて、さもや讓り(女三宮を源氏に)おき聞えまし、なども思召(朱雀院が)すべし。朱雀「誠に、すこしも世づき(聊でも世間並の夫婦暮しをさせようと思ふ娘を持つて居るなら)てあらせむと思はむ女子(をんなど)持(も)たらば、同じくはかの人(源氏にその娘を預けたいものだ)のあたりにこそは觸ればはせまほしけれ。いくばくならぬこの世の間は、さばかり(源氏のやうに)心ゆく有樣にてこそ過ぐさまほしけれ。われ女ならば、同じ兄弟(はらから)なりとも、必ず睦び寄り(源氏に近づくだらう)なまし。若かりし時など、さなむ覺えし。まして女の欺かれむは、いとことわりぞや」と宣はせて、御心のうちに、かんの(朧月夜尚侍)君の御事もおぼし出でらるべし。

この御後見どものなかに、重々しき御乳母の兄(せうと)、左中辨なる、かの院の親しき人にて年頃仕うまつるありけり。この(女三宮)宮にも心

皇女たちは 内親王様は獨身でいらせられるのが普通ですが、それやこれやにつけて好意を寄せ、萬事にお世話なさる方のあるのは心強いものです。

うへをおき奉りて 女三宮は朱雀院の外には、どなたも眞心から思つて下さる方がありませぬから、私くらゐがお仕へ申して居つても何の役に立ちませう。

わが心一つにしも 私の外にも侍女が多い事ですから、それらの手からもし間違ひでも出來て浮名でも立つやうな事があつては、どんなに迷惑な事でせう。

御覽ずる世に 朱雀院の御在世中にどちらなりと姫宮の御身がきまりましたら、私も御奉公し易からうと思ひます。

かしこき筋と聞ゆれど いくら高貴の御身分でも、女といふものは運命の定まらないものですから、何かと心配で。大勢の皇女達のなかで、院が格別この宮を御寵愛遊ばすにつけても、人の嫉妬も起る譯ですもの。

よを(せ)殊にてさぶらへば、參りたるにあひて、物語するついでに、乳母「うへなむしか〳〵御氣色ありて聞え給ひしを、かの院に、折あらば漏らし聞えさせ給へ。皇女たちは獨りおはしますこそは例の事なれど、さま〴〵につけて心寄せ奉り、何事につけても、御後見し給ふ人・(の)あるは頼もしげなり。うへをおき奉りて、又眞心に思ひ聞え給ふべき人もなければ、おのれは(が)仕うまつるとても、何ばかりの宮仕にかあらむ。わが心一つにしもあらで、おのづから思ひの外の事もおはしまし、かる〴〵しき聞えもあらむ時には、いかさまにかは煩はしからむ。御覽ずる世に、ともかくもこの御事定まりたらば、仕うまつりよくなむあるべき。かしこき筋と聞ゆれど、女はいと宿世定めがたくおはしますものなれば、よろづに歎かしく。斯くあまたの御なかに、取分き聞えさせ給ふにつけても、人のそねみあべかめるを、いかで塵もすゑ奉らじ」と語らふに、辨、「いかなるべき御事にかあらむ、

御心とまりたるをも 源氏は氣に入つた女でも又それ程でない女でも、それ〴〵お手許に引取つて一緒に住ませていらつしやいますが、大切に思召すのは何といつても紫上お一人のやうですから。

御宿世ありて もし御緣があつて女三宮が源氏に預けられるやうな事でもあれば、いくら紫上でも、姫宮と張合つて壓倒する事は出來まいと思はれますが、それでもどうかと心配になります。

さるは だが源氏はこんな事を仰しやいました。自分は澆季の世には過分な程の榮華な身の上で、氣がかりになる事もないが女の事で非難を受け、自分でも滿足出來ない事がある。

かた〴〵につけて 色々な關係から保護しておいでになる婦人達は、皆種姓もわからないやうな下賤な身分ではないが、たかの知れた平人階級の人ばかりで源氏と立並ぶ程の身分の方はありませぬ。

院(で)は怪しきまで御心長く、かりにても見そめ給へる人は、御心とまりたるをも、又さしも深からざりけるをも、かた〴〵につけて尋ね取り給ひつつ、あまたつどへ聞え給へれど、やんごとなくおぼしたるは、限りありて、一方なめれば、それに事寄りて、かひなげなるすまひし給ふ方々こそは多かめるを、御宿世ありて、もしさやうにおはしますやうもあらば、いみじき人と聞ゆとも、立ちならびて、おし立ち給ふ事はえあらじとこそは推し量らるれど、なほいかがと憚らるる事ありてなむ覺ゆる。さるは、『この世の榮え末の世に過ぎて、身に心もとなき事はなきを、女の筋にてなむ、人のもどきをも負ひ、わが心にも飽かぬ事もある』(り)となむ常にうち〳〵のすさびごとにもおぼし宣はするに(なる)、げにおのれらが見奉るにも、さなむおはします。かたがたにつけて御蔭に隱し給へる人、皆その人ならず立ちくだれる際には物し給はねど、限りあるただ人どもにて、院の御有様

それに同じくは だから同じ事なら、女三宮が源氏に預けられたら、どんなに似合の御夫婦仲でせう。

しか〳〵なむ 斯樣々々と兄に申しました所。

かの院には 六條院は屹度御承諾なさる事でせう。さうなれば六條院も年來の宿望が達したやうに思召す事と存じますもの、もし朱雀院が本當に姫宮をお許しになるお積りならば、六條院にその旨をお傳へ致しませう。

程々につけて 六條院は各婦人達の身分を考へて、それ相當に御深切に遊ばしておいでになりますが。

ただ人だに 平人でも、本妻の外に愛人の多くあるのは人が嫌ひますもの。姫宮が六條院に行かれては、けしからぬと思召す事もございませう。

御後見望み給ふ 女三宮の夫になりたがる人はいくらもあるやうでございます。

限りなき人と いくら高貴の方でも、當世は、皆世事に十分通じて居つて、自分から分別して世を渡つてゆく方もいらつしやるやうでございますのに。

朗かにあるべかしく 嫉妬の煩ひなどなく明朗に合理的にと。

姫宮はあさましく 姫宮は餘りたよりなくてあぶなかしいやうにお見えになりますし、それにお側付の者といふものは、いくらお世話申さうとしても程のあるものでございまして、氣の利いた奉公人も、主人の大體のお指圖に隨つて働きますのが氣丈夫でございます。

に並ぶべき覺え具したるやはおはすめる。それに、同じくは、げにさもおはしまさば、いかにたぐひたる御あはひならむ」と語らふを、乳母又事のついでに、「しか〳〵（朱雀院に奏する詞）なむなにがし（乳母の兄左中辨の事）の朝臣にほのめかし侍りしかば、『かの院（左中辨の詞を眞似るのである）には必ず承け引き申させ給ひてむ。年頃の御本意かなひておぼしぬべき事なるを、こなたの御許し誠にありぬべくば傳へ聞えむ』となむ申し（左中辨が）侍りしを、いかなる（の愚案である）べき事にかは侍らむ。程々につけて、人のきは〳〵思しわきまへつつ、ありがたき御心ざまに物し給ふなれど、ただ人だに、又かかづらひ思ふ人立ちならびたる事は、人の飽かぬ事にしはべるめるを、めざましき事もや侍らむ。御後見望み給ふ人々は、あまた物し給ふめり。よく思召し定めてこそよく侍らめ。限りなき人と聞ゆれど、今の世のやうとては、皆朗かにあるべかしく・・・・（こそとて）、世の中を御心と過ぐし給ひつべき・（に）もおはしますべかめるを、姫宮（女三宮）は、あさましく覺束なく心もとなく

しか思ひたどるにより 私もそのやうに思へばこそ、一體內親王が結婚するといふ事はいやな淺薄な感じもするし、又自分はよくても、女は結婚の事で悔しい事も腹の立つ事も自然に起るやうだから、一つはそれで心苦しく心を痛めてゐるのだが。「しか思ひたどるによりなむ」は下の「かつは心苦しく思ひ亂るるを」に續く。

又さるべき人に 又父母などに先立たれて庇護者を失つた後に志操堅固に獨身で暮すのも、昔は人の心がおだやかであつたから世間で許さぬ事は出來ぬものと思ひ馴れて居つたであらうが、當世では、好色濫行も往々に聞えて來るやうです。

類に觸れて 女の話でも出るとそれにつれて聞くやうだ。

なほ〳〵しく 平凡な陸でもない好色者にだまされ浮名を流して。

のみ見えさせ給ふに、さぶらふ人々は、仕うまつる限りこそ侍らめ、大方の御心おきてに隨ひ聞えて、さかしき下人（しもびと）も靡きさぶらふこそたよりある事には侍らめ。取立てたる御後見物し給（女三宮に歴としたお世話役のいらつしやらないのは心細い）はざらむは、なほ心細きわざになむ侍るべき」と聞ゆ。朱雀「しか思ひたどるによりなむ、皇女（みこ）たちの世づきたる有樣は、うたてあは〳〵しきやうにもあり、又高き際といへども、女は男に見ゆるにつけてこそ、くやしげなる事も、めざましき思ひも、おのづからうちまじるもの（わざ）なめれ、とかつは心苦しく思ひ亂るるを、又さるべき（親や親類など）人に立ちおくれて、頼む蔭どもに別れぬるのち、心を立てて世の中に過ぐさむ事も、昔は人の心平らかにて、世に許さるまじき程の事をば、思ひ及ばぬものとならひたりけむ、今の世には、すき〳〵しく亂りがはしき事も、類（るゐ）に觸れて聞ゆめりかし。昨日まで高き親の家にあがめられかしづかれし人のむすめの、今日はなほ〳〵しく下（くだ）れる際（きは）のすき者どもに名を立

いひもてゆけば 身分の高下を問はず、女の身の上は同じ事だ。

すべてあしくもよくも 總てよかれ惡しかれ、親兄弟などの指圖通りに世を送つて居れば、運がわるくて後に落ちぶれても自分の過失にはならないが。

あり經てこよなき 下の「親に知られず……忍びわざし出でたるなむ」の次に廻して解する。親にも隱し、然るべき人も許さないのに、自分勝手に密通するといふ事は、末になつて仕合よく世間の見えもよくなる場合には、これでもわるくはなかつたと思はれるけれども、やはり一寸聞いた所では女として此の上もない缺點と思はれます。

親に知られず 孟子滕文公下「不待父母之命、媒酌之言、鑽穴隙相窺、踰牆相從、則父母國人皆賤之」

みづからの心より離れて 何れにしても當人次第の事であるのだもの、いや〳〵ながら結婚をし運命を人手に定められるといふ事は、甚だ輕率な事で、女の用意態度がそれで推しはかられるものであるのに。

怪しく物はかなき 女三宮は妙に頼りない御性質のやうですから、侍女達の勝手にとりはからつて下さるな。

ち欺かれて、亡き親のおもて（名譽）を伏せ、影を辱むるたぐひ多く聞ゆる、いひもてゆけば皆同じ事なり。程々につけて、宿世など（運命などは分らぬ）いふ（もの故）なる事は、知りがたきわざなれば、よろづにうしろめたくなむ。すべてあしくもよくも、さるべき人の心に許しおきたるままにて世の中を過ぐすは、宿世々々にて、後の世に衰へある時も、みづからの過ちにはならず、あり經てこよなき幸（さいはひ）あり、目やすき事になる折は、斯くてしもあしからざりけりと見ゆれど、なほ忽ちにふと打聞きつけたる程は、親に知られず、さるべき人も許さぬに、心づからの忍びわざし出でたるなむ、女の身には、ます事なき疵（きず）と覺ゆるわざなる。なほ〳〵（女の忍びわざする事についていふ）しきただ人の中らひにてだに、あはつけく（輕率な氣にくはぬ事です）心づきなき事なり。みづからの心より離れてあるべきにもあらぬを、思ふ心（女房などの誘惑に從ふ（自分の心からでなく））より外に人にも見え、宿世の程定められむなむ、いとかろ〳〵（上の「……あらぬを」に續く）しく、身のもてなし有様推し量らるる事なるを、怪しく物はかなき心ざまにやと

さやうなる事の そんな惡い噂が立つのは誠につらい事です。

見捨て奉り給はむ 朱雀院は御出家後の事を心配していらせられるので。

今すこし物をも 女三宮がもう少し物のお分りになる年頃まで此儘にしておかうと今まで辛抱して來たのだが、それでは出家も出來ずじまひになりさうに思はれるので、それで姫宮の身の振方をつけようと思ひ立つたのです。

方々にあまた物せらる 源氏は澤山の婦人達が居られるが、何もそれに頓着する必要はない。

のどかに落ちゐて 源氏は靜に落著いて、安心の出來る點では比類のない模範的な人物です。「大方の世のためしとも」は「物せらるる」に連る。

さらでよろしかるべき 源氏以外には女三宮を託すべき適任者はない。

他人とわきまへ 兵部卿宮も源氏と同じく故院の皇子だから源氏と差別して輕しめたくはないが。

見ゆめる御さまなるを、これかれの心にまかせて、もてなし聞ゆな（る）。さやうなる事の世に漏り出でむこと、いと憂き事なり」など、見捨て奉り給はむのちの世を、うしろめたげに思ひ聞えさせ給へれば、いよ〳〵（乳母達はお互にいよ〳〵あとが難儀だと思つてゐた）煩はしく思ひあへり。朱雀「今すこし物をも思ひ知り給ふ程まで見過ぐさむとこそは年頃念じつるを、深き本意も遂げずなりぬべき心地のするに、思ひ催されてなむ。かの六條（源氏の事）のおとどは、げにさりとも物の心得て（物が分つて）、うしろやすき方（思ふが）はこよなかりなむを、方々にあまた物せらるべき人々を、知るべきにもあらずかし。とてもかくても（女三宮の心次第で嫉妬沙汰などは苦にならない）、人の心からなり。のどかに落ちゐて（源氏の事）、大方の世（廣く天下の模範として）のためしとも、うしろやすき方は並びなく物せらるる人なり。さらでよろしかるべき人、誰ばかりかはあらむ。兵部卿（螢宮）の宮、人がらは目やすしかし。同じ筋（同じ皇族で）にて、他人（ことびと）とわきまへおとしむべきにはあらねど、あまりいたくなよびよしめく程に（兵部卿宮はあまり優しくて風流がさので重々しいところが乏しくて、少し輕いといふ感じが勝つてゐるやうだ）、おもき方おくれて、すこしかろびたる覺えや

なほさる人は 兵部卿宮のやうな人はやはり頼もしくない。

大納言の朝臣 朱雀院の別當で藤大納言といふ。

家司望むなる 女三宮の家司となりたがる。即ち女三宮の夫となりたがる事をいふ。

昔もかやうなる 昔も聟選びの場合には、萬事人に勝れた聲望のある人を目指したものです。

只偏へに又なく 一圖に此上なく大事に守つてゐるといふだけを取柄に取極める事は、甚だものだりなくて遺憾な事のやうに思ふ。

右衞門督の 柏木。爰に初めて右衞門督と見える。

などかはとも 許して然るべきものと。

高き志深くて 高貴の女をとの希望が深くて今に獨身の儘で、あせりもせず志操を高く持してゐる樣子は人より圖拔けてゐて。

才なども事もなく 柏木は學問なども非難すべき點なく、結局天下の柱石となる筈の人物ゆゑ、將來も頼もしいが、やはり女三宮の夫に極めてしまはうといふ段になると無條件に諾くわけにはいかない。

進みにたらむ。なほさる人はいと頼もしげなくなむある。又大納言の朝臣の、家司望むなる、（大納言はそれ相當に實直な人物でありさうな男ではあるけれども）さる方に物まめやかなるべき事にはあなれど、さすがにいかにぞや。さやうにおしなべたる際は、なほめざましくなむあるべき。昔も、か・（う）やうなる選びには、何事も人に異なる覺えあるに、事寄りてこそありけれ。只偏へに又なく持ち居む方ばかりを、かしこき事に思ひ定めむは、いと飽かず口惜しかるべきわざになむ。右衞門督のしたにわぶなるよし、（内々女三宮を所望して）内侍のかみの物せられし、その人ばかりなむ、位など今すこし物めかしき程になりなば、などかはとも思ひ寄りぬべきを、まだ年いと若く・（て）、むげにかろびたる程なり。高き志深くて、やもめずみにて過ぐしつつ、いたくしづまり思ひあがれる氣色、人には拔けて、才なども事もなく、遂には世の固めとなるべき人なれば、行末も頼もしけれど、なほ又この爲にと思ひ果てむには、限りぞあるや」と、よろづにおぼし煩ひたり。

かやうにも 朱雀院が女三宮程に御苦心なさらない姉宮達は一向誰も所望する人もない。

怪しく 「事ひろごりて」を修飾する。

心を盡す人々 女三宮を是非にと氣をもむ人々が多かつた。

この衞門督の 柏木が今まで獨身で居て、皇女でなければ妻に持たぬと思つて居るのだから、かうした御相談の始まつた折に、柏木に御降嫁の事を願出て、聟にして戴いたならば、どんなに私の爲にも名譽で嬉しい事だらう。

内侍のかんの君には 尙侍のもとには、その姉君の北方からその旨を傳へてお頼みになるのであつた。

太政大臣
―柏木（衞門督）
―北方（四君）
―尙侍（朧月夜）

よろづ限りなき言の葉を 尙侍は甥の柏木の爲に言葉を盡して懇願し御内意をお伺ひになつた。

藤大納言 前に女三宮の家司を望んだ人。前頁。

御山籠りし給ひ 院の御隱遁の後は、頼り所なく心細からうと思はれるので、この姫宮の御後見にかこつけて己を御考へに入れていたゞくやうにと、たつて御内意を得ようとしてゐる。

か・（う）やうにもおぼし寄らぬ姉宮たちをば、かけても聞え惱まし給ふ人もなし。怪しく、（朱雀院が乳母等と女三宮の御事を御談合の事）うち〳〵に宣はする御ささめきごとどもの、おのづから事ひろごりて、心を盡す人々多かりけり。おほきおとども、（太政大臣の父）「この衞門督の、今まで獨りのみありて、みこたちならずば得じと思へるを、斯かる御定めども出で來たンなる折に、さやうにもおもむけ奉りて、召寄せられたらむ時、いかばかりわが爲にもめんぼくありて嬉しからむ」とおぼし宣ひて、内侍のかんの君には、かの姉の北の方して傳へ申し給ふなりけり。よろづ限りなき言の葉をつくして奏せさせ、御氣色賜はらせ給ふ。兵部卿の宮は、左大將の北の方を聞えはづし給ひて、聞き給ふらむところもあり、かたほならむ事はと、えり過ぐし給ふに、いかがは御心の動かざらむ、限りなくおぼしいられたり。藤大納言は、年頃院の別當にて、親しく仕うまつりてさぶらひ馴れにたるを、御山籠りし給ひなむのち、よりどころ

人づてにもあらず 夕霧は朱雀院が直接にあれほど水をお向けになつた思召を見奉つた事故、自然何かの機會に、自分の意志を院のお耳に入れたならば、よもやいけないとは仰しやるまいと思ふと、胸の躍る心地がしたであらうが。

女君の今はと 雲居雁が心から自分を頼つてゐる今日であるのに、雲居雁が長い間冷淡であつたから、それを口實にすることが出來た時でさへ他の女に心を移さうともしないで來たのだもの、生憎心も解けあつた今更昔に戻つて急に物思をさせるでもあるまい。

俄に物をや 伊行釋「かねてよりつらさを我にならはさで俄に物を思はするかな」

なのめならず 女三宮のやうな一通りならぬ高貴の方を妻にしては、何事も自由が利かなくてどちらを向いても（或は雲井雁に對し或は女三宮に對し）氣苦勞するやうであつては、自分としても苦しい事だらう。河内本の如く「わが身も苦しくこそはあらめなど」とあるべきである。

なく心細（女三宮が）かるべきを、（に）この宮の御後見にことよせて、顧みさせ給ふべく、御氣色せちに賜はり給ふなるべし。權中納言（夕霧）も、斯（女三宮の聟選びの事）かる事どもを聞き給ふに、人づてにもあらず（院が女三宮をほのめかされた事は前にある）、さばかりおもむけさせ給へりし御氣色（朱雀院の）を見奉りてしかば、おのづからたよりにつけて、漏らし（朱雀院に）聞召さする事もあらば、よももて離れてはあらじかし、と心ときめきもしつべけれど、女君（以下夕霧の心）の、今はと打解け（氣をゆるして）て・・・・・（何心もなく）頼み給へるを、年頃つらきにもことつけつべかりし程だに、ほかざまの心もなくて過ぐしてしを、あやにくに、今更に立ちかへり、俄に物をや思はせ聞えむ、なのめならず、やんごとなき方にかかづらひなば、何事も思ふままならで、ひだり右に安からずば、わが身も苦しくこそはあらめ・・（など）、もと（夕霧は元來浮氣でない人故胸をおさへて口には出さないが姫宮が他人に極つてしまふのは惜しいやうな氣がして聞き捨てには出來なかつた）よりすき〴〵しからぬ心なれば、思ひしづめつつ打出でねど、さすがにほかざまに定まり果て給はむも、いかにぞや覺えて、耳（女三宮に）はとまりけり。

春宮にも 春宮も朱雀院の聟選びの事をお聞きになつて。

さしあたりたる 内親王御降嫁の事は、差當つた只今の事はとにかくとして、將來の先例ともなる事ですから、十分御熟考あるべき事と存じます。

人がらよろしとても いくら人柄がよくても、平人は平人だけのものですから、姫宮を緣付けようと思召すならば、矢張あの六條院に親として世話をして貰ふやうにおまかせになるが宜しうございませう。

わざとの御せうそこ わざ〴〵ではないが、お手紙の序に御意見をお漏らしになつたので。

まづかの辨して まづかの左中辨を以て不取敢源氏へ思召の程を傳へさせなされた。

この宮の御事 源氏も朱雀院が女三宮の御事を心配しておいでになる事はかね〴〵聞いておいでになつたから。

院の御世の 朱雀院の御餘生が短いからといつて、私だつて院よりどれだけ長生の出來るものでもないとおもふから、姫宮の御後見の事をお引受けする譯にはいかない。

春宮にも、斯かる事ども聞召して、春宮「さしあたりたる唯今の事よりも、後の世のためしともなるべき事なるを、よく思召しめぐらすべき事なり。人がらよろしとても、ただ人は限りあるを、なほしかおぼし立つ事ならば、かの六條（源氏）の院にこそ親ざまに讓り聞えさせ給はめ」となむ、わざとの御せうそこ（くと）にはあらねど、御氣色ありけるを、待ち（朱雀院が）聞かせ給ひても、朱雀「げにさる事なり。いとよく（よく仰しやつて下さつた）おぼし宣はせたり」と、いよ〳〵御心（院が乘氣におなりになつて）だたせ給ひて、まづかの辨（左中辨）してぞかつ〴〵（やつと（御迷ひになつた後））案内傳へ聞えさせ給ひける。この宮（女三宮）の御事、斯（朱雀院が）くおぼし煩ふさまは、さき〴〵も皆聞きおき給へれば、源「心苦（左中辨に語る詞）しき御事にもあなるかな。さはありとも、院の御世の殘りすくなしとて、ここに・（は）又いくばく立ちおくれ奉るべき（し）とてか、その御後見の事をば受取り聞えむ。げに次第（お年の順序通りにいつて少しでも私があとに生き殘るやうであつたら一通りの關係ではどの御子達でも無關心にほつておくといふことが出來る筈はないが）をあやまたぬにて、いま暫しの程も殘りとまる限りあらば、大方につけては、いづれの御子（みこ）たちをも、よそに聞き放ち奉るべきにもあ

又斯く取分きて 又かうして取分け依頼された方は特別にお世話申上げようと思ふものを、それさへ不定の世の中だ、どうなるか分つたものではない。「定めなりや」の後に「如何あらん」といふやうな省文がある。さう見ないと「それだに」の收りがつかぬ。

偏へに頼まれ奉るべき 一圖に頼られるやうな關係で睦じく暮すといふ事は。

打續き世を去らむ 朱雀院に引續いて私が死にゆく際の苦しみを增すもので、私の爲にも却つて淺からぬ後世の障りになりませう。

人がらも遂におほやけの 夕霧は結局は朝廷の御後見ともなるべき將來を持つた人のやうだから、姫宮の夫と御考へになるには此の上ないとおもふ。

思ふ人定まりにてぞ 雲居雁の定まつてゐる事。

みづからは 源氏は院の御申込には應じない樣な樣子なので。

おぼろげの御定めにも 院のなみ〳〵ならぬ御考慮の結果であるのに、源氏がこんな事を仰しやるので、辨はお氣の毒にも殘念にも思つて、院が御決心になつた內々の事情などを委細に申上げるので。

いとかなしくし奉り給ふ 女三宮は院の御秘藏の姫宮のやうだから、どこ〳〵までもと先の先まで御詮議なさるのだらうね。

らねど、又斯く取分きて聞きおき奉りてむをば、殊にこそは後見聞えめと思ふを、それだにいと不定(ふぢやう)なる世の定め・・(なさ)なりや」と宣ひて、「まして、偏へに(妻として世話を引受ける事は)頼まれ奉るべき筋に睦び(れ)馴れ聞えむことは、いとなか〳〵に、打續き世を去らむきざみ心苦しく、みづからの爲にも、淺からぬほだしになむあるべき。中納言(夕霧)などは、年若くかる〳〵(ろ)(貫祿が足りないやうだが)しきやうなれど、行く先(將來があつて)遠くて、人がらも、遂におほやけの御後見ともなりぬ(る)べき生先(おひさき)なめれば、さもおぼし寄らむになどか。こよなからむ。されどいといたくまめ(夕霧は眞面目で)だちて、思ふ人定まりにてぞあめれば、それに憚らせ給ふにやあらむ」など宣ひて(左中辨に)、みづからはおぼし離れたるさまなるを、辨は、おぼろげの御定めにもあらぬを、斯く宣へば、いとほしくも口惜しくも思ひて、うち〳〵におぼし立ちにたるさまなど委しく聞ゆれば、さすがに(源氏は)うちゑみつつ、源「いとかなしくし奉り給ふ御子(みこ)なめれば、強ちに斯く來(き)し方行く先のたどりも深き

やんごとなきまづの人々 身分の高い故參の女御達が居られるなどといふ遠慮はつまらぬ事です。

必ずさりとて 故參の人が居たからとて必ず新參の者が粗略にされるといふ譯もない。

故院の御時に 桐壺院の御代、弘徽殿大后が院の春宮に立たれた當初の女御として權勢を振はれたが、ずつと後に入內した入道の宮に一時は壓倒されてしまはれたのだ。

この御子の この姫宮の御母女御こそは、かの藤壺の御兄弟でいらせられた筈だ。器量も入道宮についで美しいといはれた方でしたから、どちらから見てもこの姫宮は、並々の御器量ではいらつしやるまい。

「入道宮(藤壺)
源氏宮
朱雀院
女三宮

よろづあわただしく 諸事を急にお取極めになつて、女三宮の御裳著の準備をなさるさまは、過去未來に例があるまいと思はれる程に立派にと大騷ぎしてゐる。

御しつらひは 御裳著の設備は柏殿の西面の部屋で。柏殿は朱雀院に在つて皇后の御在所である。

なめりかしな。只うちにこそ奉り給はめ(色々迷はずに禁中に差上げられるがよからう)。やんごとなきまづの人々おはすといふ事は、よしなき事なり。それにさはるべき事にもあらず。必ずさりとて、末の人おろかなるやうもなし。故院の御時に、大后(おほきさき)の、坊の初めの女御にていきまき給ひしかど、むげの末に參り給へりし入道(藤壺)の宮に、暫しは壓(お)され給ひにきかし。この御子(みこ)の御母女御(源氏宮)こそは、かの宮(入道宮)の御兄弟(はらから)に物し給ひけめ。かたちも、さしつぎには、いとよしといはれ給ひし人なりしかば、いづ方につけても、この姫宮、おしなべての際にはよもおはせじを」など、いぶかしく(源氏もどんな方かと思ふだけの關心は持たれたやうである)は思ひ聞え給ふべし。年も暮れぬ(年末になつた)。朱雀院には、御心地なほおこたる(癒える)さまにもおはしまさねば、よろづあわただしく(せき立てられるやうに)おぼし立ちて、御裳著の事おぼしいそぐさま、來(き)し方行く先ありがたげなるまで、いつくしくののしる。御しつらひは、柏殿(かへどの)の西面(にしおもて)に、・・(御帳)御几帳より始めて、此處(和製の)の綾錦をばまぜさせ給はず、唐土(もろこし)の后の飾りをおぼし

御腰結には 御腰結の役には、前以て太政大臣にお頼みしてあつたから。

二所の大臣たち 左右大臣

院の御事は 朱雀院の御催しは今回が最後だらうといふので、主上や春宮を初めとして、この事を聞召す方々は御氣の毒に思つて、藏人所や納殿の舶來品を澤山獻上遊ばされた。

藏人所 校書殿の内にあつて藏人の詰所である。その母屋を納殿といつて累代の圖書、服御の器物錢貨等を藏め、藏人が管理する。

納殿 藏人所の納殿とは別で、宮中の御物を納めおく所。

贈物ども 人々に與へる祿や尊者への引出物などを總稱していふ。

尊者 大饗の時に正客をいふのであるが、裳著の折の腰結役の人をもそれに擬して尊者といふ。

かの昔の御髮上の具 繪合卷に秋好中宮御入内の折朱雀院から賜はつたもの。卷二、一八三頁。

やりて、うるはしく事々しく（立派に莊嚴に輝く程の御飾付であつた）、輝くばかり整へさせ給へり。御腰結（こしゆひ）には、おほきおとどを、かねてより聞えさせ給へりければ、事々しくおはする（太政大臣は物事を大袈裟に考へる人で）人にて、參りにくく（自分と三宮との關係を考慮して）おぼしけれど、院の御こと（昔から朱雀院の仰言には背かれた事がないので）を昔より背き申し給はねば、參り（朱雀院に）給ふ。今二所（ふたところ）の大臣（だいじん）たち、その殘りの上達部などは、わりなきさはり（餘儀ない故障のある人も）あるも、強ち（無理に都合をつけて參られ）にためらひ助けつつ參り給ふ。親王達（みこたち）八人、殿上人はた更にもいはず、うち春宮も（冷泉院）（の）殘らず參り（朱雀院に）つどひて、いかめしき御いそぎ（營み）の響きなり。院の御事は、この度こそとぢめ（閉）なれと、御門（みかど）春宮を始め奉りて、心苦しく聞召しつつ、藏人所納殿（をさめどの）の唐物（からもの）ども、多く奉ら（朱雀院に）せ給へり。六條（源氏）の院よりも、御とぶらひ（御祝儀の品を澤山朱雀院に奉つた）いとこちたし。贈物ども、人々の祿、尊者（そんじや）の大臣（だいじん）の御引出物（おんひきいでもの）など、かの院（六條院）よりぞ奉らせ給ひける。中宮（秋好）よりも、御裝束、櫛の筥、心殊に調ぜさせ給ひて、かの昔の御髮上（みぐしあげ）の具、故あるさまに改め加へて（趣あるやうに而ももとの面影を失はぬやうに改修して記念の品である事が分るやうにして）、さすがにもとの心ばへも失はず、それと見せて、その日の夕つがた奉（裳著當日女三宮へ）

さしながら 昔お手づから挿して戴いたこの玉の小櫛も、其儘今日まで傳へましたので古くなつてしまひました。「さしながら」はそのまゝの意であるが、櫛の緣で挿しながらをきかしてゐる。

あえもの 中宮が、幸福な自分にあやかつてもわるくはあるまいといふので女三宮に贈つたもので、いかにも名譽の櫛であるから。

昔のあはれをば 大極殿で秋好の頭に櫛を加へた時の追憶は何も言はずに。卷一、三九七頁。

さしつぎに 女三宮が中宮についで、黄楊木の櫛の古びる萬世までも榮えるのを見たいものです。「さしつぎ」に挿しがきかしてある。

おぼし起して 思ひたつて。「御髮おろし給ふ」にかゝる。

よろしき程の人の 普通の身分の人でさへ、いよ〳〵髮をおろすとなると悲しいのだから、まして院ほどの方の御出家ではあり、女御更衣達は悲しみにくれて居る。

ら・せ（れさ）給ふ。宮の權（中宮權亮で院の殿上兼務の人をお使として）の亮、院の殿上にもさぶらふを御使にて、姫宮の御方に參らすべく（其御髮上の具を）宣はせつれど、斯かる事ぞなかにあり（朱雀院へのお歌が添へてあつた）ける。

秋好中宮 さしながらむかしを今に傳ふれば玉の小櫛ぞ神さびにける

朱雀院がこのお歌を 院御覽じつけて、あはれにおぼし出でらるる事どもありけり。

秋好は運よくて中宮になられた人故 あえものけしうはあらじと讓り聞え給へる程、げにおもだたしきかんざしなれば、御返り（院からの御返歌）も、昔のあはれ（今日は芽出度い日故）をばさしおきて、

朱雀院 さしつぎに見るものにもが萬代をつげの小櫛の神さぶる迄とぞ喜び（祝）聞え給へる。

院は御病苦をおして 御心地いと苦しきを念じつつ、おぼし起して、この御いそぎ（御裳著がすんで三日たつてから）果てぬれば、三日過ぐして、遂に御髮（みぐし）おろし給ふ。よろしき程の人の上にてだに、今はとてさま變るは悲しげなるわざなれば、ましていとあはれげに御方々（朱雀院の女御更衣達）もおぼし惑ふ。内侍（朧月夜尚侍）のかんの君は、

朱雀院のおそば離れず つとさぶらひ給ひて、いみじく（深く悲しんでゐるので）おぼし入りたるを、こしらへか（院は慰めあぐまれて）

子を思ふ道は　子に別れる悲しみは諦めもつくが、かう悲しがつてゐられるのを見ては、私もお別れしかねるのです。

御心亂れぬべけれど　御出家を中止しようかとも思召したが、強ひてそれを抑へて御脇息にもたれかかつていらせられる。

山の座主　比叡山の天台座主。

御忌む事の　授戒の阿闍梨。

上下ゆすりみちて　身分の高い者低い者擧つて聲をあげて泣き叫ぶので。

斯からで　かうしてゐないで、出家する為め直樣閑靜な處に引籠らうと豫期してゐられた御本意に反するやうにお感じになるにつけても、つまりはこの幼い姫宮に引かれてのせいと思召しもし仰しやりもする。

おぼしまうけらる　本の儘。

六條の院も　源氏も、院が御出家の後、御病氣が稍宜しいとお聞きになつて參られた。

御たうばりの御封　源氏は戴いてゐられるが、同樣に定められてあるが、我はがほに本當の上皇の作法をようとはなさらない。御封は封戶。卷一、四三七頁。

世のもてなし　世間の源氏に對する待遇や尊敬などは格別であるが、作法も簡素になさつて、上例の目立たない御車に召して、相當な者だけが車で達部など、お伴申上げる。細流抄「常の檳榔毛の車なるべし、庇の車などは中古より出來るもの也」

うるはしきさまならず　儀式ばらずに、院のお居間に席を設けてお入れ申す。

變り給へる御有樣　源氏は院の御儘形を拜して前後も不覺に悲しくとめどなく涙が流れるのでお出來にならない。

世の常なく　世は無常なものと感ぜられましたので、是非出家したいと思ひましたものを、氣が弱くて、ぐづ〳〵ばかりうして居りまして、遂にかうして御出家委を拜する迄に遲れてしまひました私のしみつたれた心を恥かしく思つて居ります。

身に取りては　私などには、出家くらゐ何でもない事のやうに思はれましても、何度も思ひ立つたのでございますが、いざとなると、全くこらへきれない事がいくらもあるやうに思はれるものでございます。

ね給ひて、朱雀「子を思ふ道は限りありけり。朧月夜がかく思ひしみ給へる別れの堪へがたくもあるかな」とて、御心亂れぬべけれど、院の御有樣強ひてとどめ給ひて、山の座主より始めて、御忌む事の出家して現世に別を告げる折の作法阿闍梨三人さぶらひて、法服など奉る程、この世を別れ給ふ御悟りきつた僧侶達へ作法、いみじく悲し。今日は、世を思ひすましたる僧たちなどだに、涙もえとどめねば、まして女宮たち、女御、更衣、ここらの男女、上下ゆすりみちて泣きどよむに、いと心あわただしう、斯からで靜やかなる所に、やがて籠るべくおぼしまうけら女三宮の事れぬるも、只このをさなき宮に引かされて御とぶらひの繁さ、諸々からのお見舞のお使が澤山來た事はいふ院の御方參り給ひて、例の事々しからぬ御車に奉りて、上達部など、さるべき限り、車にてぞ仕うまつり給へる。朱雀院院にはいみじく待ち悅びて、苦しき御心地をおぼし強りて、御對面あり。

と更なり。

六條の院も、すこし御心地よろしくと聞き奉らせ給ひて、院の御方參り給ふ。御たうばりの御封などこそ皆同じごとおりゐの御門と等しく定まり給へれど、誠の太上天皇の儀式にはうけばり給はず。

世のもてなし思ひ聞えたるさまなどは心殊なれど、殊更にそぎ

うるはしきさまならず、只おはします方に御座よそひ加へて入れ奉り給ふ。院の御出家姿を變り給へる御有樣見奉り給ふに、來し方行く先かきくれて、悲しくとどめがたくおぼさるれば、とみにもえためらひ給はず。桐壺院にお別れ申した頃から「故院におくれ奉りし頃ほひより、世の常なく思ふ給へられしかば、出家の志の事この方の本意深く進み侍りにしを、心弱くたゆたふ事のみ侍りつつ、朱雀院御出家の事遂に斯く見奉りなし侍れ奉りぬる心のぬるさを、恥かしく思う給へらるるかな。身に取りては、事にもあるまじく思ひ給へ立ち侍る折々あるを、更にいと忍びがたき事多かりぬべきわざにこそ侍りけれ」と、院をお慰めするお詞に紛してゐられる慰めがたくおぼしたり。朱雀院院も物心細くおぼさるるに、

今日か明日かと　今日明日の命と思ひながらも、さすがに壽命の盡きないのに油斷して、宿望の一端も遂げずに死ぬのが殘念と思ひ立つて出家したのです。

斯くても　いくら出家しても餘命なくては修行の志も果せまいと思ひますが、まづ假にものんびりした氣持になつておいて念佛だけでもと思つて居ります。

はかく〳〵しからぬ　つまらぬ私が世に長らへて居りますのも、只この出家の志を遂げる爲に生き留つてゐるのだと自覺しない譯もありませんのに、今まで勤行もせずに懈怠して居つたのが心配でなりませぬ。

女御子たちを　多くの皇女達をあとに殘しておくのが氣の毒な女三宮の事を取分け氣づかはしく苦にやんで居ります。

まほにはあらぬ　女三宮の事をはつきり打明けかねてゐられる御樣子を拜して源氏はお氣の毒に思ふ。

げにただ人よりも　仰しやる通り、平人と違つて皇女の御身は親身に世話する人のないといふ事は遺憾におもはれる事でございます。

いとかしこき　溽暑の今の世に誠にすぐれた儲君として天下の人々が信賴して尊敬して居るのですが。

ましてこの御事と　まして院が此事は是非にと御依頼になつた事をば一事として粗略にはせられる譯はございませんから、決して將來の事などは御心配には及びませんが、春宮御卽位の後は天下の政事は思ひの儘になる筈とは申しながら、實際物事には際限がございますから、一女子たる女三宮の御爲に、どれ程際立つて好意を寄せる事が出來る譯のものでもございませぬ。

すべて女の御爲には　總じて女の御爲には、眞の後見たるべき人は、やはり夫婦となつて徹底的に世話をするといふ、さういふ意味に於ての、何につけ安心でございますものの、やはりどうしても猶御後見として世話するやうな庇護者の無い女三宮の事が御心配なら、適當に御選擇遊ばして、內々然るべき庇護者（夫）をきめてお置きになるが宜しうございませう。「さま〴〵」は「うしろやすかるべき」を修飾する。

世を保つさかりの　御在位中の主上でさへ、皇女の御後見選定には苦心された事實が多々あります。

え心强からず、うち（御袖涙のさま）鹽垂れ給ひつつ、古へ今の御物語いと弱げに聞えさせ給ひて、朱雀「今日か明日かと覺え侍りつつ、さすがに程經ぬるを、うちたゆみて深き（出家の御志）本意の端（はし）にても遂げずなりなむ事、と思ひ起してなむ。斯くても殘りの齡なくば、行ひの志もかなふまじけれど、まづ假（山籠りなどいふ本宮の出家ではなくても）にてものどめおきて、念佛（ねんぶつ）をだにと思ひ侍る。はかく〳〵しからぬ身にても、世にながらふる事、只この志に引きとどめられたると思う給へ知られぬにしもあらぬを、今まで勤めなき怠りをだに安からずなむ」とて、（豫ての計劃などをおぼしおきてたるさまなど、委しく宣はするついでに、朱雀「女御子（をんなみこ）たちを（女三宮）あまた打捨て侍るなむ心苦しきなかにも、又思ひ讓る人なきを（完全ではない）まほにはあらぬ（源氏にお話になる序に）ば、取分きてうしろめたく見煩ひ侍り（る）」とて、（源氏も女三宮を引取る氣はないがさすがにゆかしく思つてゐら）御氣色を、（源氏は）心苦しと見奉り給ふ。御心のうちにも、さすがにゆかしき御有樣なれば、おぼし過ぐしがたくて、源「げにただ人よりも、斯かる筋は、私ざまの御後見なきは、口惜しげなるわざになむ侍りける。春宮斯くておはしませば、（春宮は）いとかしこき、末の世の儲（まうけ）の君と、天の下の賴み所に仰ぎ聞えさするを、ましてこの御事と聞えおかせ給はむ事は、一事（ひとこと）としておろそかにかろめ申し給ふべきにには侍らねば、更に行く先の事おぼし惱むべきにも侍らねど、げに事限りあれば、おほやけとなり給ひ、世の政事（まつりごと）御心にかなふべしとはいひながら、女の御爲に、何ばかり（だから女三宮を遺當に縫付けなさるが宜しうございませう）のけざやかなる御心寄せあるべきにも侍らざりけり。すべて女の御爲には、さま〴〵、誠の御後見とすべきものは、猶さるべき筋に契りをかはし、（その女と夫婦になる事をいふ）えさらぬ事にはぐくみ聞ゆる御守りめ侍るなむうしろやすかるべき事に侍るを、なほ强ひて後の世の御疑ひ殘るべくば、よろしきに思し選びて、忍びてさるべき（女三宮の夫）御預りを定めおかせ給ふべきになむはべる（よ）」と奏し給ふ。朱雀「（私も）さやうに思ひ寄る事侍れど、それも難き事になむありける。古へのたしを聞き侍るにも、世を保つさかりの皇女（みこ）にだに、人を選び

まして斯く今はと まして、斯様に世を捨てようとする際に、重大がましく考へるべきでもないが、と言つて又そのやうに一切を捨てる中にも捨てがたい事情があつて、いろ〳〵氣をもんで居る間に病氣は次第に重くなつてゆきます。「まして」は御在位の帝さへさうだ、まして世を逃れようとする自分にはの意で「さま〴〵に思ひ煩ひ侍る」につづく。

又取りかへすべきにも そして又二度と取戻しの出來ない月日が過ぎてゆくので氣は落着きませぬ。

さるべきよすがをも 適當な夫をあなたからお見立てになつてそれに姫宮を預けて下さるやうお願ひしたいのですが。

權中納言などの 夕霧などが獨身時代に、こちらから申込む筈でしたに、太政大臣に先を越されて殘念です。夕霧が太政大臣の女雲居雁と婚した事を仰せられるのである。

忝くとも 畏れ多い申しやうではございますが、私が心から御世話申上げましたらば、姫宮も院の御在世中と變つたやうには思召すまいと存じますが、私も餘命が少くて、途中でお世話が出來なくなりはせぬかと、其點が心配になるのでございます。

て、さるさまの事をし給へるたぐひ多かりけり。まして斯く今はとこの世を離るる際にて、事々しく思ふべきにもあらねど、又しか捨つるなかにも、捨てがたき事ありて、さま〴〵に思ひ煩ひ侍る程に、病はおもりゆく。又取りかへすべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば、心あわただしくなむ。傍痛き讓りなれど、『このいはけなき内親王一人、取りわきてはぐくみおぼして、さるべきよすがをも、御心におぼし定めて預け給へ』と聞えまほしきを、權中納言などの獨り物しつる程に、進み寄るべくこそありけれ。おほいまうち君に先ぜられて、ねたく覺え侍る」と聞え給ふ。源「中納言の朝臣、まめやかなる方は、いとよく仕うまつりぬべく侍るを、何事もまだ・・淺くて、たどりすくなくこそ侍らめ。忝くとも、深き心にて後見聞えさせ侍らむに、おはします御蔭に變りてはおぼされじを、ただ行く先短くて、仕うまつりさす事や侍らむと、疑はしき方のみなむ心苦しく侍

あるじの院がたも 朱雀院の院司達も源氏の御供の上達部達も皆院の御前で御馳走になつたが、それは精進物で、儀式ばらず優美におもてなしなされた。

淺香 和名抄「淺香、南州異物志云、沈香其次在レ心白間、不二甚堅一者、置二之水中一不レ浮不レ沈、與レ水平者、名曰二淺香一也」

懸盤 臺の上に折敷を載せた如き形の飯臺。上面は朱塗で緣は外面が黑い。脚以下全體は黑い。

御鉢 出家の人の用ひる食器。和名抄「鉢、波知、學二佛道一者食器也」

なま心苦しう 紫上の手前聊か氣になつて心配してゐられる。

さしもあらじ そんな事はあるまい、前齋院に熱心に言ひ寄つて居られた事もあつたやうだが、御自分のお考へで特別の關係を結ぶに至らずして終つたのだもの。

さる事やある そんな事實があるかともお尋ねにはならず、無關心でゐられるので。

この事をいかにおぼさむ 女三宮の事を紫上が何と思はれるだらう、自分の愛には決して變りはなく、そんな事があれば却つて深さが增すばかりと思ふが、それを見定めない間は、紫上がどんなに疑ふ事だらう。

・・るべき」と承け引き申し給ひつ。夜に入りぬれば、あるじの院・・がたも、客人の上達部たちも、皆お前にて御あるじの事、精進物にて、うるはしからずなまめかしくせさせ給へり。朱雀院の院のお前に、淺香の懸盤に御鉢など、昔に變りて參るを、人々涙おしのごひ給ふ。あはれなる筋の事どもあれど、うるさければ書かず。夜更けて歸り給ふ。祿ども次々に賜ふ。別當大納言も御送りに參り給ふ。朱雀院あるじの院は、今日の雪にいとど御風加はりて、かき亂り惱ましくおぼさるれど、この宮の御事聞え定めつるを、心やすくおぼしけり。

源氏六條の院は、なま心苦しうさま〴〵おぼし亂る。紫の上も、斯かる御定めなど、かねてもほの聞き給ひけれど、さしもあらじ、前齋院をも懇に聞え給ふやうなりしかど、わざとしもおぼし遂げずなりにしを、などおぼして、さる事やある、とも問ひ聞え給はず、何心もなくておはするに、いとほしく、この事をいか

今の年頃となりては　今日ではまして二人共心おきなく、睦まじい夫婦仲であるから、暫しでも隠しだてするのは氣になつてならないのだが、その夜は何も話さずに一夜を明された。

院の御もしげなく　院の御病氣がよくなる見込もつかなくなつたのでお見舞に參りました。いろ〳〵御同情に堪へない事があつた。

しか〳〵なむ　女三宮の事を斯様々々と私に御依頼になつたので。

今はさやうの事も　今ではさうした事は氣恥かしくもあり興味も感じなくなつたので、院から人を以て御内談のあつた折には色々と逃げてゐたのですが。

心深きさまなる　院が女三宮の御後見の事を懇請されたのに對して、素氣なく御辭退も出來なくてお引受けしました。

におぼさむ、わが心は露も變るまじく、女三宮を迎へれはさる事あらむにつけて、いかに思ひ疑ひ給はむ、など安からずおぼさる。近年になつては夜がれもないのであるが今の年頃となりては、まして源氏と紫上とかたみに隔て聞え給ふ事なく、あはれなる御中なれば、暫し心にも隔て殘したる事あらむもいぶせきを、朱雀院からの夜なれた夜は打休みて明かし給ひつ。

又の日、雪打降り空の氣色も物あはれに、源氏は紫上と過ぎにし方行く先の御物語聞えかはし給ふ。朱雀院の「院の頼もしげなくなり給ひにたる、御とぶらひに參りて。あはれなる事どものありつるかな。女三の宮の御事を、朱雀院が「いと捨てがたげにおぼして、しか〳〵なむ宣はせつけしかば、心苦しくて、御辭退出來ずにお引受けした事を世間ではさぞ大袈裟にいひふらす事だらう聞え聞えいなびずなりにしを、事々しくぞ人はいひなさむかし。今は新に妻を迎へるなどいふ事はさやうの事もうひ〳〵しく、すさまじく思ひなりにたれば、左中辨を以て朱雀院から申込まれた事人づてに氣色ばませ給ひしには、朱雀院と源氏との對面のついでに、心深きさまなる事どもを宣ひ續けしには、えすく〳〵しくもかへさひ申さでなむ。深き御山住に移ろひ給はむ程にこそは・・・（此處に）渡し奉らめ。あちきなくやおぼさるべき。いみじき事ありとも、御ため在るよに（世）變る事は更にあるまじきを、心な措き給ひそよ。かの御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてなしても、誰も〳〵のどかにて過ぐし給はば」など聞え給ふ。はかなき御すさび事をだに、めざましきものにおぼして、心安からぬ御心ざまなれば、いかがおぼさむとおぼすに、いとつれなくて、「あはれなる御讓りにこそはあなれ。ここには、いかなる心を置き奉るべきにか。『めざましくて斯くては』など咎めらるまじくば、心安くてもはべりなむを、かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼしかずまへてむや」と卑下し給ふを、源「あまりかう打解けたるとどうした譯か（君に愛情のない爲む）氣懸りです給ふ御許しも、いかなればと、うしろめたくこそあれ。誠は、そんな風に諒解して下さつて（し）さだにおぼし許して、我も人も心得て、なだらかにもてなし過

深き御山住に　院が御山籠りをなさる時に姫宮をこちらに引取りませう。

いみじき事ありとも　どんな大事があつても、あなたに對しては生涯變る事はないと言ですから私を疑つて下さるな。

かの御ためこそ　私達二人がこんなに睦まじくては女三宮には氣の毒でせう。

それもかたはならず　女三宮を見苦しくはあしらはぬ積りで、皆が氣を長く持つて居つて下されば。

はかなき御すさび事を　紫上は一寸した冗談でも腹を立てて不愉快にしてゐられるのだから今度の一件を何と思はれる事だらうと源氏は心中不安を感じてゐられたが。

めざましく斯くては　私が斯うして居つては目ざはりだなどとあなたが女三宮からお咎めを受けなさらなければ、私は安心してゐるのでございますが。

かの母女御　女三宮の御母藤壺女御は紫上の叔母。

式部卿宮（兵部卿宮）
- 故姫君
- 藤壺
- 源氏宮
- 女三宮
- 紫上
- 朱雀院

もを宣ひ續けしには、えすく〳〵しくもかへさひ申さでなむ。深き御山住に移ろひ給はむ程にこそは・・・渡し奉らめ。あちきなくやおぼさるべき。いみじき事ありとも、御ため在るよに變る事は更にあるまじきを、心な措き給ひそよ。かの御ためこそ心苦しからめ。それもかたはならずもてなしても、誰も〳〵のどかにて過ぐし給はば」など聞え給ふ。はかなき御すさび事をだに、めざましきものにおぼして、心安からぬ御心ざまなれば、いかがおぼさむとおぼすに、いとつれなくて、「あはれなる御讓りにこそはあなれ。ここには、いかなる心を置き奉るべきにか。『めざましくて斯くては』など咎めらるまじくば、心安くてもはべりなむを、かの母女御の御方ざまにても、うとからずおぼしかずまへてむや」と卑下し給ふを、源「あまりかう打解けたるとどうした譯か（君に愛情のない爲む）氣懸りです給ふ御許しも、いかなればと、うしろめたくこそあれ。誠は、そんな風に諒解して下さつて（し）さだにおぼし許して、我も人も心得て、なだらかにもてなし過

誰がいひ出づる 誰がいふともなく、自然他の夫婦仲などの事を事實を曲げて噂をし、意外な事件を生みだすものですから、胸一つに收めて、事の成行に隨ふがよいでせう。早まつた騷ぎをして、つまらぬ嫉妬沙汰などはなさるな。

斯く空より 女三宮の事は空から降つて來た樣な事で、君も御辭退の出來なかつた事だから、憎らしく罵る事は控へよう、今度の事は、君が私に遠慮をしたり、私の制止に從ひなさるやうな相對づくの戀でもない、だからそれを止めようにも止めやうもないものの、それについて屈託してゐる風などを人に見られるやうなばかな眞似はしたくない。

あぢきなき大將の 鬚黑と玉鬘との問題のやうなつまらぬ事でさへ、不思議に私を恨んだりそねんだりしていらつしやるのだもの、この話をお聞きになつたら、それ見た事かとお思ひになる事だらう。

ぐし給はば、いよ〳〵あはれになむ。ひがごと聞えなどせむ人のこと聞入れ給ふな。すべて世の人の口といふものなむ、誰がいひ出づる事ともなく、おのづから人の中らひなどうちほほゆがみ、思はずなる事いでくるものなめるを、心一つにしづめて、有樣に從ふなむよき。まだきに騷ぎて、あいなき物恨みし給ふな」と、いとよく教へ聞え給ふ。心のうちにも、斯く空より出で來にたるやうなる事にて、のがれ給ふかたなきを、憎げにも聞えなさじ、わが心に憚り給ひ、諫むる事に隨ひ給ふべき、おのがどちの心より起れる懸想にもあらず、せかるべき方なきものから、をこがましく思ひ結ぼほるるさま世の人に漏り聞えじ、式部卿の宮の大北の方、常にうけはしげなる事どもを宣ひ出でつつ、あぢきなき大將の御事にてさへ、怪しく恨みそねみ給ふなるを、かやうに聞きて、いかにいちじるく思ひあはせ給はむなど、おいらかなる、人の御心といへど、いかでかはかばかり

人が中傷をしても信じなさるな

紫上に

紫上は心の中で

源氏も

(ひ)

紫上の繼母

始終私の事を詛はしげに仰しやつて

女三宮が源氏に迎へられた事を聞いて

その報いに違ひないと彼此結びつけて考へられるだらう

紫上はもと〳〵大やうな人だがどうしてこれくらゐの暗い蔭がなからう

今はさりとも もういくら何でも安心だといふ氣になつて、暢氣な日を送つて居た事は、物笑ひの種であらうといふ事を心の中には思つてゐられるが、至極大やうにしてゐられた。

年も返りぬ 源氏四十になる。

聞え給へる人々 女三宮に申込んだ人々は、大變殘念がつてお歎きになる。

御賀の事 四十歳以後十年毎に行ふ賀の祝。算賀ともいふ。

子の日 正月の賀は子の日に行ふのが古來の例である。

若菜參り給ふ 賀の祝として若菜を用ひるのが常例である。若がへる意。

忍びたれど 玉鬘ほどの御威勢であるから、六條院に行かれる時の行裝などは、御微行ではあるが、さわぎが格別である。

の隈はなからむ。今はさりともとのみわが身を思ひあがり、うらなくて過ぐしける世の、人笑へならむ事を、下には思ひ續け給へど、いとおいらかにのみもてなし給へり。

年も返りぬ。朱雀院には、姫宮、六條の院に移ろひ給はむ御いそぎをし給ふ。聞え給へる人々、いと口惜しくおぼし歎く。うちにも御心ばへありて聞え給ひける程に、斯かる御定めを聞召して、おぼしとまりにけり。さるは今年ぞ四十になり給ひければ、御賀の事、おほやけにも聞召し過ぐさず、世の中の營みにて、かねてより響くを、事の煩ひ多くいかめしき事は昔より好み給はぬ御心にて、皆かへさひ申し給ふ。

正月二十三日子の日なるに、左大將殿の北の方、若菜參り給ふ。かねて氣色も漏らし給はで、いといたく忍びておぼし設けたりければ、俄にて、え諫め返し聞え給はず。忍びたれど、さばかりの御いきほひなれば、渡り給ふ儀式など、いと響き殊なり。

冷泉

源氏の性質故

鬚黑

玉鬘

源氏に

源氏は

女三宮

辭退

儀式ばつた事

玉鬘は太政大臣の娘で左大將の北方故

源氏の御賀に玉鬘が六條院へ行く

南の御殿 六條院内の建物。
御座 源氏の御座席である。
壁代 壁の代りに鴨居の所からさげた垂布。
地敷 唐筵に大文の高麗縁を附けたもので、板敷の床の上に敷く茣蓙である。
御茵 座蒲團。
その御具ども 御賀に要する道具類。
二具 具は對の物を數へる助數詞。二具は四つ。御衣箱四つと共に皆四十賀に緣があるのである。
泔器 洗髮の道具で即ち鬢盥である。
掻上の箱 かきあげ箱ともいひ髮あげの道具を入れる箱。
清し 本の儘。
御挿頭の臺には 頭に挿す造花を載せる臺は沈香木や紫檀で造り。
珍らしき文目を 表面に張つてある錦は珍らしいといふ文様のは皆用ひ。
同じき金をも 同じ金具でも、色の使ひ方に趣があつて、賑かであつて、玉鬘が趣味に富み才氣のある人であるから、そのお指圖で珍らしくされたのである。
御座に出で給ふとて お客が見えてから源氏が設けの席に出ようとして玉鬘に對面された。

南の御殿の西の放出に御座よそふ。屏風壁代より始め・(て)新しくはら(こ)ひしつらはれたり。うるはしく倚子などは立てず、御地敷四十枚、御茵脇息など、すべてその御具ども、いと清らにせさせ給へり。螺鈿の御厨子二具に、御衣箱四つすゑて、夏冬の御裝束、香壺、藥の箱、御硯、泔器、掻上の箱など・(の)やうの物、うち〳〵清し(ら)を盡し給へり。御挿頭の臺には、沈紫檀を造り、珍らしき文目を盡し、同じき金をも、色、使ひなしたる心ばへあり今めかしく、かんの君、物のみやび深く、かどめき給へる人にて、目馴れぬさまにしなし給へり。大方の事をば、殊更に事々しからぬ程なり。人々參りなどし給ひて、御座に出で給ふとて、かんの君に御對面あり。御心のうちには、古へおぼし出づる事・(ど)もさま〳〵なりけむかし。いと若く清らにて、斯く御賀などいふ事は、ひが數へにやと覺ゆるさまの、なまめかしく人の親げなくおはしますを、珍らしく・(て)年月隔てて見奉り給ふ

なほけざやかなる 玉鬘は内心恥かしいながらもやはり目立つやうなよそ〳〵しさもなく源氏とお話を交換される。
をさなき君も 玉鬘が鬚黑との間にまうけた二人の子供で、後に一人は右兵衞督一人は右大辨となる。
過ぐる齡も 年取る事も、自分には格別氣がつかず、相變らず昔の儘の若い積りで元氣で居りますが、かう云ふ孫達を見るときまりわるい程年寄つた事が思ひ知られる折もあるのですよ。
中納言の 夕霧は早速子供をまうけたが、疎々しく分け隔てをして、私にはまだ見せませぬ。
人より殊に あなたが人に先だつて今日の子の日に算賀を催して下さるが、自分の老が思ひ知られてやはりつらい。
若葉さす 子供を連れて參りまして、私共の根元である源氏の君の御壽命の長久を祈ります。

は、いと恥かしけれど、なほけざやかなる隔てもなくて、御物語聞えかはし給ふ。をさなき君も、いとうつくしくて物し給ふ。かんの君は、打續きても御覽ぜられじと宣ひけるを、大將の、斯かるついでにだに御覽ぜさせむとて、二人同じやうに、振分髮の何心なき直衣姿どもにておはす。譯「過ぐる齡も、みづからの心には殊に思ひ咎められず、只昔ながらの若々しき有樣にて、改むる事もなきを、斯かる末々の催しになむ、なまはしたなきまで思ひ知らるる折も侍りける。中納言のいつしかとまうけたなるを、疎々しく思ひ隔てて、まだ見せずかし。人より殊に數へ取り給ひける今日の子の日こそ、なほうれたけれ。暫しは老いを忘れても侍るべきを」と聞え給ふ。かんの君も、いとよくねびまさり、物々しきけさへ添ひて、見るかひあるさまし給へり。

若葉さす野邊の小松を引連れてもとの岩根を祈る今日かな

四つして 四十賀にちなんだ數である。

小松原 將來の長い人達の齡に引かれて私までも長生きをする事でせう。「小松原」は小松といふべきを音調の都合で「原」をそへた歌言葉。「ひかれ」は小松の、「つむ」は若葉の緣語。

式部卿の宮は 宮の姫君は鬚黑の北方で、今では玉鬘故に離緣してお里に歸つて居られる。今日の祝は玉鬘の催であるから、宮は參りにくく思はれるのである。

心あるやうならむも 意味があつて缺席するやうに思はれては困るので。

大將のしたりがほに 鬚黑が得意げに壻舅の間柄とて、今日のお祝の一切を取りしきつて世話して居られるのも、宮にはあまりよい氣持もなさらないやうだが。

げに 參りにくくなさつたが、如何にもその通り。

御孫の君達 宮のお孫達。

式部卿宮―姫君―君達（鬚黑）

籠物 籠に入れた菓子で献上物や儀式などの時に用ひる。木の枝につけて贈る。

折櫃物 籠物も折櫃物も卷一、二八頁參照。

さるべき限り取りつづけ 然るべき人々が列をなして源氏の前に献じた。

御杯 食器で椀や皿の類。

と、せめて大人び聞え給ふ。沈の折敷四つして、御若菜、さま（形式まで）ばかり參れり。御かはらけ取り給ひて、（源氏がお盃を）

（源氏に差上げる）

小松原末のよはひに引かれてや野邊の若菜も年をつむべきなど聞えかはし給ひて、上達部あまた南の廂に著き給ふ。

式部卿の宮は、參りにくくおぼしけれど、御消息ありけるに、（源氏から請待があつたので）斯く親しき御中らひにて、心あるやうならむもびんなくて、日たけてぞ渡り給へる。大將のしたりがほにて、斯かる御中らひに、うけばりて物し給ふも、げに心やましげなるわざなめれど（式部卿宮の御心に）御孫の君達は、いづ方につけても、おり立ちて雜役し給ふ。籠物四十枝、折櫃物四十、中納言を始め奉りて、さるべき限り取りつづけ給へり。御かはらけくだり、若菜の御羹まゐる。お前には、沈の懸盤四つ、御杯どもなつかしく、今めきたる程にせられたり。朱雀院の御藥の事、なほ平らぎ果て給はぬにより、（院の御病氣がまだ御全快なさらないので）（御平癒遊ばさない）樂人などは召さず。御笛など、おほきおとどの、その方は整へ

すぐれたる音の限りを かねて名器ばかりが取揃へてあつたので。

とり〴〵に 皆がそれ〴〵演奏された中で、和琴は太政大臣の秘藏の名器である。

御こと 絃樂器の總稱。

右衛門の督 柏木。

げに 指定されただけに如何にも。

何事も 何事にも限らず、いくら名人の子供でも、これ程には親の手筋を受繼ぐ事は出來ないものだ。

調べに從ひて 唐土傳來の曲で調子によつて一定の奏法のあるものは、却つて習ふ道もよく分つてゐるのだが、一定の奏法もなく、柏木が心まかせに只搔合せる菅搔に他のすべての樂の音が調整されてゐるのは、非常に面白く不思議な程微妙に響く。

これはいとわららかに 柏木は快活な空まで響き上るやうな調子で、やさしい愛敬のある音であるのを、これ程の上手とは聞いてゐなかつたのにと親王達も喫驚される。

給ひて、（太政）「世の中に、この御賀より、又珍らしく清らを盡すべき事あらじ」と宣ひて、すぐれたる音の限りを、かねてより思し設けたりければ、忍びやかに御遊びあり。とり〴〵に奉るなかに、和琴は、かのおとどの、第一に秘し給ひける御ことなり。

（太政大臣のやうな名人が心をこめて彈鳴らされる音はたぐひもないので）

さる物の上手の、心をとどめて引鳴らし給へる音、いと並びなきを、他人は搔立てにくくし給へば、右衛門の督の固くいなぶるを責め給へば、げにいと面白く、をさ〴〵劣るまじく彈く。（柏木は）（父太政大臣にも）

何事も、上手の嗣といひながら、斯くしもえ繼がぬわざぞかし、と心にくくあはれに人々おぼす。調べに從ひて、跡ある手ども、定まれる唐土の傳へどもは、なか〴〵尋ね知るべき方あらはなるを、心にまかせて、只搔合せたる菅搔に、よろづの物の音整へられたるは・たへに面白く、怪しきまで響く。（柏木の父太政大臣）父おとどは、ことの緒もいとゆるに張りて、いたうくだして調べ、響き多く合せてぞ搔鳴らし給ふ。これはいとわららかにのぼる音の、な

この御ことは 宮の奏する琴は。宣陽殿の御物を管する。朱雀院同腹の姫宮。

一品の宮 この四十の賀の華麗を極度まで宣揚する爲に太政大臣が宮にお願して頂戴したもので、その傳來を戀しく思ひ浮べ源氏も昔の事を戀しく思ひ出して感慨無量である。

御氣色取り給ひて 源氏の御承諾を得て、琴は源氏にお讓り申される。

物のあはれに 源氏は感興にそそられて彈かずには居れず、珍らしいのを一曲だけ彈かれた。

事々しからねど 儀式ばつた催しではないが限りなく面白い御遊である。

唱歌 樂器に和して歌ふ事で殿上人が勤める。

返り聲になる 呂から律に移る事をいふ。呂は正樂で律は俗樂である。御遊はまづ呂から律に移つて次第に打解けてゆくのである。

青柳 催馬樂律青柳「青柳を、片糸に撚りてや、おけや、鶯の縫ふといふ笠は、おけや、梅の花笠や」げにも「青柳」の歌にあるやうに。

私ごとのさまに 公ごとは定法があつて自由にならないから、今日は私ごとの體裁にして、人々に贈る祝儀の品なども大層見事に準備なさつた。

つかしく愛敬づきたるを、いと斯うしもは聞えざりしをと、親王達も驚き給ふ。琴は兵部卿の宮彈き給ふ。この御ことは宜陽殿の御物にて、代々に第一の名ありし御ことを、故院の末つ方、一品の宮・好み給ふことにて、賜はり給へりけるを、この折の清らを盡し給はむとする爲、おとどの申し賜はり給へる御傳へをおぼすに、いとあはれに、昔の事も戀しくおぼし出でらる。みこも醉泣えとどめ給はず、御氣色取り給ひて、琴はお前に讓り聞えさせ給ふ。物のあはれにえ過ぐし給はで、珍らしき もの一つばかり彈き給ふに、事々しからねど、限りなく面白き夜の御遊びなり。唱歌の人々御階に召して、すぐれたる聲の限り出だして、返り聲になる。夜の更けゆくままに、物の調べどもなつかしく變りて、「青柳」遊び給ふ程、げに時の鶯驚きぬべく、いみじく面白し。私ごとのさまにしなし給ひて、祿などいと斯う數へ知らせ給へりけるにつけては、心細くなむ。時々は、

斯う數へ知らせ 四十の賀などを催して年の數を知らせて下さつたので、自分の老が思ひ知られて心細くなります。時折は私方においでになつて、私が段々年寄るか否かを前と見比べて下さい。

なか〳〵ほのかにて 玉鬘がなまなか一寸顏見せたばかりで、急いで歸られるのを源氏は物足りなく殘念に思召される。

ありがたくこまやか 源氏の世にも珍らしく深切であつた御心の程を、年月のたつにつれて、斯く身が固まるにつけても、ありがたく感謝するのであつた。

十餘日 とをかあまり。

御帳そなたの一二の對 女三宮の御帳臺。西の放出の方に當る一二の對から渡殿にかけて女三宮の侍女達の部屋々々が設けてあるが、その部屋々々まで念入りに飾り磨かせてお置きになる。

曉に、かんの君歸り給ふ。御贈物などありけり。斯う世を捨つるやうにて明し暮す程に、年月の行くへも知らずがほなるを、斯う數へ知らせ給へりけるにつけては、心細くなむ。時々は、老いやまさると見給ひくらべよかし。斯くふるめかしき身の所せさに、思ふに從ひてたいめ・なきも、いと口惜しくなむ」などと聞え給ひて、あはれにもをかしくも、思ひ出で聞え給ふ事なきにしもあらねば、なか〳〵ほのかにて斯く急ぎ渡り給ふを、いと飽かず口惜しくぞおぼされける。かんの君も、誠の親をば、さるべき契りばかりに思ひ聞え給ひて、ありがたくこまやかなりし御心ばへを、年月に添へて、斯く世に住み果て給ふにつけても、おろかならず思ひ聞え給ひけり。

斯くて二月の十餘日に、朱雀院の姫宮、六條の院に渡り給ふ。この院にも、御心設け世の常ならず。若菜參りし西の放出に御帳立てて、そなたの一二の對、渡殿かけて、女房の局々まで、

御車寄せたる 行列が六條院に到着して姫宮の御車を寄せた下り口に源氏が出て來られて。

例には違ひたる 源氏は准太上天皇であるから、自身で女を迎へるのは定例ではない。

ただ人におはすれば 源氏は臣下故、萬事の儀式に際限があつて、入内とも違つてゐる。聟君といはうにも事情が異つてゐて珍らしい夫婦仲である。

聟の大君 催馬樂我家中の句。七四頁參照。少し滑稽の意を持たせた筆である。

げに斯かるにつけても いくら女三宮が來られたにしても、源氏も言はれた通り、それにまるで壓倒される事はあるまいが、今迄は一人天下の癖がついてゐるのに、今度姫宮が、年も若くて、侮り難い有樣で賑々しく乘込んで來られた事だから、紫上は何となく居心地がわるいけれども、平氣を裝つて。「花やかに」は「移ろひ」を修飾する。

こまかにしつらひ磨かせ給へり。うちに參り給ふ人の作法をまねびて、かの院よりも御調度など運ばる。渡り給ふ儀式、いへば更なり。御送りに、上達部などあまた參り給ふ。かの家司望み給ひし大納言も、やすからず思ひながら、さぶらひ給ふ。御車寄せたる所に院渡り給ひて、おろし奉り給ふ程なども、例には違ひたる事どもなり。ただ人におはすれば、よろづの事限りありて、内裏參にも似ず、聟の大君といはむにも事たがひて、珍らしき御中のあはひどもになむ。

三日が程は、かの院よりも、あるじの院がたよりも、いかめしく珍らしきみやびを盡し給ふ。對の上も、事に觸れて、ただにもおぼされぬ世の有樣なり。げに斯かるにつけても、こよなく人に劣り消たるる事もあるまじけれど、又並ぶ人なくならひ給ひて、花やかに、生先遠く、あなづりにくきけはひにて移ろひ給へるに、なまはしたなくおぼさるれど、つれなくのみもてな

諸心に 源氏と一緒になつて。

げにまだいと小さく 女三宮十四歳。

かの紫のゆかり 源氏が藤壺の姪である紫上を引取られた時の事を思ひ合されると。

よかめり よからう、憎らしく出しやばるやうな事はなささうだ、と思召すものの、あまりに張合のない御樣子だと思召す。

年頃さもならひ給はぬ 今迄こんな目に逢ひつけない紫上の御心地には、怀へては居るもののやはり淋しい。

などてよろづの事 色々事情はあつたにせよ、紫上以外に又妻を迎へる必要があらうぞ、これも私が浮氣で氣が弱くなつて來たから起る事だ、年若だが、雲居雁以外には心を分けない物堅い夕霧は、朱雀院も聟にとお考へにならなかつたのに。

して、御渡りの程も、諸心に、はかなき事もしいで給ひて、いとらうたげなる御有樣を、いとどありがたしと思ひ聞え給ふ。

姫宮は、げにまだいと小さく、かたなりにおはするうちにも、いといはけなき御氣色して、ひたみちに若び給へり。かの紫のゆかり尋ね取り給へりし折おぼしいづるに、かれは、ざれていふかひありしを、これはいといはけなくのみ見え給へば、よかめり、憎げにおし立ちたる事などはあるまじかめり、とおぼすものから、いとあまり物の榮なき御さまかな、と見奉り給ふ。

三日が程は、夜がれなく渡り給ふを、年頃さもならひ給はぬ心地に、忍ぶれど、なほ物あはれなり。御ぞどもなど、いよ〳〵たきしめさせ給ふものから、うちながめて物し給ふ氣色、いみじくらうたげにをかし。などて、よろづの事ありとも、又人をば並べて見るべきぞ、あだ〳〵しく心弱くなり・きにけるわが怠りに斯かる事も出でくるぞかし、若けれど、中納言をばえ思

今宵ばかりは　今晩だけは女三宮へ行くのも嫉妬ないと許して下さるでせうね。以後あなたの側を離れる事があつたら私としても氣がすまない譯です。

又さりとて　と言つてあまり女三宮を粗末にしては朱雀院への聞えもあるので。

みづからの御心ながら　源氏が以上の如くとつおいつ迷つて居られるのに對しての紫上の詞である。

いふかひなげに　相手も出來ない頼りないものやうに、その場をとりつくろはれる。

目に近く　まのあたり君のお心は變りますのに、いつまでも變らぬものとあてにして居りました。

はかなき喜なれど　紫上が書かれた事は大した事ではないが源氏は尤もに思召して。

命こそ　命は絶えもしようが、私共二人の契りは、世間並の契りはないから絶える事はありませぬ。最後の「を」は「よ」の意味である。

いふかひなげに　相手も出來ない頼りないものやうに、その場をとりつくろはれる。

目に近く　まのあたり君のお心は變りますのに、いつまでも變らぬものとあてにして居りました。

はかなき喜なれど　紫上が書かれた事は大した事ではないが源氏は尤もに思召して。

命こそ　命は絶えもしようが、私共二人の契りは、世間並の契りはないから絶える事はありませぬ。最後の「を」は「よ」の意味である。

年頃さもやあらむと　今迄も、こんな事がありはせぬかと心配した事件もあつたのだが、もうさういふ事は御免だと源氏が相手になられなかつたので、もう大丈夫だと氣を許した今になつて、とどのつまり、かうして一通りならず人聞きのよくない事が起るとは。

思ひ定むべき　世の中と云ふものは安心出來さうにもないもの故、これから又どんな事だと考へるやうになられた。

思はずなる　世の中といふものは思ひがけないものだ。澤山御夫人達がおいでのやうですがどなたも皆こちらに御遠慮なさるやうにして暮してお出でになるからこそ無事太平なのだ。

おし立ちて　女三宮の横暴なかうした態度に負けて其儘過す紫上でもありますまい。

しかけずなりぬめりしを、と我ながらつらくおぼしつづけらるるに、涙ぐまれて、

「今宵ばかりは、ことわりと許し給ひてむな。これよりのちのとだえあらむこそ、身ながらも心づきなかるべけれ。又さりとて、かの院に聞召さむ事よ」と思ひ亂れ給へる御心のうち、苦しげなり。すこしほほゑみて、

「みづからの御心ながらだに、え定め給ふまじかなるを、ましてことわりも何も、いづこにとまるべきにか」と、いふかひなげに取りなし給へる、恥かしうさへ覺え給ひて、頬杖をつきて寄り臥し給へれば、御硯を引寄せて、

目に近く移ればかはる世の中を行末とほく頼みけるかな

ふることなど書きまぜ給ふを、取りて見給ひて、

はかなき事なれど、げにとことわりにて、

命こそ絶えめ定めなき世の常ならぬなかの契りを

真には女三宮方へ行きかねて居られるのをとみにもえ渡り給はぬを、「いと傍痛きわざかな」とそそのかし聞え給へば、

ひつつ、さらば斯うにこそはと打解けゆく末に、あり〳〵て斯く世の聞耳もなのめならぬ事の出で來ぬるよ、思ひ定むべき世の有樣にもあらざりければ、今よりのちも、うしろめたうぞおぼしなりぬる。さこそつれなく紛らはし給へど、さぶらふ人々も、「思はずなる世なりや。あまた物し給ふやうなれど、いづかたも皆此方の御けはひには、かたさり憚るさまにて過ぐし給へば、こそ、事なくなだらかにもあれ。おし立ちて斯ばかりなる有樣に消たれてもえ過ぐし給はじ。又さりとて、はかなき事につけても、安からぬ事のあらむ折々、必ず煩はしき事ども出で來なむかし」など、おのがじし打語らひ歎かしげなるを、露も見知らぬやうに、いとけはひをかしく物語などし給ひつつ、夜ふ

斯う人の 斯樣に人々が紫上と女三宮との中を事ありげに噂するのを紫上は聞苦しく思つて。

斯くこれかれあまた かうして澤山の婦人達がおいでのやうですが、君はそれにも目馴れておしまひになつて、お氣に召すやうな花やかな優れた方のないのを物淋しく思召していらつしやつた所へ。

なほ童心の 私もまだ子供心の失せないものと見えて、お親しくして頂きたいと思つてゐるのに、二人の間に隔てのあるやうに、皆がつまらなく氣をまはしたがつてゐるのですね。「あいなく」は「取りなさむとすらむ」に係る。

忝く心苦しき 女三宮は朱雀院の畏れ多いお氣の毒な御依頼でこちらに來られた方なのだから私もどうか氣がねして頂きたくはないと思つてゐるのです。

昔はただならぬさまに この人達は、源氏が昔思ひ人として召使つた人達であるが、其後ずつと紫上に事へて、お爲を考へて居るのであらう。

他御方々 他の婦人達即ち明石上や花散里など。

もとより思ひみなれたる もともと諦めて居る私達は、却つて氣樂でございますが。「みなれたる」は「はなれたる」とあるべき湖月抄本の誤刻である。

くるまでおはす。」斯う人のただならずいひ思ひたるも、聞きにくしとおぼして、紫「斯くこれかれあまた物し（六條院に）給ふめれど、御心（源氏は）にかなひて、今めかしくすぐれたる際（きは）にもあらずと、目馴れてさう〳〵しくおぼしたりつるに、この（女三宮）宮の斯く渡り給へるこそ目やすけれ。なほ童心（わらはどころ）の失せぬにやあらむ、我も睦びきこえてあらまほしきを、あいなく、隔てあるさまに人々や取りなさむとすらむ。ひとしき（對等か又目下だと思ふ女に對してこそ聞きずてならんと思ふやうな事も自然起るものですが）程、劣りざまなど思ふ人にこそ、ただならず耳だつ事も、おのづから出でくるわざなれ。忝く心苦しき御事なめれば、いかで心置かれ奉らじとなむ思ふ」など宣へば、中務（二人とも紫上の侍女でもとは源氏の思ひ人）、中將の君などやうの人々、目をくはせつつ（目くはせしながら）、「あまりなる御思ひ（同情）やりかな」などいふべし。昔はただならぬさまに使ひ馴らし給ひし人どもなれど、年頃はこの御方にさぶらひて、皆心寄せ聞えたるなめり。他（こと）御方々よりも、「いかに思すらむ（御心中お察し致します）。もとより思ひみ（は）なれたる人々は、なか〳〵心安きを」などおもむけ（水を向けた手紙を）

斯く推し量る人こそ こんな思ひすごしをしてくれる人達の方が却つて私にはいやなのだ、無常な世の中だもの、そんなにくよ〳〵した所でどうなるものか。

御衾まゐりぬれど 夜具はお召しになつたが、かうした獨寢の續いた事を思ふと矢張穩かならぬ心地はするが。

今はとかけ離れ 君と遠く別れて居つても、同じこの世に無事でおいでになると聞きさへすれば安心だと、自分の事はさておき、流されゆく君を惜しんで悲しく思つたものだ、さういふやうに別れ〳〵になつて、あの騷ぎに若し二人共死んでしまつて居たら、何にもならぬ二人の仲であつたらうに。

ふとも寢入られ 紫上が直には寢付かれずに居るのを、側に寢て居る侍女達がどうした事かと怪しがりはせぬかと、身動きもせずにじつとして居られるにつけても、やはり獨寢は苦しさうである。

つつ、とぶらひ（送つて紫上を慰めてくれる人もあるが）聞え給ふもあるを、斯く（紫上の心境）推し量る人こそなかなか苦しけれ、世の中もいと常なきものを、などてかさのみは思ひ惱まむ、などおぼす。

あまり久しき宵居（あまり長起きをして居ては人が不審がりはせぬかと氣が咎めて）も、例ならず人や咎めむと、心の鬼におぼして、入り給ひ（紫上が寢所に）ぬれば、御衾（おんふすま）まゐりぬれど、げに傍淋しき夜な夜な經（へ）にけるも、なほただならぬ心地すれど、かの須磨の御別れの折・・（など）をおぼし出づれば、今はとかけ離れ（紫上が源氏流謫の當時を思ひ出すのである）給ひても、只同じ世のうちに聞き奉らましかばと、わが身までの事は打置き、あ（惜）たらしく悲しかりし有樣（源氏の）ぞかし、さてその紛れに、我も人（紫上も源氏も）も命堪へずなりなましかば、いふかひあらまし世かは、とおぼしなほす。風打吹きたる夜（よ）のけはひ冷かにて、ふとも（紫上のさま）寢入られ給はぬを、近くさぶらふ（紫上の遠慮）人々怪しとや聞かむと、うちも身じろき給はぬも、なほいと苦（地からいふ）しげなり。夜深（夜明前に）き鳥の聲（鷄鳴）の聞えたるも物あはれなり。

わざとつらしとは 紫上は別に源氏を怨んで居られる譯ではないが。

かの御夢に 紫上の煩悶してゐる樣子を源氏は夢に見たので、目をさまして、何事かと心配してゐる所へ鷄が鳴いたからまだ夜明けには間のあるのも知らず顔に紫上の所へ歸つて來られた。

闇はあやなし 古今春上「春の夜の闇はあやなし梅の花色こそ見えね香やは隱るる」香やはかくるるの代言である。

なほ殘れる雪 白氏文集十六庾樓曉望「子城陰處猶殘雪、衙鼓聲前未レ有レ塵」(細)子城とは北、方をいへり、紫上の方は北也誦し給へる心面白し。

御格子 紫上の居られる西の對の。

空寢をしつつ 寢たふりをして。源氏の朝がへりを憎んだのである。

こよなく久しかりつる 大變久しく待たされたものだ。からだも冷えこんでしまつた。夜深く歸つて來るのもひどくあなたに恐れてゐるからのやうだ。恐れてゐるけれども、別に罪が有るわけでもない。

わざとつらしとにはあらねど、かやうに思ひ亂れ給ふけにや、かの御夢に見え給ひければ、打驚き給ひて、(源氏は目をさまされて)いかにと心騷がし(ぎ)給ふに、鳥の音(ね)待ち出で給へ(ひつ)・れば、夜深きも知らずがほに、急ぎ出で給ふ・。(程)・・いといはけなき御有樣なれば、乳母達近くさぶらひけり。妻戸押しあけて出で給ふを、(女三宮方の)(源氏が)見奉り送る。(乳母達が)明けぐれの空に、雪の光見えて覺束なし。(はつきりしない)名殘までとまれる御匂ひ、(源氏のお歸り後まで)「闇はあやなし」と獨りごたる。(侍女達)雪は所々消え殘りたるが、(白沙の庭に所々消え殘つてゐる雪はまだ薄暗くて直には眞砂と區別がつかない)いと白き庭の、ふとけぢめ見え分れぬ程なるに、源「なほ殘れる雪」と、忍びやかに口ずさみ給ひつつ、(ひ)御格子打叩き給ふも、(紫上方の)久し(源氏が朝歸りをされるといふやうな事は久しい間なかつたのが癖になつてゐるので)く斯かる事なかりつるならひに、人々も空寢をしつつ、やや待たせ奉りて引上げたり。(格子を)源「こよなく久しかりつる・。(に)身も冷えにけるは、おぢ聞ゆる心のおろかならぬにこそあめれ。さるは罪もなしや」とて、御衣引(おんぞ)きやりなどし給ふに、(紫上の御衾を引きのけなどすると)すこし濡れたる御單衣(ひとへ)の袖を引隱して、(何の隔意もなげなやさしさではあるが、といつて油斷のない用心深さなどは)うらもなくなつかしきものから、打

限りなき人と いくら貴人でも紫上程の女はあるまいと、紫上を女三宮に比べて見る氣になられる。

解けがたき御氣色を 紫上がなか〳〵打解けさうもないのを恨みながらその日一日は暮してしまはれたので、女三宮の所へは行かれなくなつて、手紙だけを送られる。

さ聞えさせ侍りぬ お手紙の趣を女三宮にお傳へ申しました。

院に聞召さむ事も 朱雀院のお耳に入つても濟まないから、當分の間だけは人前を取繕つて女三宮の方へ通つてゆかう。

えさもあらぬを 女三宮に對して源氏の愛情があまり深くないので、强ひて通つてゆく氣になれないのである。

女君も 紫上も、源氏がわが部屋にばかり居て女三宮の方に行かれないのを、同情のない仕打だといつて迷惑がられる。

中道を あなたの所と私の所との中間の路を往來の出來ない程に降つたといふのではないが、降り亂れるあわ雪でございます。「心」は「みだるる」の枕詞であるが、三宮の戀ひしさに思ひみだれる意味にはたらかせたものである。なほこの歌は後撰冬の「かつ消えて空に亂るるあわ雪は物思ふ人の心なりけり」を背景として詠んだものである。

解けてはたあらぬ御用意など、いと恥かしげにをかし。限りなき人と聞ゆれど難かめる世を、とおぼしくらべらる。(深みがあつて美しい)

(源氏は紫上の幼い時代の事を回想して)よろづ古への事をおぼし出でつつ、解けがたき御氣色を恨み聞え給ひて、その日は暮し給へ・れば、(紫上方で)え渡り給はで、寢殿には(女三宮の御方)御消息をぞ聞え給ふ。(源文「今朝の雪に心地あやまりて、いと惱ましく侍れば、心やすき方にためらひ侍る」とあり。(氣分がわるくなつて)(女三宮の)御乳母、「さ聞えさせ侍りぬ」とばかり、言葉に聞えたり。(口上で源氏に)殊なる事なの御返りや、とおぼす。(つまらない返事だと源氏は思召す)院に聞召さむ事もいとほし、このごろばかりつくろはむ、とおぼせど、えさもあらぬを、さは思ひし事ぞかし、(どうせこんな結果にならうと豫期してゐた)あな苦し、と、みづから思ひ續け給ふ。(源氏自身)女君も、(紫上)思ひやりなき御心かなと、苦しがり給ふ。今朝は例のやうに大殿籠りおきさせ給ひて、宮の御方に御文奉れ給ふ。(女三宮)殊に恥かしげもなき御さまなれど、御筆など引きつくろひて、白き紙に、(女三宮は別に氣のおける先でもないが雪の色にちなんで白紙を用ひたのである)

(源氏)中道を隔つるほどはなけれども心みだるる今朝のあわ雪

端近くおはします 返事を待つて居られるのである。

花を 文を結びつけた梅の枝の殘りである。

給ひつ 河内本の如く「給ひつつ」とあるべきである。

友待つ雪 降り續いて來る雪を待ちつつ消え殘つてゐる雪。後撰冬貫之「降りそめて友待つ雪はうば玉のわが黒髮の變るなりけり」

袖こそ匂へ 古今春上「折りつれば袖こそ匂へ梅の花ありとや此處に鶯の鳴く」

櫻に移してば この梅の匂を櫻に移したならば、外の花はまるで見る氣にもならないでせう。

これもあまたに移ろはぬ 梅の咲く頃は、外に花がなくて目移りがしないから特に注意を引くのかも知れない。

胸つぶれて 紫上の居る所へ女三宮の返事が來たので、源氏がはつとされたのである。

御手のいと若きを 女三宮はまだ筆蹟が幼稚だから當分紫上には見せたくない。

あは〳〵しきやう あまり奥行のない文を人に見せては、女三宮の身分がら畏れおほい。

梅(この文を白梅の枝に)につけ給へり。人召して、源「西の渡殿より奉らせよ(女三宮に)」と宣ふ。やがて見いだして、端近くおはします。白き(源氏のさま)御ぞどもを著給ひて、花(梅花)をまさぐり給ひつ・(つ)。友待つ雪のほのかに(薄く消え殘つてゐる上に)殘れる上に、打散(雪が)り添ふ空を眺め給へり。鶯の若やかに、近き紅梅の末にうち鳴きたるを、源「袖こそ匂へ」と、花を引隱(面白い詞である)して、御簾押しあげて眺め給へるさま(源氏の)、夢にも斯かる人の親(「人の親」で一語)にて重き位と見え給はず、若うなまめかしき御さまなり。御返り(女三宮からの返事が隙どるやうだから)すこし程經る心地すれば、入り(奥に)給ひて、女君(紫上に)に花を見せ奉り給ふ。源「花といはば、斯くこそ匂(この梅の花のやうに)はまほしけれな。櫻に移してば、又塵ばかりも心分く・(る)方なくやあらまし」など宣ふ。源「これもあまたに移ろはぬ程、目とまるにやあらむ。花のさかり(櫻の花盛りに櫻と梅を並べて見たいものだ)に並べて見ばや」など宣(話し)ふに、御返りあり(て居られる所へ女三宮から返事が來た)。紅の薄様にあざやかに(手際よく)押し包まれたるを、胸つぶれて、御手(以下源氏の心)のいと若きを、暫し見せ奉らであらばや、隔(別に)つとはなけれど(紫上を疎んずる譯ではないが)、あは〳〵しきやうならむは、人の御程かたじ

はかなくて おいで下さらないので、おちつきのない私は果敢なく中空で消えてしまひさうでございます。

げにいと若く 前に「御手いと若きを」とあつたのを受けていふ。

さばかりの程に 女三宮位の年頃になれば、これ程に幼稚な筆蹟ではないのにと。

他人の上ならば 他人の書いたものならば、こう程下手だなどとこつそり紫上にいふのだが、これは女三宮の筆蹟故、氣の毒がつて。

宮の御方 寢殿である。

まして 初めて源氏を見奉るのであるから、前から見馴れてゐる女房よりも一入驚歎するのである。

いでや さあね、源氏お一人だけは申分のないお方だが、御婦人達大勢居られる事だから、姫宮に取つては目に餘る事もあらう。

御しつらひなどの 御部屋の飾付などは、北方らしく堂々とした立派さであるが、御本人は無心な賴りないもので、著物ばかりが目立つて、からだは無いやうに小さく華奢である。

けなし、とおぼすに、引隱し(その文を隱しては紫上が氣まづく思はうから)給はむも心置き給ふべければ、かたそば廣げ(方を一寸廣げられたのを)給へるを、尻目(紫上が横目に)に見おこせて添ひ臥し給へり。

はかなくてうはの空にぞ消えぬべき風に漂ふ春のあわ雪(女三宮によそへていふ)

御手、げにいと若くをさなげなり。さばかりの程になりぬる人は、いと斯くはおはせぬものを、と目とまれど、見ぬやうに紛らはしてやみ給ひぬ。他人(ことひと)の上ならば、「さこそあれ」などは、忍びて聞え給ふべけれど、いとほしくて、只、源「心やすくを思ひなし給へ(女三宮は大した人ではないから氣を揉みなさるな)」とのみ聞え給ふ。

今日は、宮(女三宮)の御方に晝渡り(源氏が)給ふ。心殊にうちけさうじ給へる御有様、今見奉る女房(女三宮方の)などは、まして見るかひありと思ひ聞ゆらむかし。御・・乳母(おほむ)などやうの、老いしらへる人々ぞ、いでや、この御有様一所こそめでたけれ、めざましき事はありなむかし、と、うちまぜて思ふもありけり。女宮(をんなみや)は、いとらうたげにをさなきさまにて、御しつらひなどの、事々しくよだけくうるはし

只ちごの まるで人見知りをしない赤兒のやうで、氣の張らない愛らしい御樣子である。

院の御門は 朱雀院は男らしい眞面目な御學問は乏しくいらせられると世間では思つてゐるやうだが、風流な方面、優雅な道は人にすぐれておいでになるのに、なぜこの姫宮をこんなに大やうにお育てなされた事だらう。

さるはいと心とどめ 併し院が注意してお躾けになつた皇女だと聞いて居るのに。

只聞え給ふままに 何でも源氏の仰しやる通りになられて、御返事なども、宮の記憶して居られた事は子供らしく有の儘に仰しやつて、捨てる事の出來ぬ程愛らしくお見えになる。

昔の心ならましかば 源氏の若い昔の心であつたら、女三宮などに對しては輕蔑の念が起つたであらうが、今では世の中をそれ〴〵に諦めて。

とあるもかかるも 女には色々の種類はあるが、飛び拔けて優れた女はないものだ、それ〴〵にいろ〳〵女は澤山にある、女三宮も餘處から見ては妻として申分のない女だ（身分がいいから）。

きに、みづからは、何心もなく物はかなき御程にて、いと御ぞがちに、身もなくあえかなり。殊に恥ぢなどもし給はず、只ちごの面嫌（おもぎらひ）せぬ心地して、心やすくうつくしきさまし給へり。院（以下）の御門（源氏の心中）は、雄々しくすぐよかなる方の御才（さえ）などこそ心もとなくおはします、と世の人思ひためれ、をかしきすぢ、なまめき故々しき方は、人にまさり給へるを、などて斯くおいらかにおほし立て給ひけむ、さるは、いと御心とどめ給へる皇女（みこ）と聞きしを、と思ふも、なま口惜しけれど（源氏の心に聊か遺憾ではあるが憎からず思召す）、憎からず見奉り給ふ。只聞（女三宮の）え（さま）給ふままに、なよ〳〵と靡き給ひて、御いらへなどをも、覺え給ひける事は、いはけなくうち宣ひ出でて、笑み放（いつもにこ〳〵して）たず見え給ふ。昔（草子地）の心ならましかば、うたて心劣りせましを、今は、世の中を皆さま〴〵に思ひなだらめて、とあるもかかるも（以下源氏の心中）、きは離るる事は難きものなりけり、とり〴〵にこそ多うはありけれ、よその思ひは、いとあらまほしき程なりかし、とおぼすに、さ

一夜の程あしたの間も 源氏は紫上の事が明けても暮れても戀しく氣にかかつて愛情がいやが上にも増すので、どうしてこんなに思はれるのかと、怖ろしい程である。

院の御門は 朱雀院はその月のうちに西山のお寺にお移りになる。

煩はしく 私の思はくに何かと御遠慮なさるやうな事なく、どのやうになりとお心次第に躾けて下さるやうにと。

をさなき人の 幼いぼんやり者があなたの所へ參つた筈ですから、何事も勘辨して世話してやつて下さい。お世話下さる筈の因緣もあらうと思ひまして。

「兵部卿宮―紫上
「源氏宮
――女三宮

朱雀院

そむきにし 捨てた現世に心（子を思ふ心）だけ殘して來た、その心が山に隱れる係累であつた。

闇をえ晴るけて 子故の闇を離れ得ずに姫宮の事をお頼みするのも愚痴かも知れない。

も一緒に暮して來た今迄よりも一層紫上が立派に見えて
し並び目かれず見奉り給へる年頃よりも、對（紫上）の上の御有樣ぞなほありがたく、我ながら（自分ながらもよくこれ迄に育てたものだと思召す）もおほし立てけりとおぼす。一夜（ひとよ）の程あしたの間（ま）も戀しく覺束なく、いとどしき御志のまさるを、など斯く覺ゆらむと、（紫上の事が）ゆゆしきまでなむ。（不吉の豫感もあつて）

院の御門は、月（二月中に）のうちに御寺（みてら）に移ろひ給ひぬ。この院に、（六條院に朱雀院から）あはれなる御消息ども聞え給ふ。姫宮（女三宮）の御事は更なり、煩はしくいかに聞く所やなど憚り給ふ事なくて、ともかくも、只御心にかけてもてなし給ふべくぞ度々聞え給ひける。されどあはれにうしろめたくをさなくおはするを思ひ聞え給ひけり。紫の上にも、御消息殊にあり。（朱雀院から）朱雀「をさなき人の、（女三宮の事）心地なきさまにて移ろひ物すらむを、罪なくおぼし許して後見給へ。尋ね給ふべき故もやあらむとぞ。

朱雀院 そむきにしこの世に殘る心こそ入る山道のほだしなりけれ（子がひゞかせてある）闇をえ晴るけで聞ゆるも、をこがましくや」とあり。おとども（源氏も）

御返りはいかが 紫上は何と御返事申上げようかと困つて居られたが、仰々しく面白く書くべき場合でないから、只思ふ儘を述べて。

背く世の お捨になつたこの世が氣がかりでございますならば、のがれられぬ羈絆を（姫宮を）强ひてお振捨て遊ばすな。

何事も耻かしげ 朱雀院の御心中。かういふ立派な人達の居る六條院に幼稚な女三宮がまじつてゐられるのは心配だ。

今はとて 朱雀院のお山住みの折の有樣をいふ。

故后の宮 朱雀院の御母弘徽殿の大后。

姫宮の御事を 朱雀院は、三宮に次いでは、この方の事を氣にかけてゐられた。

斯かるきほひに 私の出家と競爭して尼になるのは、私の跡を追つて來るやうで氣ぜはしい。

見給ひて、（紫上の）「あはれなる御消息を。（眞心のこもつた御文だ謹んでお受けなさい）かしこまり聞え給へ」とて、（院の）御使にも、女房して、かはらけ（盃を）さしいだ（で）させ給ひて、（酒を）强ひさせ給ふ。御返りはいかがなど、聞えにくくおぼしたれど、事々しく面白かるべき折の事ならねば、只心をのべて、

（紫上）背く世の後めたくばさり難きほだしを强ひてかけな離れそ（羈絆の緣語）

などやうにぞあめりし。女の裝束に細長（ほそなが）添へて（お使に）かづけ給ふ。（紫上の）御手などのいとめでたきを、（朱雀院が）院御覽じて、何事も・・耻（い）かしげなるあたりに、いはけなくて見え給ふらむ事・・、（朱雀院が）いと心苦しうおぼしたり。

今はとて、女御更衣たちなど、（朱雀院に仕へて居た人々である）（暇を頂いて朱雀院から歸つてゆくにつけても）おのがじし別れ給ふも、あはれなる事なむ多かりける。（朧月夜尙侍）内侍のかんの君は、故后（こきさい）の宮のおはしまし二條の宮にぞ住み給ふ。（女三宮以外には）姫宮の御事をおきては、（朧月夜）この御事をなむ顧みがち（ぞ）に（朱雀院）御門もおぼしたりける。（朧月夜は）尼になりなむとおぼしたれど、（朱雀）「斯かるきほひには、慕ふやうに心あわただし」

やうやう佛の 朧月夜は尼にはならないが、ぼつぼつ佛いぢりの用意をなさる。

今一度あひ見て もう一度朧月夜にあつて昔の話もして見たいと。

世の騷ぎ 須磨退去當時の事。

かうのどやかに 朱雀院が山籠りをされたので朧月夜もかういふやうに閑散な身の上になつたのである。

あるまじき事とは 源氏は、けしからん事とは思ひながらも、常の見舞にかこつけて、始終心をこめたお文をさし上げられる。

昔よりもこよなく 昔よりもずつと揃つて圓熟しきつた尙侍の御樣子を御覽になるにつけてもやはり我慢が出來なくて。

昔の中納言の君 朧月夜の女房で源氏の媒をした人。

と（御制止になつて）諫め給ひて、やうやう佛の御事など急がせ給ふ。六條のおと（院）・どは、（心から物足りなく思ふ氣じの中に中絶して居つた朧月夜の事であるから）あはれに飽かずのみおぼしてやみにし御あたりなれば、年頃も（朧月夜を）忘れがたく、（源氏の心）いかならむ折に對面（たいめ）あらむ、今一度（ひとたび）あひ見て、その世の事も聞えまほしくのみおぼし渡るを、（源氏も朧月夜も互に世間の聞えを憚るべき身分故）かたみに世の聞耳も憚り給ふべき身の程に、いとほしげなりし世の騷ぎなども（源氏の心に）おぼし出でらるれば、（源氏は萬事謹直にして過して來られたのだが）よろづにつつみ過ぐし給ひけるを、（朧月夜が）かうのどやかになり給ひて、世の中を思ひしづまり給ふらむ頃ほひの御有樣、（朧月夜の御樣子が一入見たくて氣にかかるので）いよいよゆかしく心もとなければ、（手紙をあけるのはよくない事だと源氏は自制しながらも）あるまじき事とはおぼしながら、大方の御とぶらひにことつけて、あはれなるさまに常に聞え給ふ。（二人とも若氣らしく過ちを引起しさうな間柄でないから朧月夜からも時々は）若々しかるべき御あはひならねば、（御返事もある）御返りも、時々につけて聞えかはし給ふ。（手跡によつて朧月夜の樣子を推察するので）昔よりもこよなく打（ある）具し、整ひ果てにたる御けはひを見給ふにも、（源氏は）なほ忍びがたくて、昔の中納言の君のもとにも、（源氏の切な心もちを）心深き事どもを常に宣ふ。（中納言の君の）かの人の兄（せうと）なる和泉の前（さき）の守を召し寄せて、（昔の若い氣分に返られてお頼みになる）若々しく古へにかへ

人づてならで　物越しでもよいから、尚侍に直接話したい事がある。うまく承知させて、こっそり私の方から出かけよう。

今はさやうのありきも　今はそんな忍びあるきも容易でない身分故、くれ〴〵も秘しておくべき事だから、お前もこの秘密を人には漏らすまいと思ふと、おお五に安心だ。

いでや　さうね、世間が分つて來るにつけても、昔から隠分ひどいお仕打を、澤山經驗して來た今になつては、院の御出家を悲しんでゐるより外には何も源氏と昔の戀を語るでもあるまい。

心の間はむこそ　後撰戀三「無き名ぞと人には言ひてありぬべし心の間はばいかが答へむ」

古へわりなかりし世に　昔無理な首尾をしなければ逢へなかつた時でさへ承知しないでもなかつたのに。

今しもけざやかに　今になつていくら潔白にした所で、一度立つた我名を、今更取返す事の出來るものでもあるまい。古今戀三「一羣鳥の立ちにし我名今更に事なしぶともしるしあらめや」

この信太の森　信太の森は和泉國にあるから斯くいふ。六帖二「和泉なる信太の森の楠の木の千枝に別れて物をこそ思へ」

東の院　二條院の東院。

例はさしも　いつもは末摘花の事など大して氣にとめては居られないのに、今日に限つて妙だなあ。

姫宮の御事の　女三宮が來られてからは、今迄のやうではなく少し打ちとけない心持が出來て、知らぬ顔をしてゐられる。

網代車の昔覺えて　昔の忍びある時の當時を思ひ起させるやうな網代車の人目に立たないのに乘つてお出かけになる。怪しくいかやうにと今更にあるまじき旨を返事したのに、突然源氏が來られたから。まかしやかにて　風情の有るおもてなし爲てお返し申すべきです。そんなおあしらひはよくない事です。

りて語らひ給ふ。源「人づてならで、物ごしに聞え知らすべき事なむある。さりぬべく聞え靡かして、いみじく忍びて參らむ。今はさやうのありきも所せき身の程に、おぼろげならず忍ぶべき事なれば、そこにも又人には漏らし給はじと思ふに、かたみにうしろやすくなむ」と宣ふ。かんの君、「いでや、世の中をも、昔よりつらき御心を、ここら思ひつめつる年頃のはてに、あはれに悲しき御事をさしおきて、いかなる昔がたりをか聞えむ。げに人は漏り聞かぬやうありとも、心のうちに恥かしかるべけれ」と、うち歎き給ひつつ、なほ更にあるまじき由をのみ聞ゆ。古へわりなかりし世にだに、今しもけざやかに清まはりて、立ちにしわが名今更に取りかへし給ふべきにや、とおぼしおこして、この信太の森を道のしるべにてまうで給ふ。

女君には、東の院に物する常陸の君の、日頃煩ひて久しくなりにけるを、物さわがしき紛れにとぶらはねば、いとほしくてなむ。晝などけざやかに渡らむもびんなきを、夜の間に忍びてとなむ思ひ侍る。人にも斯くとも知らせじ」と聞え給ひて、いといたく心げさうし給ふを、例はさしも見えぬあたりを、怪し、と見給ひて、思ひ合せ給ふ事もあれど、姫宮の御事ののちは、何事も、いと過ぎぬる方のやうにはあらず、すこし隔つる心添ひて、見知らぬやうにてをはす。その日は寢殿へも渡り給はで、御文書きかはし給ふ。薫物などに心を入れて暮し給ふ。宵過ぐして、睦まじき人の限り四五人ばかり、網代車の昔覺えてやつれたるにて出で給ふ。和泉の守して御消息聞え給ふ。斯く渡りおはしましたる由ささめき聞ゆれば、驚き給ひて、「怪しく、いかやうに聞えたるにか」と、むづかり給へど、和泉「をかしやかにて返し奉らむに。いとびんな

只ここもとに　一寸此處まで。物越しでもよいから。昔のやうなけしからぬ疑など全く持つて居りませぬ。

さればよ　案の定この通りだ、簡單に逢ふことは昔の儘だ。**かたみにおぼろげならぬ**　御兩人共今は輕々しく身動きも出來ない御身分故、こんなむつかしい對面するにつけても感慨無量である。**東の對なりけり**　今源氏と尚侍と對面してゐる場所は二條院の東對であつたのだ。**御簾子のしりは**　隔ての襖は竪くしめてあるので。**かためしれば**　本の儘。

玉藻に遊ぶ　後撰春中「春の池の玉藻に遊ぶ鴛鳥の足のいとなき戀もするかな」さて〳〵世はたえず移り變るものだ。**さも移りゆく**　平仲　平貞文の事。卷一、二七〇頁。**昔に變りて**　昔の樣子と違つて源氏は大人らしい口はきかれるが。

年月を　久しぶりの對面であるのに襖にせきとめられて悲しい。「逢坂の」は「せき」の枕詞で、同時に相逢ふ意がきかしてある。**涙のみ**　私も悲しくて涙は清水のやうに流れますが、逢ふべき道は疾く經えて居ります。（拾遺）逢坂の關の清水にかげ見えて今や引くらむ望月の駒。あの悲しい須磨流謫の騷ぎも誰が原因なのか、主に自分が原因なのだ。

もとよりづしやかなる　臨月夜はもと〳〵どつしりした（重い）所のない人で、源氏と朱雀院との間の經驗からそれ〴〵男女の仲といふものがわかり、年來は色々と世間の事が分り、自分の過去が公私につけて後悔の種の多いのにひどく氣づいてゐるが、當時に似てゐる今夜の御對面に、昔の事も昨今のやうな氣がして、氣強いおあしらひも出來なさない。**一方ならぬ**　いろ〳〵な意味での、心と源氏に對する情と二つの間にもがきながら、溜息がちに言葉を交はされる御樣子などは、今初めての仲よりも珍らしく情味も深くて。「一方ならぬ」は一世のつつましさ」と「あはれ」と双方の間に立つ意。

う侍らむ」とて、無理強段をして源氏を内へお入れ申した　強ちに思ひめぐらして入れ奉る。裏氏はお見舞の詞などをのべて　など聞え給ひて、物越しでもよいから。昔のやうなけしからぬ疑など全く持つて居りませぬ。源「只ここもとに・・。（て）物ごしにても。更に昔のあるまじき心などは殘らずなりにけるを」と、隔りに仰しやるので　わりなく聞え給へば、いたく歎く〳〵ねざり出で給へり。源氏の心に御侍の昔ながらの騷さ（近づき）さればよ、なほけぢかさは、（臨月夜は易さ）を思ひ合せたのである　とかつおぼさる。かたみにおぼろげならぬ御みじろきなれば、あはれもすくなからず。東の對なりけり。辰巳の方の廂におす丞申して　源氏をも南の廂の間に　辰巳の方の廂にすゑ奉りて、御障子のしりはかためしれば、源「いと若やかなる心地もするかな。年月の積りをも、紛れなく數へらるる心逢ひたいのだがこんなに懷々しくされては恨めしいならひに、斯くおぼめかしきは、いみじうつらくこそ」と恨みそらとぼけたやうな御仕打は　聞え給ふ。夜いたく更けゆく。玉藻に遊ぶ鷲の聲々など、あはれに聞えて、しめ〳〵と人目すくなき宮の内の有樣に、二條院　さも移りゆく世かな、と源氏の心に　おぼし續くるに、平仲が眞似ならねど、誠に涙もろになむ。昔に變りて、大人々々しくは聞え・・・給ふものから、これを斯くてやと、引き動かし給ふ。

源氏　年月をなかに隔てて逢坂のさもせきがたく落つるなみだか

臨月夜　女、　涙のみせきとめがたき清水にてゆきあふ道は早く絶えにき

など、かけ離れ聞え給へど、古へをおぼし出づるも、誰により　侍は逢はうとはなさらないが　侍の心に　行違ふ昔と近江路　多うはさるいみじき事もありし世の騷ぎぞ・、と思ひいで給ふに、げに今一度の對面はありもすべかりけり、とおぼし弱るも、我の折れてゆくのも　侍の心に　もとよりづしやかなる所はおはせざりし人の、年頃は、さまざまに世の中を思ひ知り、きし方をくやしく、おほやけ私の事に觸れつつ、かずもなくおぼし集めて、いといたく過ぐし給ひにたれど、昔覺えたる御對面に、その世の事も遠からぬ心地して、臨月夜は今も昔ながらに上品に若くやさしみがあつて　臨月夜の心に　え心強くももてなし給はず。なほらう〳〵じく若うなつかしくて、一方ならぬ、世のつつましさをもあはれをも思ひ亂れて、臨月夜が　歎きがちにて物し給ふ氣色など、臨月夜の　今始めたらむよりも珍らしく　源氏の心に　仲よりも珍らしく情味も深くて。「一方ならぬ」は一世のつつましさ」と「あはれにて、明けゆくもいと口惜しくて、出で給はむ空もなし。

名殘霞める 花の散つたあとの梢が淺綠に霞んでゐるのを見るにつけても。

昔藤の宴し給ひし 花の宴の卷に源氏が「扇を取られてからき目を見る」と言つた時の事。卷一、三二一頁。

この藤よ この藤を御覽。どうして染めた色か、何ともいへない味のある色合だ。この蔭はとても離れられない。

さしあひ 源氏の美しさと日の光と相映じて。

さる方にても 朧月夜はなぜ源氏と夫婦になつて暮さなかつたのだらう、御宮仕が結構だといつても、それもきりのあるもので、女御などいふ飛拔けた身分でもなかつたのに。

朝ぼらけのただ（趣ある）ならぬ空に、百千鳥の聲もいとうららかなり。花は皆散り過ぎて、名殘霞める梢の淺綠なる木立、昔藤の宴し給ひし、此頃の事なりけむ（り）かし、とおぼし（源氏が）出づるに、年月の積りにける程も、その折の事かきつづけあはれにおぼさる。中納言の君の、見奉り（源氏を）送るとて、妻戸押しあけたるに、立ち（源氏が）かへり給ひて、源「この藤よ。いかに染めけむ色にか、なほえならぬ心添ふ匂ひにこそ。いかでかこの蔭（を）は立ち離るべき」と、わり（どうして）なく出でがてにおぼしやすらひたり。山（東の）際よりさし出づる日の花やかなるにさしあひ、目も輝く心地する御（源氏の）さまの、こよなく（年と共にすばらし）ねび加はり給へる（く美しくなられた源氏のお姿を）御けはひなどを、珍らしく程經ても見奉る（中納言の君が）は、まして世の常ならず覺ゆれば、さる方にても（以下中納言の君の心）などか見奉り（源氏を）過ぐし給はざらむ、御宮仕（禁中の）にも限りありて、際殊に離れ給ふ事もなかりしを、故宮（弘徽殿大后があまり世話を燒きすぎた爲に須磨流謫といふ騷ぎが起つて）のよろづに心をつくし給ひ、よからぬ世の騷ぎに、かる〴〵しき御名さへ響きてやみにしよ、など思ひ出でら（朧月夜の浮名まで立つて御仲も其儘になつたのだ）

名殘多く殘りぬらむ 御兩人の御物語はそのあとがまだ多く殘つてゐるであらうから、その御物語の末をば如何にももつと續けさせてあげたいのだが、源氏は自分で自分の身が自由にもならないだらうし、多くの人目も怖ろしくもあり、憚られもするので日が次第に昇りゆくにつれて、心が落著かなくて。「げに」は前頁「わりなく出でがてにおぼしやすらひたり」とあるのを受けて、如何にも源氏の希望どほりの義。

沈みしも 君ゆゑに須磨に沈淪する身となつたあの苦しみは忘れないながらも、なほ性懲りもなく、君の爲に命までも捨てようとする自分です。

身を投げむ 君は身を投げようと仰しやいますが、それは僞でせうから、私は性懲りもなく戀の涙に袖をぬらすやうな事はしますまい。「淵ならで」の次に僞の淵だからと補つて解かなければならぬ。

關守の 朧月夜を守る人目の緩なのに氣を許してか。

そのかみも 昔も朧月夜を源氏が誰よりもわけて戀して居りながらも、僅かばかりの契りで中絶してしまつた御仲であるからどうして愛情が淺からう。

る。名殘多く殘りぬらむ御物語のとぢめには、げに殘りあらせまほしきわざなめるを、御身を心にえまかせさせ給ふまじく、ここらの人目もいと怖ろしくつつましければ、やう〳〵さしあがりゆくに、心あわただしくて、廊の戸に御車さし寄せたる。人々も忍びてこわづくり聞ゆ。人召して（源氏が）、かの咲きかかりたる花一枝（藤の花）折らせ給へり。

沈みしも（源氏）忘れぬものをこりずまに身を（も）投げつべき宿の藤波（須磨を響かす）（淵を響かせる）いといたくおぼし煩ひて寄り居給へるを、心苦しう（中納言の君が）見奉る。女君も、今更にいとつつましく（逢瀬を恥かしく思つて）、さま〴〵に（源氏と朧月夜とそれ〴〵に）思ひ亂れ給へるに、花の蔭（源氏の事をいふ）はなほなつかしくて、

身を投げむ淵も（淵に藤を）誠の淵ならでかけじやさらにこりずまの波

いと若やかなる御振舞を、心ながらも許さぬ事におぼしながら、（こんな若々しい忍びの逢瀬を源氏自身も不都合な行爲とは自覺しながら）

關守の固からぬたゆみにや、いとよく語らひおきて出で給ふ。（今朧月夜が二條院に獨住みであるから）（後の逢瀬を）

そのかみも、人よりこよなく心とめて思う給へりし御志ながら、

いみじく忍び入り 源氏が朧月夜から歸邸して、わが方にそつと忍んではひられるのを待ち受けた紫上は、その寢起きの姿を御覽になつて、多分尙侍に逢つて來たのだらうと感づいては居られるが、氣づかぬ顏をしておいでになる。

など斯くしも なぜ紫上はかうして自分に構はないやうになられたのかと心配で、前より一層深く長き末の世をかけて契られる。

物越にはつかなりつる 朧月夜には物越で一寸對面したばかりだから、まだいひ殘した事があるやうな氣がする。人に見とがめられる事のないやう、祕密にもう一度逢ひたい。

今めかしくも 花やかに若返りなさいましたね。昔の戀をもりかへして今の數にお附けたしなさいますのでは、縋りばのない私はつらくて。「昔」は朧月夜、今は女三宮。

かう心やすからぬ さう腹を立てられては困る。たゞおとなしく抓るなり何なりして恨みを言うて下さい。

隔てあるべくも 分けへだてするやうには躾けなかつた筈だのに、案外な氣性になられましたね。

はつかにてやみにし御中らひには、いかでか・(は)あはれもすくなからむ。いみじく忍び入り給へる御(おほん)・・寢(源氏の)くたれのさまを待ち・(ま)うけて、女君(紫上は)、さばかりならむと心得給へれど、おぼめかしくもてなしておはす。なか〳〵うちふすべなどし給へらむよりも心苦しく(源氏の心に)、など斯くしも見放ち給へらむとおぼさるれば、ありしよりけに深き契りをのみ長き世をかけて聞え給ふ。かんの(尙侍との關係も他には漏らすべきではないが紫上は昔の關係も承知の事ゆゑ)君の御事も、又漏らすべきならねど、古への事も知り給へれば、まほにはあらねど、源「物越(ものごし)にはつかなりつる對面(たいめ)なむ(ど)、殘りある心地する。いかで人目咎めあるまじくもて隱して今一度も」と語らひ聞え給ふ。うち(紫上は)笑ひて、紫「今めかしくもなりかへる御・・ありさまかな。昔を今に改め加へ給ふ程、中空(なかぞら)なる身のため苦しく」とて、さすがに涙ぐみ(紫上のさま)給へるまみ(目つき)の、いとらうたげに見ゆるに、源「かう心やすからぬ御氣色こそ苦しけれ。只おいらかに引きつみなどして敎へ給へ。隔てあるべくもならはし聞えぬ

よろづに御心取り給ふ 色々機嫌を取つてゐる間に、すべてを白狀してしまはれる事になるやうだ。

姫宮は 姫宮は何も氣にかけてゐられないのに、侍女達が源氏の夜がれを不平がましく申上げた。

煩はしうなど 姫宮が嫉妬でもなさるやうであつたら、そちらも一層氣苦勞になつたであらうが、さうもないので、おつとりとして可愛いおもちやのやうに源氏は思つてゐられた。

うちはへ 其後ずつとお里下りが出來ず、お暇が出ないので、今まで氣樂にしつけた若いお心には、實に苦しかつた。

いとわりなしと 姫宮は大變困つておいでになる。

まだいとあえかなる こんなお年若な折の御懷姙であるから、誰も大變心配してゐられるやうである。

明石の御方 明石上は今は姫君に附添うて禁中にお出入りなさるのも、結構な運勢を持つてゐられるのだ。

對の上こなたに 紫上が明石姫君方においでになつて御對面の序に。

を、思はずにこそなりにける御心なれ」とて、よろづに御心取り給ふ程に、何事もえ殘し給はずなりぬめり。宮(女三宮)の御方にも、とみにえ渡り給はず、こしらへ聞えつつおはします。姫宮(女三宮)は何ともおぼしたらぬを、御後見(侍女達が)どもぞやすからず聞えける。煩はしうなど見え給ふ氣色ならば、そなたもまして心苦しかるべきを、おいらかにうつくしきもてあそびぐさに思ひ聞え給へり。桐壺(明石姫君)の御方は、うちはへえまかで給はず、御暇(おんいとま)のありがたければ、心やすく(入内前には)ならひ給へる若き御心・(地)に、いと苦しくのみおぼしたり。夏頃惱(明石姫君が)ましくし給ふを、とみにも許し聞え給はねば、いとわりなしとおぼす。珍らしきさまの御心地にぞありける。まだいとあえかなる御程に、いとゆゆしくぞ誰も〳〵おぼすらむかし。からうじてまかで給へり。姫宮のおはします御殿(おとど)の東面(ひんがし)に御方(おもて)はしつらひたり。明石の御方、今は御身に添ひて出で入り給ふも、あらまほしき御宿世なりかし。對の上こなたに渡

姫宮にも 女三宮にも隔ての戶をあけて御挨拶申したいものです。前からもさう思つて居りましたが、序がなくてはそれも氣がおけるのですが、かういふ機會にお馴染になれば氣づまりでなからうと思ひます。「中の戶」とあるのは隔意を除いての意をおもしろく言つたもの。

思ふやうなる そんなに睦まじくして貰ふと、私も望み通りで嬉しく思ひます。「御語らひ」は紫上と姬宮と親しくする事を言ふ。

宮よりも 紫上は、女三宮に對してよりも明石上に對して餘計氣がおけるので、髮を洗ひ身づくろひをして居られる樣子は、これ程の美人はあるまいと思はれた。

夕方かの對に 夕方あの對の上が明石姬君に對面するとてこちらに來る序に、お近づきになりたいやうに申して居りましたが、承知してお會ひ下さい。淑景舍は桐壺の事で明石姬君が其處に居られるから、姬君の事を淑景舍又は桐壺の御方などいふ。

何事をか 何と御挨拶したらよろしうございませう。

りて、對面し給ふついでに、紫「姫宮にも中の戶あけて聞えむ。かねてよりもさやうに思ひしかど、ついでなきにはつつましきを、斯かる折に聞え馴れ（な）・ば、心やすくなむあるべき」と〔源氏に〕おと〔源氏は〕うちゑみて、源「思ふやうなる・（べき）・御語らひにこそはあなれ。〔女三宮はまだ子供のやうですから安心の出來るやうに躾けてやつて下さい〕いとをさなげに物し給ふめるを、うしろやすく敎へなし給へかし」と、許し聞え給ふ。〔女三宮〕宮よりも、〔明石上〕明石の君の〔氣づまりな應對を想像してゐられるから〕恥かしげにてまじらはむをおぼせば、〔紫上の樣子をいふ〕御髮すまし引き繕ひておはする、たぐひあらじと見え給へり。〔源氏が女三宮方に〕おとどは宮の御方に渡り給ひて、源「夕方、〔西の對に居る紫上が〕かの對に侍る人の、淑景舍に對面せむとて出で立つ・（その）・ついでに、〔紫上が女三宮に〕近づき聞えさせ・・まほしげに物すめるを、許して語らひ給へ。〔紫上は〕心などはいとよき人なり。まだ若々しくて、〔女三宮の遊び相手にも〕御遊びがたきにもつきなからずなむ」など聞え給ふ。女三「恥かしうこそはあらめ。何事をか聞えむ」とおいらかに宣ふ。源「〔返事といふものは其の場合々々で考へ出すものです〕人のいらへは、事に隨ひてこそはおぼし出

御中うるはしくて 紫上と女三宮とが仲よく暮してくれればよいと思召すあまりに、あどけない女三宮の御有樣を紫上に見あらはされる事を、恥かしくもつまらなくも源氏は思はれるけれども、折角紫上が會ひたいといふのに、それを斷るのもよくないと思召すのであつた。

我よりかみの 北方として自分より上の人は無い筈だ。紫上は式部卿宮の姬君であるといふ自負があるのである。

身の程の 北山で祖母の手で賤しく育つた幼時の有樣を源氏に見られて居るといふだけの事だ。

おのづから古言も 古歌などを書くにも、自然物思はしい意味の歌が書かれるので。

宮女御の君などの御有樣 女三宮や明石女御などの御有樣を見て、それ〴〵かはいらしいなと感ぜられた目で紫上を見ると、年來見馴れて居る紫上の事故、もし一通りの美人ならば何も驚かれる筈もないのに、やはり美しいなと思つて御覽になる。

あるべき限り 紫上はどこからどこまでもけだかく氣づまりに思はれる程氣品が具はつて居る上に。

でめ。〔紫上に對して隔てがましい應對をなさるな〕隔ておきてなもてなし給ひそ」と、こまかに敎へ聞え・（さ）・（せ）・給ふ。御中うるはしくて過ぐし給へと〔源氏の心に〕おぼすあまりに、何心（も）・なき〔女三宮の〕御有樣を、見あらはされむも恥かしくあぢきなけれど、さ宣はむを、〔源氏の遠慮〕心隔てむも〔つまらぬ〕あいなしとおぼすなりけり。〔紫上は女三宮に御對面の用意はなさるものの〕對には、斯く出で立ちなどし給ふものから、〔以下紫上の心中〕我よりかみの人やはあるべき、身の程の・ものは〔たよりない有樣〕かなきさまを、〔源氏に〕見えおき奉りたるばかりこそあらめ、など思ひ續けられて、うちながめ給ふ。手習などするにも、おのづから古言（ど）・も・（の）物思はしき筋のみかか・るを、〔知らず〳〵さういふ歌が書かれるやうならば〕さらばわが身には思ふ事ありけりと、〔紫上自身に〕みづからぞおぼし知らるる。〔源氏が紫上方へ〕院わたり給ひて、宮、女御の君などの御（おほむ）ありさまどもを、うつくしうもおはするかなと、さま〴〵見奉り給へる御目移しには、年頃目馴れ給へる人のおぼろげならむが、〔紫上の美しさを今更に感じなさるのである〕いと斯く驚かるべきにもあらぬを、なほたぐひなくこそはと見給ふ。〔紫上のやうな美人は滅多にないと草子地〕ありがたき事なりかし。〔紫上のすぐれたるさまをいふ〕あるべき限り、け高う恥かしげ

匂ひ　容貌に溢れてゐるのをいふ。

かをり　匂ひとおなじこと。

打解けとりつる　氣樂に書いてゐられた。河内本の如く「打解けたりつる」とあるべきである。

身に近く　見て居るうちに山の青葉も色が變つて來た。私が飽かれる時が近づいたのでせう。

みづとりの　私の心に變りはないが、あなたの下心は樣子が變つて來ました。

すさび給ふ　樂書をして居られる。

氣に觸れて　何かにつけて煩悶の樣子が自然に漏れて出るのを紫上は何げなくしてゐられる慎み深さを、稀な殊勝な事だと源氏は思はれる。

いとわりなく　無理な首尾をして源氏が忍んで行かれた。

に整ひたるに添ひて、花やかな美しさが花やかに今めかしく匂ひ、なまめきたるさま〴〵のかをりも、何一つ缺けてないこと取り集めめでたきさかりに見え給ふ。去年より今年はまさり、昨日より今日は珍らしく、新しい感じがあつてさまのし給へるを、いかで・斯くしもありけむと思す。打解けとりつる御手習を、硯の下にさし入れ給へれど、見つけ給ひて、筆蹟はさう上手にきばつて書いてはないが手などの、いとわざとも上手と見えで、らうらうじくうつくしげに書き給へり。

紫上

源氏

身に近く秋や來ぬらむ見るままに青葉の山も移ろひにけり

源氏がとどめ給ひて、

みづとりの青羽は色も變らぬを萩のしたこそ氣色ことなれ

紫上も女三宮も

下にはおのづから漏りつつ見ゆるを、事なく消ち給へるも、あはれにおぼさる。今宵はいづ方にも御暇ありぬべければ、かの忍び所に、いとわりなく・出で給ひにけり。いとあ

春宮の御方　明石姫君は春宮の女御故斯く申す。

いとうつくしげに　明石姫君が大層かはいらしく成人して居られるので、紫上も眞身の親のやうに心からかはいがつておいでになる。

對面し　紫上が女三宮に。

昔の御筋をも　女三宮の御血統を辿つて御話になる。紫上と女三宮とは從姉妹であるからである。三〇五頁參照。

同じかざしを　長れ多い事ですが、先祖を考へて見ますと一つのやうですけれども、今迄は折がなくてお目に懸りませんでしたが、これからは親しくして私の所へもおいでになつて、私が御無沙汰しましたら御注意下さるやうでしたら嬉しうございませう。

頼もしき御影どもに　女三宮は父朱雀院は御出家遊ばしは死別れ、あとにお一人心細さうにしていらつしやいますのにすと、御深切に仰しやつて頂きまこれ以上嬉しい事はございませぬ。

と源氏は自制するがるまじき事と、いみじくおぼし返すにも、かなはざりけり。

寶母の明石上よりも紫上を

春宮の御方は、じちの母君よりも、この御方をば睦まじきものに頼み聞え給へり。いとうつくしげに大人びまさり給へるを、思ひ隔てずかなしと見奉り給ふ。御物語などいとなつかしく聞えかはし給ひて、中の戸あけて宮にも對面し給へり。

女三宮

女三宮はまるで子供のやうに

いとをさなげにのみ見え給へば心やすくて、大人々々しく親めきたるさまに、昔の御筋をも尋ね聞え給ふ。

紫上は氣が張らなくて

女三宮の乳母

中納言の乳母といふ召出で方へも乳母に參り給へといふのである

女三宮の御母は紫上の叔母

なたなどにも物し給ひて、怠らむ事をば驚かしなども物し給はむなむ嬉しかるべき」など宣へば、中納言「頼もしき御影どもに、さま〴〵におくれ聞え給ひて、心細げにおはしますめるを、斯かる御許し・はべるめれば、ます事なくなむ思う給へられける。

御出家遊ばした朱雀院の思召も紫上が女三宮に對して隔心なくお扱ひ下さるやうにとの事であつたやうに存じます

背き給ひにしうへの御心向けも、只斯くなむ御心隔て聞え給は

うち〳〵に 女三宮も内々そのやうにあなたを頼りにしておいでになりました。

いと忝かりし 先日朱雀院から忝い御手紙を戴いてからは、是非お力になりたいと存じて居りますが、何事につけても、數でない身は殘念な事です。

げにいと著く心よげなる 前に源氏が「心などはいとよき人なり」などいつた詞を受ける。三六頁參照。

あいなう 下の「いひあつかふ云々」に係る。先妻後妻の間柄について、世間の人もつまぬ噂をしたがるもので。

御覺え 源氏の御寵愛も今迄のやうではないだらう。

などと 河内本に從ふべきである。

今すこし深き御志 女三宮が出來てから却つて御志が深まつてゆく位なので。

著なほりて わるい噂も立たなくなつて、世間體もよかつた。

いかめしき事は 立派な事はせぬやうにと六條院がたつて制せられるので、内輪にとの御計畫であつた。

帙簀 經卷を包む帙。

最勝王經 金光明最勝王經の略。

金剛般若 金剛般若波羅蜜多經の略。

壽命經 一切如來金剛壽命陀羅尼經の略で壽命陀羅尼經ともいふ。以上三者を鎭護國家の三部經といふ。

御誦經 僧への布施。

御としみ 佛會中は精進であるから、それがすむと精進落しのわがあるのである。

わが御私の殿と 紫上は自分の所有と心得て居る二條院で精進落の祝の準備をなさる。

御方々も 他の婦人達も、然るべき事柄は、分擔して自分の方から進んで準備をした。

ず、まだいはけなき御有樣をも、はぐくみ奉らせ給ふべくぞ侍るめりし。うち〳〵にもさなむ賴み聞えさせ給ひし」など聞ゆ。

紫「いと忝かりし御消息ののちは、いかでとのみ思ひ侍れど、何事につけても、數ならぬ身なむ口惜しかりける」と、やすらかさてのちは、常に御文通ひなどして、をかしき・遊びわざなどにつけても、うとからず聞えかはし給ふ。世の中の人も、あいなう、かばかりになりぬるあたりの事はいひあつかふものなれば、初めつかたは、「對の上がいかにおぼすらむ。御覺えいとこの年頃のやうにはおはせじ。すこしは劣りなむ」などといひけるを今すこし深き御志斯くてしもまさるさまなるを、それにつけても、又やすからずいふ人々あるに、かく憎げなくさへ聞えかはし給へば、事なほりて、目やすくなむありける。

神無月に、對の上、六條院の四十の御賀に、嵯峨野の御堂にて、藥師佛供養じ奉り給ふ。いかめしき事は、せちに諫め申し給へば、忍びやかにとおぼしおきてたり。佛、經箱、帙簀の整へ、誠の極樂ぞ・思ひやらる。最勝王經、金剛般若、壽命經など、いとゆたけき御祈りなり。上達部いと多く參り給へり。御堂のさま面白く、紅葉の蔭分けゆく野邊の程より始めて、見ものいはむ方なく、紅葉も見たくて大勢集まつたのであらうなるに、かたへはきほひ集まり給ふなるべし。霜枯れわたれる野原のままに、馬車の行きかふ音繁く響きたり。御誦經我も我もと、御方々いかめしくせさせ給ふ。

十月二十三日を御としみの日にて、この院は、斯く透間なくつどひ給へるうちに、わが御私の殿とおぼす二條の院にて、その御設けはせさせ給ふ。御裝束をはじめ、大方の事どもも、皆こなたにのみし給ふを、御方々も、さるべき事ども、分けつつ望み仕

對どもは 二條院の對は、今迄は侍女達の局にしておいたのだが、それを取拂つて。

諸大夫 五位の侍。

覆ひ それ〴〵の品々の上に掛けてある覆ひである。

内の心は その覆ひの下にはどんな物があるか、はつきりは分らない。

唐のぢの 舶來の地質の。湖月抄本の一本によれば「唐の羅の」である。

けそく 花足。このあたりの有樣、かの玉鬘が若菜を奉つた時の事を思ひ合すべきである。三〇七頁以下參照。

黄金の鳥 その挿頭の趣向は黄金の鳥が銀の枝にとまつて居る形で、これは淑景舍の擔當で、明石上が調達したもので、格別趣味の深いものである。

だん 河内本によつて「たき」即ち瀧とすべきである。

置物の御厨子 置物を載せる御厨子でその上に色々の御調度が置き並べてある。

平張 幕の天井を布帛で平に張つて、日光の直射や雨雪等を防ぐもの。

屯食 中古・禁中・又は貴族の饗宴に、下臈に庭上ですゝめた饗膳强飯握飯の類。

うまつり給ふ。對どもは、人の局々にしたるを拂ひて、殿上人、諸大夫、院司、下人までの設け、いかめしくせさせ給へり。寢殿の放出を例のしつらひて、螺鈿の倚子立てたり。御殿の西の間に、御ぞの机十二立てて、夏冬の御よそひ、御衾など例の如く、紫の綾の覆ひども、うるはしく見えわたりて、内の心はあらはならず。お前に置物の机二つ、唐のぢの裾濃の覆ひしたり。挿頭の臺は、沈のけ・そく、黄金の鳥、ぎん・・の枝に居たる心ばへなど、淑景舍の御預かりにて、明石の御方のせさせ給へる、故深く心殊なり。うしろの御屏風四帖は、式部卿の宮なむせさせ給ひける。いみじく盡して、例の四季の繪なれど、珍らしき泉水、だんなど、目馴れず面白し。北の壁に沿へて、置物の御厨子二具立てて、御調度ども例の事なり。南の廂に上達部、左右の大臣、式部卿の宮を始め奉りて、次々はまして參り給はぬ人なし。舞臺の左右に、樂人の平張打ちて、西東に屯食八十

未の時ばかり 午後二時頃。

萬歳樂 平調の中曲で六人又は四人で舞ふ。則天武后の作といふ。鳳凰又は鸚鵡の鳴聲を象つて作つた曲であるといふので鳥聲萬歳樂ともいふ。

皇麞 二一頁。

高麗の亂聲して 高麗樂の亂聲をして。亂聲は舞樂の始に奏する曲。

落蹲 壹越調の小曲で納蘇利ともいふ。但し納蘇利は二人舞でこれは一人舞である。

權中納言衛門督の 夕霧と柏木とがその父君達に劣らず立派に跡をついで、世間の氣受けや器量用意なども殆ど劣る所なく、而も官位は當時の父君達よりも稍高くなつてゐるなどと、夕霧と柏木との年齢を數へて見て、やはりさうした前世の因緣が有つて二人がその親達に相繼いで人にすぐれた御二人だとほめてゐる。

北の政所の別當ども 紫上附きの別當が、人々を連れて祿の納めてある唐櫃の側に行つて、一つづつ取出して次々と與へる。人々がいろ〳〵の白い御衣を頭に頂いて、築山の麓を廻つて池の堤を通る所を餘處から見ると。

具、祿の唐櫃四十・・續けて立てたり。未の時ばかりに樂人參る。萬歳樂、皇麞など舞ひて、日暮れかかる程に、高麗の亂聲して、落蹲の舞ひ出でたる程、なほ常の目馴れぬ舞のさまなれば、舞ひ果つる程に、權中納言、衛門督おりて、入綾をほのかに舞ひて、紅葉の蔭に入りぬる名殘、飽かず興ありと人々おぼしたり。古への朱雀院の行幸に、青海波のいみじかりし夕べ思ひいで給ふ人々は、權中納言、衛門督の、又劣らず立ちつづき給ひにける世々の覺え有樣、かたち用意なども、をさ〳〵劣らず、官位はやや進みてさへこそなど、齡の程をもかぞへて、なほさるべきにて、昔より斯く立ち續きたる御中らひなりけりと、めでたく思ふ。あるじの院も、あはれに涙ぐましくおぼし出でらるる事ども多かり。夜に入りて、樂人どもまかり出づ。北の政所の別當ども、人々引きゐて、祿の唐櫃に寄りて、一つづつ取りて、次々賜ふ。白き物どもを品々かづきて、山際より池の

鶴の毛衣　催馬樂呂席田「むしろ田のや、席田の、伊津貫川にや住む鶴の、住む鶴の、千年をかねてぞ遊びあへる、よろづ代かねてぞ遊びあへる」席田は美濃國席田郡である。

故入道の宮　以下源氏の心。

この院の御事をだに　せめて此の六條院をなりと、恒例通り父子の禮を盡したいと思召すけれども、それの出來ぬ事を始終物足りなく感じてゐられたのであるが。

世の中の頽ひ　行幸の爲には一般人民に損ひを及ぼす事が大きいから、源氏はそれを憚つて御辭退申上げたのである。

堤過ぐる程のよそ目は、千年をかねて遊ぶ鶴の毛衣に思ひまがへらる。御遊び始まりて、又・・面白し。御ことどもは春宮より賜はり給へるを・・て、珍らしく彈き合せ給へるに、何の折にも、過ぎにし方の御有樣、うちわたりなど思し出でらる。故入道の宮おはせましかば、斯かる御賀など、我こそ進み仕うまつらましか、何事につけてかは、志をも見え奉りけむと、飽かず口惜しくのみ思ひ出で聞え給ふ。うちにも、故宮のおはしまさぬ事を、何事にも榮なくさう・・しくおぼさるるに、この院の御事をだに、例の跡あるさまの長まりを盡してもえ見せ奉らぬを、世と共に飽かぬ心地し給ふも、今年はこの御賀にことつけて、みゆきなどもあるべくおぼしおきてけれど、「世の中の頽ひならむ事、更にせさせ給ふまじくなむ」と、いなび申し給ふ事度々になりぬ

七大寺　東大寺、興福寺、元興寺、大安寺、藥師寺、西大寺、法隆寺。

御讀經　布施。

布四千段　四千は四十の賀に緣を持たせたのである。段は普通一人分の衣服の料とする布帛で、絹物は三丈、鯨尺約二丈七八尺。

四十寺　何れの寺と一定してない。これも四十の賀の緣。

絹四百疋　これも四百も四十賀の緣で疋は二段の事。

四十の賀　前例をそれ〴〵聞いて見ても、四十の賀を受けた人は、餘命の長かつた人は、少なかつたといひますから。

のちに足らむ事を　五十の賀を受ける事の出來るやうに祝つて下さい。

おほやけざまにて　公式でやはり盛大に催された。

宮のおはします　中宮は六條院の坤の一廓においでになる。

六條　正月二日に后宮春宮から饗宴を賜はる。これを二宮の大饗といふ。西宮記卷一「西宮記云、大納言白衣二領、中納言同記云、一領、參議紅大袿一領、非參議色一領、參議小袿一領、五位細長一領、柳色袿一領、延喜式云、位祿、中納言已上各白衣一領、非參議三位已上令賜之、參議已上令賜之、五位各一領、六位已上令賜之、袿綿六百屯、受大藏云々」

れば、口惜しくおぼしとまりぬ。

十二月の廿日あまりの程に、中宮まかでさせ給ひて、今年の殘りの御祈りに、奈良の京の七大寺に御誦經、布四千段、この近き都の四十寺に、絹四百疋を分ちてせさせ給ふ。ありがたき御はぐくみをおぼし知りながら、何事につけてかは深き御志をもあらはし御覽ぜさせ給はむとて、父宮母御息所のおはせましかば、御ためしの志をも取添へおぼすに、かう強ちにおぼやけにも聞えかへさせ給へば、事ども多くとどめさせ給ひつ。「四十の賀といふ事は、さき〴〵を聞き侍るにも、殘りの齡久しきためしになむすくなかりけるを、この度は、なほ世の譽きとどめさせ給ひて、誠にのちに足らむ事を數へさせ給へ」とありけれど、おほやけざまにて、なほいかめしくなむありける。宮のおはします一廓の寢殿に、御しつらひなどして、上達部の祿など、大饗になずらへて、みこたちには殊に女の裝束、

腰差 貰つた時に腰に插して退出するやうにしてある卷絹。

古き世の一つの この御賀には古來天下唯一と稱せられた名器は悉く集まつた。

うちには 冷泉院は折角源氏の賀を思ひ立たれたのであるが、それを其儘にするのも殘念とて夕霧に依囑して御賀を行はしめ給うた。

この中納言に 源氏の御賀の際に夕霧に慶事を添へようと思召して、夕霧を急に右大將に任ぜられた。

いとかく俄に こんなに急に身に餘る昇進は、早過ぎるやうな氣が致します。

かたことに 樣式が普通と違つた盛大さで。

非參議の四位、大夫即ち五位の人々まうちきんだちなど、ただの殿上人には、白き細長一襲（ひとかさね）、腰插（こしざし）などまで、次々に賜ふ。御裝束（源氏の着料である）、限りなく清らを盡して、名高き帶（石帶）、御はかし（鋤）など、故前坊（秋好の父宮）の御方ざまにて傳はり參りたるも、またあはれになむ。古き世の一つの物と名ある限りは、皆つどひ參る御賀になむあめる。昔物語にも、物得（贈物の事）させたるを（仰々しく書き立ててゐるが）かしこき事には數へ續けためれど、いとうるさくて、こちたき（澤山にある）御中らひの事どもは、えぞ數へあへ侍らぬや。

うちには（冷泉院）、おぼしそめてし（六條院への行幸も中止になつた事）事どもを、むげにやはとて、中納言（夕霧）にぞつけさせ（依囑）給ひてける。その頃の右大將（系圖なし）、病ひして、辭し給ひけるを、この中納言（夕霧）に、御賀の程、悅び加へむと思召（主上が）して、俄になさせ給ひつ。院（源氏）も喜び聞えさせ給ふものから、源「いと斯く俄にあまる悅びをなむ、いちはやき心地し侍る」と、卑下し申し給ふ。丑寅（花散里の方）の町に、御しつらひ（夕霧が源氏の御賀の用意をして）設け給ひて、隱ろへ（内々の御催しのやうにされた）たるやうにしなし給へれど、今日はなほかたことに儀式まさりて、所

内藏寮穀倉院 卷一、四頁及二六頁參照。

屯食 強飯を握り固めて鷄卵を横に切つた形に丸く少し長く盛つたもの。

みこたち五人 以下今日の御賀に參會した人々の事である。

殿上人は 以上の親王達上達部の外に、殿上人では例によつて主上附きの殿上人、春宮附きの殿上人、院附きの殿上人、殆ど殘らず參會した。

今日は仰言ありて 太政大臣は身分柄他出も困難であるが今日は勅命によつて參會した。

母屋のおましに 母屋に設けてある源氏の御座に直面して太政大臣の御座がある。

宿德 老成して德の高い人。

四帖 四十の賀にちなむ。

うちの御手書かせ その御屏風四帖は、下繪のある唐綾の薄綾を張つて、その上に主上が和歌をお書きになつたもので。薄綾は白地に薄紫に色どつたものであるといふ。

作繪 彩色繪。

置物の御厨子 置物を載せる御厨子で、彈物や吹物は皆その御厨子に載せて飾つておくのである。

所の饗なども、内藏寮穀倉院（くらづかさごくさうゐん）より仕うまつらせ給へり。屯食（どんじき）などおほやけざまにて、頭の中將、宣旨（勅命によつて調進した）承りて、みこたち（親王達）五人、左右のおとど、大納言二人、中納言三人、宰相五人、殿上人は、例のうち（冷泉院）、春宮、院（朱雀院）、殘りすくなし。御座（おまし）御調度どもなどは、おほきおとど（致仕太政大臣が委細勅を奉じて源氏の御座や御調度類を準備した）、委しく承りて仕うまつらせ給へり。今日は仰言（おほせごと）ありて、わたり參り（太政大臣が源氏方へ）給へり。院（源氏も非常に恐縮して着座された）もいとかしこく驚き申し給ひて、御座（おんざ）に著き給ひぬ。母屋（もや）のおまし（御ざし）にむかへて、おとどの御座（ざ）あり。いと清らに物々しくふとりて、このおとどぞ今さかりの宿（しう）德（とく）とは見え給へる。あるじの院は、なほいと若き源氏の君に見え給ふ。御屏風四帖（でふ）に、うちの御手書かせ給へる唐の綾のうす（薄）だん（綾）に、下繪（したゑ）のさまなど、おろかならむやは。面白き春秋の作（つくり）繪（ゑ）などよりも、この御屏風の墨つきの輝くさまは、目も及ばず、思ひなしさへめでたくなむありける。置物（おきもの）の御厨子（みづし）、彈物（ひきもの）、吹物など、藏人所より賜はり給へり。大將（夕霧）の御いきほひも、いと

御馬四十疋　御賀の親に主上から賜はつた御馬四十疋を左右馬寮及び六衞府の官人が、上から順次に並べる間に日が暮れた。三四三頁。

萬歳樂　太食調の中曲で萬歳樂と同衣裳を著て四人で舞ふ。唐の太宗が秦王であつた時に、父高祖の美徳を稱讃する爲に作つた曲であるといふ。

お前に琴の御こと　源氏は七絃琴太政大臣は和琴を彈かれた。

琴も御手をさ〳〵　源氏も殆どあらん限りの手を盡されて、見事な音色が出る。

今はた　昔とは遜ふといひながらも、かうした古馴染であるから、何かにつけ睦じく交際したいといふ事など愉快に話しあつて。

御贈物　源氏から太政大臣への贈物には。

唐土の手本。

ここの草の本　こゝの「草」は假名の總稱に用ひてある。女手や草は時に假名の總稱として用ひられる。

いかめしくなり給ひにたれば、打添へて、今日の作法いと殊なり。御馬四十疋、左右の馬寮、六衞府の官人、上より次々に引き整ふる程、日暮れ果てぬ。例の萬歳樂、賀皇恩などいふ舞、氣色ばかり舞ひて、おとどの渡り給へるに、珍らしくもてはやし給へる御遊びに皆人心を入れ給へり。琵琶は例の兵部卿の宮、箏の宮は何事にかけても聞きなしにや、いと優にあはれに思さるれば、琴も御手をさを給ふべき御睦びなど、心よく聞え給ひて、御みきあまたたび參りて、物の面白さも滯りなく、御醉泣どもえとどめ給はず。御贈物に、すぐれたる和琴一つ、好み給ふ高麗笛添へて、紫檀の箱一具に、唐の本ども、ここの草の本など入れて、御車に追

御馬ども　宮中から引いて來て立てておいた四十疋の御馬を右馬寮の官人が受取つて。

次々の御ゆかり　主上を始め源氏の御親族の立派な御方々がずらりと居並ばれた事だから、やはりかうした場合には結構な事と思はれた。

大將のただ一所　夕霧が源氏の一人息子なので、物足りなく振合のないやうな氣がしたが、多くの人々にすぐれ、氣受けもよく、人柄も並ぶ者のない程でいらせられるにつけても。

挑みかはし　葵上が六條御息所と恨を結んで、競爭してゐられたが、その二人の運命は、それ〴〵、一方秋好は中宮となられた事によつて、一方夕霧は大將となられた事によつて勝負はついたやうなものである。

折節につけたる　花散里は、今までは時折の御催にも、衣裳の調製といふやうな事には一切無關係でゐられたので、到底かうした重要な地位に出られようとは思はれなかつたのに、夕霧を子のやうにして居つた緣によつて、立派に人々の仲間入りが出來たのである。

次々の御ゆかりの御親族の立派な御方々がずらりと居並ばれた事だから、やはりかうした場合には結構な事と思はれた。大將のただ一所の一人息子なので、物足りなく振合のないやうな氣がしたが、多くの人々にすぐれ、氣受けもよく、人柄も並ぶ者のない程でいらせられるにつけても。挑みかはし葵上が六條御息所と恨を結んで、競爭してゐられたが、その二人の運命は、それ〴〵、一方秋好は中宮となられた事によつて、一方夕霧は大將となられた事によつて勝負はついたやうなものである。折節につけたる花散里は、今までは時折の御催にも、衣裳の調製といふやうな事には一切無關係でゐられたので、到底かうした重要な地位に出られようとは思はれなかつたのに、夕霧を子のやうにして居つた緣によつて、立派に人々の仲間入りが出來たのである。

御馬ども　宮中から引いて來て立てておいた四十疋の御馬を右馬寮の官人が受取つて。

ひて奉れ給ふ。御馬ども迎へ取りて、右のつかさども、高麗の樂してののしる。六衞府の官人の祿ども、大將賜ふ。御心とそぎ給ひて、いかめしき事どもは、この度とどめ給へれど、うち、春宮、一の院、后の宮、次々の御ゆかりいつくしき程、いひ知らず見えわたる事なれば、なほ斯かる折には、めでたくなむ覺えける。大將のただ一所おはするを、さう〴〵しく榮なき心地せしかど、あまたの人にすぐれ、覺え殊に、人がらもかたはらなきやうに物し給ふにも、かの母北の方の、伊勢の御息所との恨み深く、挑みかはし給ひけむ程の御宿世どもの、ゆくへ見えたるなむさま〴〵なりける。その日の御裝束どもなど、こなたの上なむし給ひける。祿ども大方の事をぞ三條の北の方はいそぎ給ふめりし。折節につけたる御營み、うち〴〵の物の清らをも、此方には只よその事にのみ聞きわたり給ふを、何事につけてかは斯かる物々しきかずにもまじらひ給はましと覺えたるを

年返りぬ　源氏四十一歳。

おとどの君　源氏は嘗て葵上がお産の爲に死なれたといふ忌はしい例を見て居られるから、お産といふものは怖ろしいものと思ひ込んで居られるので。

まだいとあえかなる　姫君がまだごくひよわでいらせられる事故、どうなる事かと案じてから心配してゐられると。姫君十三歳。

怪しく御氣色變りて　妙に容態が變つてお苦しみになるので。

陰陽師　陰陽寮に屬して占筮相地等の事を掌どる。

明石の御町　六條院の戌亥。

この時にわが宿世も　この時こそ自分の運命の分れ目であるから、大變氣を揉んでゐられる。

大尼君　明石上の母で姫君の祖母。

この有樣を　孫娘のお産を見る事はまるで夢のやうな氣がするので、早速お側にやつて來て親しく附添つてゐる。

古めかしき事ども　姫君の生れる前後の頃の昔話。

怪しくむつかしき　妙ないやなお婆さんだと思つて。

斯かる人ありと　自分の祖母にかうしたお婆さんのあるといふ事だけは一寸耳にはさんで居られたので、今ではやさしくあしらつて居られた。

今はとて京へ　源氏が歸京された折には、私共は途方にくれてもうこれきりだ、これだけの因緣であつたのだと歎いたのでございますが、あなたが生れて私共を助けて下さつた御因緣を思ふと、本當に悲しい事でございます。

大將の君の御ゆかりに、いとよくかずまへられ給へり。年返りぬ。桐壺の御方近づき給ひぬるにより、正月朔日より、御修法不斷にせさせ給ふ。寺々社々の御祈りはた數も知らず。おとどの君、ゆゆしき事を見給へてしかば、斯かる程の事は、いと怖ろしきものにおぼししみたるを、對の上などの、さる事のないのはし給はぬは、口惜しくさうく〳〵しきものから、嬉しくおぼさるるに、まだいとあえかなる御程に、いかにおはせむと、かねておぼし騷ぐに、二月ばかりより、怪しく御氣色變りて惱み給ふに、御心ども騷ぐべし。陰陽師どもも、所をかへて愼み給ふべく申しければ、外のさし離れたらむは覺束なしとて、かの明石の一ト邸の御町の、中の對に渡し奉り給ふ。此方は只大きなる對二つ、廊どもなむめぐりてありけるに、御修法の壇ひまなく塗りて、いみじき驗者どもつどひてののしる。母君、この時にわが宿世も見ゆべきわざなめれば、いみじき心を盡し給ふ。かの大尼

君も、今はこよなき齢人ほけ人にてぞありけむかし。この御有樣を見奉るは夢の心地して、いつしかと參り近づき馴れ奉るに、年頃、この母君は、かう添ひさぶらひ給へど、昔の事などまほにしも聞え知らせ給はざりけるを、この尼君、喜びにえ堪へず、參りては、いと涙がちに、古めかしき事どもを、わなゝき出でつゝ語り聞ゆ。初めつかたは、怪しくむつかしき人かなと、うちまもり給ひしかど、斯かる人ありとばかりはほの聞きおき給へれば、なつかしくもてなし給へり。「生れ給ひし程の事、おとどの君の、かの浦におはしましたりし有樣、今はとて京へのぼりにこそはありけれ、と歎きしを、わか君の斯く引助け給へる御宿世の、いみじく悲しき事」と、ほろ〳〵と泣けば、げにあはれなりける昔の事を、斯く聞かせざらましかば、覺束なくても過ぎぬべかりけり、とおぼして、うち泣き給ふ。心のうちには、

わが身は 自分などは本當に今のやうに大きな顔をして榮華を極めるべき身分ではなかつたのに、紫上の御蔭で、人からもつまらぬ者には思はれて居らないのであつたのだ。

身をば又なきものに 今迄は自分程の者は他にないやうに思つて居つたからこそ、宮仕に出ても、傍輩達を輕蔑して大得意で居つたのだ。

世の人は 世間の人は蔭でいろいろ噂をして居る事であらう。

母君をば 姫君は、母君がもともとすこし身分の卑しい人だとは知つて居られたが、自分のお生れになつた當時の事などについては、そんな世離れた片田舎で生れたなどとも御存じなかつた。

怪しくおぼ〳〵し それにしても不思議なぼんやりした話だなあ、祖父の入道が仙人のやうな世離れた生活をしてゐるといふ話を聞くのも氣の毒な事だ。

いと物あはれに 姫君が物思に沈んで居られる所へ母君が參られた。

わが身は、げにうけばりて、いみじかるべき際にはあらざりけるを、對の上の御もてなしに磨かれて、人の思へるさまなども、かたほにはあらぬなりけり、身をば又なきものに思ひてこそ、宮仕の程にも、かたへの人々をば思ひ消ち、こよなき心驕りをばしつれ、世の人は、下にいひいづるやうもありつらむかし、など、おぼし知り果てぬ。母君をば、もとより斯くすこし覺え下れる筋と知りながら、生れ給ひけむ程などをば、さる世離れたる境にてなども知り給はざりけり。いとあまりおほどき給へるけにこそは。怪しくおぼ〳〵しかりける事なりや。かの入道の、今は仙人の、世にも住まぬやうにて居たンなるを聞き給ふも心苦しくなど、かた〴〵に思ひ亂れ給ひぬ。いと物あはれにながめておはするに、御方參り給ひて、日中の御加持に、此方彼方より參りつどひ、物さわがしくののしるに、お前に殊に人もさぶらはず。尼君所得て、いと近くさぶらひ給

短き御几帳 低い御几帳を立ててその蔭においでになるがようございませう。尼君にいふ詞。

風など騷がしくて 風が激しく吹いたりして、自然垂布の隙から見えたりしては困ります。

藥師などやうの 細流「醫者などこそかやうにしてはさぶらへと也」花鳥「宿木卷に、くすしなどのつらにても御簾の内にはさぶらふまじくやはとあり」

怪しく昔思ひ出でたる 尼君を見ての明石上の感じ。

古代の僻事どもや 間違だらけの昔話でもあつたのですか。

よく此世のほかの よく、この世の事とは思はれないやうな覺え誤りとごつちやにして、變な昔話をなさいますが、そんな事でもあつたのでせう。

わが子とも覺え給はず 以下明石上が姫君を見ての心の中。

いとほしき事ども 尼君が雜多なお話を姫君に申上げたので姫君は心配してゐられるのだらうか、姫君が后の位を極められた曉に一部始終を打明けようと思つてゐたのに、私だつて見限られる程賤しい身分でもないが、それでも尼君の話を聞いてお氣の毒に氣がひけるだらう。

ふ。明石上「あな見苦しや。短き御几帳引寄せてこそさぶらひ給はめ。風など騷がしくて、おのづから綻びのひまもあらむに。藥師などやうのさまして。いとさかりすぎ給へりや」など、なま傍痛く思ひ給へり。よしめきそして振舞ふとは覺ゆめれども、もう〳〵に耳もおぼ〳〵しかりければ、尼「ああ」とかたぶきて居たり。さるは、いとさいふばかりにもあらずかし。六十五六の程なり。尼姿いとかはらかに、あてなるさまして、目つややかに泣き腫れたる氣色の、怪しく昔思ひ出でたるさまなれば、胸うちつぶれて、明石上「古代の僻事ども・や侍りつらむ。よく此世のほかの・やうなる僻覺どもに取りまぜつつ、怪しき昔の事ども・出でまうで來つらむはや。夢の心地こそし侍れ」と、うちほほゑみて見奉り給へば、いとなまめかしく清らにて、例よりもいたくしづまり、物おぼしたるさまに見え給ふ。わが子とも覺え給はず、忝きに、いとほしき事ども・聞え給ひて、おぼ

御菓子など 明石上がお菓子を姫君にあげて。

いと苦しげに思ひて 姫君が何も召上らないから。

あな傍痛 明石上は、まあ見苦しい、と目付で制するけれども尼君は聞入れない。

老の波 年寄の尼が生かひのある目にあつて嬉し涙にくれて居ようとも、誰が咎める者がありませう。

昔の世にも 昔だつて私のやうな年寄は、大目で見て貰へたものです。

鹽垂るる 泣きぬれてゐる尼君を道案内として祖父入道の居られる濱の苫屋を尋ねて見たいものです。

し亂るるにや、今はかばかりと御位を極め給はむ世に、聞えも（明石上から昔）知らせ（話を姫君に）むとこそ思へ、口惜しくおぼし捨つべきにはあらねど、いといとほしく心劣りし給ふらむ、と覺ゆ（明石上の心に）。御加持果ててまか（驗者等が）でぬる（退出）に、御菓子（くだもの）など近くまかなひなし、明石上「これば（お菓子なりと召上れ）かりをだに」と、いと心苦しげに思ひて聞え（姫君に）給ふ。尼君は、いとめ（姫君を）でたう（く）うつくしく（う）見奉るままにも、涙はえとどめず、顔はゑみて、口つきなどは見苦（笑つて）しくひろごりたれど、まみのわたりうち（涙の爲に）しぐれて、ひそみ（べそをかいて居る）居たり。あな傍痛（かたはらいた）、と目（尼君に）くはすれど、聞きも入れず。

「老（尼君）の波かひある（貝を響かせてゐる）浦に立出でて鹽垂るるあま（蜑と尼）を誰かとがめむ昔の世にも、かやうなる古人（ふるびと）は、罪許されてなむ侍りける」と聞ゆ（姫君に）。御硯（みすゞり）なる紙に、

鹽垂（姫君）るるあまを浪路のしるべにて尋ねも見ばや濱の苫屋を

御方（明石上も怺へきれないで）もえ忍び給はで、うち泣き給ひぬ。

世を捨てて 浮世を捨てて明石の浦に住む入道も矢張娘や孫の事は氣に懸つてゐる事でせう。

聞え紛らはし 歌で涙を紛はしてゐられる。

別れけむ曉の 姫君は入道にお別れした曉の事さへも、夢の中にも思ひ出せないのを殘念に思召す。

かねてはおどろ〳〵しく 前には仰々しく騒いだのであるが、大したお苦しみもなく、而も皇子でまでもいらせられるので、全く願ひ通りで、源氏も安心された。

こなたは 姫君が今居られる所は裏住ひの方で、人ぢかな（奥深くない）部屋であるが。

御産養 産後三、五、七、九夜に、親族から食物衣服等を産家に贈つて祝ひ賀宴を催す事。

儀式なきやうなれば 明石上方の部屋では産養を催すにもおもてだゝないやうにおもはれるから。

渡り給ひなむとす まだお歸りにはならない。

みづから 紫上自身は子を生んだ經驗もなし、人の産兒を見られた事もないので、珍らしく又かはゆく思召した。

誠の祖母君 若宮の祖母君即ち明石上。

世（明石上）を捨ててあかしの浦に住む人（子を思ふ心の闇）も心の闇は晴るけしもせじなど聞え紛らはし給ふ。別れけむ曉の事も、夢のうちにおぼし出でられぬを、口惜しくもありけるかな、とおぼす。

三月（やよひ）の十餘（よ）日の程に、平かに生れ給ひぬ。かねてはおどろ〳〵しく（お産の事について）おぼし（加持祈禱など）騒ぎしかど、いたく惱み給ふ事もなくて、男みこに（後に春宮と申上げる方）さへおはすれば、限りなくおぼすさまにて、おとども（源氏）御心おちゐ給ひぬ。こなたは隱れの方にて、只けぢかき程なるに、いかめしき御産養（おんうぶやしなひ）などの打頻り、響きよそほしき（儀式ぼつた賑ひが續くので）有樣、げに「かひある浦（前頁の尼君の歌）」と尼君の爲には見えたれど、儀式なきやうなれば、渡り給ひなむとす（姫君が御自分の御殿に）。對の上（紫上も御産屋に）も渡り給へり。白き御（紫上のさま）裝束し給ひて、人の親めきて、若宮をつと抱きて居給へるさま（も）、いとをかし。みづから斯かる事知り給はず、人の上にても見ならひ給はねば、いと珍らかにうつくしと思ひ聞え給へり。むつかしげにおはす（赤兒のまだ世話の燒ける中から始終紫上が抱いてゐられるので）る程を、絶えず抱き取り給へば、誠の祖母君（おはぎみ）は、只まかせ（若宮を紫上に）奉り

御湯殿の 若宮に湯を使はせるお世話の方をして居られる。

御迎湯に 明石上がそのお相手役をなさるにつけても、典侍は感慨無量で。

うち〳〵の事も 典侍は内々の事情をうす〳〵知つてゐるのでもし明石上の人柄がよくなかつたら都合が惡い事であつたらうに、驚く程氣高く、いかにもかういふ立派な人を娘に持つだけの幸運を持つて生れた人だと思つてゐる。

六日といふに お産後六日目の日に姫君は今までの御自分の御殿にお歸りになつた。

この程の事どもは 源氏も今度のお祝は、いつものやうに簡略になさらずに、大變に盛大を極めたものであつたので、内部のこま〳〵とした優雅な風流で後世に語り傳へるべきものもあつた筈だが、それらの點は人々の目を引かずに終つた。それで此處にも書き漏らしたのである。

て、御湯殿のあつかひなどを仕うまつり給ふ。春宮の宣旨なる内侍のすけぞ仕うまつる。（若宮に湯をお使はせ申す）御迎湯におり立ち給へるもいとあはれに、うち〳〵の事もほの知りたるに、（明石上が姫君の實母で明石入道の娘であるなどいふ事を）すこしかたほならばいとほしからましを、あさましくけだかく、げに斯かる契り殊に物し給ひける人かなと見聞ゆ。（明石上を）その程の儀式などもまねびたてむに、いと更なりや。

六日といふに、例の御殿に渡り給ひぬ。七日の夜、うち（冷泉院）よりも御産養の事あり。朱雀院の、（朱雀院御遁世故その御代りに主上から御産養をせられた）斯く世を捨てておはします御かはりにや、藏人所より、頭の辨、（勅命を奉じて）宣旨承りて、珍らかなるさまに仕うまつれり。（御産養を）祿の絹など、又中宮の御方よりも、おほやけごとには立ちまさり、（秋好）（主上から表向にされたのよりも以上に）いかめしくせさせ給ふ。次々の親王達、大臣の家々、その頃のいとなみにて、（專らの爲事として）我も〳〵と清らを盡して仕うまつり給ふ。（御産養を）おとどの君も、この程の事どもは、例のやうにもことそがせ給はで、世になく響きこちたき程に、うち〳〵の

かくらうたき人を こんなにかはゆい孫を得て嬉しい。湖月抄では「人を添へ奉りたる」と讀んで「源氏の御身に添奉る事と悦びうつくしみ給ふ也」と註してゐるが、河内本に從つて「人をぞ得奉りたる」と解すべきである。

さぶらふ中に 今迄居た女房の中から、人柄や氣立てのすぐれた者ばかりを選んでお使ひになつた。

まほならねど 紫上は明石上にちよい〳〵對面されて、もとはあれ程打ちとけようとはなさらなかつたのであるが、今では若宮のお蔭で大變睦じくして厚くなさるやうになつた。

あまがつ 天兒。貞丈雜記に圖がある。練絹で人形を縫ひ、中に綿を入れて小兒の這ひあるく形にしたもので、小兒のお守りである。

そそくり 忙しさうに手先を動かすこと。

かの古代の尼君は あの古ぼけた尼君は若宮をゆつくり見る事も出來ないのが不足であつた。

なまめかしくこまかなるみやびの、まねび傳ふべきふしは、目もとまらずなりにけり。（源氏）おとどの君も、若宮を程なく（生れて間もなく）抱き奉り給ひて、（源）「大將のあまたまうけたンなるを、（夕霧は子供を澤山持つてゐるくせに）今まで見せぬが恨めしきに、かくらうたき人をそへ（え）奉りたる」と、（若宮）うつくしみ聞え給ふは、ことわりなりや。日々に、（若宮の御事をいふ）物を引延ぶるやうにおよすげ給ふ。（御生長なさる）御乳母など、心知らぬはとみに召さで、さぶらふ中に、品心すぐれたる限りをえりて、仕うまつらせ給ふ。（乳母として）御方の（明石上の御心構へは）御心おきての、らう〳〵じくけだかくおほどかなるものの、さるべき方には卑下して、（氣ばたらきもあり）（小憎らしくさし出などなさらないのを）憎らかにもうけばらぬなどを、ほめぬ人なし。（紫上）對の上は、まほならねど見えかはし給ひて、さばかり許しなくおぼしたりしかど、今は宮の御徳に、いと睦まじくやんごとなくおぼしなりにたり。（紫上は子供がおすきな御性質で）ちごうつくしみし給ふ御心にて、あまがつなど、御手づから作りそそくりおはするも、いと若々し。あけくれこの御かしづきにて過ぐし給ふ。（若宮のお世話で）かの古代の尼君（明石尼君）

この國の奥の郡に 播磨の國の奥の郡の人も通へないやうな深山を以前から所有して居ながらも、一旦其處に隱棲した後は又と人には會ふ、しでないと考へて、ほんの少しばかり此世に氣がかりな事があつたので、今迄其處には移らずに長らへてゐたのであるが、もう安心だと、佛や神を力にしてその深い山に引移つた。

この近き年頃と 最近の數年間は、別段の用事がなければ京に使は出さなかつた。

これよりくだし給ふ 京から遣された使に託して、尼君の所へ一行でも然るべき時々の用向も書送つたのである。

は、若宮を・(も)え心のどかに見奉らぬなむ飽かず覺えける。なか(なまなか)なか見奉りそめて戀ひ聞ゆるにぞ、命もえ堪ふまじかりける。(・め)かの明石(明石入道の事)にも、斯かる(若宮御誕生の御事を)御事傳へ聞きて、さる聖心地(ひじりごゝち)にも、いと嬉しく覺えければ、入道「今なむこの世(もうこれで樂々往生が出來る)の境を心やすく行き離るべき」と弟子どもにいひて、この家(自分の家を)をば寺になして、あたりの田などやうのものは、皆その寺(その寺領に寄進して)の事にしおきて、この國の奥の郡(こほり)に、人も通ひがたく深き山あるを、年頃も占めおきながら、あ(占め)しこ(おいた所に)に籠りなむのち又人には見え知らるべ(す)きにもあらずと思ひて、只すこし(若宮の御誕生を待つて居つた事)の覺束なき事殘りければ、今までながらへけるを、今はさりともと、佛神(ほとけかみ)を頼み申してなむ移ろひける(その占めおいた所へ)。この近き年頃となりては、京に殊なる事ならで(く)人も通はし奉らざりつ。これより(源氏の方から)くだし給ふ人ばかりにつけてなむ、一くだりにても、尼君にさるべき折節の事も通ひける。思ひ離るる世(かの奥山に引移る最後に手紙を書いて明石上に送られ)のとぢめに、文(た)書きて、御方に奉れ給へり。入道文「この年頃は、同じ世の中の

斯くながら このままあの世に生れ變つた氣になりまして、格別の用事のない限りは、お便りもしなければ御返事も貰はうとは致しませんでした。

假名文見給へるは 假名書きの手紙を讀むのは時間がかかつて念佛もなまけるやうで、無駄な事ですから、お手紙もあげずに居りますが。婦人の手紙は必ず假名で書かれたもの。河内本に從ふべきである。

みづから斯く拙き 私のやうなつまらぬ山伏の身で、自身今更浮世の榮華を希ふ譯ではなく、今迄は、未練がましく、六時の勤行の折にも、私自身の極樂往生の願は後廻しにして、只管あなたの事だけを心に懸けて祈念して居りました。「みづから」は「今更に……侍らず」を修飾する。

わがおもと 女を親しんでいふ第二人稱。

須彌の山 須彌山は梵音蘇迷盧といひ妙高山と譯する。佛說によればこの山を世界の中央にして周圍に七金山八海等があり、一切の生類はこれによつて棲息し日月諸天もこれによつて回轉するといふ。その形狀、上下は直徑大、中央は小。水面を出る事八萬四千由旬、水底又八萬四千由旬、頂上は縱橫共に八萬由旬で帝釋の居城であるといふ。由旬は由旬那の略、六町一里として四十里・三十里・十六里などの說がある(祖庭事苑)。

うちにめぐらひ(生きては居りましたが)侍りつれど、何かは(いやなあに)。斯くながら身をかへたるやうに思ひ(う)給へなしつつ、させる事なき限りは、聞え承らず。假名文(かなぶみ)見給へ(ふ)るは、目の暇(いとま)いりて、念佛も懈怠(けだい)するやうに、や(益)くなうてなむ御消息も奉らぬを、つてに(人傳に)承れば、若君(明石姫君)は春宮に參り給ひて、男宮生れ給へる由をなむ深く悅び申し侍る。その故は、みづから斯く拙き山伏の身に、今更にこの世の榮えを思ふにも侍らず、過ぎにし方の年頃、心ぎたなく、六時(晨朝日中日沒初夜中夜後夜)の勤めにも、只御事(明石上の事を)を心(上の「心ぎたなく」がかゝる)にかけて、蓮(はちす)の上の露の願ひをばさしおきてなむ念じ奉りし。わがおもと(明石上をさす)と生れ給はむとせしその年の二月(きさらぎ)のその夜の夢に見しやう、みづから須彌(すみ)の山を右(明石上を生む事)の手に捧げたり、山の左右(さう)より、月日(月は明石姫君日は若宮)の光さやかにさしいでて世を照らす。みづ(入道自身)からは山のしもの(た)蔭に隱れて、その光に當らず(入道が遁世して其德を蒙らない事)、山をば廣き海(春宮御即位あつて天下を治め)に浮べおきて、小さき舟に乘りて(入道が般若の舟に乘つて生死の海を越え西方極樂の岸に至る事)、西の方をさして漕ぎ行く、となむ見侍りし。夢さめてあしたより、數ならぬ身に頼む所出(入道の身に未來の期待が生じ)

ぞくの方の書 俗書即ち外典の事で内典に對する。佛典以外の書物の事。

内教 内典即ち佛教關係の書。

賤しき懷の 賤しい身ながらあなたを大切に養育して居りましたが、力の足りない私には辛抱しきれないで田舍下りをしたのです。

又この國の事に 播磨守に沈淪しまして、二度と都には歸るまいと決心して、この浦に年を送りました間も。

わが君を頼む事に あなたに期待をかけて居ましたから、心ひそかに多くの願を立てました。

その返申 只今はその願解きが無事に出來るやうな望み通りの時節になりました。返申は神佛へのお禮まゐり。

この一つの思ひ 姫君が國母となられるといふ最後の願ひも遠からず叶ふ筈ですから、極樂往生の出來る事は疑ありませぬ。

九品 極樂往生の九階級。卷一、一〇九頁。

迎ふる蓮を待ち 聖衆の來迎を待ち奉る。

で來ながら、何事につけてか、さるいかめしき事をば待ちいでむと、心の内に思ひ侍りしを、その頃より孕まれ給ひ・・・・・にしこなた、ぞくの方の書を見はべりしにも、又内教の心を尋ぬるなかにも、夢を信ずべき事多くはべりしかば、賤しき懷のうちにも、忝く思ひいたづき奉りしかど、力及ばぬ身に、思ひ給へかねてなむ斯かる道におもむき侍りにし。又この國の事に沈み侍りて、老いの波・更に立返らじと思ひとぢめて、この浦に年頃侍りし程も、わが君を頼む事に思ひ聞えはべりしかばなむ、心一つに多くの願を立てはべりし。その返申、平かに思ひのごと時にあひ給ふ。若君國の母となり給ひて、願ひ滿ち給はむ世に、住吉の御社を始め、果たし申し給へ。更に何事をか・疑ひ侍らむ。この一つの思ひ近き世にかなひ侍りぬれば、遙に西のかた十萬億の國隔てたる九品のうへの望みは疑ひなくなり侍りぬれば、今は只迎ふる蓮を待ち侍る程、その夕べまで、

水草清き 玄賓僧都山に入る時の歌「とつ國は水草清し事繁き天の下には住まぬまされり」

ひかり出でむの歌 春宮御即位の曉も近くなつたから今こそ昔見た夢の話を致します。

わが身は變化のものと あなた自身は化生のものと信じて私の爲に冥福を祈つて下さい。

願ひ侍る處に 極樂にさへ往生が出來れば、屹度又對面が出來ませう。

娑婆のほかの岸 娑婆とは貪婪癡に滿ちた穢土の此の岸即ち現在の苦の世界で、此の岸から煩惱生死の中流を渡つて涅槃の彼の岸に到る。娑婆のほかの岸とはその彼岸の事で極樂世界の意。

事殊に書かず 格別變つた事も書いてない。何にも別に書いてない。河内本に從へば「殊事も」と解くべきである。

熊狼にも施し 拾遺物名「身を捨てて山に入りにし我なれば熊のくらはむ事も覺えず」

そこには あなたはもつと長生して居つて、豫て望んで居つた通りの御世にあひなさい。

水草清き山の末にて勤め侍らむとてなむまかり入りぬる。ひかり出でむ曉近くなりにけり今ぞ見し世の夢語りする」とて、月日書きたり。入道文「命終らむ月日も、更にな知ろしめしそ。古へより人の染めおきける藤衣にも、何かやつれ給ふ。只わが身は變化のものとおぼしなして、老法師の爲には功德を作り給へ。この世の樂しみに添へても、後の世を忘れ給ふな。願ひ侍る處にだに到り侍りなば、必ず又對面も侍りなむ。娑婆のほかの岸に到りて、疾くあひ見むとをおぼせ」。さてかの社に立て集めたるぐわんもんどもを、大きなる沈の文箱にふんじこめて奉り・たり。尼君には、事殊に書かず、只、入道文「この月の十四日になむ、草の庵まかり離れて、深き山に入り侍りぬる。かひなき身をば、熊狼にも施し侍りなむ。そこにはなほ思ひしやうなる御世を待ち出で給へ。明かなる所にて又對面はありなむ」とのみあり。尼君この文を見て、かの使の大德に問へば、僧「こ

なにがしらも 描僧等もお送りに麓まではお供致しましたが。

今はと世を背き 入道が今を限りと御出家なされたあの時を悲しみの最後と思ひました所、まだ悲しみは殘つて居りました。

罷申（まかりもうし）**御堂に施入し** 暇乞。この二つの樂器を御堂に寄進なさいました。

御弟子ども 御弟子達は親しい者ばかり六十餘人居つたのですが、その人々の身の程に應じて皆形見分けして。

今はとて 此の世を捨ててあのやうな遠い山の雲や霞の中に隱れておしまひになつたあとに空しく取殘されまして。

この大徳も この使の僧も、子供の時に京からついて行つて今は老法師になつた人で。

佛の御弟子の賢明な聖者達で 釋尊の御弟子の賢明な聖者達でさへ、常在靈鷲山といふ事を十分信じて居りながらも、やはり釋尊入滅の折の悲しみは深かつたのであるから。

の御文書き給ひて、三日（三日目に）といふになむ、かの絕えたる峯（人跡の絕えたる）に移ろひ給ひにし。なにがしらも、かの御送りに、麓まではさぶらひしかど、皆返し給ひて、僧一人、童（わらは）二人なむ御供にさぶらはせ給ふ。今はと世を背き給ひし折を、悲しき閉ぢめと思う給へしかど、殘り侍りけり。年頃、今遠國行のひまひまに、行ひのひまひまに、寄り伏しながら掻鳴らし給ひし琴（きん）の御こと、琵琶取寄せ給ひてかい調べ給ひつつ、佛に罷申（まかりもうし）し給ひてなむ御堂（みだう）に施入（せにふ）し給ひし。其他の品物も大部分はさらぬ物どもも、多くは奉り給ひて、親しき限りさぶらひける、程につけて皆そぶんし給ひて、なほし殘りをなむ京の御料とて送り奉り給へる。今はとて人なむ、親しき尼君や明石上の御料かきこもり、さる遙けき山の雲霞にまじり給ひにし空しき御跡にとまりて、悲しび思ふ人々なむ多く侍る」など、この大徳も、童にて京よりくだりたりし（ぐしけるふる）人の、老法師になりてとまれる、いとあはれに心細しと思へり。佛の御弟子のさかしき聖（ひじり）だに、驚の峰をばたしかに（たど）〳〵しからず頼み聞えながら、なほ薪盡きの起らぬ事で、明石上は昔から今まで思ひ出されて居られる事が、思ひ續けて居られる事でもあるから、父入道に再會のだと思ふと悲しく堪へられない事でもあるのだ。

此夢語りを 明石上は入道の夢物語を讀んで、一方では將來が頼もしく思はれて、一方では父のねぢけ心から私を聞逃つた方角（源氏に娶せた事）に迫ひやつて、氏に娶せた事も無くしてしまつたのだと、一時思案にくれたのは、この夢を信じて高い理想を心がけてゐられたのだと、やつと思ひ合はされる。

よその人は 他人には何の感じも、明石上は昔から今まで思ひ出されて居られる事が、始終戀しいと思ひ續けて居られるから、父入道に再會の期もなくて終るのだと思ふと悲しく堪へられない事でもあるのだ。

驚の峰 靈鷲山の事。印度摩訶陀國王舍城の東北角にある山で鷲の形に似てゐるから名づく。法華經壽量品に「常在靈鷲山」とあつて、釋尊は入滅してもその報身即ち因行の功德の報によつて實智を現した身はこの山にあつて盡未來際說法してゐるといはれる。

薪盡きける 法華經序品「佛此夜滅度（如二薪盡一火滅）」

南の御殿 明石姫君のゐられる御殿。

に、驚の峰をばたしかに（たど）〳〵しからず頼み聞えながら、なほ薪盡きける世の惑ひは深かりけるを、まして尼君の悲しと思う（ひ）給へること限りなし。

御方は南の御殿に 明石上御方は南の御殿（おとど）におはするを、「斯かる御消息なむある」とあれば、忍びて渡り給へり。（明石からお手紙が參りました）（明石上は重々しく振舞にゐて一寸の事では尼君と往き來をして對面するも〳〵しく身をもてなして、おもも〳〵しく身をもてなして、お事も困難なのであるがぼろげならでは通ひあひ見給ふ事も難きを、あはれなる事なむ（悲しい消息だと聞いて氣に懸るので人目を忍んで尼君方に來て見られると）と聞きて、覺束なければ、打忍びて物し給へるに、いといみじく悲しげなる氣色にて居給へり。（尼君は）火近く取寄せて、（燈火を）この文を見給ふに、まづ昔きし方の事思ひ出で、戀しと思ひわたり給ふ心には、あひ見で過ぎ果てぬるにこそはと見給ふに、いみじくいふかひなし。（明石上は）涙をえせきとめず、此の夢語りを、かつは行く先頼もしく、（明石上心）さらば僻心（ひがごころ）にて、（源氏に娶はせ其後源氏が明石上を殘して歸洛せられた事）わが身をさしもあるまじきさまにあこがれ（く）がらし給ふと、中頃思ひただよはれし事は、（父入

君の御德には　あなたのお蔭で嬉しさも名譽も分に過ぎて類ひない事だと思つて居ります。

あはれにいぶせき　それと共に悲しく胸の晴れない思ひも人一倍です。

數ならぬ方にても　つまらぬ身ながらも、住み馴れた都を捨てて、あんな田舍に落ちぶれて居つた事をさへ人並はづれた運命だと思つて居りましたが、生存中に夫と別れ／＼に居なければならぬ夫婦仲とは思ひも寄らず、後世の一蓮託生の頼みまでも考へて、年月を過して來ましたのに。

背きにし世に　一旦捨てた都に歸りました。

片つ方には　又一方には氣がかりな悲しい事が（入道の事）絶えず起つて來るのですが、結局かうして離れた儘で死んでしまふのが殘念です。

世に經し時だに　入道は俗人であつた時でさへ人と違つた性質で、世のすね者でしたが、それでも私共若い同志互に力になりあふのが癖になつて、二人はどんな場合があつてもと契りかはして居ましたので、お互に深く頼りにしあつて居りました。

（道が）くはかなき夢に頼みをかけて、心高く物し給ふなりけりと、かつ／＼思ひ合せ給ふ。尼君久しくためらひ（淚を抑へて）て、尼「君（明石上に對していふ）の御德には、嬉しくおもだたしき事をも、身に餘りて並びなく思ひ侍り。あはれにいぶせき思ひもすぐれてこそ侍・・（りけ）れ。數ならぬ方にても、ながらへし都を捨てて、かしこ（播磨）に沈み居しをだに、世の・人に違（たが）ひたる宿世にもあるかなと思ひはべ・りしかど、生ける世に行き離れ、隔たるべき中の契りとは思ひかけず、同じ蓮（はちす）に住むべき後の世の頼みをさへかけて、年月を過ぐし來て、俄に斯く（あなたが源氏に迎へ取られるといふやうな意外な事が突然起つて私も歸京致しました）覺えぬ御事いで來て、背きにし世に立ち返りて侍る。かひある（若宮御誕生の事）御事を見奉り悦ぶものから、片つ方には、覺束なく悲しき事の打添ひて絶えぬを、遂に斯くあひ見ず隔て（入道と再會の機もなく）ながら、この世を別れぬるなむ口惜しく覺え侍る。世に經し時だに、人に似・ぬ心ばへにより、世をもてひがむるやうなりしを、若きどち（入道と尼君と）頼みならひて、おの／＼は又なく契りおきてければ、かたみにいと深く

斯く耳に近き程　容易に消息の聞けるやうなこんな近い所に住んで居りながら、どうして此儘別れてしまふのでせう。

うちひそみ給ふ　泣面をする。

數ならぬ身には、私のやうなつまらぬ身では、どうせ表だつて生きがひのある境遇になれないのは分りきつて居りますが、父には音信不通のまゝ悲しい別れをしてしまはなければならないのが殘念です。

さるべき人　「御爲とこそ覺え侍れ」を指して「さうあるべき」といつたのである。報を受けなければならぬ筈の人。入道。

世中も定めなきに　無常な世の中の事ですから、其儘亡くなられたならば、何の價値もない事です。

昨日も　昨日も大臣の君が、私があちらに居る事を見ておかれたのに、急にこちらに來て隱れてゐるやうなのも輕々しい爲業のやうです。

斯く添ひ給ふ御爲　今度お生れになつた若宮の御爲などに對してうち捨てておくやうで（重んじないやうで）お氣の毒なので勝手な振舞も出來かねるのです。

曉に歸り渡り　姫君の方へ。但しまだ實際は歸つてゆかないのである。

今見奉り　すぐにお目に懸られます。女御の君もあなたの事を思ひ出して懷しがつて噂をしていらつしやいます。

こそ頼みはべ・りしか。いかなれば、斯く耳に近き程（京と明石の事）ながら、斯くて別れぬらむ」といひつづけて、いとあはれにうちひそみ（悲しげに沈みこんでしまふ）給ふ。御方（明石上）もいみじく泣きて、明石上「人にすぐれむ行先の事（我身の將來の榮華も望みませぬ）も覺えずや。數ならぬ身には、何事もけざやかにかひあるべきにもあ（姫君が實子であつても表向きさうと名乘る事の出來ない事をいふ）らぬものから、あはれなる有樣に、覺束なく（消息も分らないまゝに）てやみなむのみこそ口惜しけれ。よろづの事、さるべき人の御爲とこそ覺え侍れ。（何事も入道の御爲と存じますのに其儘引籠つておしまひになつたら）さて絶え籠り給ひなば、世の・中も定めなきに、やがて（入道が）消え給ひなば、かひなくなむ」とて、夜もすがら、あはれなる事どもを（尼君と明石上と）いひ・・（うこ）あかし給ふ。明石上「昨日も、おとど（源氏）の君の、あなた（姫君の方）にありと見おき給ひてしを、俄に這ひ隱れたらむ（尼君の所に來て居る事）もかる／＼しきやうなるべし。身一つは、何ばかりも思ひ憚り侍らず（私自身は何も斟酌など致しませんが）。斯く添ひ給ふ御爲などのいとほしきになむ、心にまかせて身をもてなしにくかるべき」とて、曉に歸りわたり給ひぬ（明石上が南の對へ歸る事になさつた）。尼「若宮はいかがおはします。いかでか見奉るべき（是非お目に懸りたい）」とても泣きぬ。明石上「今見奉